平成31年度（令和元年度）

全国学力・学習状況調査
福岡県学力調査
調査結果報告書

～小中9年間を通した「授業改善」による学力向上のために～

国語

算数
数学

英語

質問紙調査

令 和 元 年 １ ２ 月
福 岡 県 教 育 委 員 会

■　報告書作成・活用についての基本的な考え方

この報告書は本県の教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善に役立てることを目的として作成しています。また、全国学力・学習状況調査及び福岡県学力調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であることや学校における教育活動の一側面であることを踏まえています。

※　Ｗｅｂページへの掲載

本報告書は、次のＷｅｂページで閲覧することができます。

①　福岡県庁ホームページ

ＵＲＬ：http://www.pref.fukuoka.lg.jp/life/5/41/184/

（トップページ→子育て・教育→教育→義務教育→一般情報）

②　福岡県教育庁教育振興部義務教育課各種資料のページ

ＵＲＬ：http://gimu.fku.ed.jp

※　ふくおか学力向上ｗｅｂシステムの活用

各学校の全国学力・学習状況調査結果が登録されています。児童生徒一人一人に対する教育指導の改善に向けた具体的な取組を計画的に実施するための分析・検証に御活用ください。（詳細は、H31.3.15 付３０教義第５６１８号「別紙：平成３１（２０１９）年度ふくおか学力向上 Web システム運用について」を参照。）

平成31年度（令和元年度）

全国学力・学習状況調査
福岡県学力調査
調査結果報告書

～小中9年間を通した「授業改善」による学力向上のために～

平成31年度(令和元年度) 全国学力・学習状況調査 福岡県学力調査
調査結果報告書

目　次

平成３１年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査

★　調査結果ダイジェスト

Ⅰ　調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　1　調査の目的
　2　調査対象の学年
　3　調査の方式
　4　調査日
　5　調査の内容
　6　４月１８日に調査を実施した県内公立学校・児童生徒数
　7　調査問題の内容

Ⅱ　調査結果の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　1　調査結果の概況
　2　教科に関する調査の結果（福岡県全体の状況）
　3　標準化得点の推移
　　(1) 本県の標準化得点の推移
　　(2) 本県の学力層（四分位）の推移
　　(3) 地区別の標準化得点の推移
　4　児童生徒の無解答の状況（地区別）
　　(1) 全体の状況
　　(2) 教科ごとの「無解答なし」の児童生徒の状況
　　(3) 記述式問題における「無解答率」と「平均正答率」の状況
　5　県全体の平均正答率度数分布（市町村単位）
　6　市町村別の状況

Ⅲ　各教科の調査結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２８
　1　小学校国語
　2　小学校算数
　3　中学校国語
　4　中学校数学
　5　中学校英語

Ⅳ　日々の授業改善及び学校運営等によって効果を上げている事例 ・・・・・・・ ３９
　＜授業改善＞
　　事例１　「生徒による授業評価と教員による自己評価を関連付けた授業改善」------------（福　岡地区Ａ中学校）
　　事例２　「児童の『書く力』を高める組織的な授業改善」-------------------------------（北九州地区Ｂ小学校）
　　事例３　「授業スタンダードの徹底と定期考査問題改善によるゴール像を明確にした授業づくり」---（京　築地区Ｃ中学校）
　　事例４　「学力調査問題を位置付けた年間指導計画に基づく授業改善」------------------（京　築地区Ｄ中学校）
　＜学校運営＞
　　事例５　「『小中一貫スタイル』を基にした９年間の系統を意識した授業づくり」---------（福　岡地区Ｅ中学校）
　　事例６　「校長のマネジメントによる学力向上を図る組織の機能化」--------------------（北九州地区Ｆ小学校）
　　事例７　「地域と連携した教育活動の展開」--（京　築地区Ｇ小学校）
　＜人材育成＞
　　事例８　「教員の実践的指導力を高めるメンタリングを中心とした授業研修」------------（福　岡地区Ｈ小学校）
　　事例９　「ミドルリーダー人材育成と OJT を基軸とする学力向上戦略 PDCA の徹底」------（福　岡地区Ｉ小学校）
　　事例１０「指導技術の継承を目指す学年学級バリアフリーによる人材育成」--------------（北筑後地区Ｊ中学校）
　＜その他：英語教育、予習・家庭・補充的な学習、非認知的能力の育成＞
　　事例１１「音声活動を中心とした外国語科の授業改善」--------------------------------（北九州地区Ｋ中学校）
　　事例１２「安心したコミュニケーションができるスピーキング活動」--------------------（南筑後地区Ｌ中学校）
　　事例１３「予習・復習等、学習の基盤づくりを生かした授業改善」----------------------（北筑後地区Ｍ小学校）
　　事例１４「授業と授業をつなぐ『学びのサイクル』の確立」----------------------------（筑　豊地区Ｎ中学校）
　　事例１５「学力テストの誤答から始まる『再チャレ学習』の取組」----------------------（筑　豊地区Ｏ中学校）
　　事例１６「学ぶ意欲や向上心の高まりを目指す非認知的能力の育成」--------------------（南筑後地区Ｐ小学校）

Ⅴ　児童生徒質問紙に関する調査結果と分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５６
1　学力基盤づくり
2　授業づくり
3　家庭・関係機関との連携

Ⅵ　学校質問紙に関する調査結果と分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　７２
1　学力基盤づくり
2　授業づくり
3　教員の意識・指導力の向上
4　家庭・関係機関との連携
5　その他

Ⅶ　児童生徒質問紙と学校質問紙の調査結果の比較分析　・・・・・・・・・・・・・・　８９
■　課題解決に向けた取組①
■　課題解決に向けた取組②
■　学んだことを生かすこと
■　自己有用感
■　将来に関する意識
■　挑戦心

Ⅷ　小学校と中学校の質問紙回答状況を比較分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・　９２
1　学校質問紙
■　ＰＤＣＡサイクルの確立
■　指導計画の作成
■　近隣等の小/中学校との成果や課題の共有
■　近隣等の小/中学校との合同研修
2　児童生徒質問紙（同一集団での推移で比較）
■　自己有用感
■　挑戦心
■　規範意識
■　自分の考えを深めたり広げたりすること

令和元年度 福岡県学力調査

Ⅸ　調査結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９６
1　調査の概要
2　調査結果の概要
(1) 県全体及び地区別の平均正答率、最大・最小の差
(2) 全体の状況
(3) 小学校の状況
(4) 中学校の状況
(5) 地区別の標準化得点
(6) 各地区の同一集団の標準化得点の推移
(7) 県平均を１００とした場合の全国学力・学習状況調査と県学力調査の各地区の標準化得点
3　各学年の調査結果
(1) 小学校第５学年国語
(2) 小学校第５学年算数
(3) 中学校第１学年国語
(4) 中学校第１学年数学
(5) 中学校第２学年国語
(6) 中学校第２学年数学

まとめと今後の取組

Ⅹ　まとめと今後の取組　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１０８
1　まとめ
2　今後の取組

平成３１年度（令和元年度）

全国学力・学習状況調査結果【ダイジェスト版】

教科に関する調査結果概要

報告書 P.3～

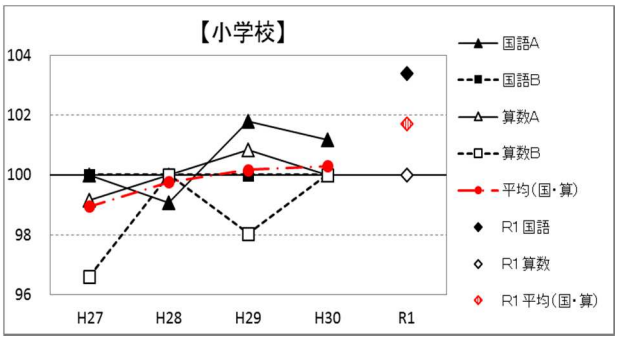
◆福岡県と全国の平均正答数・平均正答率※1（公立）

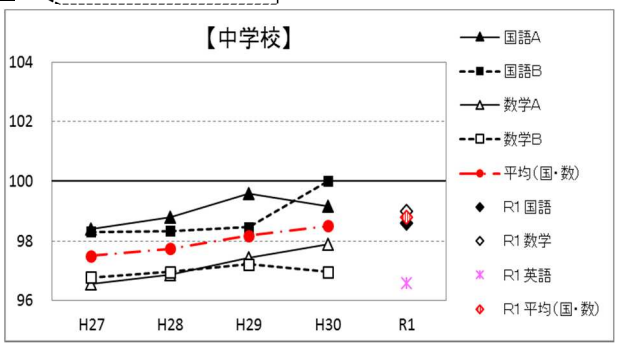
	小学校		中学校			
	国語	算数	国語	数学	英語※2	英語「話すこと」※3
福岡県	9.2/14 問 65%	9.3/14 問 67%	7.2/10 問 72%	9.5/16 問 59%	11.4/21 問 54%	1.6/5 問 31%
全　国	8.9/14 問 64%	9.3/14 問 67%	7.3/10 問 73%	9.6/16 問 60%	11.8/21 問 56%	1.5/5 問 31%

※１　平均正答率は、小数第１位を四捨五入した整数値で表示（都道府県は整数値のみが公表されるため）。そのため、福岡県と全国で平均正答数が異なる場合でも、四捨五入によって平均正答率が同じになる場合がある。
※２　英語調査は「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の合計を集計。
※３　英語「話すこと」の全国の値は、国立及び私立を含む参考値（全国は、公立のみの公表がないため）。なお、福岡県の値は、公立のみの参考値（都道府県の公表がないため、ローデータを基に福岡県で独自に算出）。

◆福岡県の標準化得点の推移※4と結果の状況

報告書 P.4～





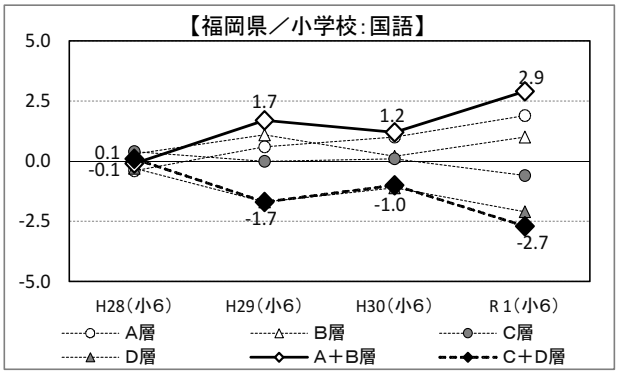
※４　Ｒ１は、知識と活用を一体的に問う調査問題となったため、前年度からの推移は参考として示している。

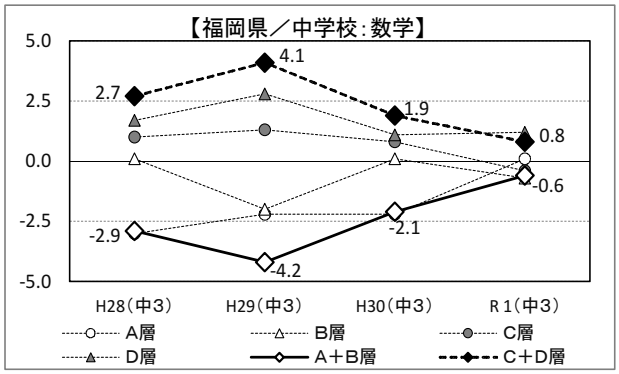
＜小学校＞国語は全国を上回り、算数は全国と同値、**平均（国・算）では5年連続で向上**。
＜中学校＞全教科で全国を下回ったが、**平均（国・数）では4年連続で改善傾向**。

◆福岡県の学力層（四分位）の推移

報告書 P.5～

学力層（四分位）の分析によって、C層、D層の児童生徒にとっての苦手領域等を明確にしたり、学校や市町村等における取組がどの層の児童生徒に効果があったのかを検証したりして、今後の授業改善の方策等を見いだすことができることから、本年度から新たに掲載している。





＜小学校:国語＞A・B層が増加、C・D層が減少 ⇒ どの層にも一定の取組効果があったと考えられる。
＜中学校:数学＞A層が増加、C層が減少 ⇒ A層、C層に取組効果があったと考えられる。

◆教科に関する調査結果【小学校】

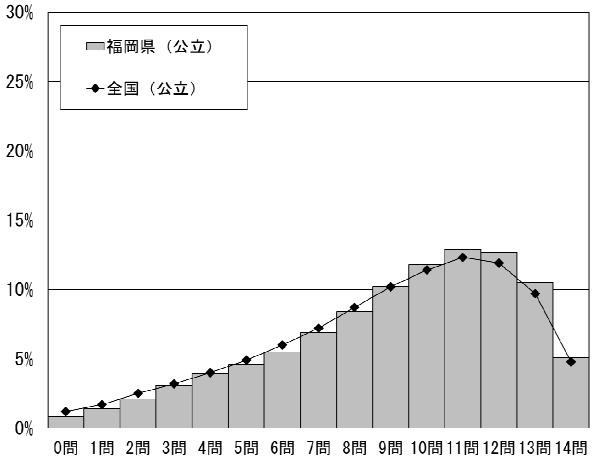
小学校 国語

報告書 P.28～

＜分類・区分別集計結果＞

分類	区分	対象問題数	平均正答率（%） 福岡県	平均正答率（%） 全国
学習指導要領の領域等	話すこと･聞くこと	3	73.8	72.3
	書くこと	3	55.2	54.5
	読むこと	3	82.8	81.7
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	5	55.9	53.5
評価の観点	国語への関心・意欲・態度	3	59.3	57.6
	話す・聞く能力	3	73.8	72.3
	書く能力	3	55.2	54.5
	読む能力	3	82.8	81.7
	言語についての知識・理解・技能	5	55.9	53.5
問題形式	選択式	7	76.1	75.1
	短答式	4	51.2	48.7
	記述式	3	59.3	57.6

＜児童の正答数分布グラフ＞（横軸：正答数、縦軸：割合）



	平均正答数	平均正答率(%)	中央値	標準偏差
福岡県	9.2 ／ 14	65	10.0	3.3
全 国	8.9 ／ 14	64	10.0	3.4

◎「目的に応じて、本や文章全体を概観して効果的に読む」ことはできている。〔2二〕(89.7%)

▲「目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて書く」ことに課題がある。〔1三〕(29.8%)

◎は正答率が一番高く、▲は一番低かった内容。〔　〕内は問題番号、（　）内の値は正答率。

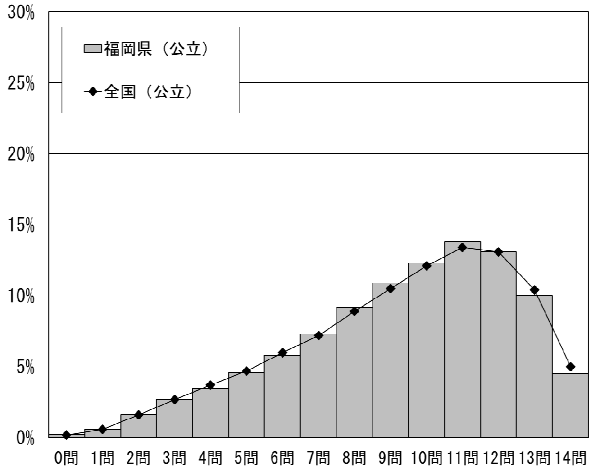
小学校 算数

報告書 P.30～

＜分類・区分別集計結果＞

分類	区分	対象問題数	平均正答率（%） 福岡県	平均正答率（%） 全国
学習指導要領の領域等	数と計算	7	63.5	63.2
	量と測定	3	52.0	52.9
	図形	2	76.6	76.7
	数量関係	7	68.1	68.3
評価の観点	算数への関心・意欲・態度	0		
	数学的な考え方	8	62.3	62.2
	数量や図形についての技能	4	73.3	73.6
	数量や図形についての知識・理解	2	70.4	70.1
問題形式	選択式	5	75.8	75.7
	短答式	5	73.1	72.8
	記述式	4	46.8	47.4

＜児童の正答数分布グラフ＞（横軸：正答数、縦軸：割合）



	平均正答数	平均正答率(%)	中央値	標準偏差
福岡県	9.3 ／ 14	67	10.0	3.0
全 国	9.3 ／ 14	67	10.0	3.1

◎「棒グラフから、資料の特徴や傾向を読み取る」ことはできている。〔2(1)〕(95.3%)

▲「示された計算の仕方を解釈し、減法の場合を基に、除法に関して成り立つ性質を記述できる」ことに課題がある。〔3(2)〕(31.3%)

◆教科に関する調査結果【中学校】

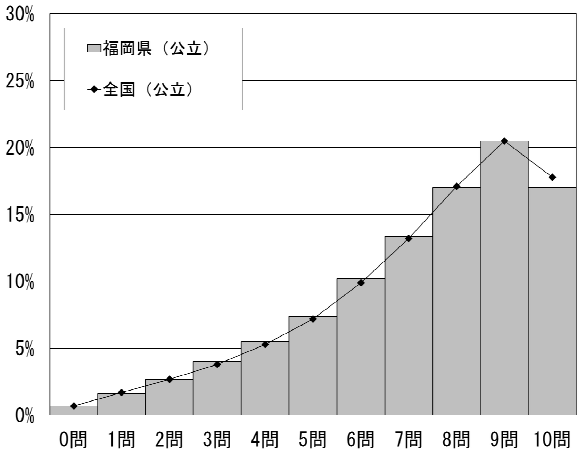
中学校 国語

報告書 P.32～

＜分類・区分別集計結果＞

分類	区分	対象問題数	平均正答率（%） 福岡県	全国
学習指導要領の領域等	話すこと･聞くこと	3	70.7	70.2
	書くこと	2	82.0	82.6
	読むこと	3	72.0	72.2
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	2	65.7	67.7
評価の観点	国語への関心・意欲・態度	3	77.1	76.5
	話す・聞く能力	3	70.7	70.2
	書く能力	2	82.0	82.6
	読む能力	3	72.0	72.2
	言語についての知識・理解・技能	2	65.7	67.7
問題形式	選択式	6	72.9	73.6
	短答式	1	54.3	56.8
	記述式	3	77.1	76.5

＜生徒の正答数分布グラフ＞（横軸：正答数、縦軸：割合）



	平均正答数	平均正答率(%)	中央値	標準偏差
福岡県	7.2 ／ 10	72	8.0	2.4
全 国	7.3 ／ 10	73	8.0	2.4

◎「文章に表れているものの見方や考え方について、自分の考えをもつ」ことはできている。〔1三〕(92.0%)
▲「封筒の書き方を理解して書く」ことに課題がある。〔1四〕(54.3%)

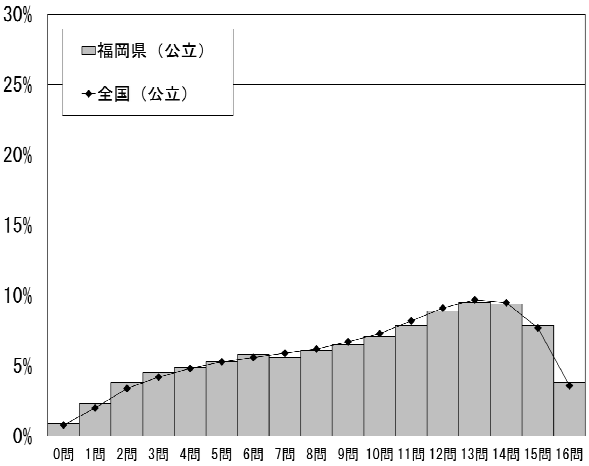
中学校 数学

報告書 P.34～

＜分類・区分別集計結果＞

分類	区分	対象問題数	平均正答率（%） 福岡県	全国
学習指導要領の領域等	数と式	5	63.4	63.8
	図形	4	70.4	72.4
	関数	3	41.8	40.8
	資料の活用	4	56.0	56.3
評価の観点	数学への関心・意欲・態度	0		
	数学的な見方や考え方	8	51.1	51.0
	数学的な技能	3	63.5	63.9
	数量や図形についての知識・理解	5	69.7	71.3
問題形式	選択式	5	60.3	60.3
	短答式	7	65.3	66.6
	記述式	4	47.3	47.1

＜生徒の正答数分布グラフ＞（横軸：正答数、縦軸：割合）



	平均正答数	平均正答率(%)	中央値	標準偏差
福岡県	9.5 ／ 16	59	10.0	4.3
全 国	9.6 ／ 16	60	10.0	4.2

◎「平行移動の意味を理解している」はできている。〔 3 〕(81.9%)
▲「事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明する」ことに課題がある。〔6(2)〕(34.8%)

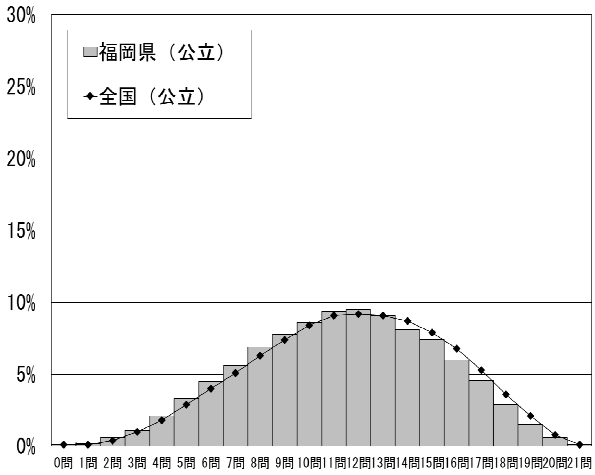
中学校 英語

報告書 P.36～

＜分類・区分別集計結果＞

分類	区分	対象問題数	平均正答率（%） 福岡県	平均正答率（%） 全国
学習指導要領の領域等	聞くこと	7	66.6	67.9
	話すこと（参考値）			
	読むこと	6	54.5	55.6
	書くこと	8	42.8	45.8
評価の観点	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝへの関心・意欲・態度	0		
	外国語表現の能力	1	1.3	1.8
	外国語理解の能力	6	43.3	44.7
	言語や文化についての知識・理解	14	62.5	64.7
問題形式	選択式	13	70.1	71.4
	短答式	5	41.7	45.2
	記述式	3	5.4	6.8

＜生徒の正答数分布グラフ＞（横軸：正答数、縦軸：割合）



	平均正答数	平均正答率(%)	中央値	標準偏差
福岡県	11.4 ／ 21	54	11.0	3.9
全 国	11.8 ／ 21	56	12.0	3.9

◎「語と語の連結による音変化をとらえて、情報を正確に聞き取ること」はできている。〔1(1)〕(90.2%)

▲「与えられたテーマについて考えを整理し、文と文のつながりなどに注意してまとまりのある文章を書く」ことに課題がある。〔10〕(1.3%)

※英語は「話すこと」を除く、「聞くこと、読むこと、書くこと」の結果

ここがポイント！ 学習指導の改善・充実に向けて

○ 学力層の分析による一人一人の学力を把握した個に応じた指導

学力層（四分位）の分析は、各学力層の分布やその推移の状況を明らかにします。この分析により、授業のねらいを焦点化し、手立てを具体化することができるとともに、習熟度別少人数授業や各学力層の実態に応じた教材・教具の一層の充実を図ることが可能になります。

○ 低学年からの系統性を意識した学習計画の工夫

調査対象学年だけではなく、低学年からつまずきがある場合もあります。「学習指導要領における領域・内容」から各学年の目標や内容の系統性を意識することで、全学年を見通した各学年の授業を展開することができます。

○ 調査問題や過去の資料（「解説資料」「授業アイディア例」等）の活用

教材や題材を選ぶ際に、調査問題を参考にすることで、授業の幅も広がります。また、調査結果を踏まえ、関連する過去の資料を活用することにより、児童生徒のつまずきやすいところが明らかになり、授業改善のヒントが見つかります。

質問紙に関する調査結果

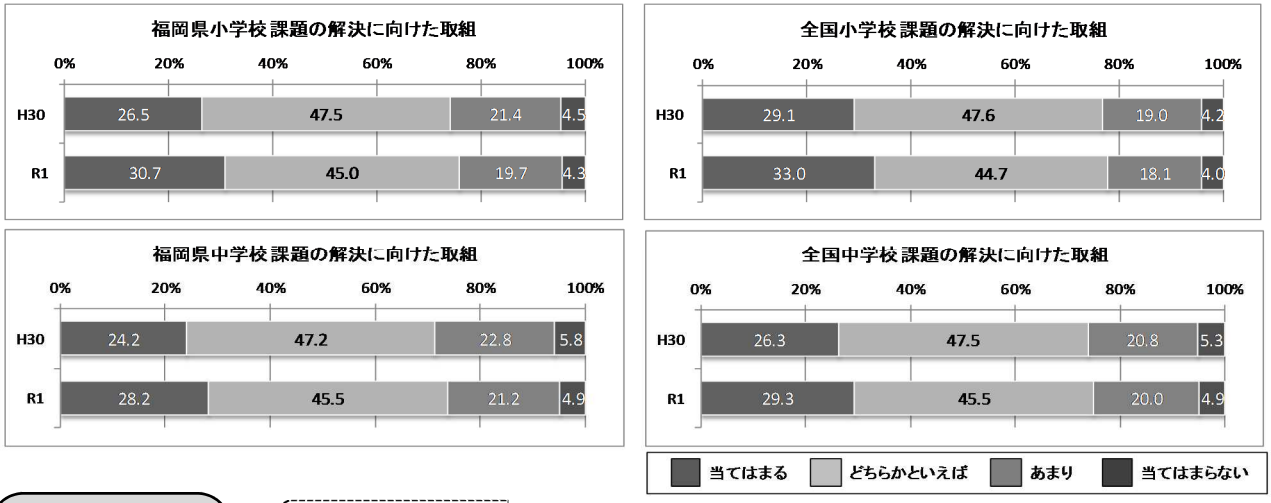
児童生徒質問紙

報告書 P.56～

「課題解決に向けた授業改善に対する児童生徒の捉え」の肯定的な回答は、昨年度よりも増加していることから、各学校における授業改善が進んでいることがうかがえる。その他の回答「基本的な生活習慣」「規範意識」「学習に対する関心・意欲・態度」等についても、昨年度よりも肯定的な回答が増加している。

◆課題の解決に向けた取組

授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。



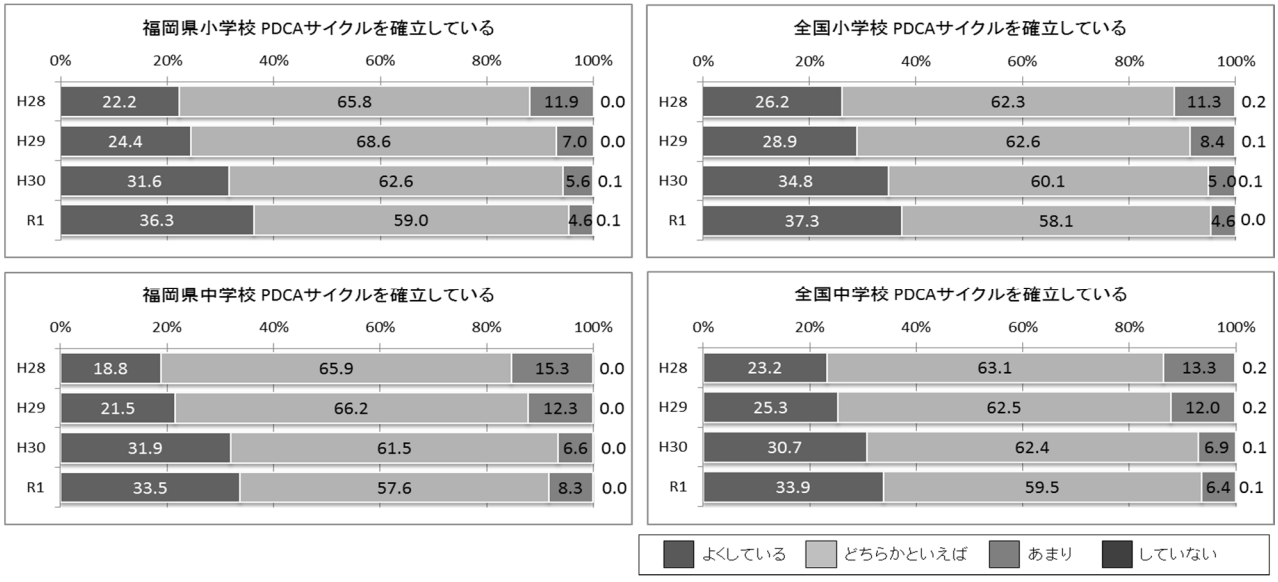
学校質問紙

報告書 P.72～

「PDCAサイクルの確立」についての肯定的な回答は、年々増加傾向にあることから、各学校における学力向上に向けた検証改善が進んでいることがうかがえる。その他の回答「補充的な学習」「調査問題を活用した授業改善」「ICTの活用」等についても、昨年度よりも肯定的な回答が増加傾向にある。

◆学力向上に関する検証改善サイクルの確立

児童（生徒）の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか。



質問紙に関する調査の比較分析

児童生徒と教員（学校）の回答状況の比較

報告書 P.89～

「自己有用感」に関する回答結果では、教員の取組意識と児童生徒の受け止め方に差があることから、教員の指導を児童生徒にさらに浸透させる手立てが必要と考えられる。その他の回答「合意形成」「挑戦心」に係る取組等でも、教員の取組と児童生徒の受け止め方に差がみられた。

◆自己有用感

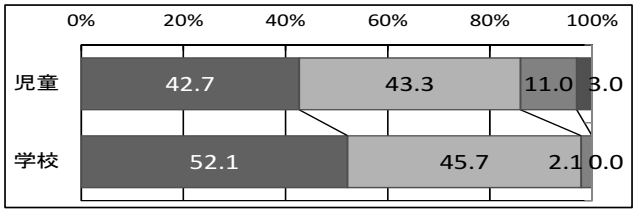
児童生徒：先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思うか。

学校：児童生徒一人一人のよい点や可能性を見付け評価する取組をどの程度行ったか。

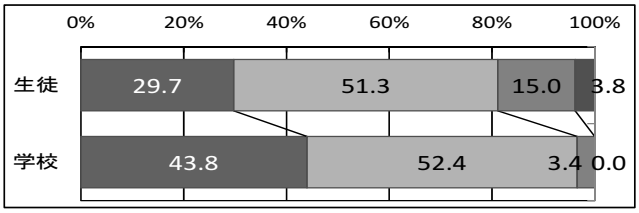
児童生徒質問紙　当てはまる　どちらかといえば　あまり　全く

学校質問紙　よく行った　どちらかといえば　あまり　全く

■　小学校



■　中学校

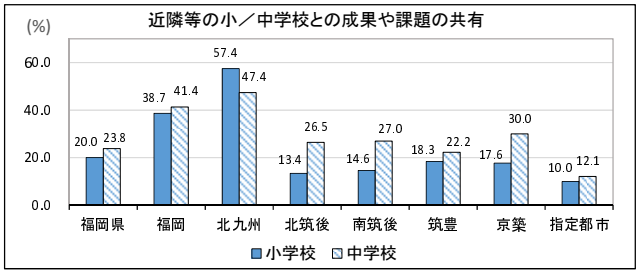


小学校と中学校の回答状況の比較

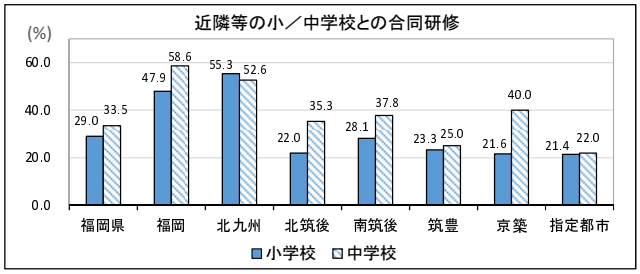
報告書 P.92～

「小中連携の取組」の回答結果では、多くの地区において、中学校（中学校区）を中心とした学力向上の取組が推進されていることがうかがえる。

◆学力調査の成果や課題の共有



◆小学校と中学校との合同研修

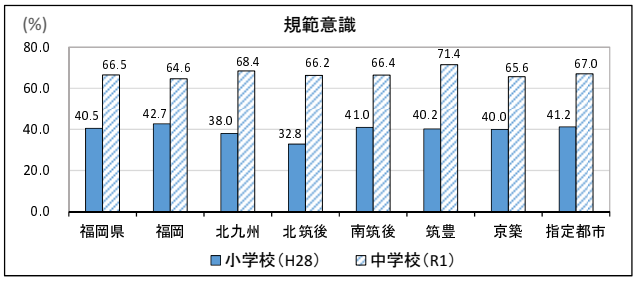


同一集団（H28 小６と R1 中３）の比較

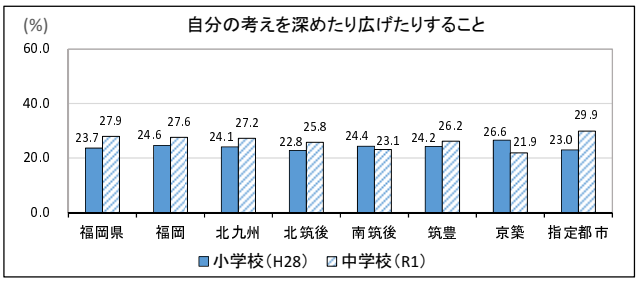
報告書 P.94～

「規範意識」「自分の考えを深めたり、広げたりすること」の回答結果では、多くの地区において、小学校で育まれた素地が中学校において確実に伸長していることがうかがえる。

◆規範意識



◆自分の考えを深めたり広げたりすること



まとめと今後の取組

報告書 P.108～

◆これまでの取組の「○成果」と「●課題」

○ 学力調査結果において、小学校は5年連続上昇傾向、中学校は4年連続改善傾向にある。
○ 学力向上に関する検証改善サイクルが着実に実施されている。
● 小学校で培った学力を、中学校で十分に伸ばせていない。

◆今後の取組

＜今後の改善の視点＞

- 小中一貫した指導等による「授業改善」
- ミドル・リーダー等の「人材育成」
- 管理職のリーダーシップによる「学校マネジメント」

小中９年間を通した『授業改善』による学力向上

小中をつないだ取組の充実

人材育成　支援

❒ **学校の中核となるﾐﾄﾞﾙ･ﾘｰﾀﾞｰの育成**
- ｶﾘｷｭﾗﾑ･ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ力を磨く研修の充実
- 職能成長を図る業績評価の充実
- 学校経営参画力を高める管理職面談の実施

【学力向上推進拠点校事業】
【福岡県地区間交流研修】

❒ **県全体の教科指導ﾘｰﾀﾞｰの育成**
- 専門性を備えた教科指導者研修の充実
- 実践的指導力を高める授業公開等の実施
- 各地区教科等研究会との連携

【ｺｱ･ﾃｨｰﾁｬｰ指導力向上講座】
【各地区教科等研究会の情報収集】

❒ **若年教員の授業力育成**
- 教員育成指標に基づく若年教員研修の充実
- 初任者指導教員連絡協議会の開催

【若年教員（初任者）研修】
【ふくおか若年教員育成事業】

授業改善　支援

❒ **小中一貫した指導による授業づくり**
- ９年間の視点に立った学力向上ﾌﾟﾗﾝの充実
- 中学校区における小中合同研修会の充実
- 中学校区における学習指導の一貫性の確保

【学力向上強化市町村指定事業】
【重点課題研究指定・委嘱事業】

❒ **思考力・判断力・表現力等を育む授業づくり**
- 四分位層分析等を活用した学力調査結果分析
- 「書くこと(振り返り)」を重視した授業改善
- 学力調査結果を踏まえた「指導資料」の活用

【全国及び県学力調査結果の分析】
【全国調査結果を踏まえた指導資料の作成】
【教育事務所によるフォローアップ訪問】
【「主体的・対話的で深い学び」授業実践講座】

❒ **指導と評価の一体化を重視した授業改善**
- 高校入試問題を活用した授業づくりの推進
- 活用力を見取る定期考査問題の収集
- 授業評価による授業改善の充実

【「定期考査問題の作り方」の作成・配布】
【高校入試問題活用資料提供】
【学力向上推進拠点校指定事業】

学校のマネジメント　支援

❒ **カリキュラム・マネジメントの充実**
- 教育課程の編成、実施、評価の適切な管理
- 非認知的能力の育成するプロジェクトの実施
- 今日的課題に対応する指導計画の作成と環境整備

【学力向上推進拠点校指定事業】
【鍛ほめプロジェクト推進事業】
【英語教育推進・プログラミング教育推進事業】

❒ **管理職のリーダーシップとマネジメント**
- 校長による経営課題、教育課題の的確な把握
- 職員のﾓﾁﾍﾞｰｼｮﾝを高めるマネジメントの理解促進
- 中学校区を中心とした小中連携教育の推進

【管理職研修・新任管理職研修】

❒ **地域や保護者、関係機関等との組織的な連携**
- 「社会に開かれた教育課程」を実現する学校評価の充実
- 地域の教育力を活用した学校運営の推進
- 課題解決のための関係機関等との円滑な連携

【コミュニティ・スクール推進事業】

【県教育委員会としての今後の取組】

平成 31 年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査

Ⅰ　調査の概要

１　調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

２　調査対象の学年

・小学校第６学年、義務教育学校前期課程第６学年、特別支援学校小学部第６学年
・中学校第３学年、義務教育学校後期課程第３学年、中等教育学校前期課程第３学年、特別支援学校中学部第３学年

３　調査の方式

文部科学省による悉皆方式の調査として実施

４　調査日

平成３１年４月１８日（木）

５　調査の内容

(1) 教科に関する調査

小学校は、国語及び算数、中学校は、国語、数学及び英語とし、下記の①と②を一体的に問う出題内容

①	②
身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等	知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

(2) 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

児童生徒に対する調査	学校に対する調査
学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査	指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査

(3) 調査時間

小学校

１時限目：国語（45 分）、２時限目：算数（45 分）、２時限目終了以降：質問紙（20 分程度）

中学校

１時限目：国語（50 分）、２時限目：数学（50 分）、３時限目：英語「聞くこと、読むこと、書くこと」（45 分）、３時限目終了以降：質問紙（20 分程度）、４～６時限目：英語「話すこと」（5 分程度）

※　各学校・学級数の状況に応じて時間割は変動

６　４月１８日に調査を実施した県内公立学校・児童生徒数

小学校	学校数（校）	児童数（人）		
		国語	算数	
福岡県（公立）	725	44,458	44,466	
全国（公立）	19,263	1,028,203	1,028,177	

中学校	学校数（校）	生徒数（人）		
		国語	数学	英語
福岡県（公立）	349	39,699	39,703	39,711
全国（公立）	9,511	938,797	938,887	938,888

※　学校数は、国・私学を除く。※　福岡県（公立）には、両指定都市を含む。

７　調査問題の内容

■　各教科の設問数

小学校		中学校		
国語	算数	国語	数学	英語
14	14	10	16	21（5）

※（　）は英語「話すこと」の設問数で外数。

■　評価の観点別の設問数

国語の評価の観点	小学校	中学校
国語への関心・意欲・態度	3	3
話す・聞く能力	3	3
書く能力	3	2
読む能力	3	3
言語についての知識･理解･技能	5	2

算数･数学の評価の観点	小学校	中学校
算数への関心・意欲・態度	0	0
数学的な考え方	8	8
数量や図形についての技能（数学的な技能）	4	3
数量や図形についての知識・理解	2	5

英語の評価の観点	小学校	中学校
コミュニケーションへの関心・意欲・態度		0
外国語表現の能力		1（2）
外国語理解の能力		6
言語や文化についての知識・理解		14（3）

※（　）は英語「話すこと」の設問数で外数。

■　問題形式別の設問数

問題形式	小学校		中学校		
	国語	算数	国語	数学	英語
選択式	7	5	6	5	13
短答式	4	5	1	7	5
記述式	3	4	3	4	3
口述式※					5

※　口述式は、英語「話すこと」のみで実施。

Ⅱ　調査結果の概要

１　調査結果の概況

		小学校（公立）			中学校（公立）		
		平均正答数／出題数	平均正答率	標準化得点	平均正答数／出題数	平均正答率	標準化得点
国語	福岡県	9.2 ／14	65	103.4	7.2 ／10	72	98.6
	全国	8.9	64	(100.0)	7.3	73	(100.0)
算数 数学	福岡県	9.3 ／14	67	100.0	9.5 ／16	59	99.0
	全国	9.3	67	(100.0)	9.6	60	(100.0)
英語	福岡県				聞くこと 読むこと 書くこと 11.4 ／21	54	96.6
	全国				11.8	56	(100.0)
	福岡県				話すこと（参考値） 1.6 ／ 5	31	106.7
	全国				1.5	31	(100.0)

※　英語「話すこと」の全国の値は、国立と私立を含む。

平均正答数 ：児童生徒の正答数の平均のこと。
平均正答率 ：平均正答数を設問数で割った値を百分率で表示した値のこと。
標準化得点 ：全国の平均正答数をそれぞれ１００となるよう標準化した得点のこと。

２　教科に関する調査の結果（福岡県全体の状況）

○　小学校の標準化得点は、国語で全国平均を上回り、算数で全国平均と等しかった。

○　中学校の標準化得点は、全ての教科で全国平均を下回ったが、英語「話すこと」調査では全国平均を上回った。

３　標準化得点の推移

※　本年度からＡ・Ｂ問題が統合されたため、H19～H30 は参考として示す。

※　中学校英語については、初めての実施であったため、推移については触れていない。

(1) 本県の標準化得点の推移

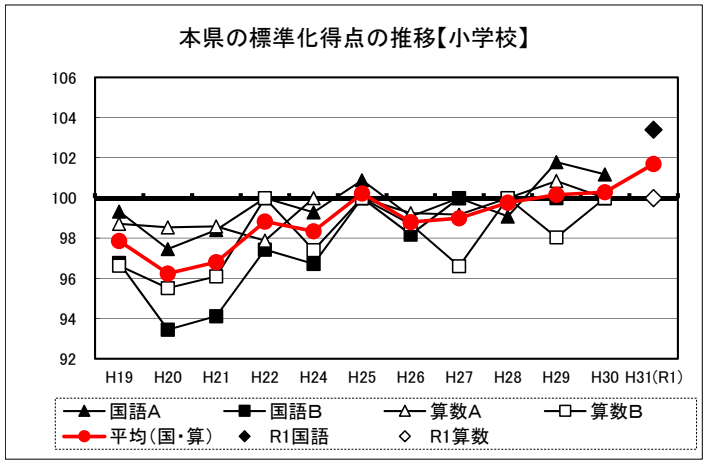
＜小学校＞

○　昨年度（A・B問題を平均した値）との比較では、国語は上昇し、算数は同様であった。
○　平成 19 年度（A・B問題を平均した値）との比較では、国語、算数ともに上昇した。
○　国語、算数の値を平均すると、調査開始以来、最も高い値である。

■　本県の標準化得点の推移

	国語A	国語B	算数A	算数B	平均
H19	99.3	96.8	98.7	96.6	97.9
H20	97.5	93.4	98.5	95.5	96.2
H21	98.4	94.1	98.6	96.1	96.8
H22	100.0	97.4	97.9	100.0	98.8
H24	99.3	96.7	100.0	97.4	98.4
H25	100.9	100.0	100.0	100.0	100.2
H26	99.1	98.2	99.2	98.7	98.8
H27	100.0	100.0	99.2	96.6	99.0
H28	99.1	100.0	100.0	100.0	99.8
H29	101.8	100.0	100.8	98.0	100.2
H30	101.2	100.0	100.0	100.0	100.3

H31	国語	算数	平均
(R1)	103.4	100.0	101.7



※　「平均」は、国語と算数の標準化得点を平均した値である。

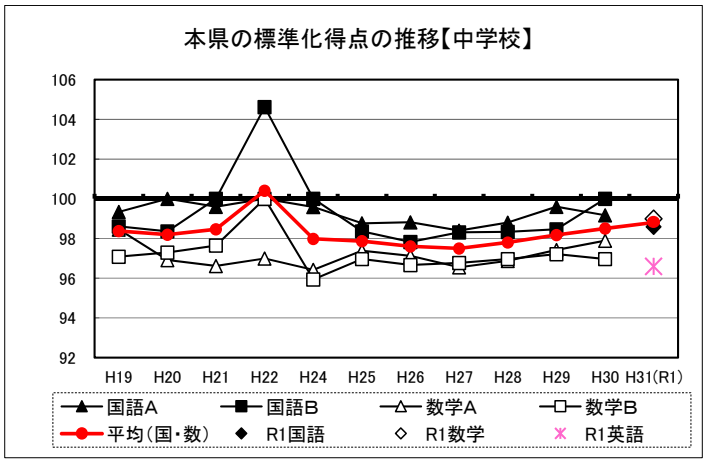
＜中学校＞

○　昨年度（A・B問題を平均した値）との比較では、国語は下降し、数学は上昇した。
○　平成 19 年度（A・B問題を平均した値）との比較では、数学において上昇した。
○　国語、数学の値を平均すると、４年連続で改善傾向である。

■　本県の標準化得点の推移

	国語A	国語B	数学A	数学B	平均
H19	99.3	98.6	98.5	97.1	98.4
H20	100.0	98.4	96.9	97.3	98.2
H21	99.6	100.0	96.6	97.6	98.5
H22	100.0	104.6	97.0	100.0	100.4
H24	99.6	100.0	96.4	95.9	98.0
H25	98.8	98.4	97.4	97.0	97.9
H26	98.8	97.8	97.1	96.7	97.6
H27	98.4	98.3	96.6	96.8	97.5
H28	98.8	98.3	96.9	97.0	97.8
H29	99.6	98.5	97.4	97.2	98.2
H30	99.2	100.0	97.9	97.0	98.5

H31	国語	数学	平均	英語
(R1)	98.6	99.0	98.8	96.6



※　「平均」は、国語と数学の標準化得点を平均した値である。

(2) 本県の学力層（四分位）の推移

児童生徒の学力層に応じた学力向上の取組を検証し、授業改善等に生かすため、平成 28 年度から本年度までの各学力層(以下､四分位層という｡)の推移を分析している。

四分位層とは、児童生徒全員の正答数分布の状況から高い順に 25%区切りで、Ａ層、Ｂ層、Ｃ層、Ｄ層の４つの層に分けたものである。なお、グラフの値は、全国と本県のＡ～Ｄ層それぞれの児童生徒の割合の差であり、中心線(0.0)に近いほど、全国との差が小さいことを示している。また、Ａ層、Ｂ層が増加(右上がり)、Ｃ層、Ｄ層が減少(右下がり)している場合は、好ましい傾向と言える。

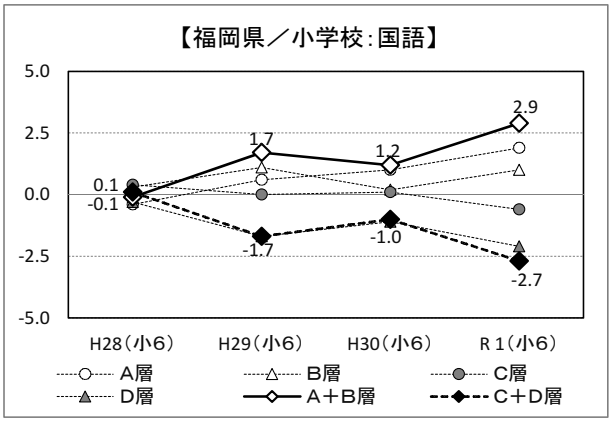
標準化得点の推移等に加え、本分析の視点を取り入れることで、Ｃ層、Ｄ層の児童生徒にとっての苦手領域等を明確にしたり､学校や市町村等における取組がどの層の児童生徒に効果があるのかを検証したりして､今後の授業改善の方策等を見いだすことができることから、本年度から新たに掲載している。

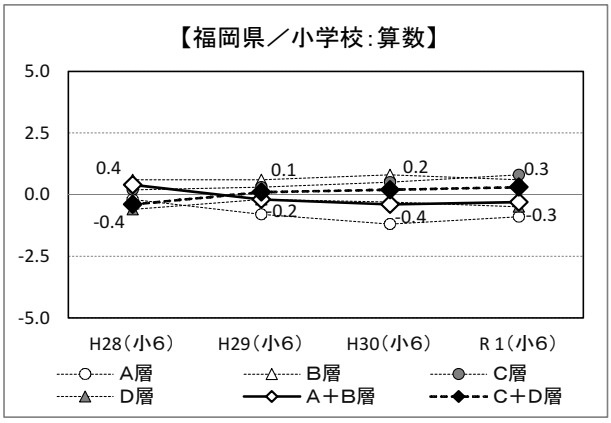
以下の内容は、各グラフの H28 と R1 を比べ、これまでの取組等がどの層に効果があったのか等の分析を示している。

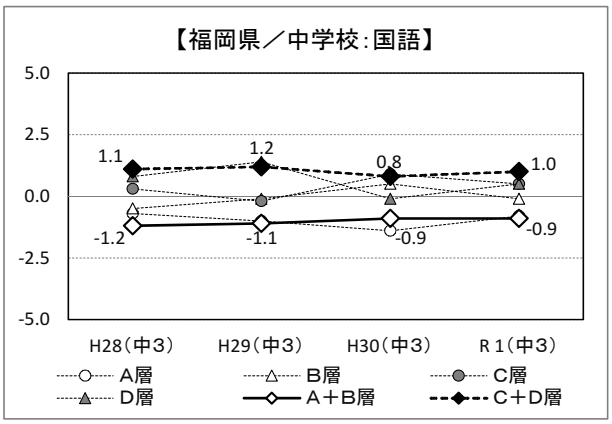
○　小学校国語は、Ａ層、Ｂ層が増加し、Ｃ層、Ｄ層が減少していることから、どの層にも取組の効果があったと考えられる。

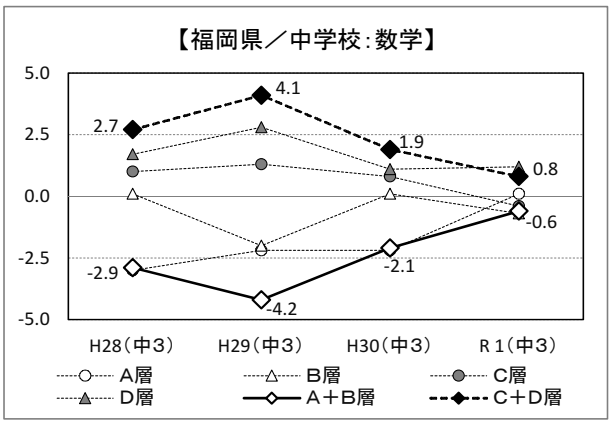
○　小学校算数、中学校国語は、どの層も全国とほぼ同じ割合で推移しているが、全国より､Ｃ＋Ｄ層の割合が大きいため､さらなる取組の改善が必要だと考えられる。

○　中学校数学は、Ａ層、Ｂ層が全国の割合に達していないものの、Ａ層の増加、Ｃ層の減少に取組の効果があったと考えられる。









※ 平成 28～30 年度は、Ｂ問題における四分位層

(3) 地区別の標準化得点の推移

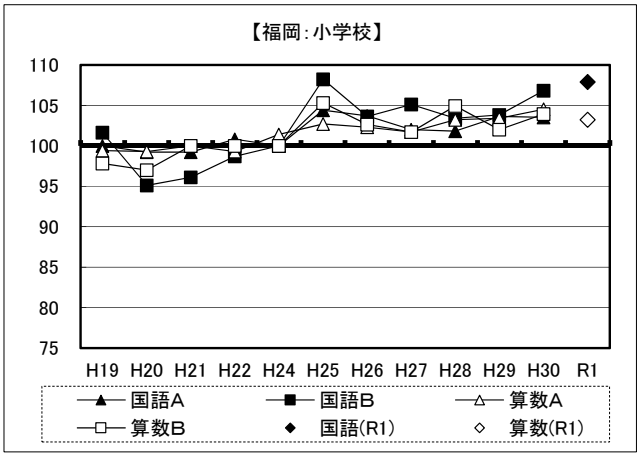
○　７つの地区間の標準化得点の最大・最小の差は、小学校では国語で 9.0 ポイント、算数で 9.7 ポイント、中学校では国語で 13.7 ポイント、数学で 18.7 ポイント、英語で 15.3 ポイントであった。

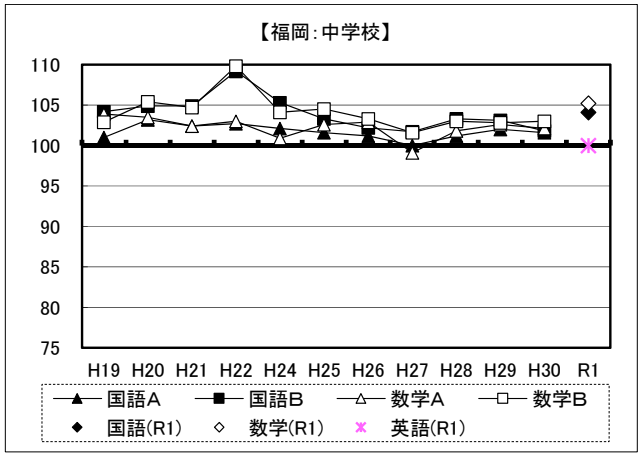
○　平成 19 年度（A・B問題の差を平均した値）との比較では、７つの地区間の最大・最小の差は、小学校、中学校ともに全ての教科で縮小した。

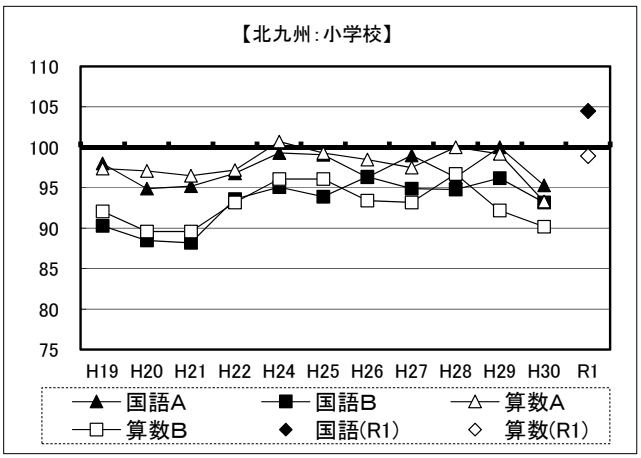
○　最大・最小の差は、小学校に比べ中学校の方が大きい。

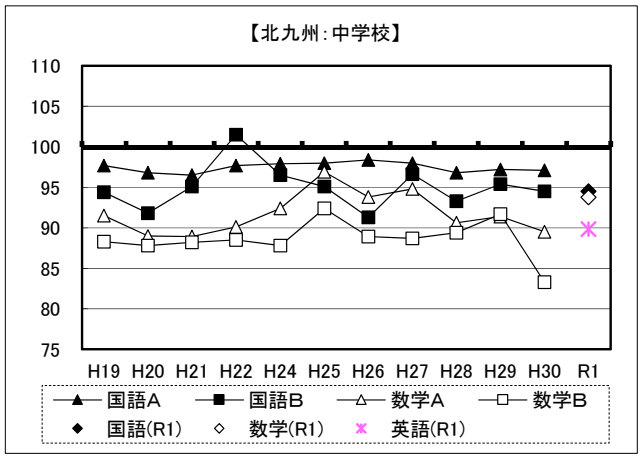
○　最大・最少の差が最も大きかったのは、中学校数学であった。

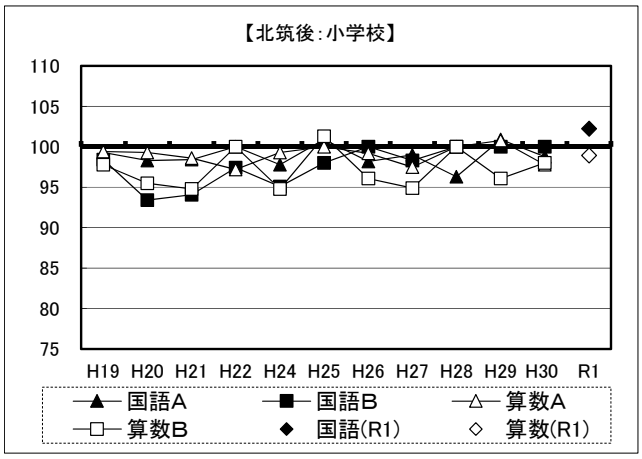
■　標準化得点の推移

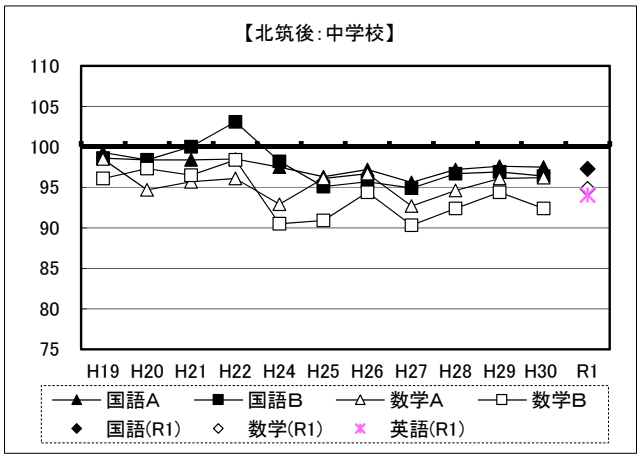


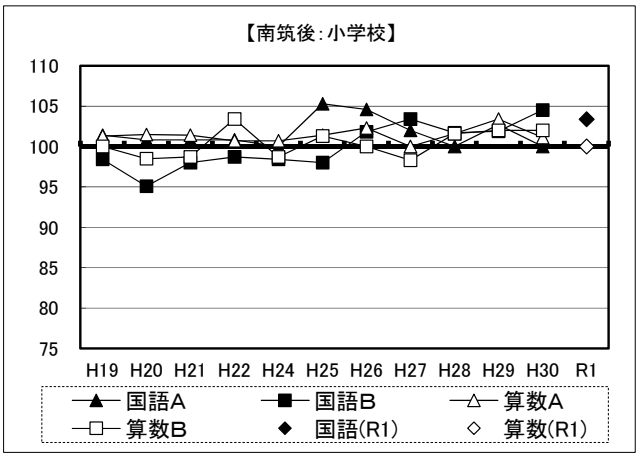


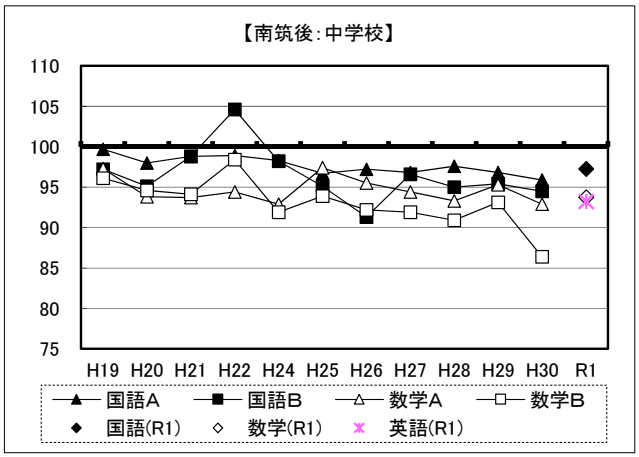


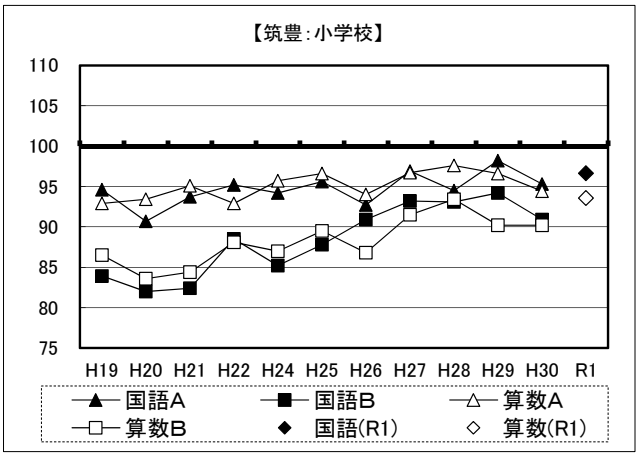


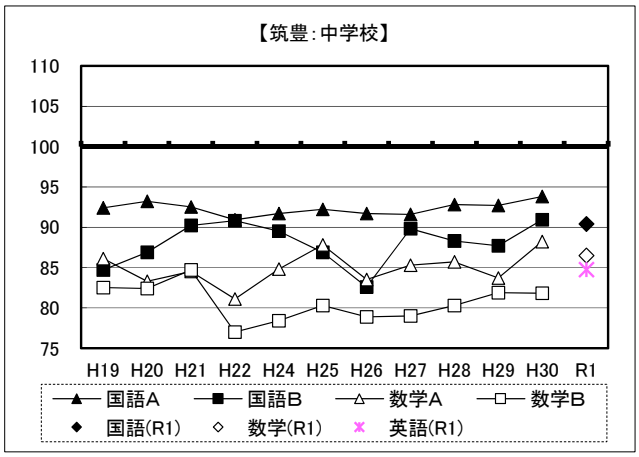


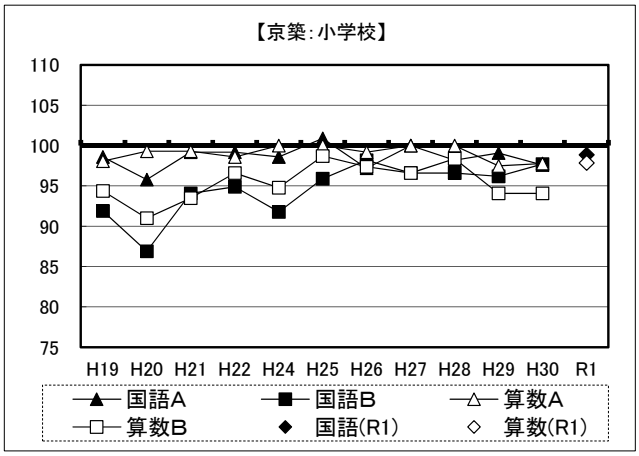


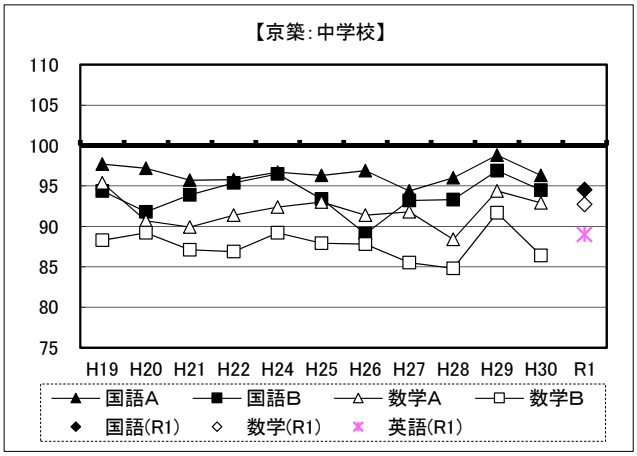

【南筑後:小学校】
110
105
100
95
90
85
80
75
H19 H20 H21 H22 H24 H25 H26 H27 H28 H29 H30 R1
国語A
国語B
算数A
算数B
国語(R1)
算数(R1)

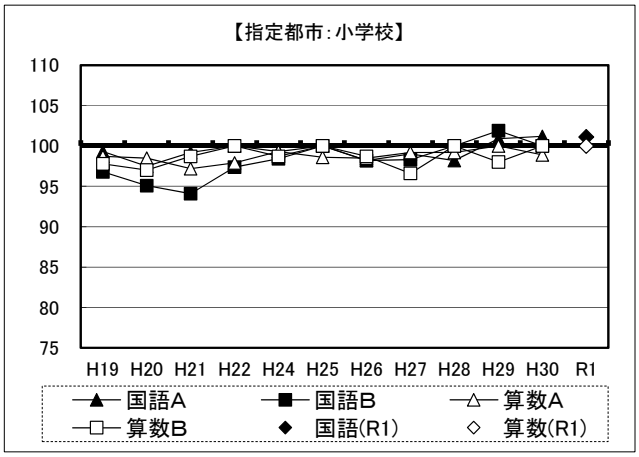

【南筑後:中学校】
110
105
100
95
90
85
80
75
H19 H20 H21 H22 H24 H25 H26 H27 H28 H29 H30 R1
国語A
国語B
数学A
数学B
国語(R1)
数学(R1)
英語(R1)

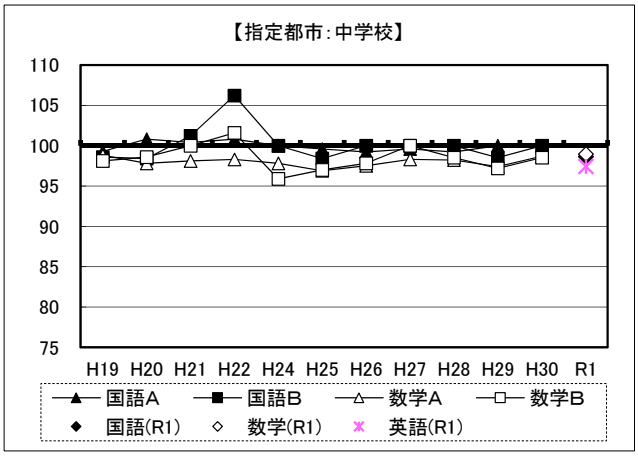

【筑豊:小学校】
110
105
100
95
90
85
80
75
H19 H20 H21 H22 H24 H25 H26 H27 H28 H29 H30 R1
国語A
国語B
算数A
算数B
国語(R1)
算数(R1)


【筑豊:中学校】
110
105
100
95
90
85
80
75
H19 H20 H21 H22 H24 H25 H26 H27 H28 H29 H30 R1
国語A
国語B
数学A
数学B
国語(R1)
数学(R1)
英語(R1)


【京築:小学校】
110
105
100
95
90
85
80
75
H19 H20 H21 H22 H24 H25 H26 H27 H28 H29 H30 R1
国語A
国語B
算数A
算数B
国語(R1)
算数(R1)


【京築:中学校】
110
105
100
95
90
85
80
75
H19 H20 H21 H22 H24 H25 H26 H27 H28 H29 H30 R1
国語A
国語B
数学A
数学B
国語(R1)
数学(R1)
英語(R1)


【指定都市:小学校】
110
105
100
95
90
85
80
75
H19 H20 H21 H22 H24 H25 H26 H27 H28 H29 H30 R1
国語A
国語B
算数A
算数B
国語(R1)
算数(R1)


【指定都市:中学校】
110
105
100
95
90
85
80
75
H19 H20 H21 H22 H24 H25 H26 H27 H28 H29 H30 R1
国語A
国語B
数学A
数学B
国語(R1)
数学(R1)
英語(R1)

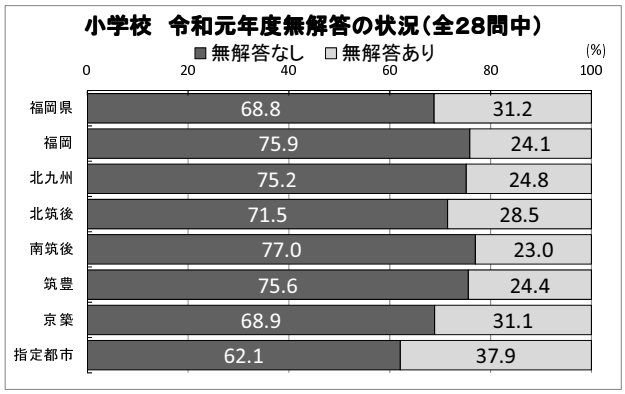
４　児童生徒の無解答の状況（地区別）

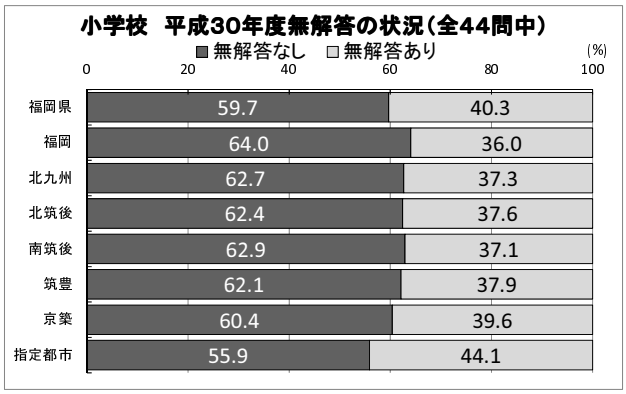
※　全ての問題に解答している場合は「無解答なし」、それ以外は「無解答あり」としている。

(1) 全体の状況

■　小学校（国語 14 問、算数 14 問、全２８問を対象）

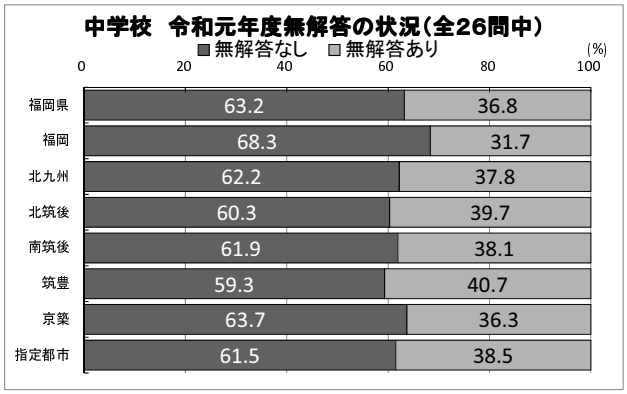
○　平成 30 年度と比較すると、県全体及び全ての地区において「無解答あり」の割合が減少した。

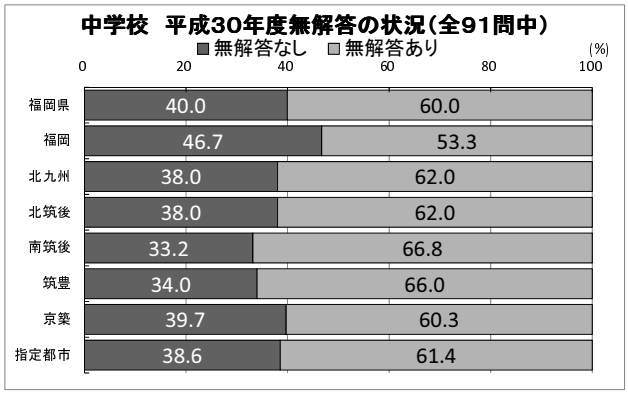




■　中学校①（国語 10 問、数学 16 問、全 26 問を対象）

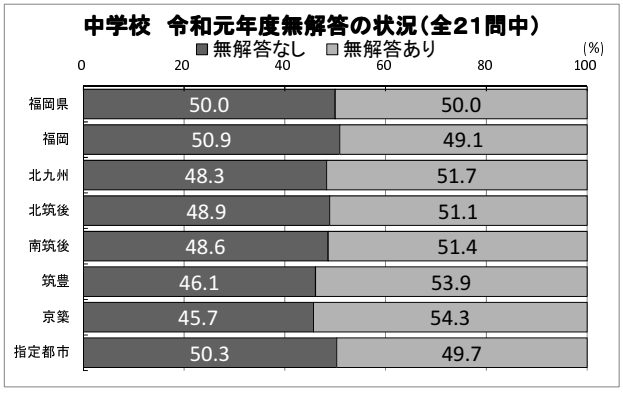
○　平成 30 年度と比較すると、県全体及び全ての地区において「無解答あり」の割合が減少した。





■　中学校②（英語「聞くこと、読むこと、書くこと」の 21 問を対象）

○　福岡、指定都市の地区において、「無解答なし」の割合が 50%以上であった。

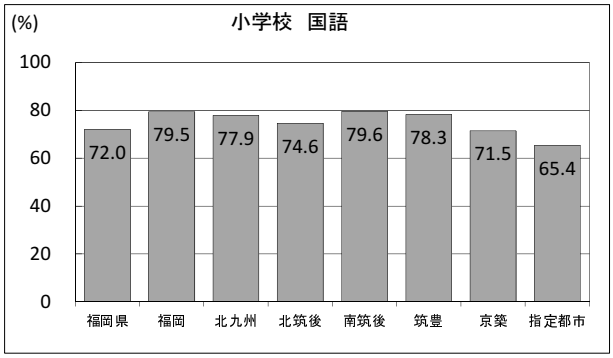


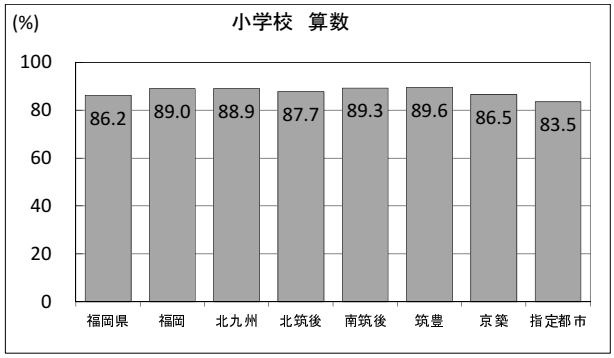
本年度から調査のため H30 のデータはなし

(2) 教科ごとの「無解答なし」の児童生徒の状況

■　小学校

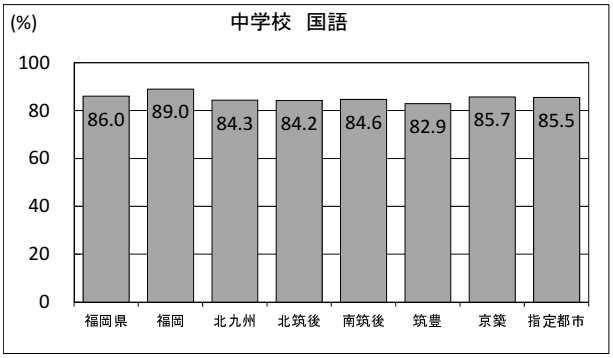
○　算数の方が国語より「無解答なし」の児童の割合が大きい。

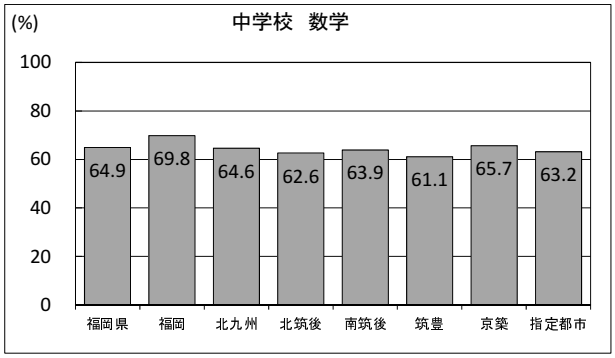


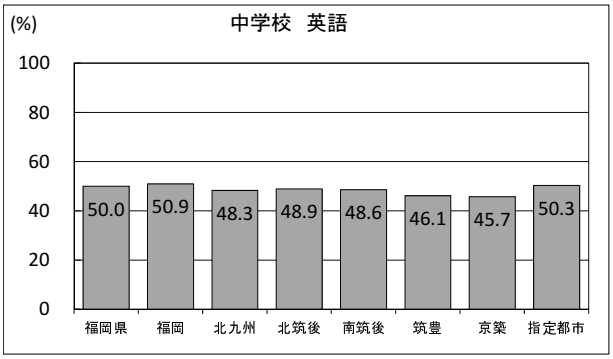


■　中学校

○　国語が「無解答なし」の生徒の割合が最も大きい。







(3) 記述式問題における「無解答率」と「平均正答率」の状況

○　小学校国語、算数及び中学校国語は、全国と比べて、無解答率が低い問題が多い。また、小学校算数及び中学校国語は、正答率が低い傾向にある。
○　中学校数学及び英語は、全国と比べて、無解答率が高い問題が多く、正答率も低い傾向にある。

教科	問題番号	出題の趣旨	無解答率(%)									平均正答率(%)								
			福岡	北九州	北筑後	南筑後	筑豊	京築	指定都市	福岡県	全国	福岡	北九州	北筑後	南筑後	筑豊	京築	指定都市	福岡県	全国
小学校 国語	1 三	目的や意図に応じて，自分の考えの理由を明確にし，まとめて書く	2.2	2.9	2.2	1.9	3.0	3.2	4.0	3.2	**3.8**	33.0	31.9	33.7	32.5	27.5	31.1	27.0	29.8	**28.8**
	2一（2）	目的に応じて，文章の内容を的確に押さえ，自分の考えを明確にしながら読む	2.9	3.8	3.7	3.2	3.4	4.1	5.5	4.3	**5.0**	82.3	79.2	79.4	80.6	75.8	76.7	75.2	77.9	**75.9**
	3 三	話し手の意図を捉えながら聞き，自分の考えをまとめる	8.7	11.2	11.0	8.9	8.5	13.0	16.0	12.6	**14.2**	76.8	72.3	72.1	74.4	71.2	69.3	65.7	70.2	**68.2**
小学校 算数	1（3）	示された図形の面積の求め方を解釈し，その求め方の説明を記述できる	4.2	4.9	5.1	4.5	4.2	5.5	7.4	5.9	**6.7**	43.4	40.9	40.5	43.0	38.1	45.0	43.8	42.9	**43.9**
	2（3）	資料の特徴や傾向を関連付けて，一人当たりの水の使用量の増減を判断し，その理由を記述できる	1.1	1.8	1.2	1.1	1.1	1.1	2.1	1.6	**2.0**	53.1	44.4	48.2	49.1	39.9	46.9	52.3	50.6	**52.1**
	3（2）	示された計算の仕方を解釈し，減法の場合を基に，除法に関して成り立つ性質を記述できる	6.7	7.4	8.0	6.6	6.6	8.7	11.0	8.9	**10.8**	32.2	32.1	28.2	33.8	27.2	30.3	31.6	31.3	**31.1**
	4（3）	場面の状況から，単位量当たりの大きさを基に，求め方と答えを記述し，その結果から判断できる	2.4	2.7	3.3	2.6	1.9	3.4	3.8	3.2	**3.5**	66.4	61.0	61.5	62.0	57.0	61.1	61.8	62.5	**62.6**
中学校 国語	1 三	文章に表れているものの見方や考え方について，自分の考えをもつ	0.8	1.6	1.4	1.3	1.4	1.0	1.5	1.3	**1.7**	93.9	90.9	91.0	91.7	90.4	92.1	91.5	92.0	**91.2**
	2 三	話合いの話題や方向を捉えて自分の考えをもつ	5.6	8.6	8.5	8.8	9.5	8.0	8.6	7.9	**8.9**	67.2	58.6	61.4	59.8	55.0	59.4	62.1	62.5	**60.4**
	3 二	伝えたい事柄について，根拠を明確にして書く	6.2	9.4	8.7	8.6	9.6	8.3	8.0	7.8	**7.9**	80.8	73.7	75.4	75.4	72.8	78.0	76.0	76.9	**77.8**
中学校 数学	6（2）	事象を数学的に解釈し，問題解決の方法を数学的に説明することができる	6.6	7.3	8.6	7.1	6.5	6.8	9.8	8.3	**11.6**	40.7	33.4	32.3	30.4	27.5	29.9	34.2	34.8	**34.7**
	7（3）	結論が成り立つための前提を考え，新たな事柄を見いだし，説明することができる	13.5	17.6	18.6	17.7	20.7	18.9	18.0	17.1	**17.6**	55.5	48.6	49.4	48.1	42.9	47.7	51.7	51.6	**53.3**
	8（2）	資料の傾向を的確に捉え，判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる	17.6	22.8	22.7	21.4	24.2	22.4	22.3	21.2	**21.3**	47.2	44.0	43.8	41.4	42.0	45.5	40.1	42.7	**40.8**
	9（2）	事柄が成り立つ理由を説明することができる	15.6	20.4	21.4	19.6	22.8	18.6	18.5	18.4	**17.8**	63.7	57.6	55.4	56.7	52.4	57.5	60.8	60.1	**59.7**
中学校 英語	4	聞いて把握した内容について，適切に応じることができる	42.3	43.7	42.8	44.7	45.4	47.0	42.1	42.6	**42.3**	5.5	2.7	4.9	5.1	2.4	3.4	6.9	5.9	**7.6**
	8	書かれた内容に対して，自分の考えを示すことができるよう，話の内容や書き手の意見などをとらえることができる	25.8	31.6	29.7	29.9	34.8	32.0	27.8	28.2	**27.9**	9.6	6.7	8.7	9.2	4.1	5.7	9.8	9.2	**10.9**
	10	与えられたテーマについて考えを整理し，文と文のつながりなどに注意してまとまりのある文章を書くことができる	5.7	8.4	8.1	6.4	7.9	7.5	7.8	7.2	**8.3**	1.5	0.6	0.8	1.0	0.6	0.6	1.6	1.3	**1.8**

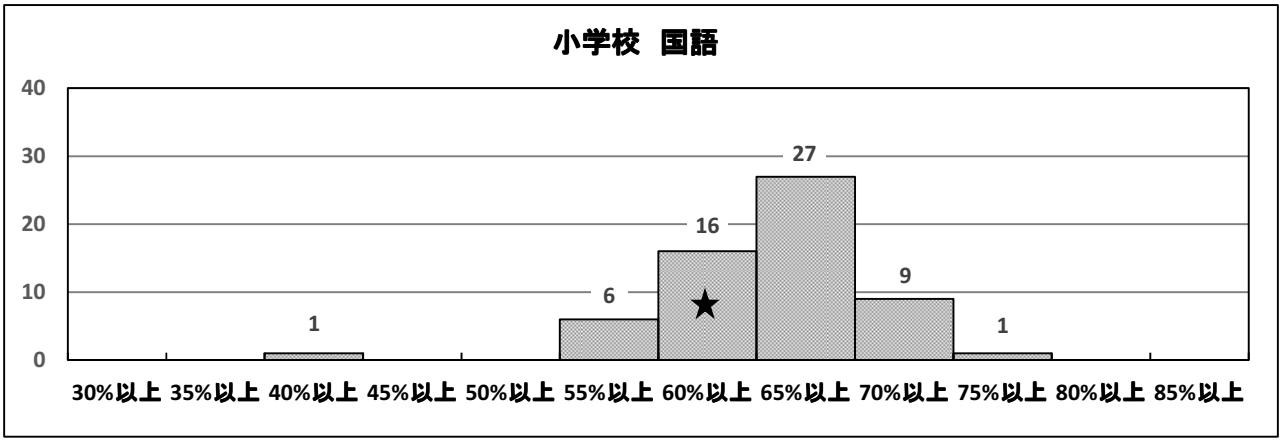
※　無解答率の網掛けは「全国より高い値」、平均正答率の網掛けは「全国より低い値」である。

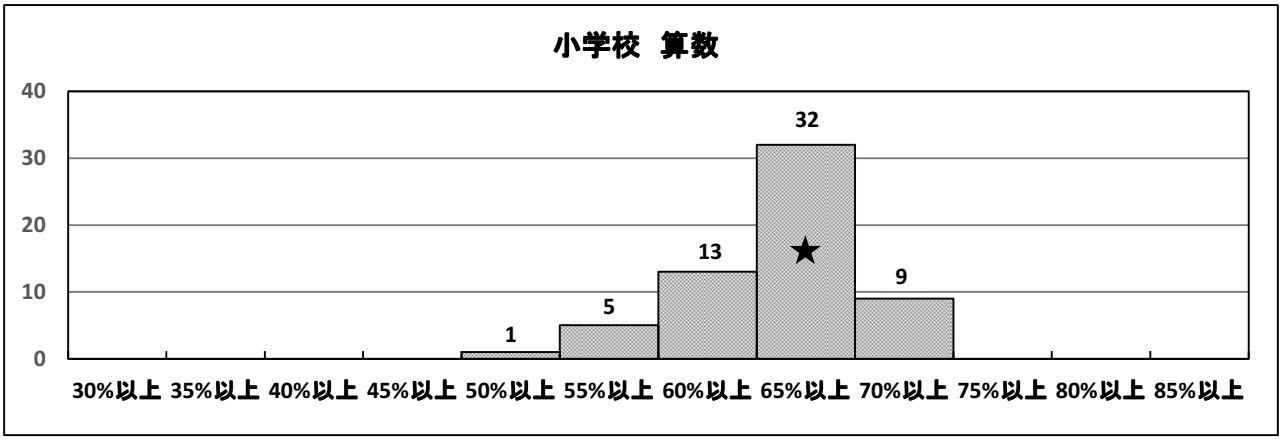
５　県全体の平均正答率度数分布（市町村単位）

※　グラフの左軸は市町村教育委員会の数を示している。

■　小学校

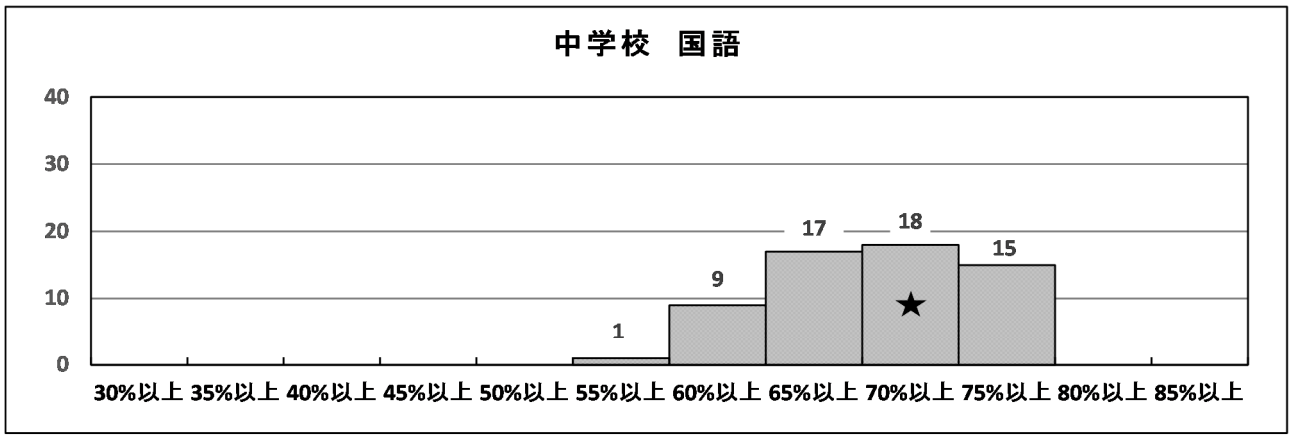
○　国語は、全国の平均正答率のある階級（★印）よりも１つ高い階級に最も多くの市町村が集まっており、算数は、全国の平均正答率のある階級に、最も多くの市町村が集まっている。

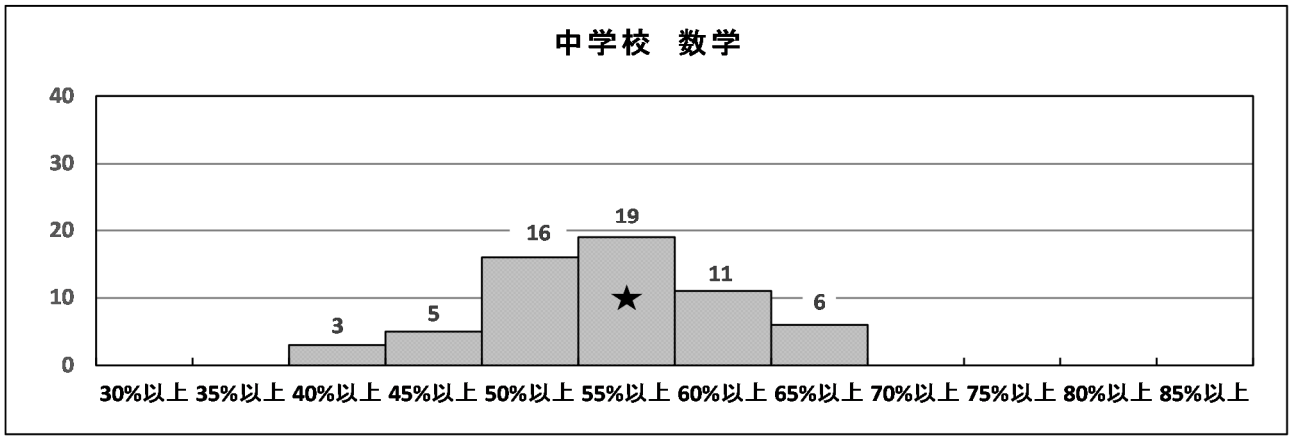


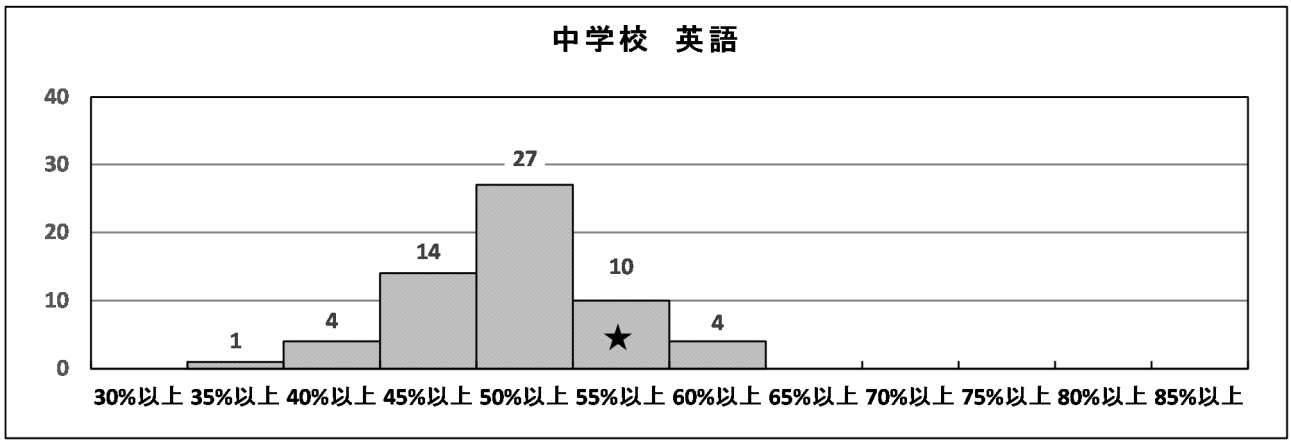


■　中学校

○　国語及び数学は、全国の平均正答率のある階級（★印）と同じ階級に最も多くの市町村が集まっており、英語は、全国平均正答率のある階級よりも１つ下の階級に最も多くの市町村が集まっている。







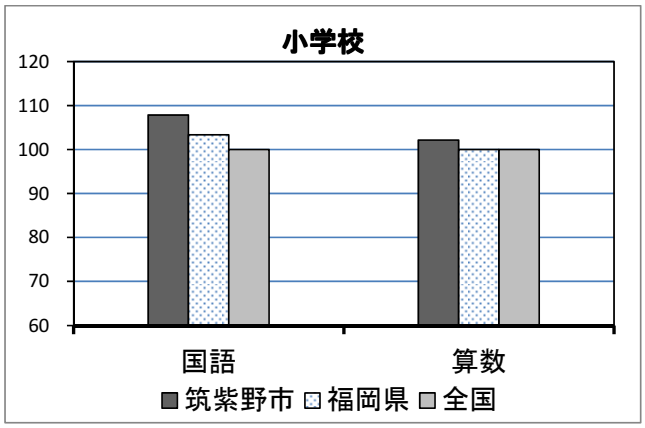
６　市町村別の状況

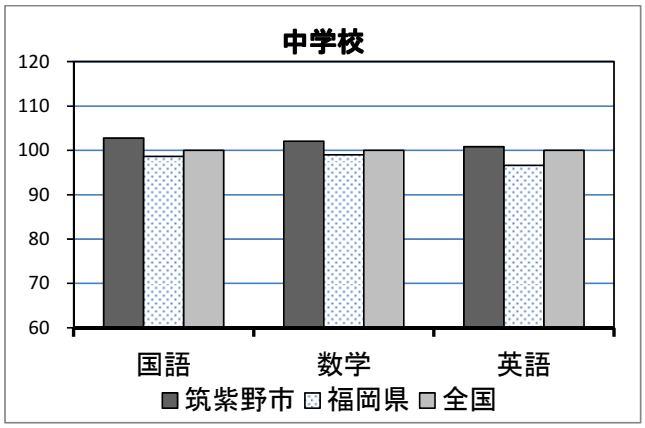
令和元年度は、全ての市町村教育委員会が公表に同意した。

なお、市町村内の学校数が１小学校又は１中学校である場合は、当該学校を公表の対象外とし、「公表対象外」と表記している。

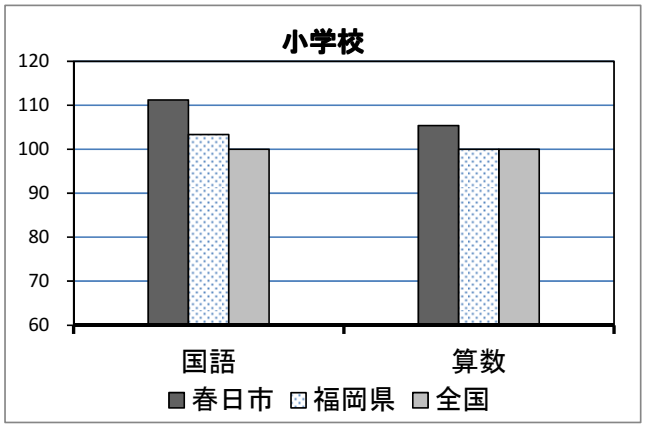
したがって、「東峰村」「糸田町」「赤村」「吉富町・吉富町外一市中学校組合」は１小学校、１中学校のため掲載していない。

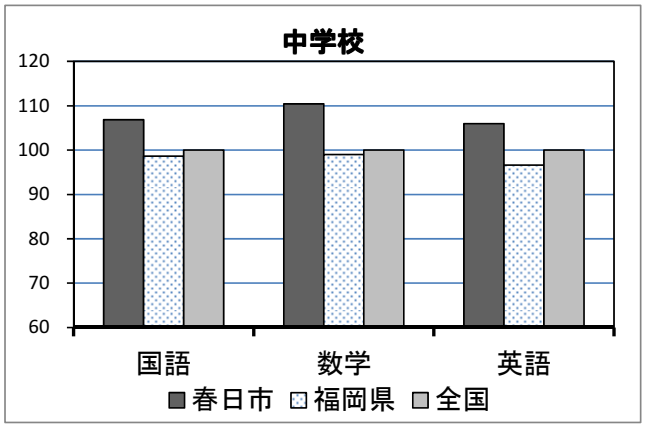
【筑紫野市】



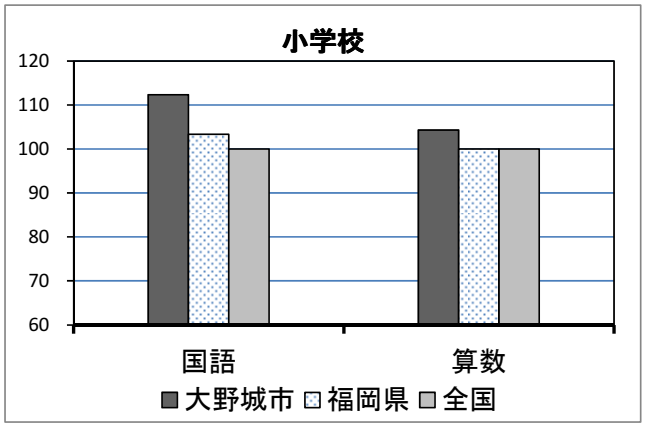


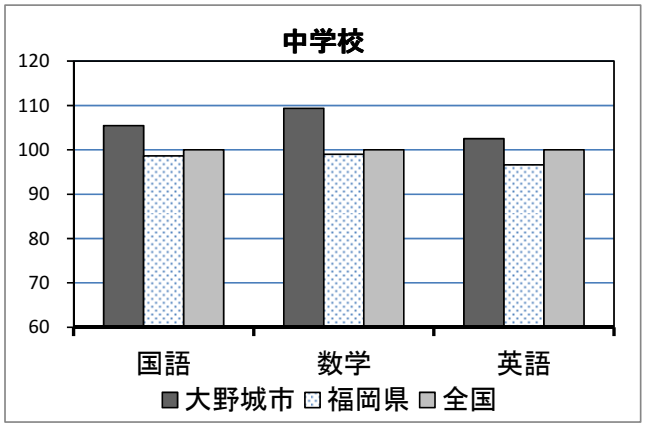
【春日市】



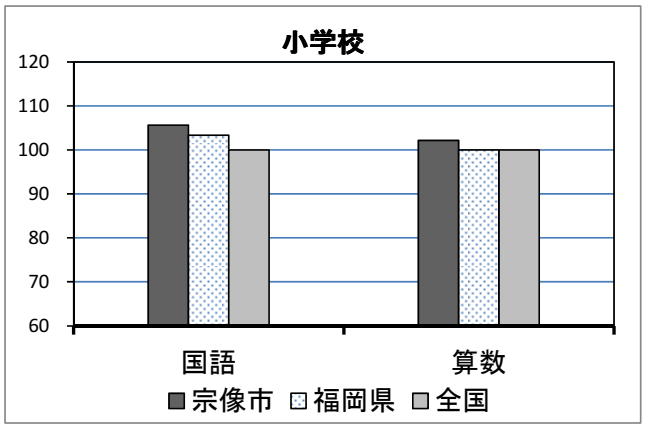


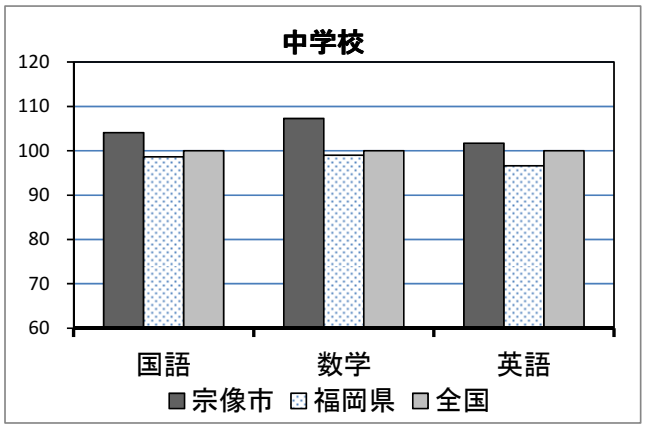
【大野城市】



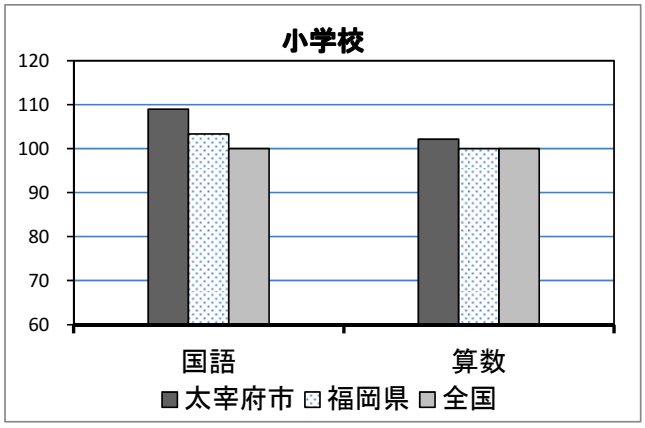


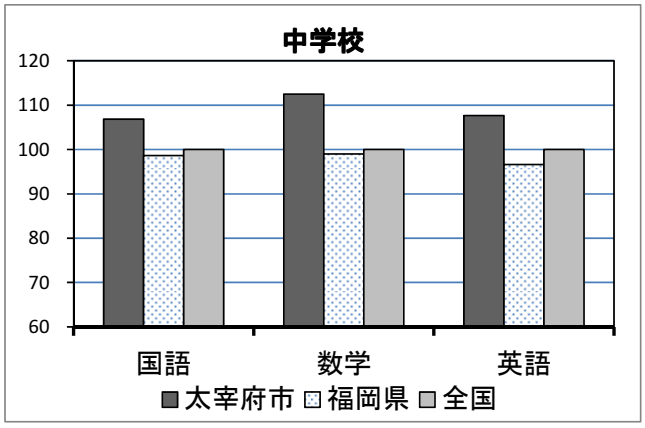
【宗像市】



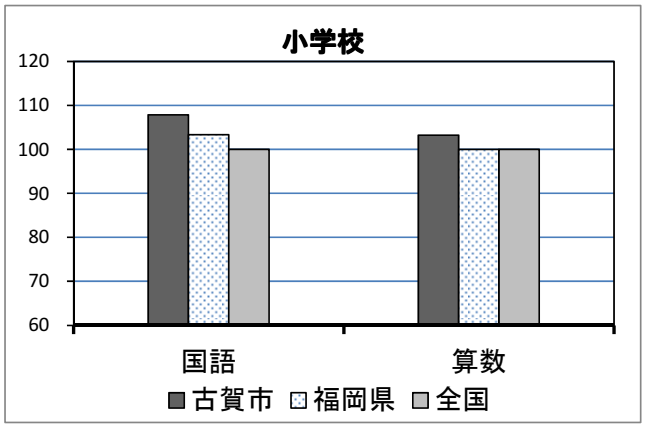


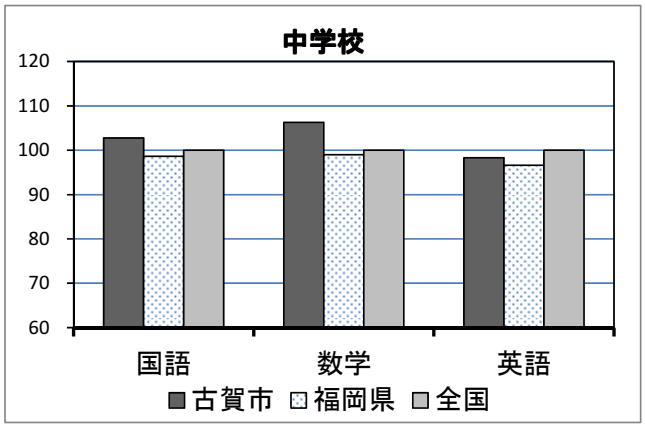
【太宰府市】



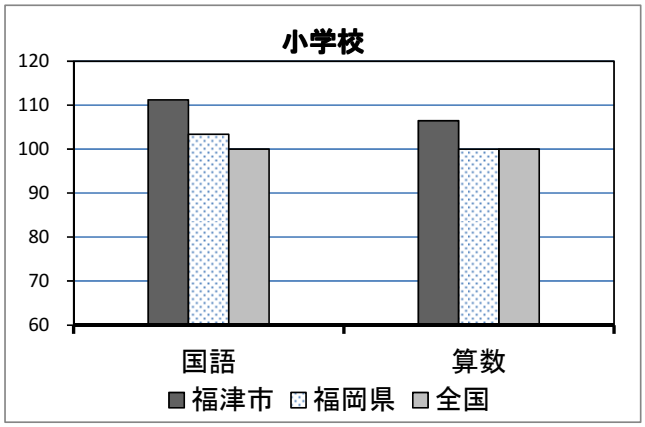


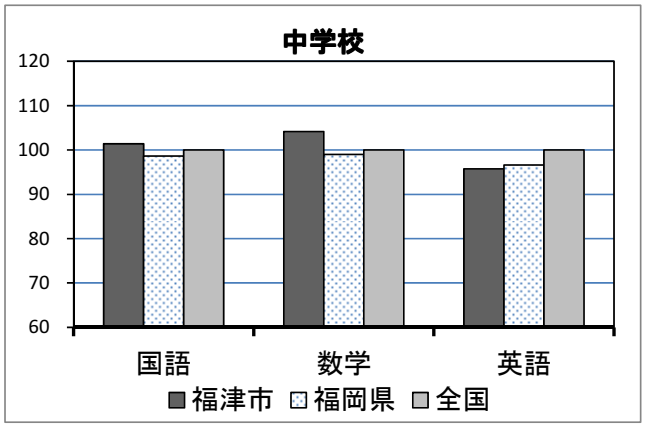
【古賀市】



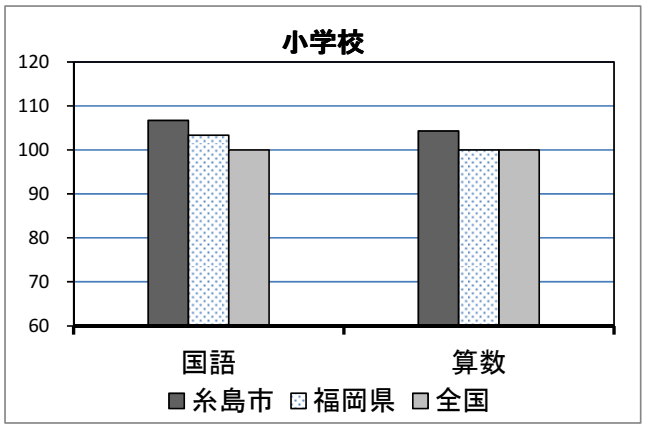


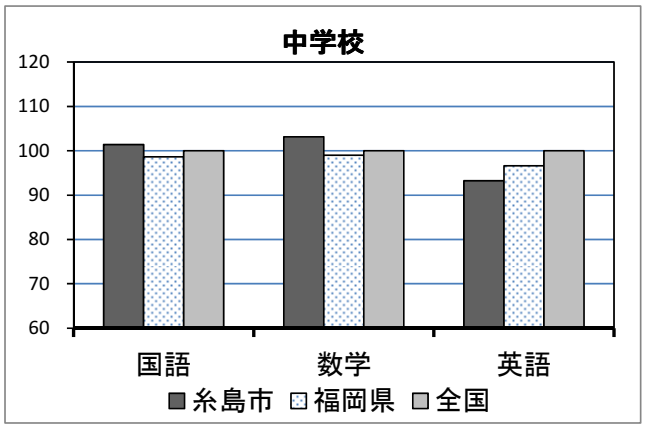
【福津市】



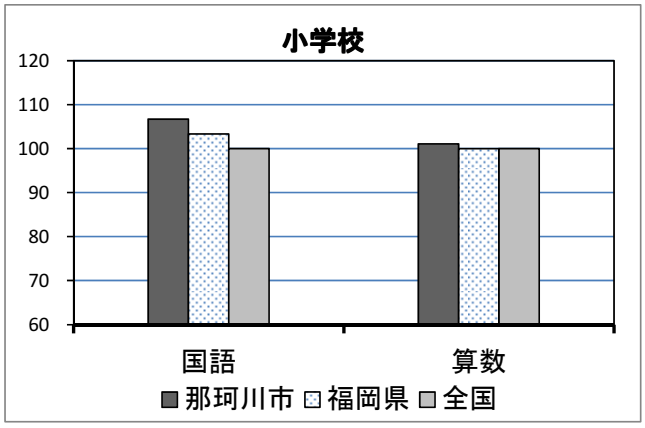


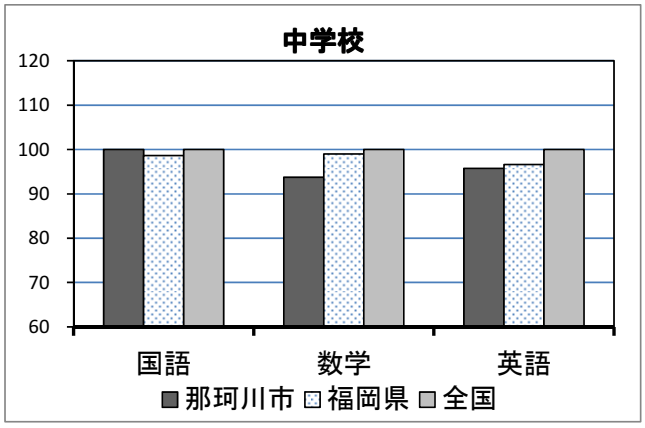
【糸島市】



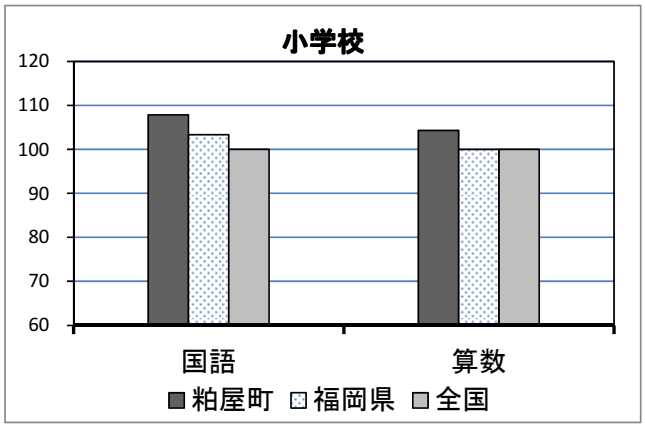


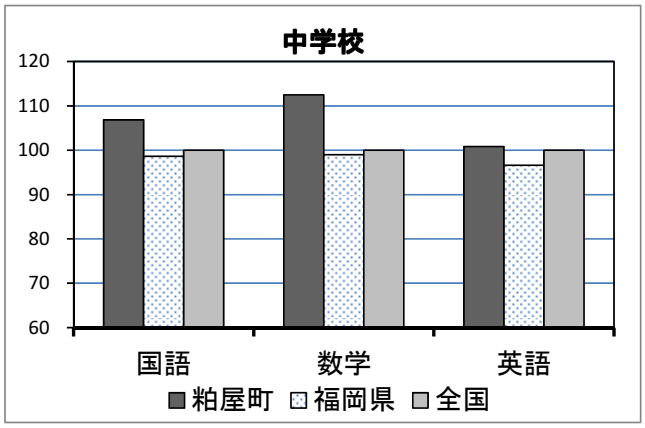
【那珂川市】



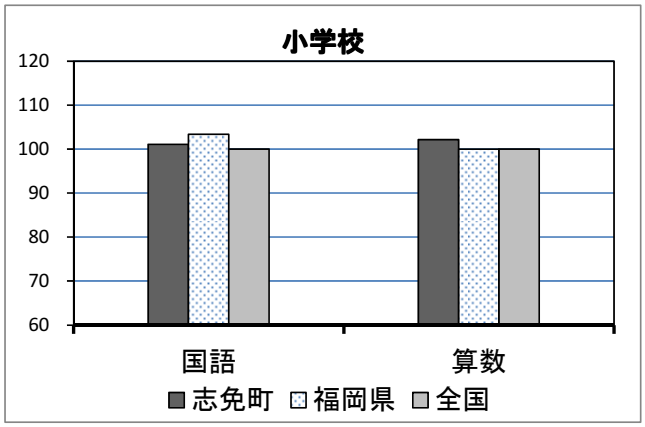


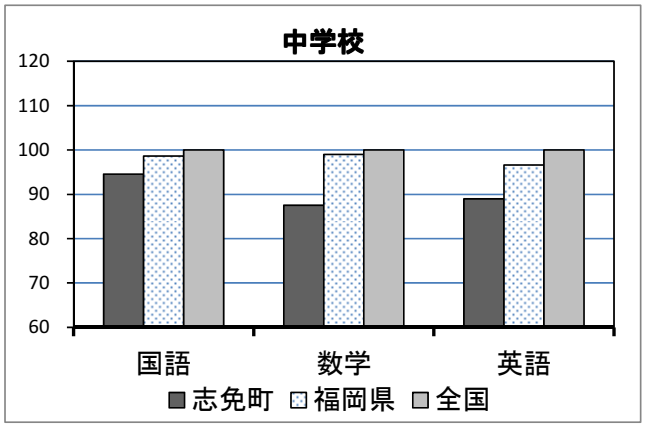
【粕屋町】



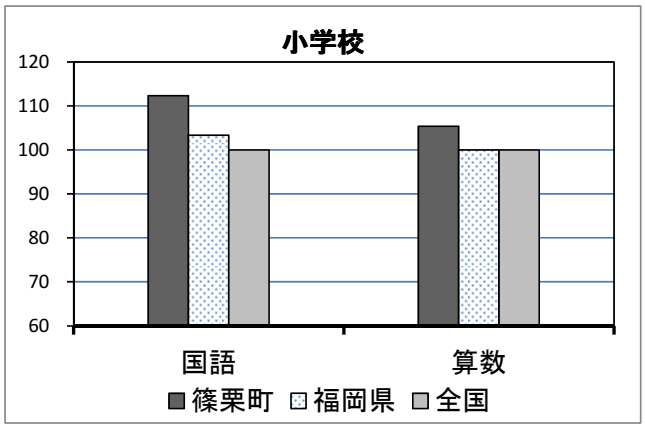


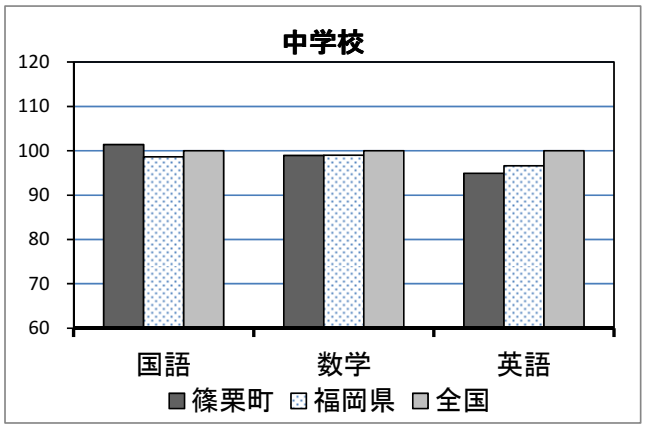
【志免町】



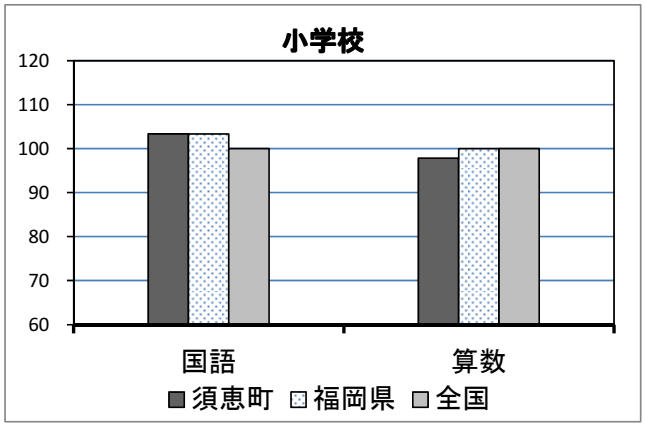


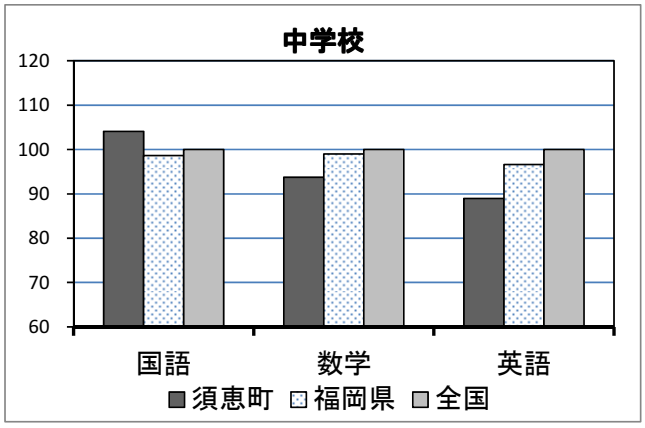
【篠栗町】



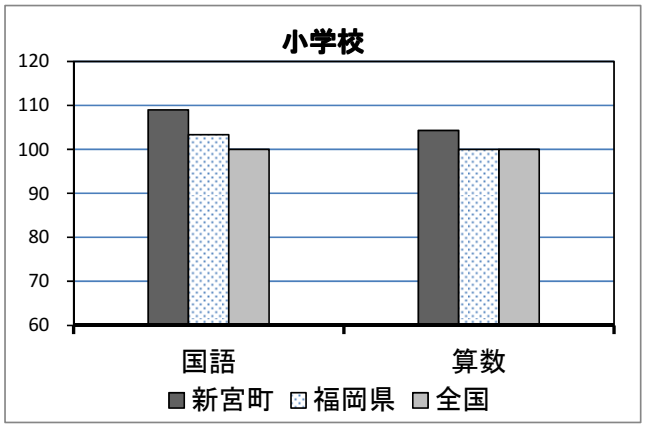


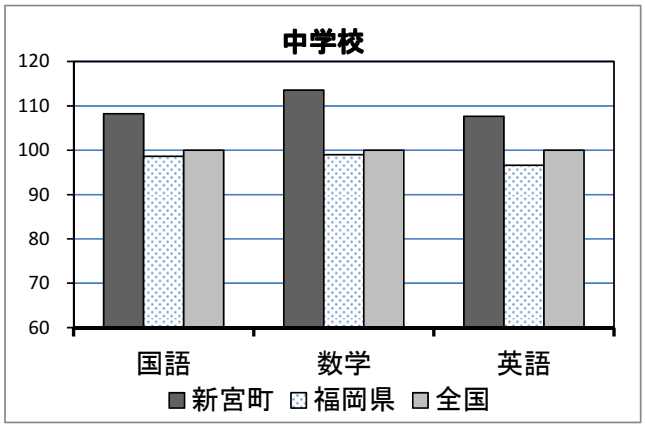
【須恵町】



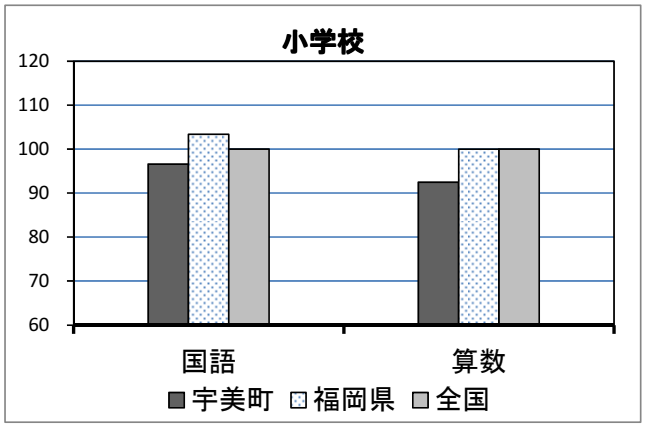


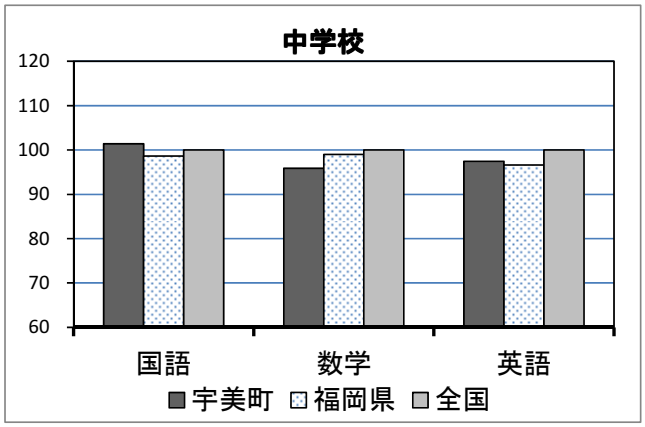
【新宮町】



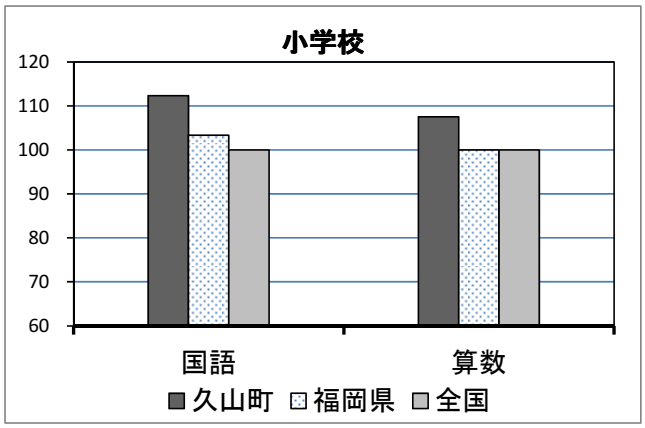


【宇美町】



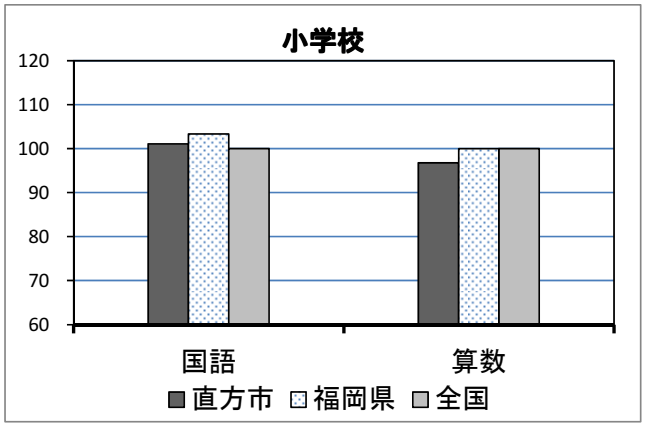


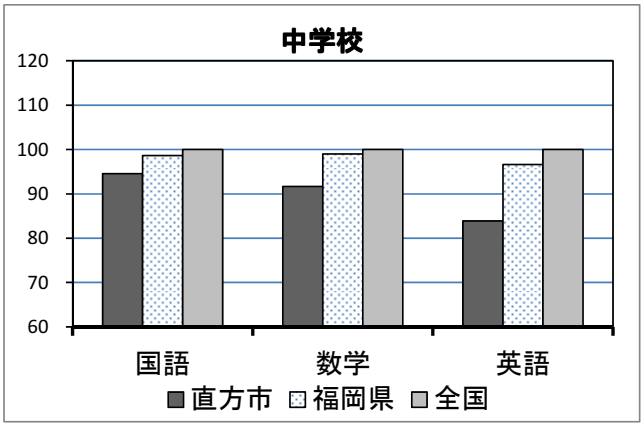
【久山町】



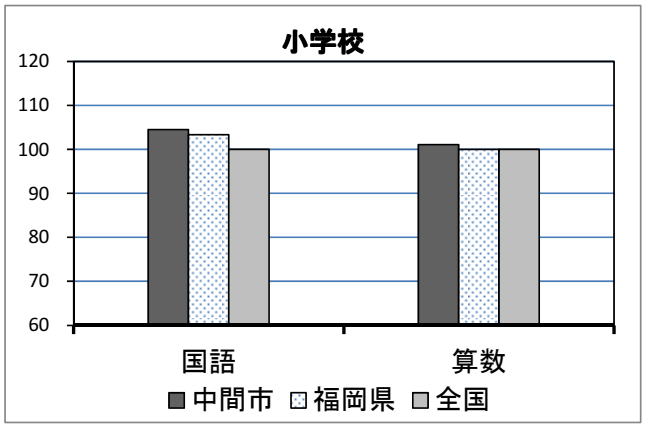
中学校は、公表対象外

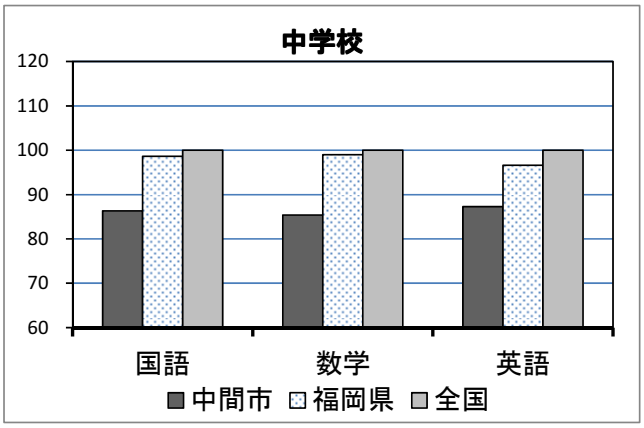
【直方市】



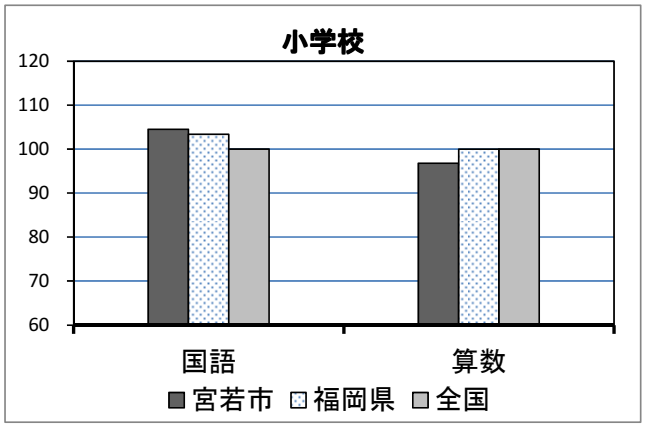


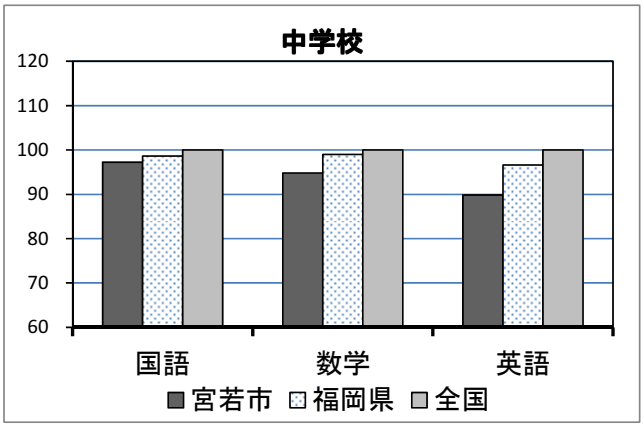
【中間市】



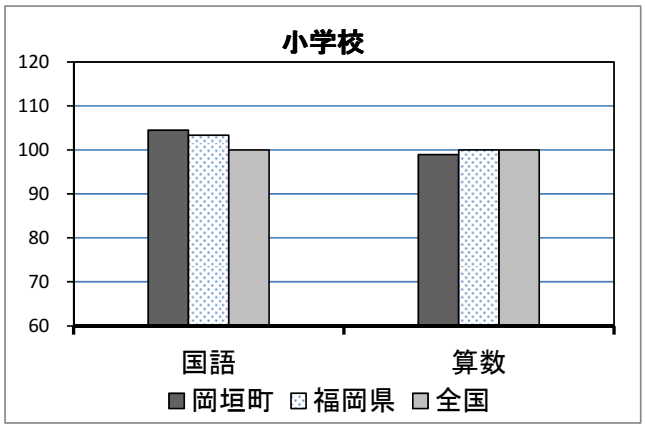


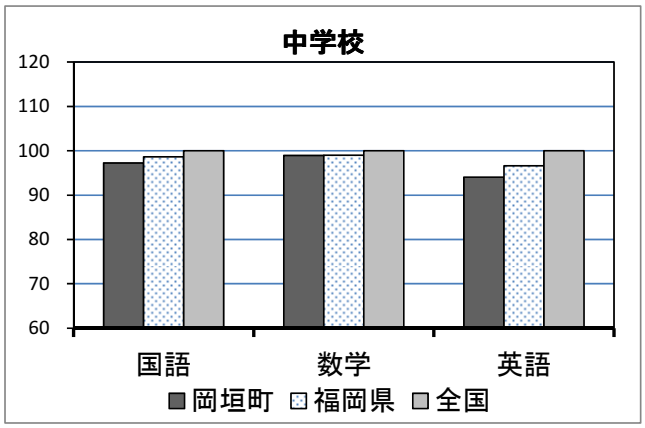
【宮若市】



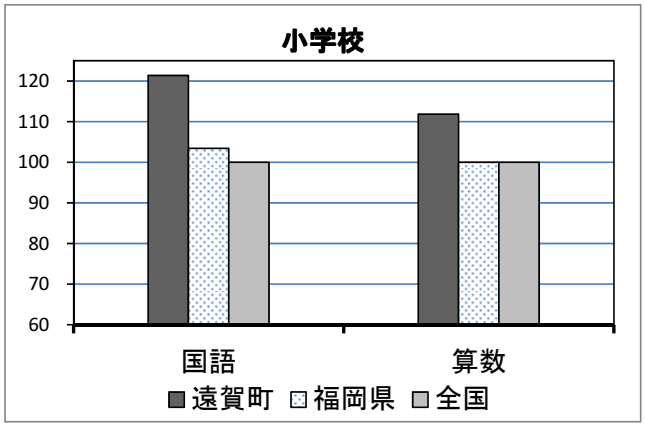


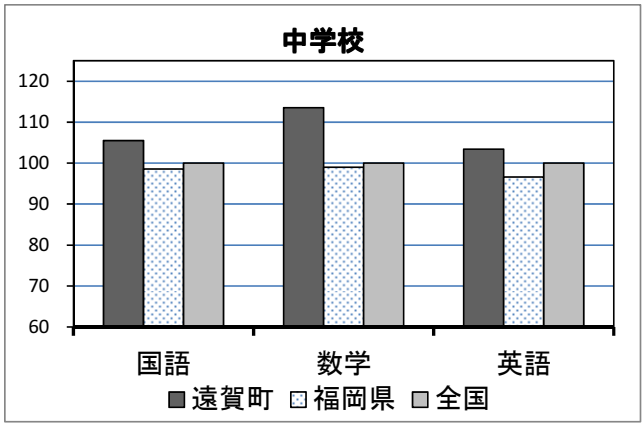
【岡垣町】



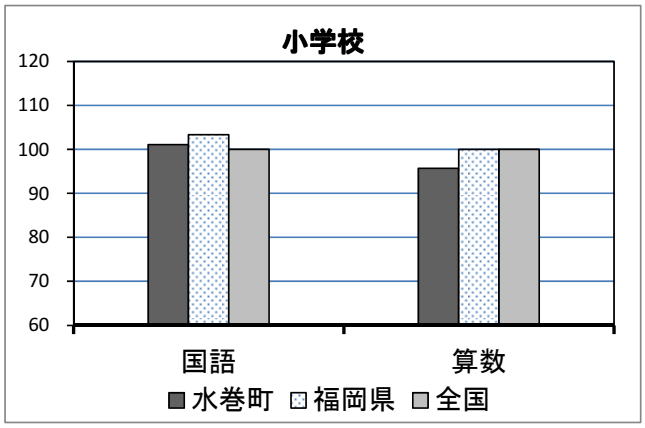


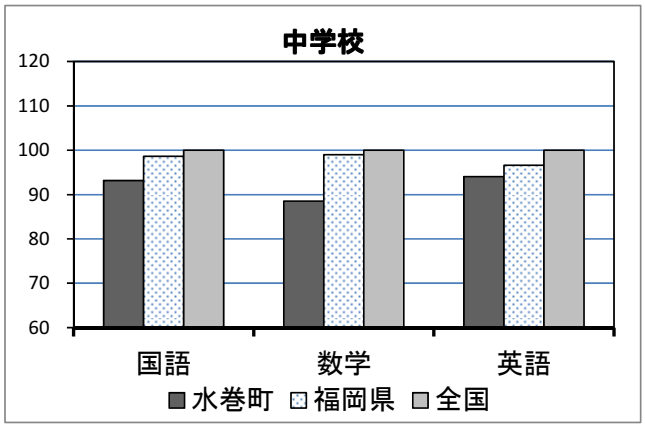
【遠賀町】



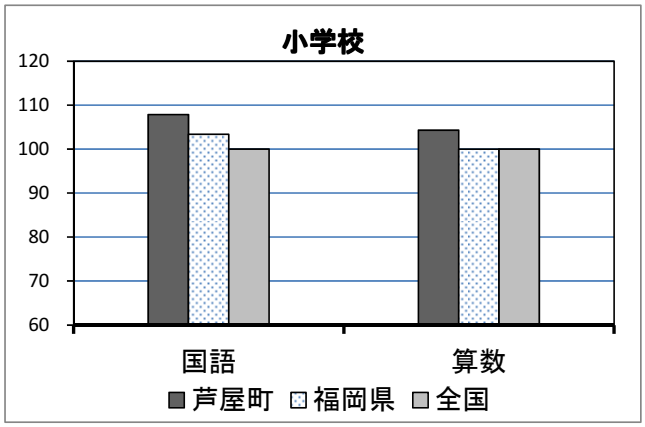


【水巻町】



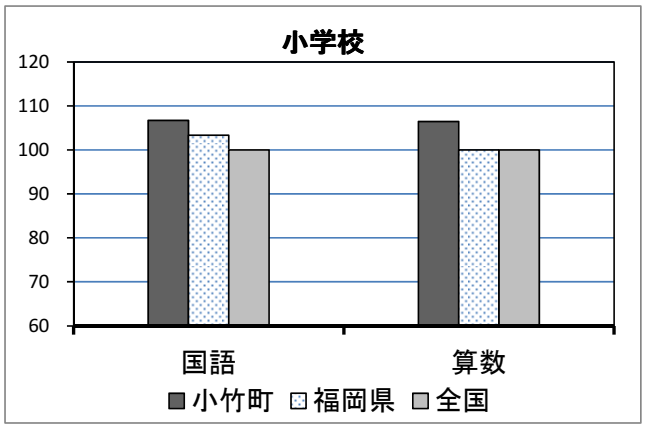


【芦屋町】



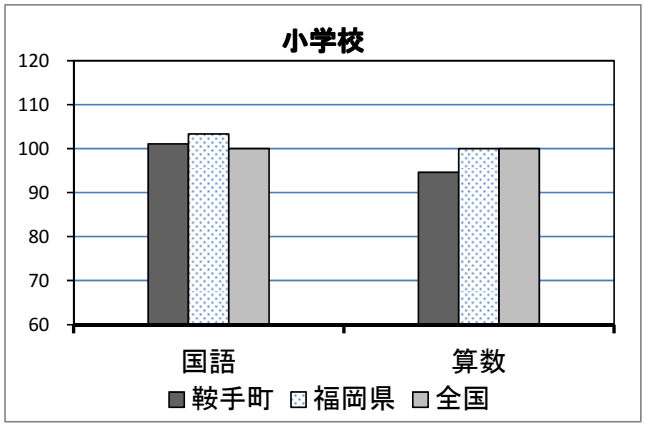
中学校は、公表対象外

【小竹町】



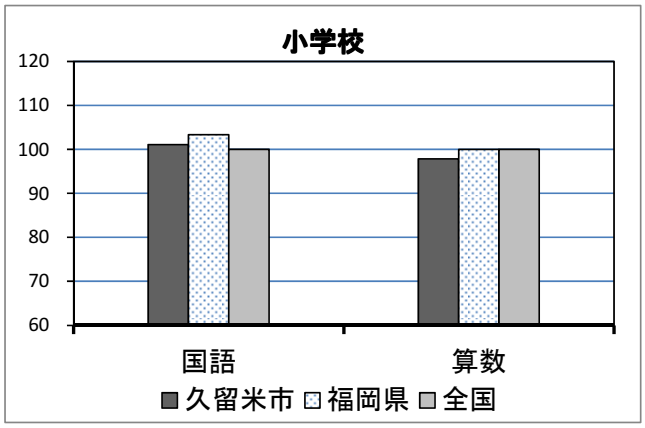
中学校は、公表対象外

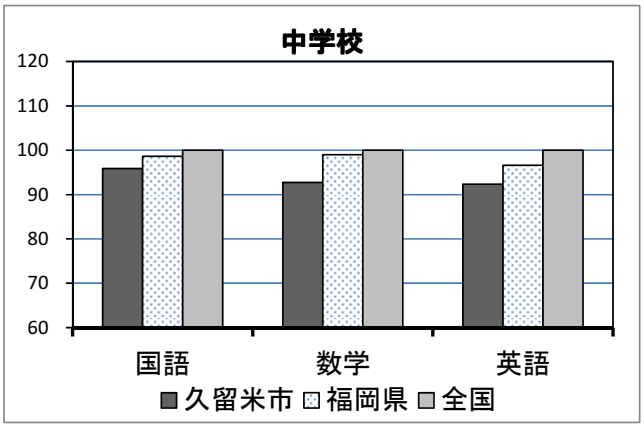
【鞍手町】



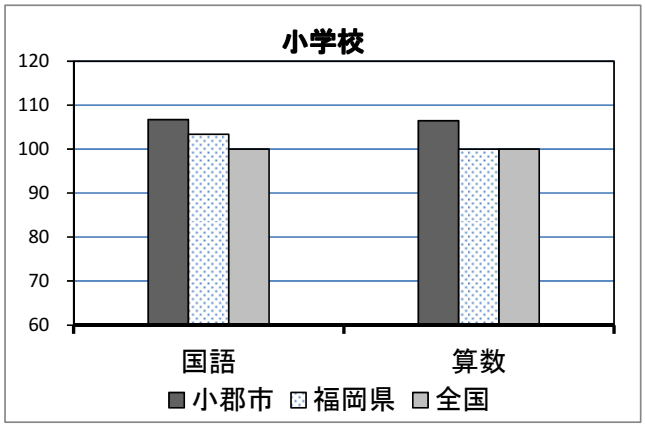
中学校は、公表対象外

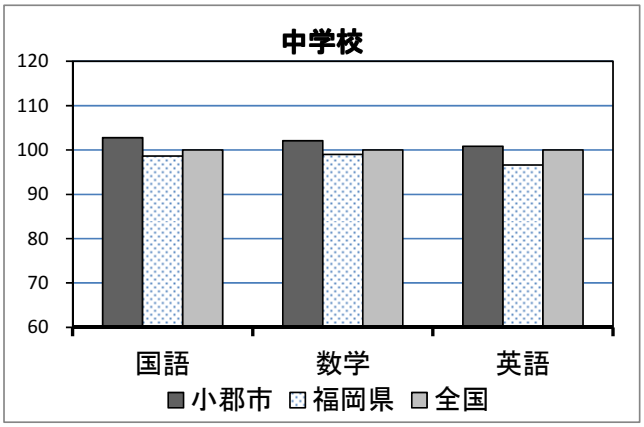
【久留米市】



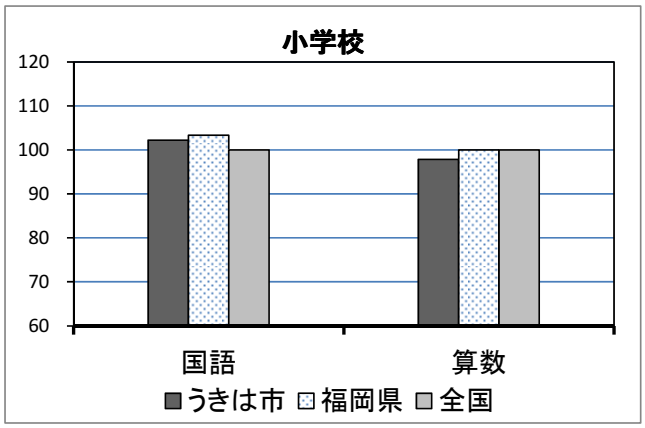


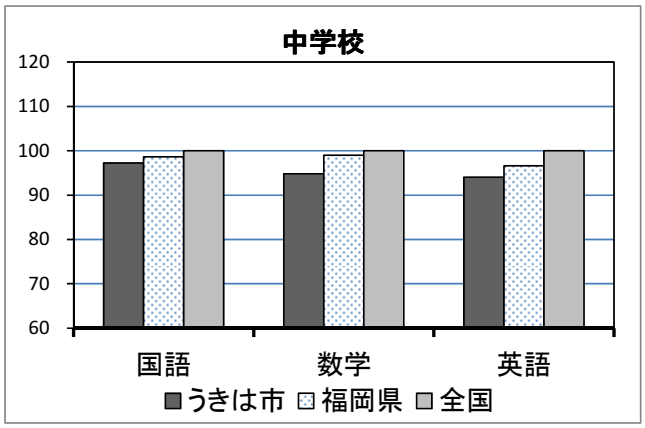
【小郡市】



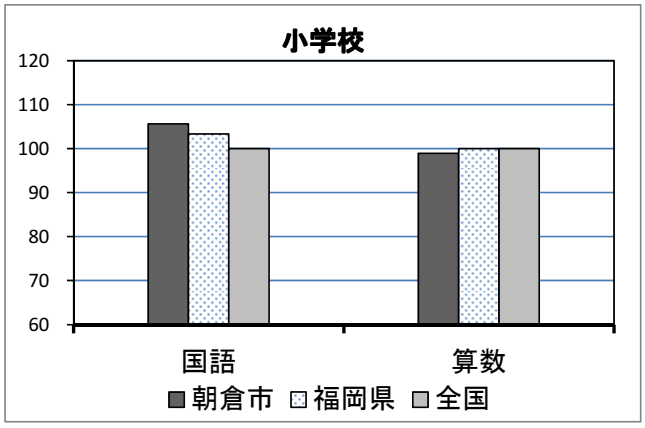


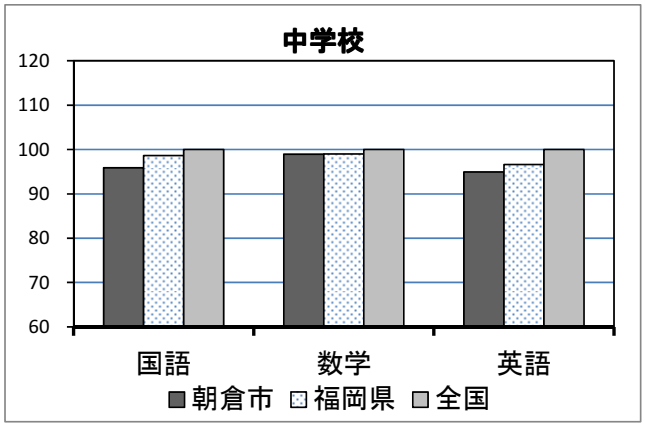
【うきは市】



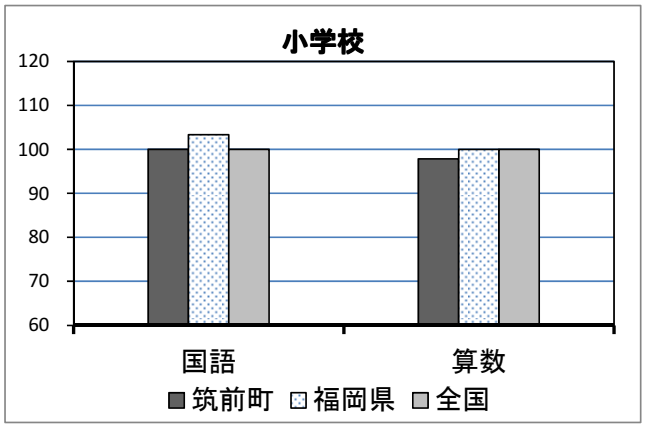


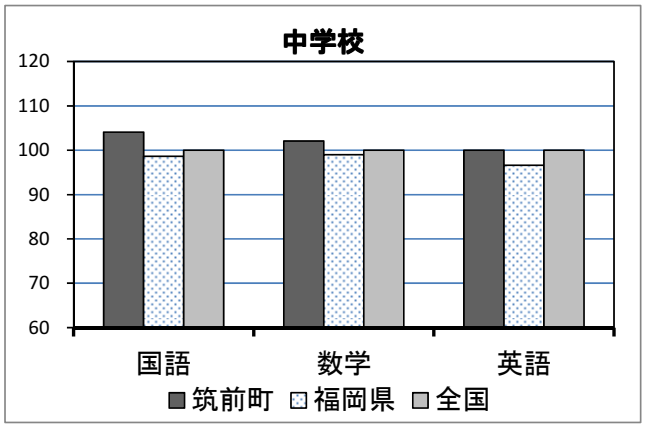
【朝倉市】



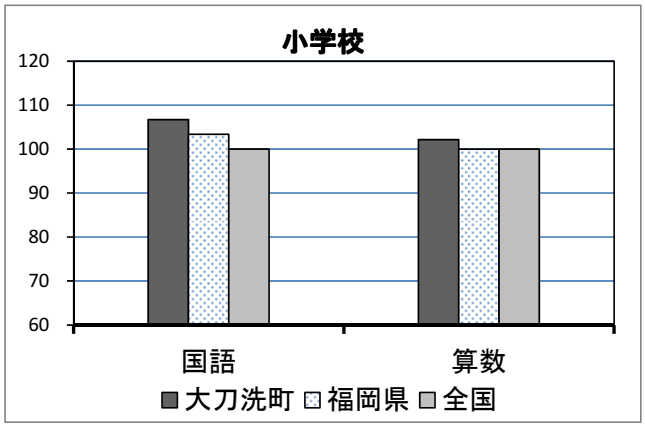


【筑前町】



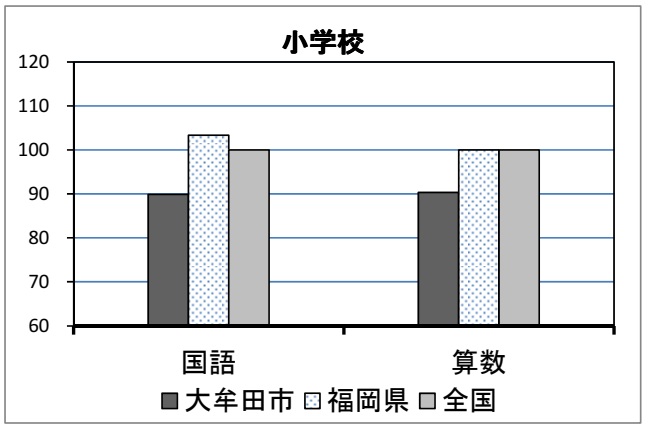


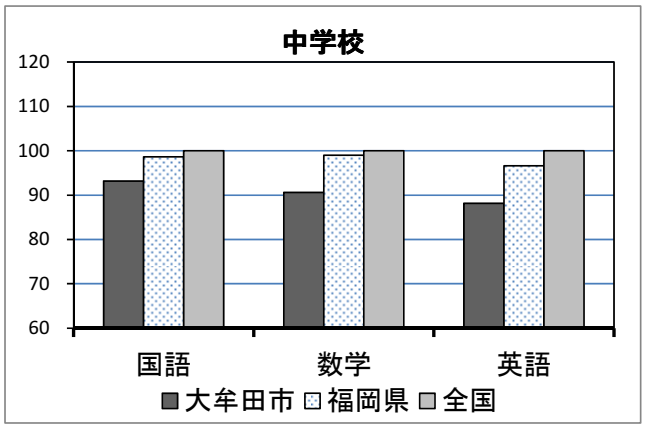
【大刀洗町】



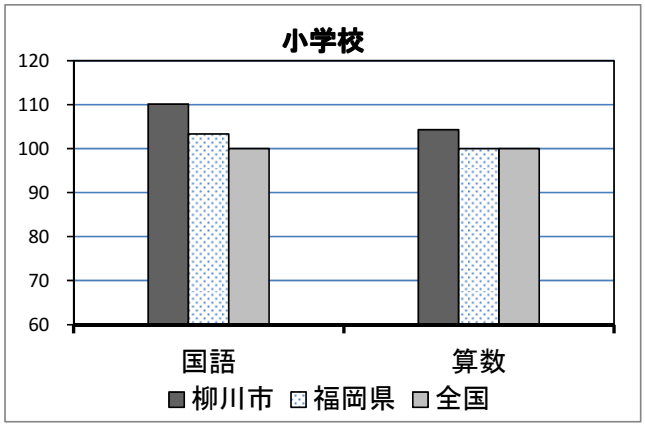
中学校は、公表対象外

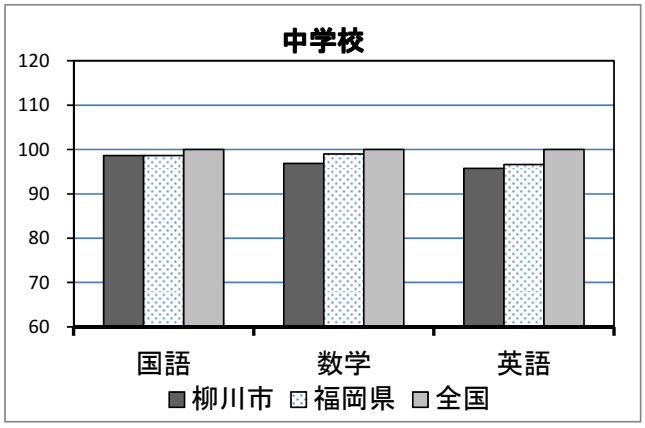
【大牟田市】



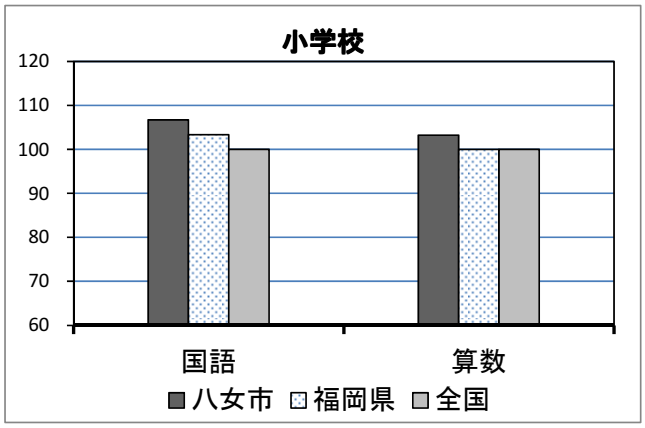


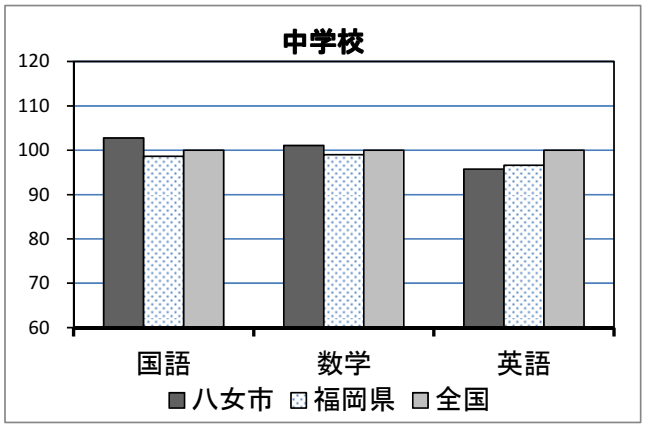
【柳川市】



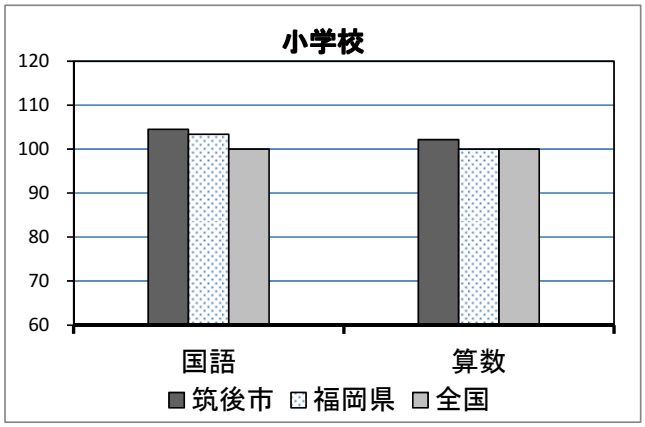


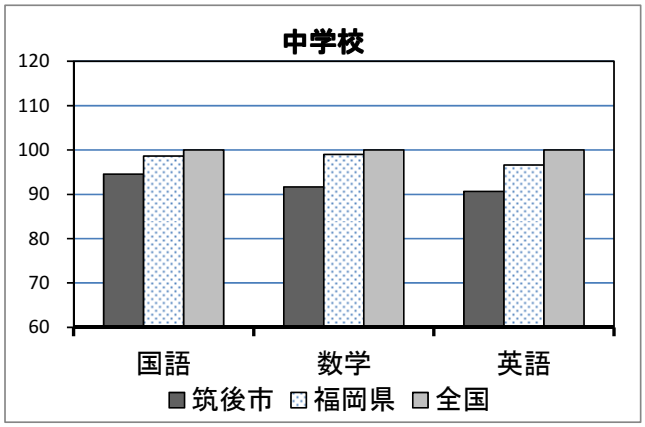
【八女市】



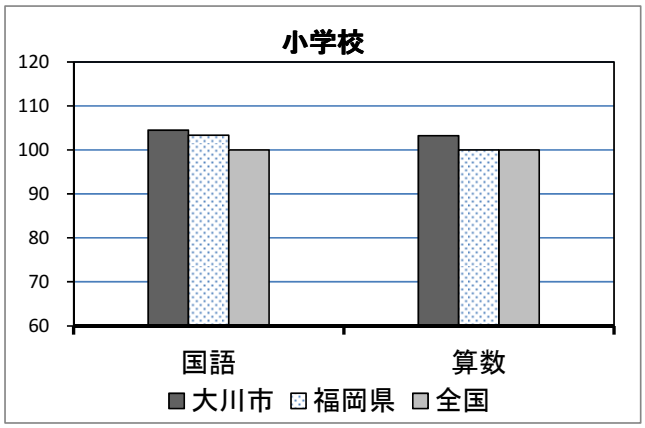


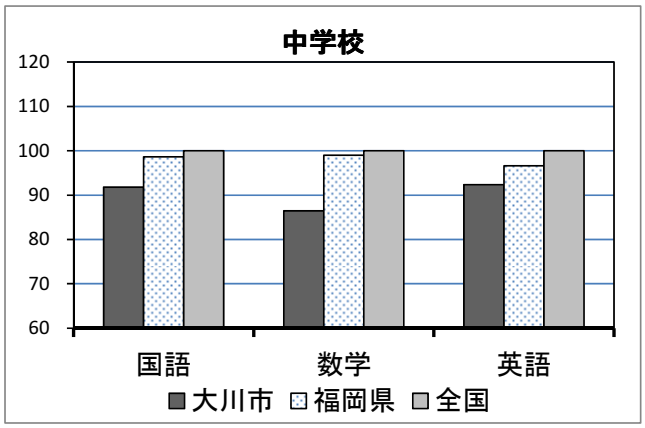
【筑後市】



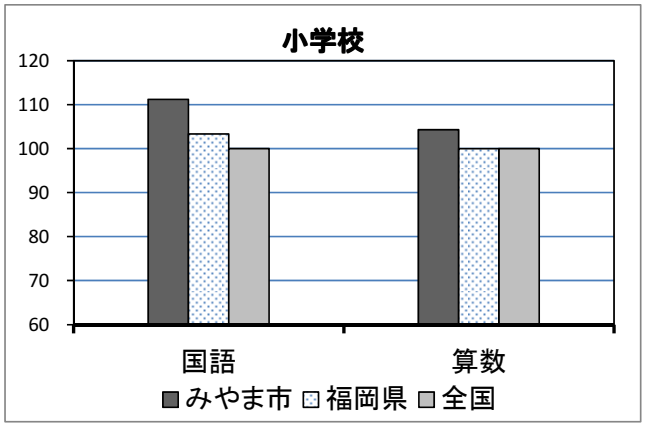


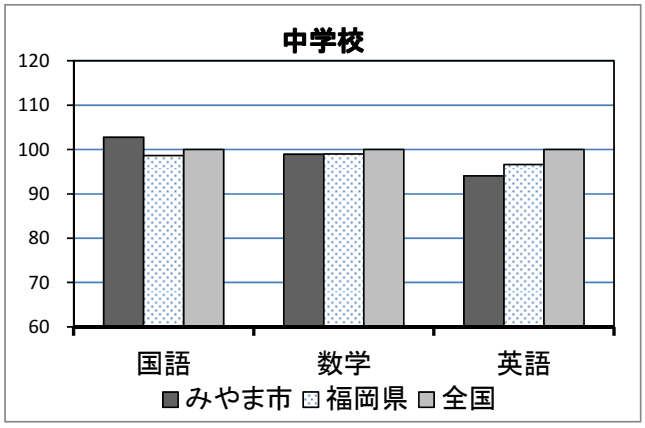
【大川市】



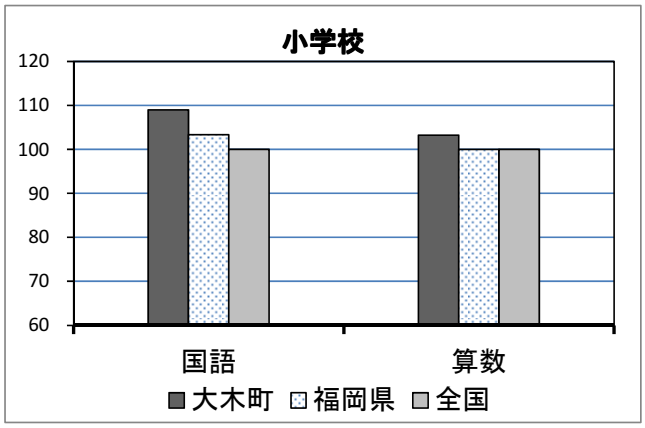


【みやま市】



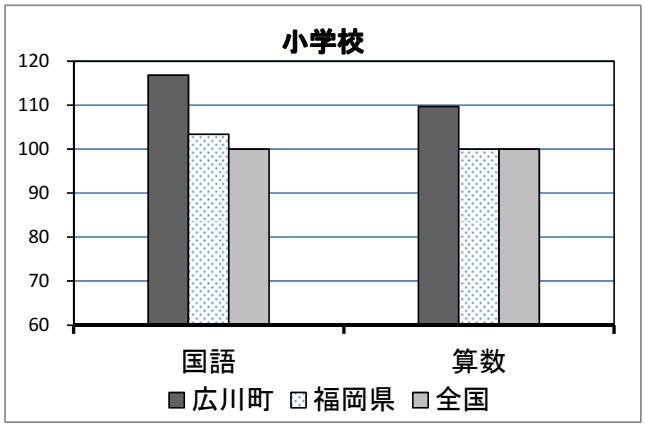


【大木町】



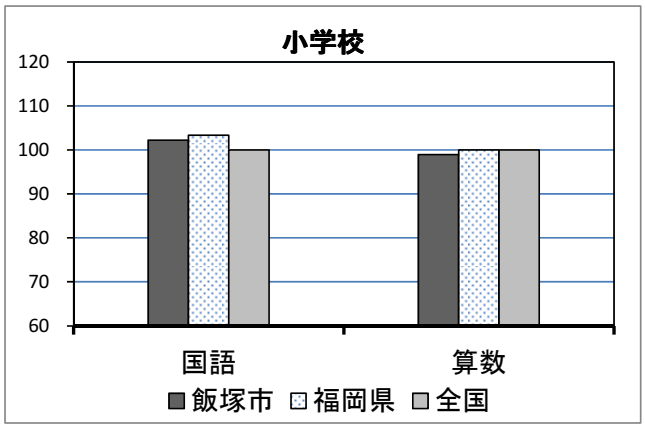
中学校は、公表対象外

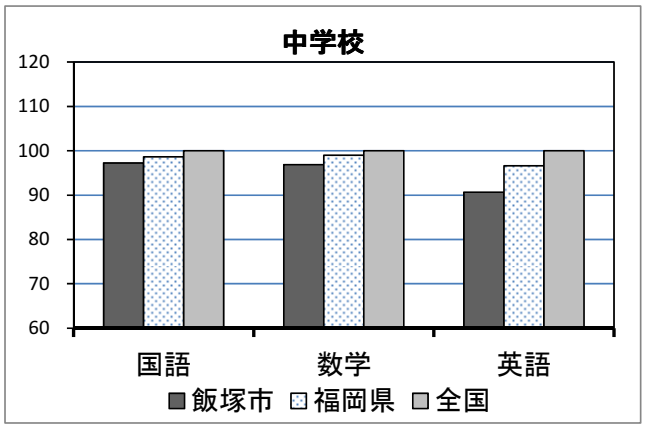
【広川町】



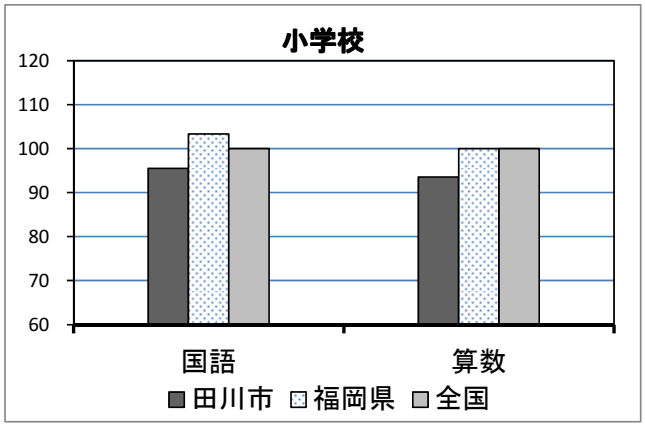
中学校は、公表対象外

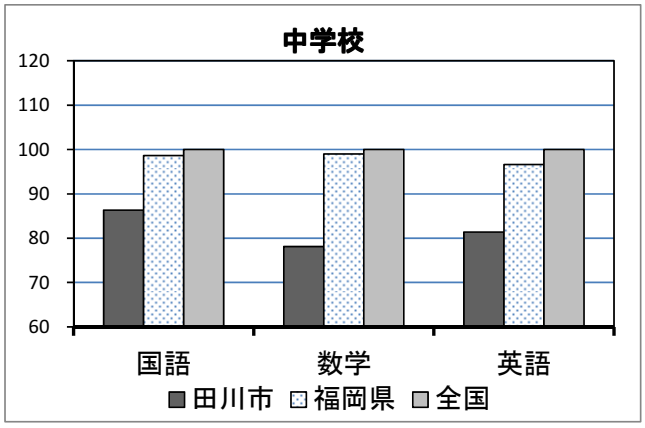
【飯塚市】



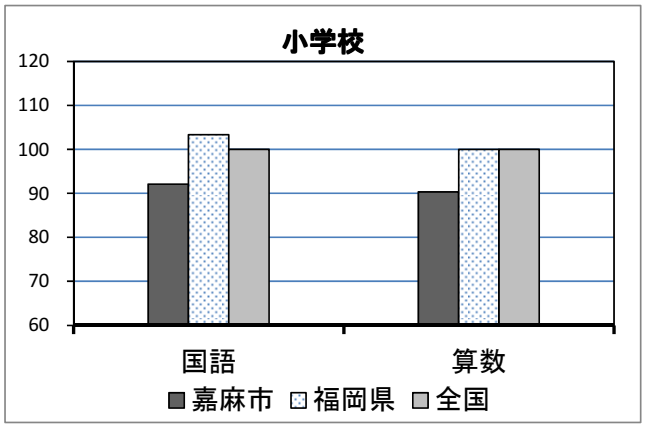


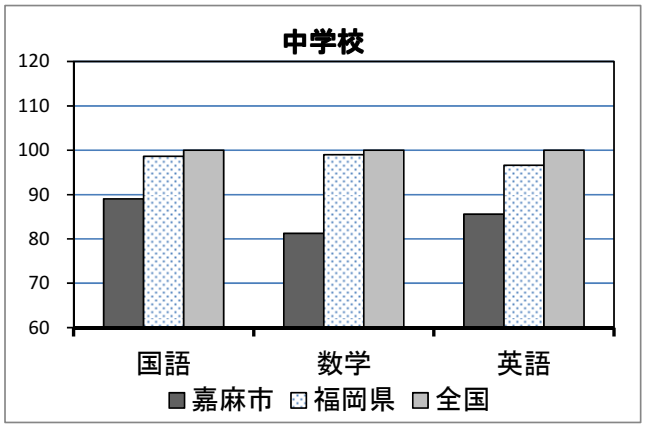
【田川市】



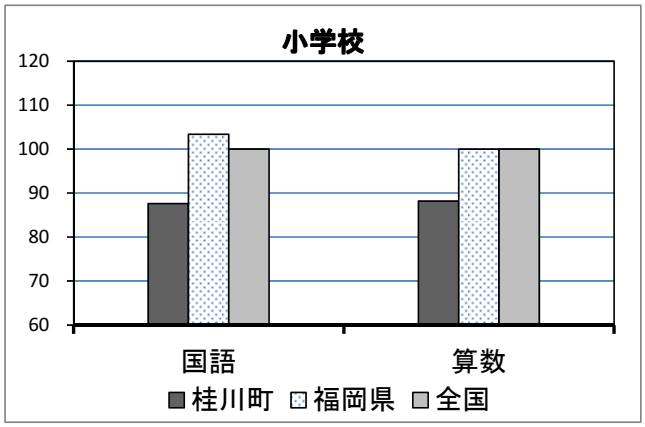


【嘉麻市】



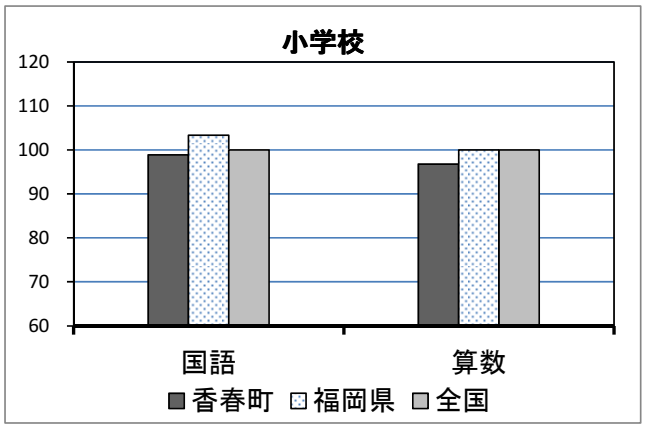


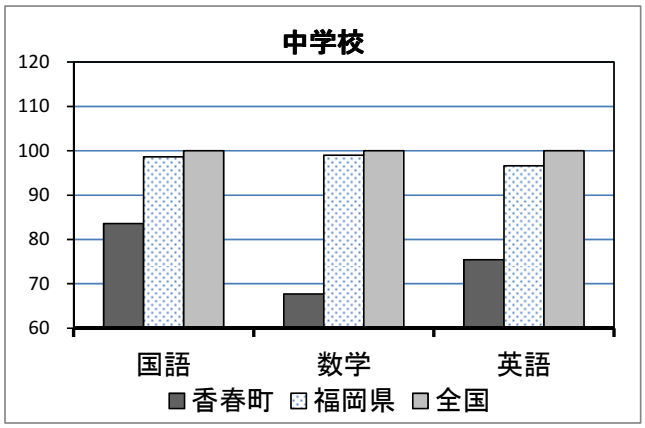
【桂川町】



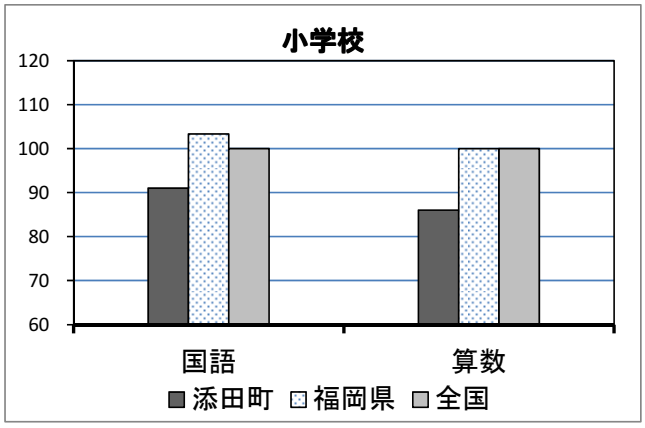
中学校は、公表対象外

【香春町】



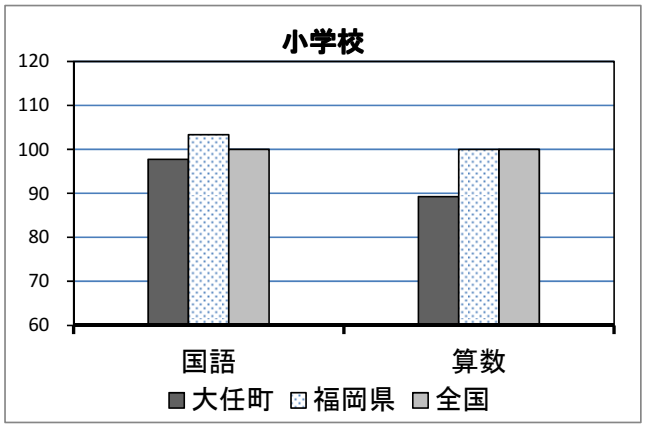


【添田町】



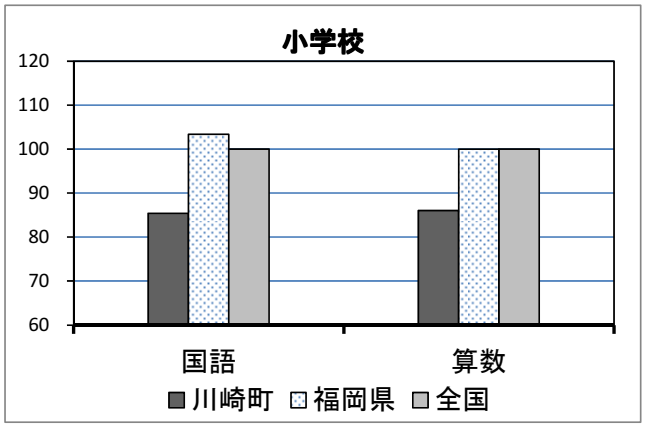
中学校は、公表対象外

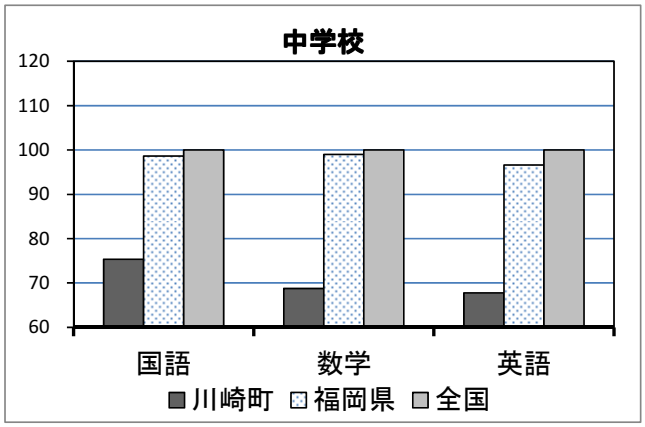
【大任町】



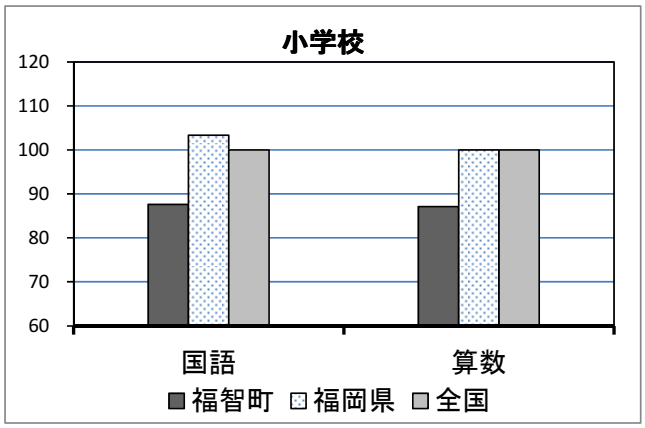
中学校は、公表対象外

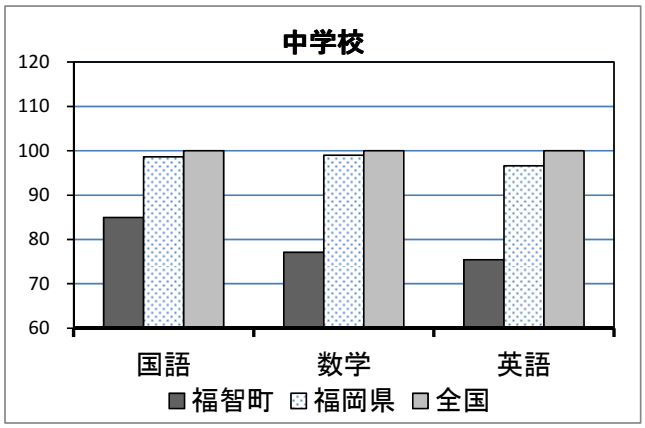
【川崎町】



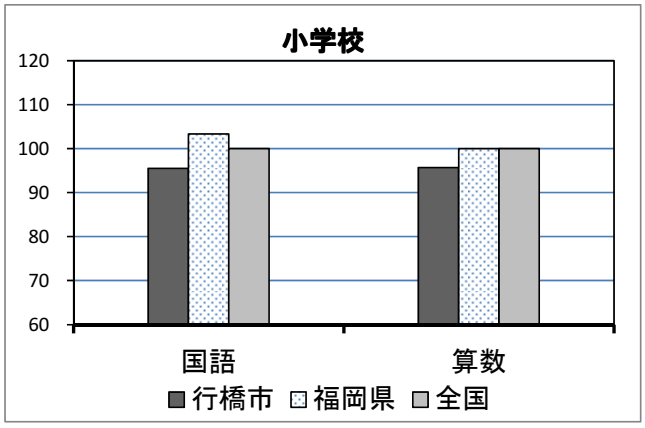


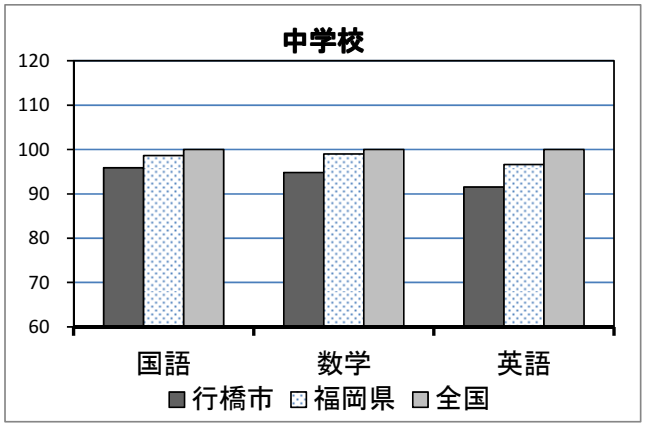
【福智町】



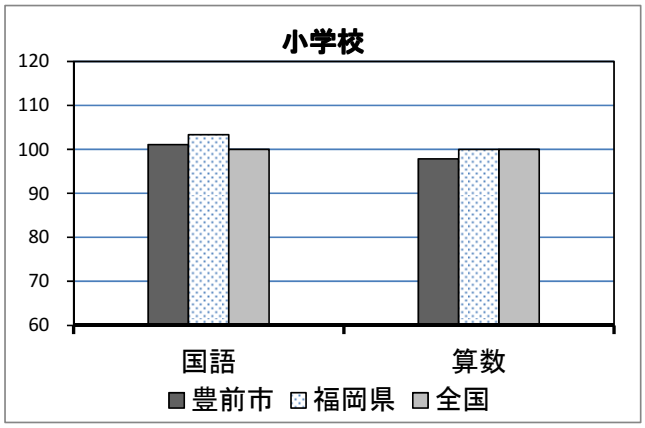


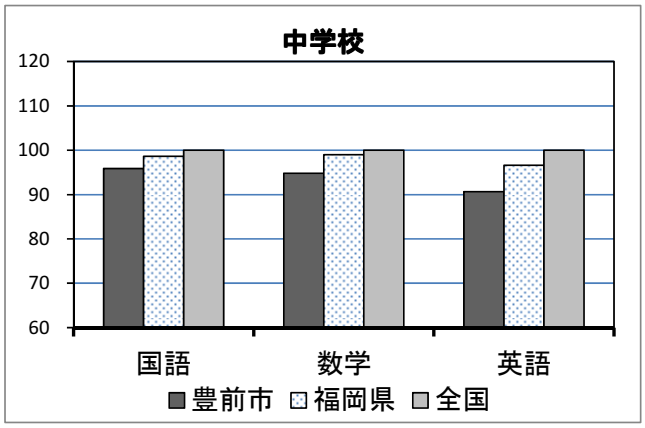
【行橋市】



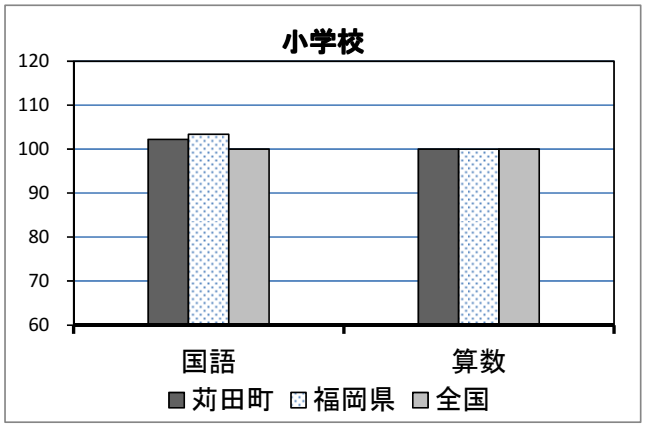


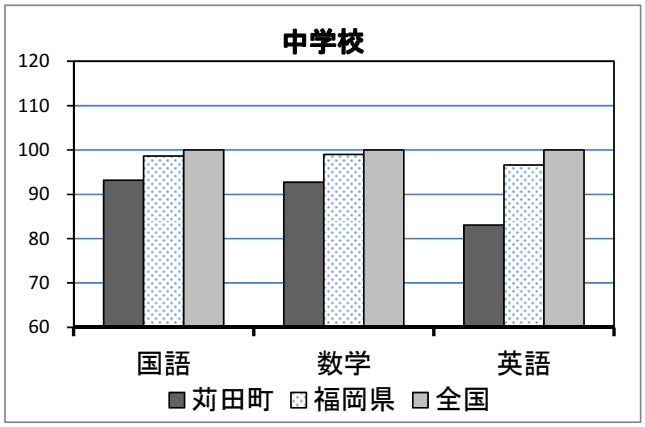
【豊前市】



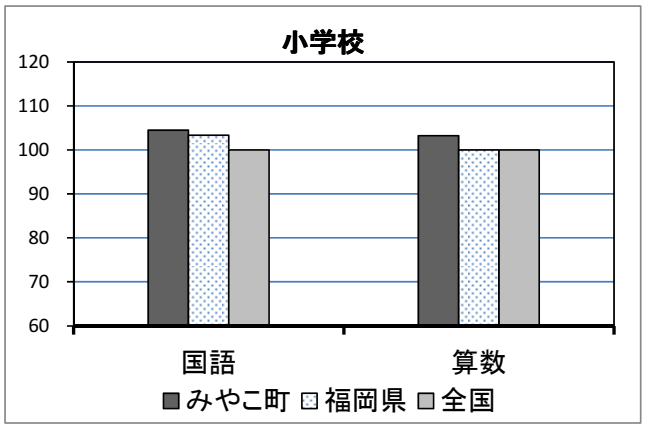


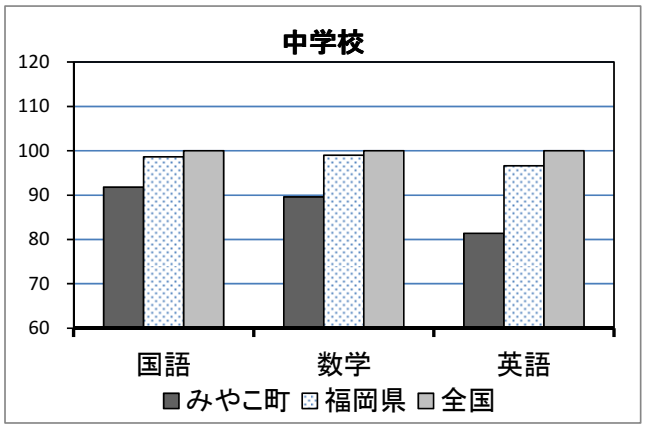
【苅田町】



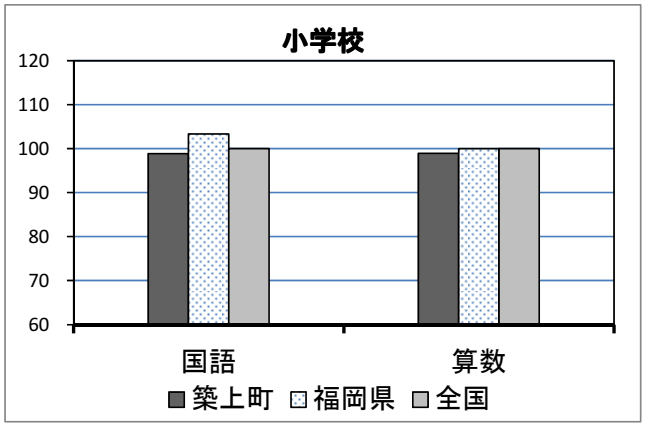


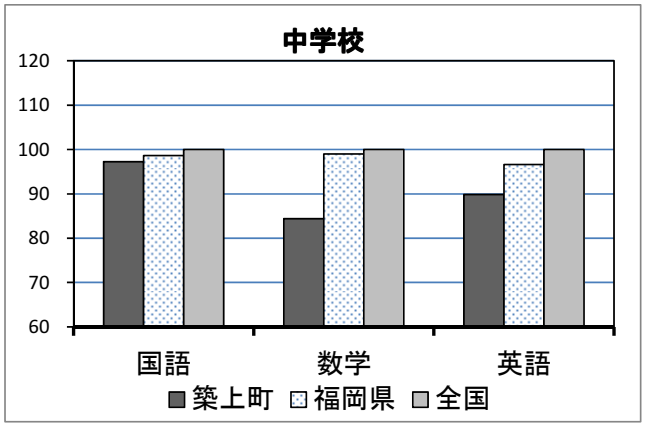
【みやこ町】



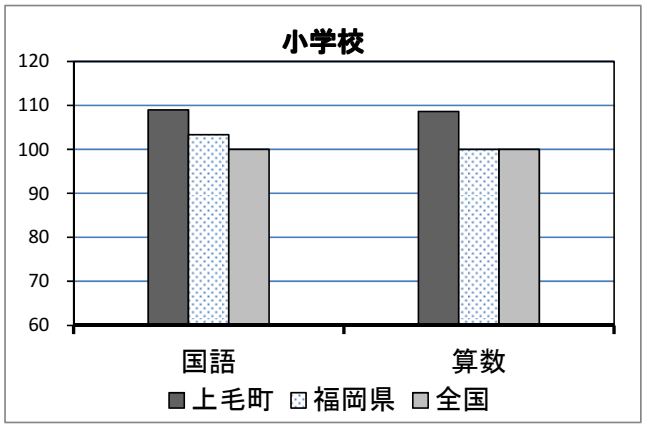


【築上町】



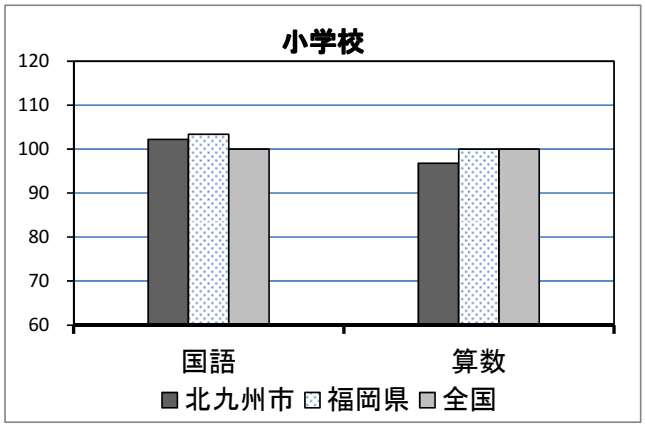


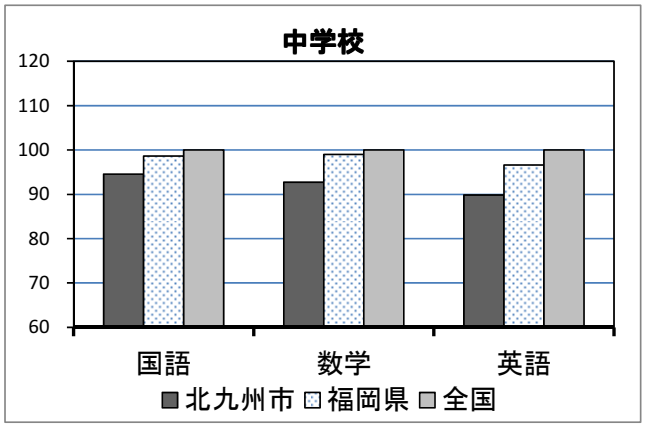
【上毛町】



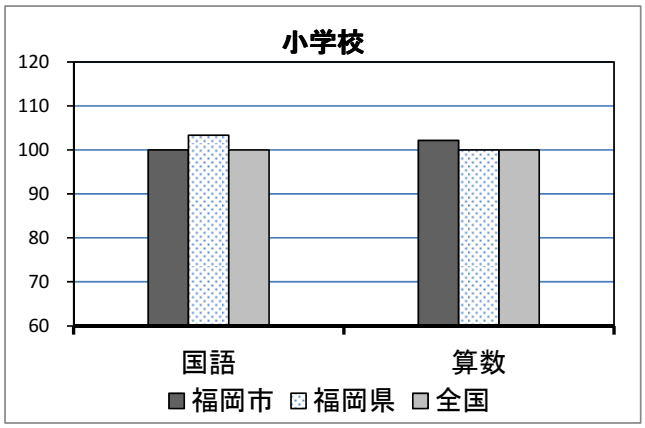
中学校は、公表対象外

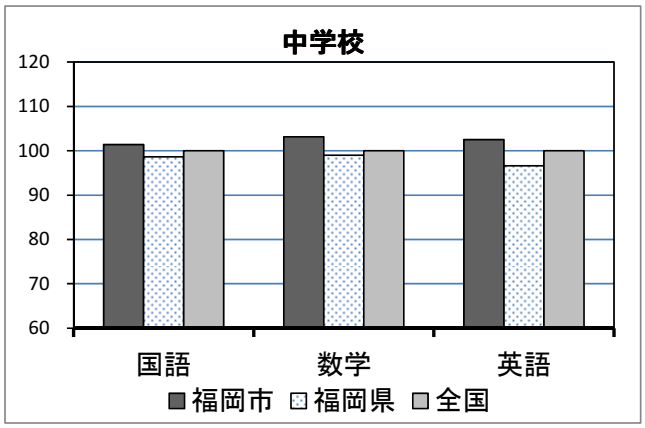
【北九州市】





【福岡市】


小学校
120
110
100
90
80
70
60
国語
算数
福岡市
福岡県
全国


中学校
120
110
100
90
80
70
60
国語
数学
英語
福岡市
福岡県
全国

Ⅲ　各教科の調査結果

１　小学校国語

平成３１年度全国学力・学習状況調査　　小学校調査

調査結果概況　［国語］
福岡県－児童（公立）

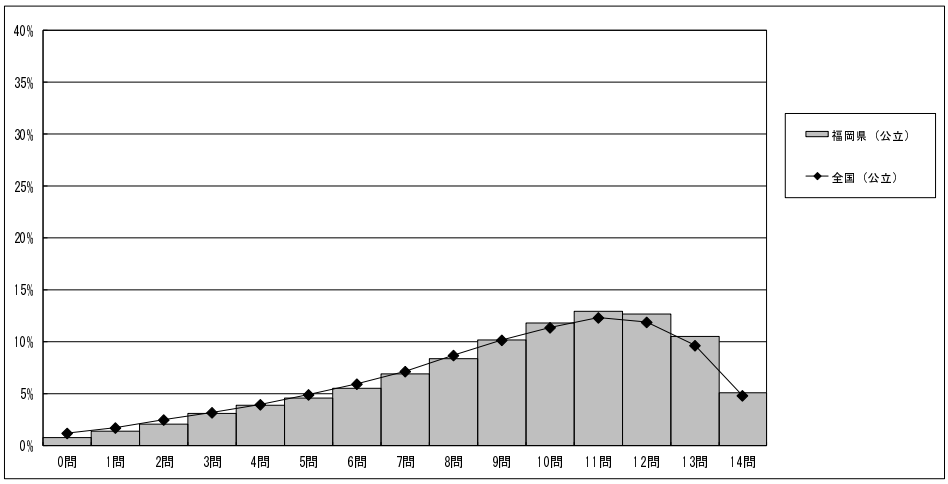
・以下の集計値／グラフは，４月１８日に実施した調査の結果を，児童を対象として集計した値である。

	児童数	平均正答数	平均正答率（%）	中央値	標準偏差
福岡県（公立）	44,458	9.2 /14	65	10.0	3.3
全国（公立）	1,028,203	8.9 /14	63.8	10.0	3.4

	評価の観点				
	関心・意欲・態度	話す・聞く・能力	書く能力	読む能力	知識・理解・技能
福岡県（公立）	59.3	73.8	55.2	82.8	55.9
全国（公立）	57.6	72.3	54.5	81.7	53.5

問題形式		
選択式	短答式	記述式
76.1	51.2	59.3
75.1	48.7	57.6

正答数分布グラフ（横軸：正答数，縦軸：割合）



正答数集計値			
正答数	児童数	割合（%）	
	福岡県（公立）	福岡県（公立）	全国（公立）
１４問	2,275	5.1	4.8
１３問	4,671	10.5	9.7
１２問	5,651	12.7	11.9
１１問	5,738	12.9	12.3
１０問	5,233	11.8	11.4
９問	4,556	10.2	10.2
８問	3,755	8.4	8.7
７問	3,064	6.9	7.2
６問	2,459	5.5	6.0
５問	2,050	4.6	4.9
４問	1,739	3.9	4.0
３問	1,360	3.1	3.2
２問	937	2.1	2.5
１問	610	1.4	1.7
０問	360	0.8	1.2

※今回の調査での四分位は以下の通り。

	福岡県（公立）	全国（公立）
第３四分位	12.0問	12.0問
第２四分位	10.0問	10.0問
第１四分位	7.0問	7.0問

小学校国語では、次のような課題が見られた。

- 目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて書くこと
〔１　三　　福岡県 29.8%　全国 28.8%〕
- 文と文との意味のつながりを考えながら、接続語を使って内容を分けて書くこと
〔１　四（２）　福岡県 48.3%　全国 47.8%〕
- 情報を相手に分かりやすく伝えるための記述の仕方の工夫を捉えること
〔１　二　　福岡県 63.9%　全国 63.4%〕
- 目的に応じて、質問を工夫すること
〔３　二　　福岡県 69.4%　全国 67.4%〕
- 話し手の意図を捉えながら聞き、自分の考えをまとめること
〔３　三　　福岡県 70.2%　全国 68.2%〕

※　授業改善の視点から、特に課題が見られた順に挙げている。
※　数値は平均正答率を示している。

■　小学校国語　設問別正答率

問題番号	問題の概要	出題の趣旨	正答率（%）		無解答率（%）	
			福岡県（公立）	全国（公立）	福岡県（公立）	全国（公立）
１一	公衆電話について調べたことを【報告する文章】で〈資料２〉と〈資料３〉をそれぞれどのような目的で用いているか，適切なものを選択する	図表やグラフなどを用いた目的を捉える	71.7	71.2	0.3	0.5
１二	公衆電話について調べたことを【報告する文章】の「（２）公衆電話にはどのような使い方や特ちょうがあるのか」における書き方の工夫として適切なものを選択する	情報を相手に分かりやすく伝えるための記述の仕方の工夫を捉える	63.9	63.4	4.6	5.9
１三	公衆電話について調べたことを【報告する文章】の［　　］に，「２　調査の内容と結果」の（１）と（２）で分かったことをまとめて書く	目的や意図に応じて，自分の考えの理由を明確にし，まとめて書く	29.8	28.8	3.2	3.8
１四（１）ア	公衆電話について調べたことを【報告する文章】の中の ――― 部アを，漢字を使って書き直す （調査のたいしょう）	学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う	48.3	41.9	5.7	8.2
１四（１）イ	公衆電話について調べたことを【報告する文章】の中の ――― 部イを，漢字を使って書き直す （友達にかぎらず）		71.5	69.4	9.8	12.1
１四（１）ウ	公衆電話について調べたことを【報告する文章】の中の ――― 部ウを，漢字を使って書き直す （かんしんをもってもらいたい）		36.8	35.6	3.9	4.9
１四（２）	公衆電話について調べたことを【報告する文章】の［　　］の１文を，接続語「そこで」を使って２文に分けて書き直す	文と文との意味のつながりを考えながら，接続語を使って内容を分けて書く	48.3	47.8	8.9	11.3
２一（１）	食べ物の保存についてまとめている【ノートの一部】の［ア］に入る，［疑問に思ったこと］の①に対する答えとして適切なものを選択する	目的に応じて，文章の内容を的確に押さえ，自分の考えを明確にしながら読む	81.0	80.7	0.8	1.4
２一（２）	食べ物の保存についてまとめている【ノートの一部】の［イ］に，［疑問に思ったこと］の②に対する答えになるように考えて書く		77.9	75.9	4.3	5.0
２二	梅干し作りについて【知りたいこと】を調べるために，選んだ本の【目次の一部】から，読むページとして適切なものを選択する	目的に応じて，本や文章全体を概観して効果的に読む	89.7	88.5	2.8	4.2
３一	畳職人への【インタビューの様子】の［ア］に入る，自分の理解が正しいかを確認する質問として適切なものを選択する	話し手の意図を捉えながら聞き，話の展開に沿って，自分の理解を確認するための質問をする	82.0	81.3	2.4	3.4
３二	畳職人への【インタビューの様子】の［　　］の場面における，質問の工夫として適切なものを選択する	目的に応じて，質問を工夫する	69.4	67.4	3.0	4.2
３三	【インタビューの様子】の［イ］に，畳職人の仕事への思いや考えに着目して心に残ったことを書く	話し手の意図を捉えながら聞き，自分の考えをまとめる	70.2	68.2	12.6	14.2
３四	ことわざの使い方の例として，【ノートの一部】の［ウ］に入る適切なものを選択する（習うより慣れよ）	ことわざの意味を理解して，自分の表現に用いる	74.8	73.0	6.3	7.9

２　小学校算数

平成３１年度全国学力・学習状況調査　　小学校調査

調査結果概況　［算数］

福岡県－児童（公立）

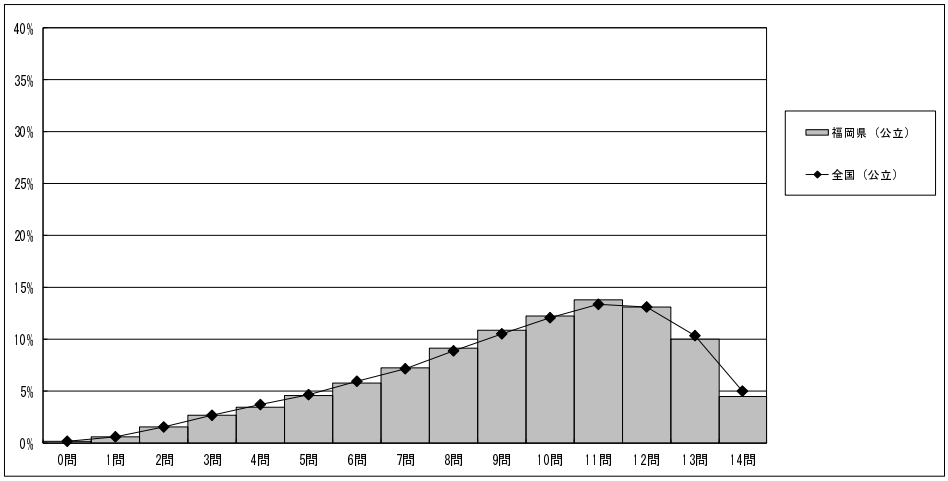
・以下の集計値／グラフは，４月１８日に実施した調査の結果を，児童を対象として集計した値である。

	児童数	平均正答数	平均正答率（%）	中央値	標準偏差
福岡県（公立）	44,466	9.3 /14	67	10.0	3.0
全国（公立）	1,028,177	9.3 /14	66.6	10.0	3.1

	評価の観点			
	関心・意欲・態度	数学的な考え方	数量や図形の技能	数量や図形の知識・理解
福岡県（公立）		62.3	73.3	70.4
全国（公立）		62.2	73.6	70.1

問題形式		
選択式	短答式	記述式
75.8	73.1	46.8
75.7	72.8	47.4

正答数分布グラフ（横軸：正答数，縦軸：割合）



正答数集計値			
正答数	児童数	割合（%）	
	福岡県（公立）	福岡県（公立）	全国（公立）
１４問	2,013	4.5	5.0
１３問	4,443	10.0	10.4
１２問	5,829	13.1	13.1
１１問	6,146	13.8	13.4
１０問	5,487	12.3	12.1
９問	4,862	10.9	10.5
８問	4,070	9.2	8.9
７問	3,242	7.3	7.2
６問	2,572	5.8	6.0
５問	2,034	4.6	4.7
４問	1,543	3.5	3.7
３問	1,196	2.7	2.7
２問	693	1.6	1.6
１問	260	0.6	0.6
０問	76	0.2	0.2

※今回の調査での四分位は以下の通り。

	福岡県（公立）	全国（公立）
第３四分位	12.0問	12.0問
第２四分位	10.0問	10.0問
第１四分位	7.0問	7.0問

小学校算数では、次のような課題が見られた。

- 示された計算の仕方を解釈し、減法の場合を基に、除法に関して成り立つ性質を記述できること　〔３（２）　福岡県 31.3%　全国 31.1%〕
- 示された図形の面積の求め方を解釈し、その求め方の説明を記述できること　〔１（３）　福岡県 42.9%　全国 43.9%〕
- 資料の特徴や傾向を関連付けて、一人当たりの水の使用量の増減を判断し、その理由を記述できること　〔２（３）　福岡県 50.6%　全国 52.1%〕
- 図形の性質や構成要素に着目し、ほかの図形を構成することができること　〔１（２）　福岡県 60.0%　全国 60.3%〕
- 場面の状況から、単位当たりの大きさを基に、求め方と答えを記述し、その結果から判断できること　〔４（３）　福岡県 62.5%　全国 62.6%〕

※　授業改善の視点から、特に課題が見られる順に挙げている。

※　数値は平均正答率を示している。

■　小学校算数　設問別正答率

問題番号	問題の概要	出題の趣旨	正答率(%)		無解答率(%)	
			福岡県（公立）	全国（公立）	福岡県（公立）	全国（公立）
１（１）	長方形を直線で切ってできた図形の中から，台形を選ぶ	台形について理解している	93.2	93.1	0.1	0.1
１（２）	二つの合同な台形を，ずらしたり，回したり，裏返したりして，同じ長さの辺どうしを合わせてつくることができる形を選ぶ	図形の性質や構成要素に着目し，ほかの図形を構成することができる	60.0	60.3	0.5	0.6
１（３）	減法の式が，示された形の面積をどのように求めているのかを，数や演算の表す内容に着目して書く	示された図形の面積の求め方を解釈し，その求め方の説明を記述できる	42.9	43.9	5.9	6.7
２（１）	１９８０年から２０１０年までの，１０年ごとの市全体の水の使用量について，棒グラフからわかることを選ぶ	棒グラフから，資料の特徴や傾向を読み取ることができる	95.3	95.2	0.2	0.2
２（２）	２０１０年の市全体の水の使用量が１９８０年の市全体の水の使用量の約何倍かを，棒グラフから読み取って書く	２０１０年の市全体の水の使用量が１９８０年の市全体の水の使用量の何倍か読み取ることができる	77.2	78.6	0.7	1.0
２（３）	二つの棒グラフから，一人当たりの水の使用量についてわかることを選び，選んだわけを書く	資料の特徴や傾向を関連付けて，一人当たりの水の使用量の増減を判断し，その理由を記述できる	50.6	52.1	1.6	2.0
２（４）	洗顔と歯みがきで使う水の量を求めるために，６＋０．５×２を計算する	加法と乗法の混合した整数と小数の計算をすることができる	60.6	60.1	0.8	1.0
３（１）	３５０－９７について，引く数の９７を１００にした式にして計算するとき，ふさわしい数値の組み合わせを書く	示された減法に関して成り立つ性質を基にした計算の仕方を解釈し，適用することができる	82.7	81.8	0.8	0.9
３（２）	減法の計算の仕方についてまとめたことを基に，除法の計算の仕方についてまとめると，どのようになるのかを書く	示された計算の仕方を解釈し，減法の場合を基に，除法に関して成り立つ性質を記述できる	31.3	31.1	8.9	10.8
３（３）	被除数と除数にかける数や割る数を選び，６００÷１５を計算しやすい式にして計算する	示された計算の仕方を解釈し，かける数や割る数を選び，計算しやすい式にして計算できる	76.4	74.9	1.7	2.1
３（４）	１８００÷６は，何m分の代金を求めている式といえるのかを選ぶ	示された除法の式の意味を理解している	47.6	47.0	1.8	2.2
４（１）	だいたい何分後に乗り物券を買う順番がくるのかを知るために，調べる必要のある事柄を選ぶ	目的に適した伴って変わる二つの数量を見いだすことができる	83.1	82.7	1.4	1.7
４（２）	何秒後にゴンドラに乗ることができるのかを求める式を書く	示された場面において，複数の数量から必要な数量を選び，立式することができる	68.6	68.6	4.0	4.4
４（３）	残り７ポール分進むのにかかる時間の求め方と答えを記述し，２４分間以内にレジに着くことができるかどうかを判断する	場面の状況から，単位量当たりの大きさを基に，求め方と答えを記述し，その結果から判断できる	62.5	62.6	3.2	3.5

３　中学校国語

平成３１年度全国学力・学習状況調査　　中学校調査

調査結果概況　［国語］

福岡県－生徒（公立）

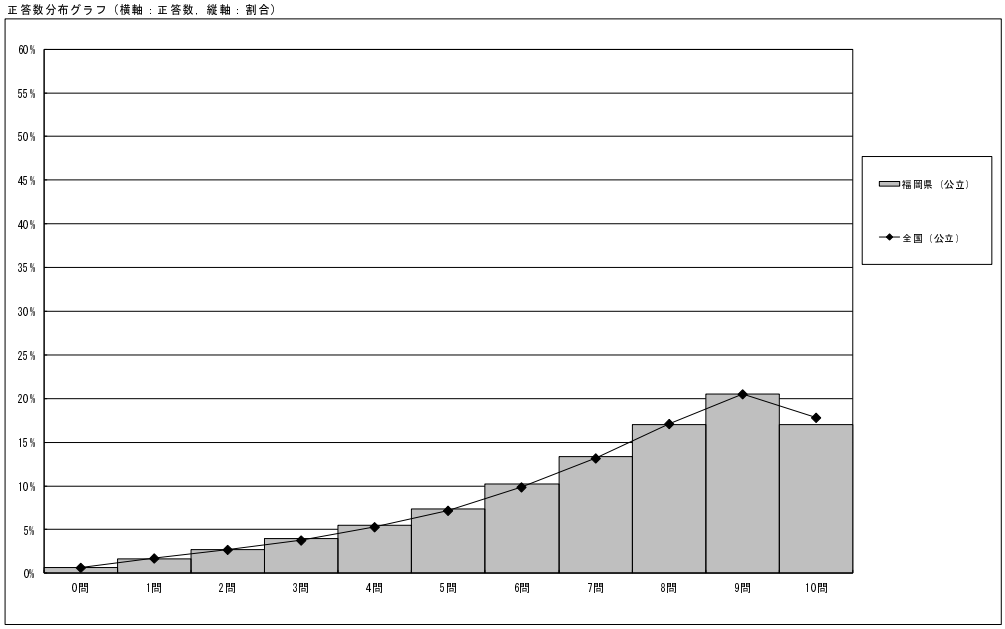
・以下の集計値／グラフは，４月１８日に実施した調査の結果を，生徒を対象として集計した値である。

	生徒数	平均正答数	平均正答率（%）	中央値	標準偏差
福岡県（公立）	39,699	7.2 /10	72	8.0	2.4
全国（公立）	938,797	7.3 /10	72.8	8.0	2.4

	評価の観点				
	関心・意欲・態度	話す・聞く・能力	書く能力	読む能力	知識・理解・技能
福岡県（公立）	77.1	70.7	82.0	72.0	65.7
全国（公立）	76.5	70.2	82.6	72.2	67.7

問題形式		
選択式	短答式	記述式
72.9	54.3	77.1
73.6	56.8	76.5

正答数分布グラフ（横軸：正答数，縦軸：割合）



正答数集計値			
正答数	生徒数	割合（%）	
	福岡県（公立）	福岡県（公立）	全国（公立）
１０問	6,749	17.0	17.8
９問	8,138	20.5	20.5
８問	6,742	17.0	17.1
７問	5,312	13.4	13.2
６問	4,067	10.2	9.9
５問	2,921	7.4	7.2
４問	2,193	5.5	5.3
３問	1,595	4.0	3.8
２問	1,055	2.7	2.7
１問	653	1.6	1.7
０問	274	0.7	0.7

※今回の調査での四分位は以下の通り。

	福岡県（公立）	全国（公立）
第３四分位	9.0問	9.0問
第２四分位	8.0問	8.0問
第１四分位	6.0問	6.0問

中学校国語では、次のような課題が見られた。

- 封筒の書き方を理解して書くこと
  〔１ 四　　福岡県 54.3%　全国 56.8%〕
- 文章の展開に即して情報を整理し、内容を捉えること
  〔１ 二　　福岡県 60.6%　全国 61.5%〕
- 話合いの話題や方向を捉えて自分の考えをもつこと
  〔２ 三　　福岡県 62.5%　全国 60.4%〕
- 文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをもつこと
  〔１ 一　　福岡県 63.5%　全国 63.9%〕
- 相手に分かりやすく伝わる表現について理解すること
  〔２ 二　　福岡県 69.0%　全国 69.7%〕

※　授業改善の視点から、特に課題が見られた順に挙げている。

※　数値は平均正答率を示している。

■　中学校国語　設問別正答率

問題番号	問題の概要	出題の趣旨	正答率（%）		無解答率（%）	
			福岡県（公立）	全国（公立）	福岡県（公立）	全国（公立）
１一	「日本の文化の中には，海外でも広く知られているものがあります。……第一回は，弁当です。」について説明したものとして適切なものを選択する	文章の構成や展開，表現の仕方について，根拠を明確にして自分の考えをもつ	63.5	63.9	0.1	0.1
１二	「海外に広がる弁当の魅力」で述べられている，弁当の魅力として適切なものを選択する	文章の展開に即して情報を整理し，内容を捉える	60.6	61.5	0.1	0.1
１三	「みんなの短歌」に掲載されている短歌の中から一首を選び，感じたことや考えたことを書く	文章に表れているものの見方や考え方について，自分の考えをもつ	92.0	91.2	1.3	1.7
１四	「声の広場」への投稿を封筒で郵送するために，投稿先の名前と住所を書く	封筒の書き方を理解して書く	54.3	56.8	5.4	5.6
２一	話合いでの発言の役割について説明したものとして適切なものを選択する	話合いの話題や方向を捉える	80.5	80.4	0.2	0.2
２二	話合いでの発言について説明したものとして適切なものを選択する	相手に分かりやすく伝わる表現について理解する	69.0	69.7	0.3	0.3
２三	話合いの流れを踏まえ，「どうするか決まっていないこと」について自分の考えを書く	話合いの話題や方向を捉えて自分の考えをもつ	62.5	60.4	7.9	8.9
３一	意見文の下書きに書き加える言葉として適切なものを選択する	書いた文章を読み返し，論の展開にふさわしい語句や文の使い方を検討する	87.1	87.4	0.4	0.4
３二	広報誌の一部にある情報を用いて，意見文の下書きに「魅力」の具体例を書き加える	伝えたい事柄について，根拠を明確にして書く	76.9	77.8	7.8	7.9
４	語の一部を省いた表現についての説明として適切なものを選択する	語の一部を省いた表現について，話や文章の中での適切な活用の仕方を理解する	77.1	78.7	1.6	1.2

４　中学校数学

平成３１年度全国学力・学習状況調査　　中学校 調査

調査結果概況　［数学］

福岡県－生徒（公立）

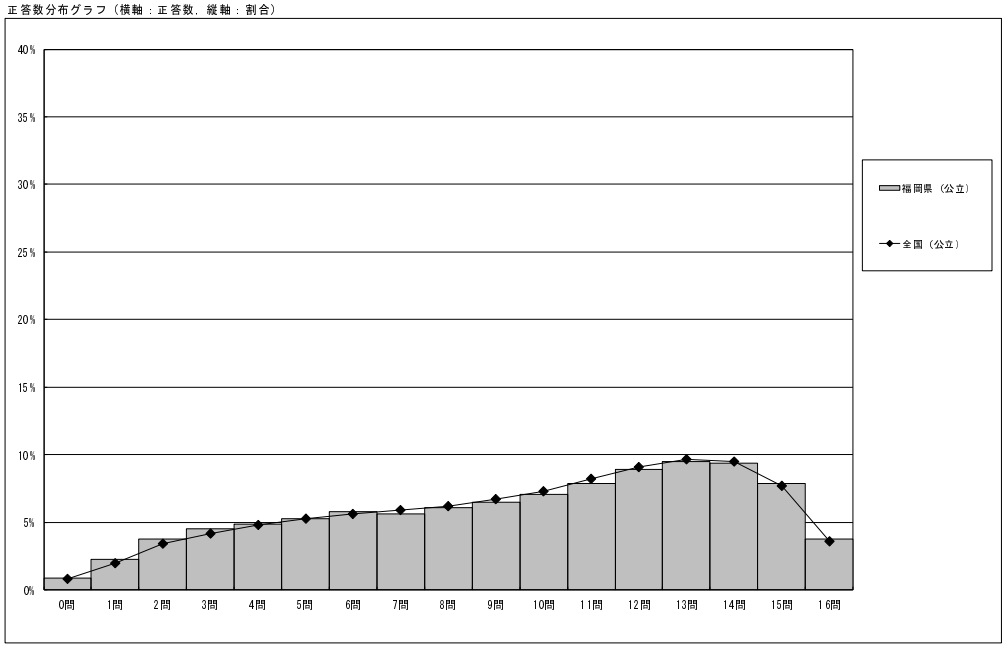
・以下の集計値／グラフは，４月１８日に実施した調査の結果を，生徒を対象として集計した値である。

	生徒数	平均正答数	平均正答率（%）	中央値	標準偏差
福岡県（公立）	39,703	9.5 ／16	59	10.0	4.3
全国（公立）	938,887	9.6 ／16	59.8	10.0	4.2

	評価の観点			
	関心・意欲・態度	数学的な考え方	数学的な技能	数量や図形の知識・理解
福岡県（公立）		51.1	63.5	69.7
全国（公立）		51.0	63.9	71.3

問題形式		
選択式	短答式	記述式
60.3	65.3	47.3
60.3	66.6	47.1

正答数分布グラフ（横軸：正答数，縦軸：割合）



正答数集計値			
正答数	生徒数	割合（%）	
	福岡県（公立）	福岡県（公立）	全国（公立）
１６問	1,499	3.8	3.6
１５問	3,146	7.9	7.7
１４問	3,748	9.4	9.5
１３問	3,759	9.5	9.7
１２問	3,517	8.9	9.1
１１問	3,123	7.9	8.2
１０問	2,803	7.1	7.3
９問	2,570	6.5	6.7
８問	2,403	6.1	6.2
７問	2,235	5.6	5.9
６問	2,301	5.8	5.6
５問	2,097	5.3	5.3
４問	1,949	4.9	4.8
３問	1,781	4.5	4.2
２問	1,492	3.8	3.4
１問	913	2.3	2.0
０問	367	0.9	0.8

※今回の調査での四分位は以下の通り。

	福岡県（公立）	全国（公立）
第３四分位	13.0問	13.0問
第２四分位	10.0問	10.0問
第１四分位	6.0問	6.0問

中学校数学では、次のような課題が見られた。

- 事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができること
〔６（２）　福岡県 34.8%　全国 34.7%〕
- グラフ上の点Ｐの ｙ 座標と点Ｑの ｙ 座標の差を、事象に即して解釈することができること　〔６（１）　福岡県 39.5%　全国 38.8%〕
- 資料の傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができること　〔８（２）　福岡県 42.7%　全国 40.8%〕
- 結論が成り立つための前提を考え、新たな事柄を見いだし、説明することができること　〔７（３）　福岡県 51.6%　全国 53.3%〕
- 事柄が成り立つ理由を説明することができること
〔９（２）　福岡県 60.1%　全国 59.7%〕

※　授業改善の視点から、特に課題が見られる順に挙げている。

※　数値は平均正答率を示している。

■　中学校数学　設問別正答率

問題番号	問題の概要	出題の趣旨	正答率（%）		無解答率（%）	
			福岡県（公立）	全国（公立）	福岡県（公立）	全国（公立）
1	a と b が正の整数のとき，四則計算の結果が正の整数になるとは限らないものを選ぶ	数の集合と四則計算の可能性について理解している	62.3	62.2	0.1	0.2
2	連立二元一次方程式 $\begin{cases} y=-2x+1 \\ y=x-5 \end{cases}$ を解く	簡単な連立二元一次方程式を解くことができる	68.2	70.1	5.5	5.1
3	△ＡＢＣを，矢印の方向に△ＤＥＦまで平行移動したとき，移動の距離を求める	平行移動の意味を理解している	81.9	83.6	0.7	0.7
4	反比例の表から式を求める	反比例の表から，x と y の関係を式で表すことができる	51.1	48.9	9.7	10.4
5	２枚の１０円硬貨を同時に投げるとき，２枚とも表の出る確率を求める	簡単な場合について，確率を求めることができる	71.2	72.8	3.6	3.3
6（1）	冷蔵庫Ａの使用年数と総費用の関係を表すグラフについて，点Ｐの y 座標と点Ｑの y 座標の差が表すものを選ぶ	グラフ上の点Ｐの y 座標と点Ｑの y 座標の差を，事象に即して解釈することができる	39.5	38.8	0.3	0.3
6（2）	冷蔵庫Ｂと冷蔵庫Ｃについて，式やグラフを用いて，２つの総費用が等しくなる使用年数を求める方法を説明する	事象を数学的に解釈し，問題解決の方法を数学的に説明することができる	34.8	34.7	8.3	11.6
7（1）	証明で用いられている三角形の合同条件を書く	証明の根拠として用いられている三角形の合同条件を理解している	71.2	75.8	6.0	5.2
7（2）	ある予想に対して与えられた図が反例となっていることの説明として正しいものを選ぶ	反例の意味を理解している	77.1	77.2	0.5	0.5
7（3）	四角形ＡＢＣＤがどのような四角形であれば，ＡＦ＝ＣＥになるかを説明する	結論が成り立つための前提を考え，新たな事柄を見いだし，説明することができる	51.6	53.3	17.1	17.6
8（1）	読んだ本の冊数と人数の関係をまとめた表から，読んだ本の冊数の最頻値を求める	資料を整理した表から最頻値を読み取ることができる	56.2	57.9	10.3	10.6
8（2）	「１日に２６分ぐらい読書をしている生徒が多い」という考えが適切ではない理由を，ヒストグラムの特徴を基に説明する	資料の傾向を的確に捉え，判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる	42.7	40.8	21.2	21.3
8（3）	図書だよりの下書きに書かれているわかったことの根拠となる値として適切なものを選ぶ	問題解決をするためにどのような代表値を用いるべきかを判断することができる	53.9	53.6	1.0	1.0
9（1）	説明をよみ，$6n+9$ を $3(2n+3)$ に変形する理由を完成する	与えられた説明を振り返って考え，式変形の目的を捉えることができる	57.6	57.4	9.7	9.5
9（2）	連続する５つの奇数の和が中央の奇数の５倍になることの説明を完成する	事柄が成り立つ理由を説明することができる	60.1	59.7	18.4	17.8
9（3）	連続する４つの奇数の和が $4(2n+4)$ で表されたとき，$2n+4$ はどんな数であるかを選ぶ	総合的・発展的に考察し，得られた数学的な結果を事象に即して解釈することができる	68.8	69.6	1.9	1.9

５　中学校英語

平成３１年度全国学力・学習状況調査　　中学校 調査

調査結果概況　［英語］

福岡県－生徒（公立）

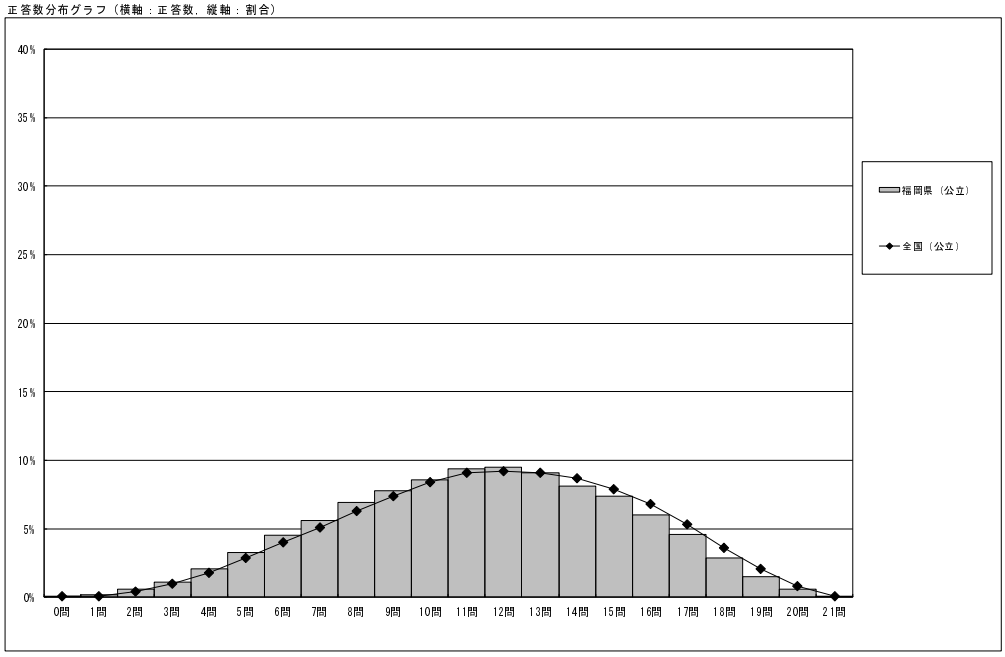
・以下の集計値／グラフは，４月１８日に実施した調査の結果を，生徒を対象として集計した値である。

	生徒数	平均正答数	平均正答率（%）	中央値	標準偏差
福岡県（公立）	39,711	11.4 /21	54	11.0	3.9
全国（公立）	938,888	11.8 /21	56.0	12.0	3.9

	評価の観点			
	関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
福岡県（公立）		1.3	43.3	62.5
全国（公立）		1.8	44.7	64.7

問題形式		
選択式	短答式	記述式
70.1	41.7	5.4
71.4	45.2	6.8

正答数分布グラフ（横軸：正答数，縦軸：割合）



正答数集計値			
正答数	生徒数	割合（%）	
	福岡県（公立）	福岡県（公立）	全国（公立）
２１問	20	0.1	0.1
２０問	250	0.6	0.8
１９問	599	1.5	2.1
１８問	1,141	2.9	3.6
１７問	1,825	4.6	5.3
１６問	2,392	6.0	6.8
１５問	2,950	7.4	7.9
１４問	3,207	8.1	8.7
１３問	3,614	9.1	9.1
１２問	3,754	9.5	9.2
１１問	3,738	9.4	9.1
１０問	3,423	8.6	8.4
９問	3,085	7.8	7.4
８問	2,753	6.9	6.3
７問	2,219	5.6	5.1
６問	1,800	4.5	4.0
５問	1,314	3.3	2.9
４問	845	2.1	1.8
３問	452	1.1	1.0
２問	224	0.6	0.4
１問	71	0.2	0.1
０問	35	0.1	0.1

※今回の調査での四分位は以下の通り。

	福岡県（公立）	全国（公立）
第３四分位	14.0問	15.0問
第２四分位	11.0問	12.0問
第１四分位	9.0問	9.0問

中学校英語では、次のような課題が見られた。

- 与えられたテーマについて考えを整理し、文と文のつながりなどに注意してまとまりのある文章を書くことができること　〔１０　福岡県　1.3%　全国　1.8%〕
- 聞いて把握した内容について、適切に応じることができること　〔４　福岡県　5.9%　全国　7.6%〕
- 書かれた内容に対して、自分の考えを示すことができるよう、話の内容や書き手の意見などをとらえることができること　〔８　福岡県　9.2%　全国 10.9%〕
- 与えられた情報に基づいて、３人称単数現在時制の肯定文を正確に書くことができること　〔９（３）②　福岡県 27.9%　全国 32.9%〕
- 一般動詞の１人称複数過去時制の肯定文を正確に書くことができること　〔９（２）②　福岡県 25.7%　全国 28.9%〕

※　授業改善の視点から、特に課題が見られる順に挙げている。

※　数値は平均正答率を示している。

■　中学校英語　設問別正答率

問題番号	問題の概要	出題の趣旨	正答率（%）		無解答率（%）	
			福岡県（公立）	全国（公立）	福岡県（公立）	全国（公立）
１（１）	ある状況を描写する英語を聞いて，その内容を最も適切に表している絵を選択する	語と語の連結による音変化をとらえて，情報を正確に聞き取ることができる	90.2	91.1	0.2	0.2
１（２）	教室英語を聞いて，その指示の内容を最も適切に表している絵を選択する	教室英語を理解して，情報を正確に聞き取ることができる	87.6	88.6	0.2	0.1
１（３）	外国人の先生と女子生徒の会話を聞いて，その内容を最も適切に表している絵を選択する	日常的な話題について，情報を正確に聞き取ることができる	70.0	72.3	0.2	0.2
１（４）	家での会話を聞いて，その内容を最も適切に表している絵を選択する	日常的な話題について，情報を正確に聞き取ることができる	61.4	61.8	0.2	0.2
２	イギリスと日本の類似点や相違点についてのスピーチを聞いて，話の展開に合わせて示す絵を並び替える	まとまりのある英語を聞いて，話の概要を理解することができる	71.4	71.8	0.2	0.2
３	天気予報を聞いて，ピクニックに行くのに最も適する曜日を選択する	まとまりのある英語を聞いて，必要な情報を理解することができる	80.0	82.0	0.2	0.2
４	来日する留学生の音声メッセージを聞いて，部活動についてのアドバイスを書く	聞いて把握した内容について，適切に応じることができる	5.9	7.6	42.6	42.3
５（１）	ある場所を説明する英文を読んで，空所に入る語句として最も適切なものを選択する	日常的な話題について，簡単な語句や文で書かれたものの内容を，正確に読み取ることができる	77.4	79.4	0.2	0.2
５（２）	ある状況を描写する英文を読んで，その内容を最も適切に表している絵を選択する	日常的な話題について，簡単な文で書かれたものの内容を，正確に読み取ることができる	74.5	74.4	0.2	0.2
５（３）	月ごとの平均気温を表したグラフを見て，その内容を正しく表している英文を選択する	日常的な話題について，簡単な文で書かれたものの内容を，正確に読み取ることができる	72.2	73.1	0.4	0.4
６	発表活動のためにまとめられた100円ショップについての文章を読んで，話の流れを示すスライドとして最も適切なものを選択する	まとまりのある文章を読んで，話のあらすじを理解することができる	61.8	62.9	0.3	0.4
７	チンパンジーに関する説明文とその前後にある対話を読んで，書き手が最も伝えたい内容を選択する	まとまりのある文章を読んで，説明文の大切な部分を理解することができる	31.9	32.8	1.0	1.0
８	食糧問題について書かれた資料を読んで，その問題に対する自分の考えを書く	書かれた内容に対して，自分の考えを示すことができるよう，話の内容や書き手の意見などをとらえることができる	9.2	10.9	28.2	27.9
９（１）①	文中の空所に入れる接続詞として，最も適切なものを選択する	文の中で適切に接続詞を用いることができる	76.2	79.9	0.2	0.3
９（１）②	文中の空所に入れる接続詞として，最も適切なものを選択する	文の中で適切に接続詞を用いることができる	56.5	58.2	0.6	0.5
９（２）①	与えられた英語を適切な形に変えたり，不足している語を補ったりなどして，会話が成り立つように英文を書く	一般動詞の２人称単数現在時制の疑問文を正確に書くことができる	69.4	73.6	5.0	4.4
９（２）②	与えられた英語を適切な形に変えたり，不足している語を補ったりなどして，会話が成り立つように英文を書く	一般動詞の１人称複数過去時制の肯定文を正確に書くことができる	25.7	28.9	13.6	12.6
９（３）①	与えられた情報に基づいて，ある女性を説明する英文を書く	与えられた情報に基づいて，３人称単数現在時制の肯定文を正確に書くことができる	50.4	53.5	7.4	6.4
９（３）②	与えられた情報に基づいて，ある女性を説明する英文を書く	与えられた情報に基づいて，３人称単数現在時制の肯定文を正確に書くことができる	27.9	32.9	10.7	9.3
９（３）③	与えられた情報に基づいて，ある女性を説明する英文を書く	与えられた情報に基づいて，一般動詞の３人称単数現在時制の否定文を正確に書くことができる	35.2	37.4	11.2	10.5
１０	学校を表す２つのピクトグラム（案内用図記号）の案を比較して，どちらがよいか理由とともに意見を書く	与えられたテーマについて考えを整理し，文と文のつながりなどに注意してまとまりのある文章を書くことができる	1.3	1.8	7.2	8.3

Ⅳ　日々の授業改善及び学校運営等によって効果を上げている事例

～児童生徒・学校・地域等の実態を踏まえて学力を向上させる取組～

本県の学力の課題の一つに、「地区間差」「学校間差」があり、一律の取組だけでは改善が難しい場合があります。

そこで、本章では、児童生徒・学校・地域等の実態を踏まえた取組を行うことで、学力を向上させている学校の効果的な取組事例を紹介しています。

県内のさまざまな実態に対応できるように、できるだけ多くの事例を掲載しています。本事例を参考に、そのまま実践したり、自校の実態に合わせてアレンジしたりして、自校の学力向上、授業改善等の一助としていただければ幸いです。

■事例１：授業改善

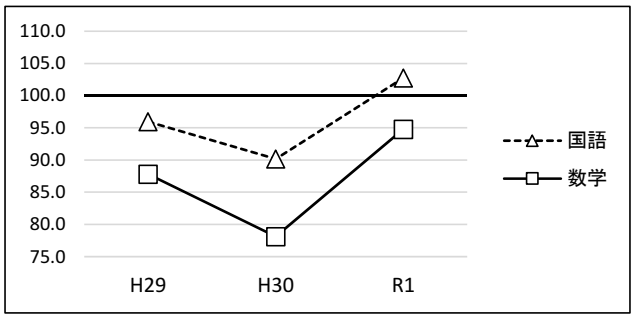
生徒による授業評価と教員による自己評価を関連付けた授業改善

Ａ町立Ａ中学校（福岡地区）

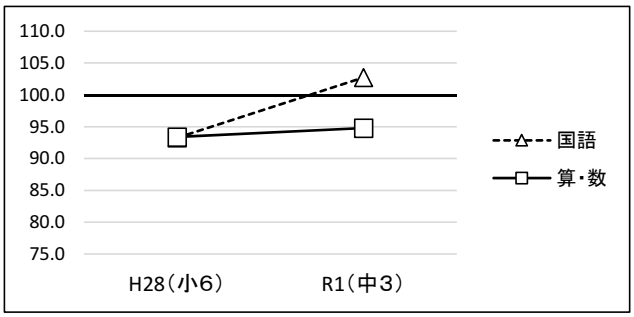
〇学校の特徴等

全校生徒数 320 名、12 学級（特別支援学級含む）、教職員 36 名の学校である。これまでの授業改善をさらに推進するために、生徒の視点（授業の受け止め）を取り入れた取組を行っている。

〇経年変化（H29,H30 はＡ・Ｂ問題の平均）



〇同一集団の推移



１ 成果が見られた主な取組の概要

学校の重点目標を実現し生徒の学びを深化させるために、生徒による授業評価と教員による自己評価の結果を関連付けた取組を通して、授業改善を行った。

① 重点目標が全職員に行き渡る校内組織の再編

カリキュラムリーダー（校長）が、生徒や地域等の実態把握に基づく重点目標「Ａ中学習ビジョン」と「目標値」を設定した。そして、それらが全ての教育活動と連動するように、カリキュラム・マネジメント委員会を中心とした校内組織を再編し、全教員が常に重点目標を意識した取組を推進できる仕組みをつくった。

② 重点目標を基に質問項目を統一した生徒評価と教員評価

カリキュラムマネージャー（教務担当主幹教諭）が、重点目標を基に生徒評価と教員評価の質問項目を統一した評価を定期的に実施した。そして、研究推進委員会で、二つの評価結果を関連付けながら分析を行い、それぞれの認識の違いから授業改善の取組を焦点化していった。

２ 取組のポイント

〇 定期的な授業改善ＷＥＥＫによる共同実践と見届け

焦点化された授業改善の取組を実践に移す授業改善ＷＥＥＫを定期的に設定した。その際、カリキュラム・マネジメント委員会の委員が、授業を参観・評価し、個々の教員の成果と課題を明らかにして指導助言を行った。

３ 取組の効果

一人一人の授業改善に対する姿勢が受動的から能動的に変容するとともに、生徒の学びも「Ａ中学習ビジョン」に向かって変容が見られた。また、本年度の全国学力・学習状況調査では、同一集団の標準化得点の伸びや無解答の減少という形で現れている。さらに、生徒質問紙「自分にはよいところがあると思いますか」の項目においても、「当てはまる」と答えた生徒が全国平均を大きく上回り、生徒の自尊感情の高まりも見られた。

本事例は、定期的に行う「教員評価（教員の思い）」と「生徒評価（生徒の受け止め）」の違いを基に、めあてや発問の質などの授業改善に取り組むことで、着実に学力や生徒の自尊感情を向上させている好事例と言えます。また、校長がカリキュラムリーダーとして積極的に授業改善に関わることで、教員が自ら日常的に授業評価と授業改善を行うようになっている様子は、教員の主体的な学力向上への取組として参考になります。

■事例２：授業改善

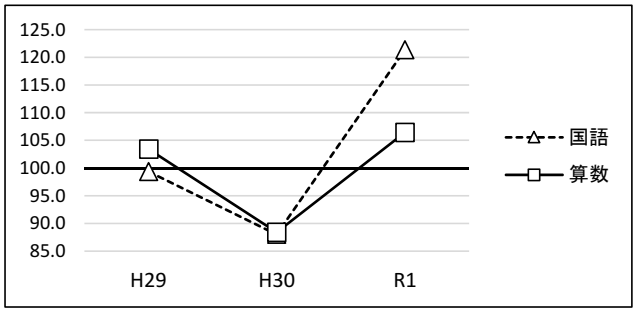
児童の「書く力」を高める組織的な授業改善

Ｂ市立Ｂ小学校（北九州地区）

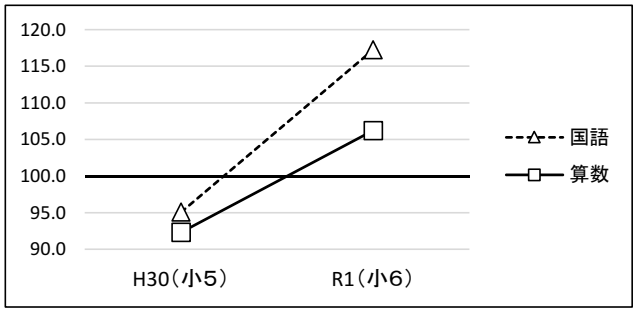
○学校の特徴等

全校児童 465 名、21 学級（特別支援学級を含む）、教職員 38 名の学校である。本校では、教職員の若年化が急速に進んでおり、指導力の向上が喫緊の課題となっている。各種学力調査の結果から、児童には、特に「自分の考えを書く力」に課題があることが明らかになったため、その課題解決に向けた授業改善を進めている。

○経年変化（H29,H30 はＡ・Ｂ問題の平均）



○同一集団の推移　※県を 100 としたときの標準化得点



１　成果が見られた主な取組の概要

自分の考えを書く力を育成するために、児童が学習のまとめを自分で考えてつくることができるように、以下の工夫を行った。

①　課題を明確にしためあての設定

本時の学習課題となるめあてを、『問い』の形で設定し、まとめは、その問いに答えるような形で表現させた。

②　キーワードの明確化と板書の工夫

教員が、教材研究の段階で、まとめに用いるべきキーワードを明確にしておく。課題解決の場面では、交流活動において、児童からキーワードに類する言葉を引き出せるよう、発問を精選する。交流活動を通して引き出されたキーワードが、児童から見ても課題解決に必要な言葉であることが分かるようにするために、チョークの色使いを工夫した。また、構造的な板書計画を行うことにより、課題とキーワードの関係を視覚的に捉えられるようにした。

２　取組のポイント

①　書く活動を充実させるための基盤づくり

全校で統一した書く活動の指導ができるよう、全学級で共通した指導５項目を設定し、ノート指導の充実を図るようにした。さらに、全校一斉視写を毎週実施し、ノートに考えを書く習慣と考えをまとめる力の育成に努めた。

②　組織的取組に対する教員の意識化

全教員が「本校の授業改善はこれだ」と言えるように、主題研究、学力向上研修、鍛ほめ事業、小中連携等の全ての取組において、書く活動を取り入れ、自校採点や学力分析、意見交流を行い、学力に関する課題を共有した。また、学級・学年経営案や各種研修における学習指導案作成等においても、この取組の視点を位置付けるようにした。

３　取組の効果

H30 記述問題の平均正答率は 34.1%だったが、本年度は 58.7%に向上した。また、無解答率も全国に比べて低かったことから、「書くこと」への抵抗が減ったり、自分の考えを書く力が伸びたりしていることが分かる。

本事例は、まとめに用いるべき「キーワード」を明確にして、書く活動を行っているところによさがあります。この取組により、平均正答率の向上とともに、児童質問紙において、国語科の記述式問題を「最後まで書こうと努力した」や、算数科で「解き方や考え方をノートに書いている」と回答した割合が全国平均を大きく上回っていることからも好事例と言えます。

■事例３：授業改善

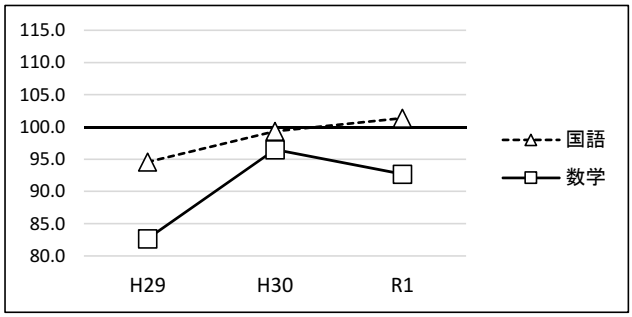
授業スタンダードの徹底と定期考査問題改善によるゴール像を明確にした授業づくり

Ｃ町立Ｃ中学校（京築地区）

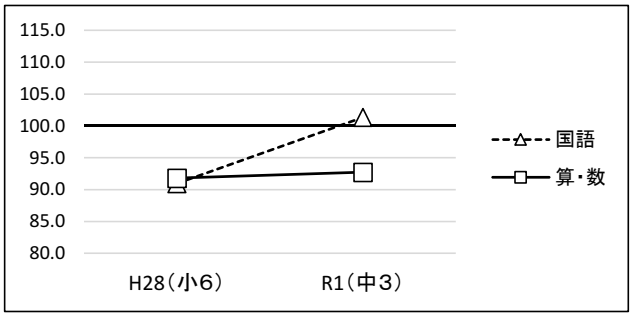
○学校の特徴等

全校生徒数 258 名、10 学級（特別支援学級含む）、教職員数 24 名の学校である。学習規律の徹底を主な目的として主題研究に取り組んできたが、取組をさらに前進させるために、「Ｃ中授業スタンダード」を作成し、ゴール像を明確にした授業改善に取り組んでいる。

○経年変化（H29,H30 はＡ・Ｂ問題の平均）



○同一集団の推移



１ 成果が見られた主な取組の概要

授業規律の徹底と組織的な授業改善のために「Ｃ中授業スタンダード」の徹底とゴール像を明確にして、日々、組織的な授業改善に取り組んでいる。

① 主題研修と連動した授業のスタンダードの徹底

組織的な授業改善を目指し、５年前より「Ｃ中授業スタンダード」を作成し取り組んでいる。当初の２年間は、授業規律面を重視したスタンダードであったが、３年前より学力の向上のために、主題研究（学びのユニバーサルデザイン）と連動させ、ゴールを明確にした「わかる」「できる」「やりたい」授業づくりに全教科全教員で取り組んでいる。

② 定期考査問題の改善（質の高い活用力を問う問題の導入）

①の取組を基に、思考力・判断力・表現力等を育成する授業になるように、各種調査問題や高校入試の「問い方」を参考にした定期考査問題の改善を行っている。定期考査問題をゴールとして設定することによって、全教員が単元全体を見通した授業づくりを進めるようになってきている。

２ 取組のポイント

○ ミドル層を育てながら取組を浸透させる

毎回の定期考査後に、教頭と教務主任が良問に付箋を付けて問題をファイリングし、誰でもいつでも見ることができるようにしている。また、より質の高い定期考査問題になるように、日ごろから研究主任や教科主任等が考査問題の検討を重ね、若年層教員に問題づくりの手法等を伝えている。それにより、ミドル層と若年層教員の職能成長が図られている。

３ 取組の効果

全国学力・学習状況調査では、同一集団の経年変化において標準化得点の上昇が見られる。また、考査問題の作成や改善は、多くの場合、各教員が自主的に時間を見つけたり、教員同士が積極的に意見交流したりして行われるようになる等、主体的に取り組まれるようになってきた。

本事例は、授業スタンダードと定期考査問題の改善を組織的に行うことで、日常の学習指導の改善・充実が図られている点が参考となります。また、考査問題作成を通して、若年層もベテラン層も共に成長しながら、主体的に日々の授業改善への気運を高めている好事例と言えます。

■事例４：授業改善

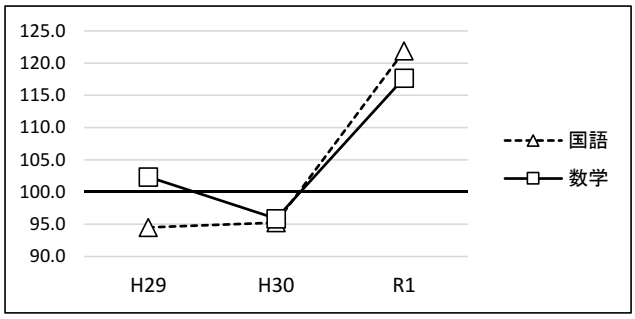
学力調査問題を位置付けた年間指導計画に基づく授業改善

Ｄ市立Ｄ中学校（京築地区）

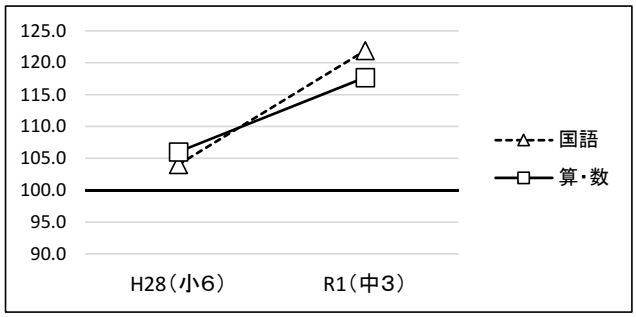
○学校の特徴等

全校生徒数 31 名、４学級（特別支援学級を含む）、教職員 11 名の学校である。「根拠をもとに自分の考えを書く」ことに課題があると捉え、全国学力・学習状況調査問題を活用した学習指導を年間指導計画に位置付けるなどして授業改善を図っている。

○経年変化（H29, H30 はＡ・Ｂ問題の平均）



○同一集団の推移



１ 成果が見られた主な取組の概要

「根拠をもとに自分の考えを書く力」をつけるために、全国学力・学習状況調査問題を活用した学習活動を国語と数学の年間指導計画に位置付け、ゴール像を明確にするとともに、習熟度等に応じた授業改善を図っている。

① 国語科の取組

学力調査問題を授業で活用したり、定期考査問題の中に位置付けて出題したりすることで、根拠をもとに自分の考えを書く力を伸ばすことを目指している。また、週末課題と授業をリンクさせ、１年時は「新聞のコラムをノートに貼り、感想を書く」、２年時は「コラムについて自分の考えを理由とともに書く」、３年時は「コラムを要約し、根拠を明確にして自分の考えを書く」など、段階を踏んだ指導を行っている。

② 数学科の取組

日常的な授業では基礎的な問題（A問題）に、単元末においては活用に関する問題（B問題）を中心に取り上げて取り組ませている。７～８割の正答率を得られない課題のある問題については、授業で丁寧に指導した上で、定期考査で繰り返し出題するなどして、確実な学力定着を図っている。

２ 取組のポイント

○ 学力向上コーディネーターと管理職による打合せ

管理職と学力向上コーディネーターが学力の課題に応じた取組の方向性を明確にし、「Ｂ問題においては中間層を引き上げること」、「再テストの取組では個別支援をすること」などを全職員に周知し、共通理解を促している。

３ 取組の効果

本年度の全国学力・学習調査結果においては、小６からの標準化得点の推移でみると、国語、数学ともに大きく上昇している。

本事例は、各教科の課題に応じた学力調査問題を、計画的に位置付けた授業を行うことで、教員も生徒自身も理解の状況を適切に評価できるようになった好事例と言えます。また、学力調査問題の問い方や正答例を踏まえることで、言語活動を充実させる授業が展開できるようになることも期待されます。

■事例５：学校運営

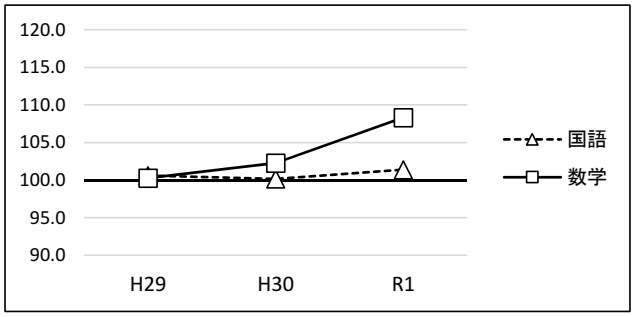
「小中一貫スタイル」を基にした９年間の系統を意識した授業づくり

Ｅ市立Ｅ中学校（福岡地区）

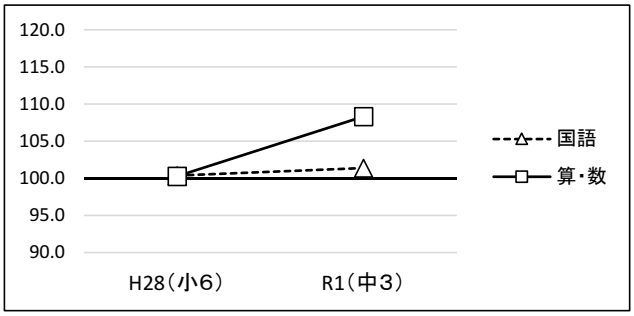
○学校の特徴等

全校生徒数 310 名、11 学級（特別支援学級含む）、教職員 25 名の学校である。平成 17 年度より２小１中での小中一貫教育を推進している。９年間の学びを一貫するために「そろえる」「つなぐ」「つみあげる」をキーワードにした「小中一貫スタイル」をもとに授業づくりを行っている。

○経年変化（H29,H30 はＡ・Ｂ問題の平均）



○同一集団の推移



１ 成果が見られた主な取組の概要

中学校区で目指す児童生徒像を具現化するために、「学び方」「学習規律」「教室環境」「家庭学習の仕方」をそろえた「小中一貫スタイル」を基に、小学校から中学校へと学びを積み上げる取組を行っている。

① 学び方をそろえる

一単位時間の学習過程を「つかむ」「さぐる」「まとめる」の３段階で構成し、その学習過程を小中３校でそろえ、一貫させている。また、「９年間で段階的に育てる学び方」を一覧にまとめ、前期、中期、後期のそれぞれの段階での話し方、聞き方、ノートの作り方についても、共通理解を図った指導を行っている。

② 家庭学習をそろえる

学校と家庭が連携し、宿題や予習、復習などの家庭学習の充実を図るために、家庭学習の時間や内容を示した「家庭学習の手引き」を作成・活用している。「家庭学習チャレンジ 10」の実施時期や内容を小中合わせて行い、家庭学習の内容や時間と保護者の評価を記入する記録シートを活用して、自分の頑張りを可視化できるようにしている。

２ 取組のポイント

○ 年間を通した小中合同授業研修会の実施

学び方をそろえるために、小中３校の研究内容を同一にするとともに、４月当初には、小中３校全職員の合同研修会で研究内容や「小中一貫スタイル」の共通理解を図っている。また、各校で行う授業研究会には３校の全教職員が参加して、学力向上に向けた授業づくりについて協議を行っている。指導案の形式についても３校で統一したものを活用している。

３ 取組の効果

９年間の学びを「そろえ」「つなぎ」「つみあげ」ていったことで、教員の異動等があっても授業のスタイルが統一されているので、児童生徒はスムーズに学習にむかうことができている。

小中合同の研究を進めているため、課題も３校で共有することができ、校種を超えた建設的な意見をもとに授業改善が進んでいる。

本事例は、小・中学校の取組状況の差による課題が生じないよう授業スタイル等を一貫させているため、児童生徒にとっては、授業全体を見通しながら学習を進められるよさがあります。また、教員にとっては授業づくりの視点が明確になり、日常的な学習指導の工夫・改善が図られるなどの効果を生み出しています。小・中学校の教員が、「9年間で子供を育てる」という考え方に立った小中一貫教育のモデル的実践と言えます。

■事例６：学校運営

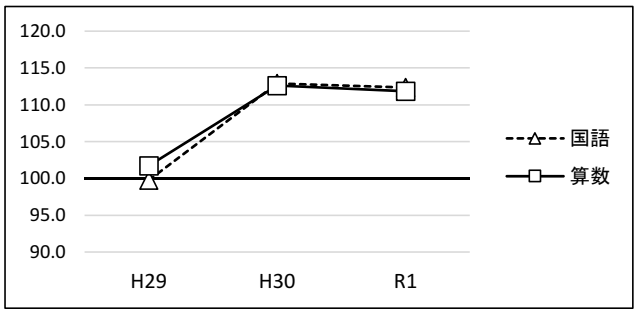
校長のマネジメントによる学力向上を図る組織の機能化

Ｆ町立Ｆ小学校（北九州地区）

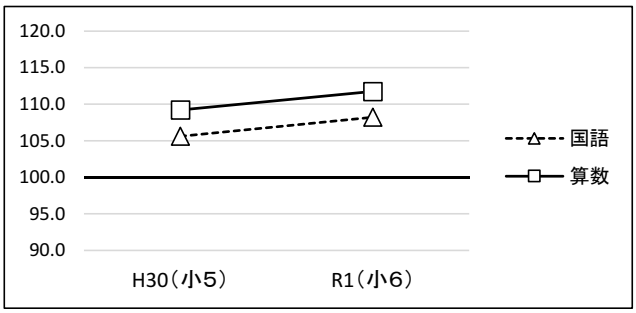
○学校の特徴等

全校児童 157 名、７学級（特別支援学級含む）、教職員 19 名の小規模校である。担任や学力向上コーディネーター、教頭、主幹教諭等が主体的に学力向上の取組を進めるために、校長のリーダーシップとマネジメントのもと、学力向上に関する組織の機能化を図っている。

○経年変化（H29,H30 はＡ・Ｂ問題の平均）



○同一集団の推移　※県を 100 としたときの標準化得点



１　成果が見られた主な取組の概要

若年教員の授業力や生徒指導力等の学級経営力を高めるため、若年教員と中堅・ベテラン教員がチームを組んで教育課題解決を図っている。

①　検証改善を促す組織マネジメント

検証委員会を、担任以外を中心とした「企画立案部」と担任中心の「実行改善部」に分け、効果的・効率的に運営できるようにした。また、校長が検証委員会の中で、学力向上の取組について、いつ、誰が、どんな指導をするのかを具体化するよう各担当者に指示している。さらに、学力向上に係る日々の取組では、右表のように役割を分担し、組織的な取組を推進している。

＜役割分担の例＞

宿題点検	教頭、指改担当
朝自習（習熟度別の課題）	担任、主幹教諭、指改担当
昼のスキルアップタイム（算数）	担任

※指改担当…指導方法工夫改善担当教員

②　教員一人一人の参画意識を高め、主体的に授業改善を行うための取組

授業研修では、新たに「教材分析部」を設置し、参観者全員が授業評価シートを活用することを通して、全教員の参画意識を高めながら日々の授業改善を行っている。

週案に、授業改善の視点を記入する欄を新設し、管理職が週案にコメントを記入することで、日々の授業の改善点を管理職と担任が一緒に考えている。そのことを通して、担任が自信をもって学習指導に臨めるようになってきている。

２　取組のポイント

①　小さなＰＤＣＡサイクル

全教員が学力向上プランを意識した取組ができるようにするために、検証改善ロードマップにチェックポイントを設け、短い周期で各取組の実施状況を点検・評価・改善している。

②　共通理解のための啓発活動

各種の取組後に、教頭や研究主任が学力向上のポイント等を記した「職員室だより」や「研修だより」を配布し、課題解決の手立てや方向性等を共通理解できるようにしている。

３　取組の効果

学力向上・授業改善に関する意識調査［4 件法］の結果（5 月と 10 月の比較）では、「教材分析」「週案の活用」「小さな PDCA サイクルの実施」に対する意識が向上した。特に「部会での協議や意見交換」を重視する意識は、2.7 から 3.6 に上昇している。

本事例では、校長が明確なビジョンを示し、リーダーシップと適切なマネジメントをもとにした取組を徹底することで、教職員同士の主体的な授業改善を生み出しています。これは、今求められている校長のリーダーシップとマネジメントによって児童の学力を向上させる学校運営の好事例と言えます。

■事例７：学校運営

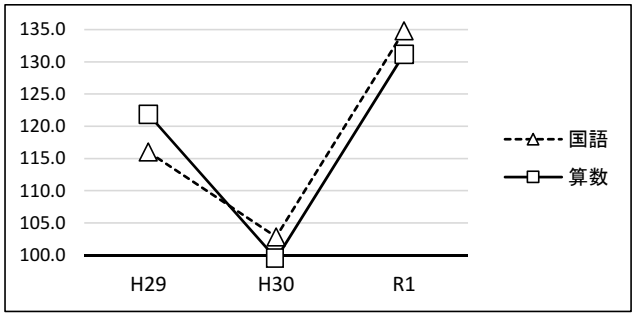
地域と連携した教育活動の展開

Ｇ町立Ｇ小学校（京築地区）

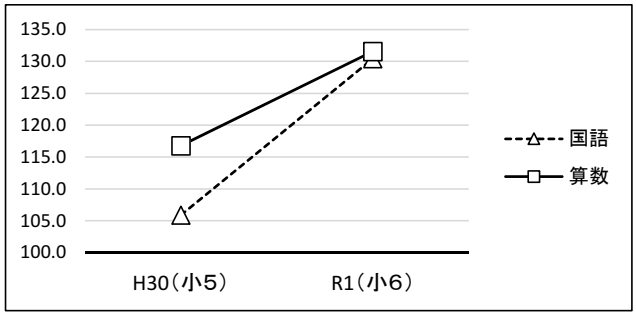
○学校の特徴等

全校児童数 96 名、８学級（特別支援学級含む）、教職員 14 名の学校である。学校運営協議会を活用し、学校経営の活性化と、地域と連携した教育活動の充実を図っている。

○経年変化（H29,H30 はＡ・Ｂ問題の平均）



○同一集団の推移　※県を 100 としたときの標準化得点



１　成果が見られた主な取組の概要

学校経営の活性化及び教育活動の充実のために、学校運営協議会委員による学習参観アンケートの結果を教員にフィードバックしたり、地域の人と連携した体験活動と言語活動を関連付けたりしている。

①　学校運営協議会委員による学習参観及び授業評価

学校運営協議会委員に授業を参観してもらい、アンケートによる意見聴取を行っている。「子どもの学びの姿勢」や「教員の発問の手立て」などについてのアンケート結果を教職員にフィードバックすることにより、教員のモチベーションアップにつなげている。

②　地域の人と連携した体験活動

児童の意欲的な学習態度を育むために、地域の人に関わってもらいながら、「稲刈り」「菊づくり」「昔遊び」などの体験活動等を積極的に取り入れている。また、学習したことをまとめたり、お礼の手紙を書いたりするなどの言語活動を位置付けることで、目的意識や相手意識のある学習を展開することができている。

２　取組のポイント

○　評価のフィードバックによる授業改善と教員の意欲の向上

学校運営協議会委員による学習参観アンケートに、「授業は工夫できていたか」という項目を設けることで、地域の方からの評価を含めた多面的な評価結果を自分の授業改善に生かすことができる。また、地域の方からの評価は、各教員の意欲の向上につながっている。

３　取組の効果

日常的な授業改善によって、教員の授業改善に対する意欲が高まり、全国学力・学習状況調査で全国を大きく上回るとともに、上昇傾向も継続している。

本事例は、教員の授業改善に向けた意欲の向上を図るために、学校運営協議会を効果的に位置付けた好事例です。また、地域と連携した体験活動等を取り入れながら、「地域とともにある学校づくり」のもとでの学力向上を実現しています。外部からの意見を教員のモチベーション向上に効果的に活用している点も参考になります。

■事例８：人材育成

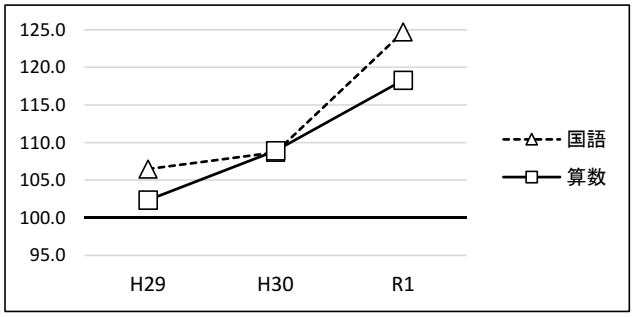
教員の実践的指導力を高めるメンタリングを中心とした授業研修

Ｈ町立Ｈ小学校（福岡地区）

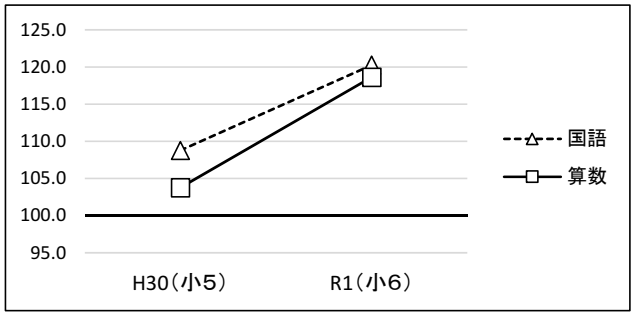
○学校の特徴等

全校児童数 375 名、16 学級（特別支援学級含む）、教職員 29 名の学校である。本年度より、学校全体の業務の改善を目指して、職員研修の進め方を中心に研究している。

○経年変化（H29,H30 はＡ・Ｂ問題の平均）



○同一集団の推移　※県を 100 としたときの標準化得点



１　成果が見られた主な取組の概要

自己管理の下で行われる職員の研修は、自身の課題解決を目指して、各自都合のよい時間をペアで設定し、メンタリングという方法で進めている。また、メンタリングでは、自校で開発した課題選択シート及びメンタリングシートを活用している。

①　指導力アップに向けた即効性のある授業研修

メンタリングの中でメンティは、個人の指導力の向上を目的として、「課題選択シート」の項目から自分の課題を決め、その課題改善に向けて授業を行う。メンターは、授業への助言等を行い、メンティと共に自身の課題改善に取り組んでいる。

②　指導案を書かない授業研修

授業研修では、詳細な指導案を書かずに、メンターとメンティの話合いで授業づくりの検討を行っている。指導案の代用として、簡単なメンタリングシートを作成して授業を行う。詳細な指導案作成に割く時間を少なくすることで、授業公開、授業参観をこれまで以上に多く行うことが可能となり、自身の課題解決まで粘り強く授業実践を繰り返している。

２　取組のポイント

○　目的に応じたメンター・メンティの関係

学校全体でメンタリングを進めていくことができるようにするために、進め方を共有する学年メンタリング、若手から先輩が学ぶリバースメンタリング、若手教員同士で行うグループメンタリングなど、様々な方法を開発し、目的に応じて使い分けている。

３　取組の効果

授業参観や授業公開を多く行うことが可能になり、教員一人一人が主体的に実践的指導力を向上させる意識が高まった。また、経験年数が長い教員もこれまで取り組む機会がなかった内容について研修を行っている。このように、教員の指導力を高める研究は、子どもたちの学力向上にも効果を上げている。

本事例は、研修時間の確保と児童と向き合う時間等の確保を両立することを可能にした好事例です。また、メンタリングの手法に加え、課題選択シートやメンタリングシートの開発、リバースメンタリング等、より効果的に進める方法を自校の現状を踏まえて工夫している点も参考となります。

■事例９：人材育成

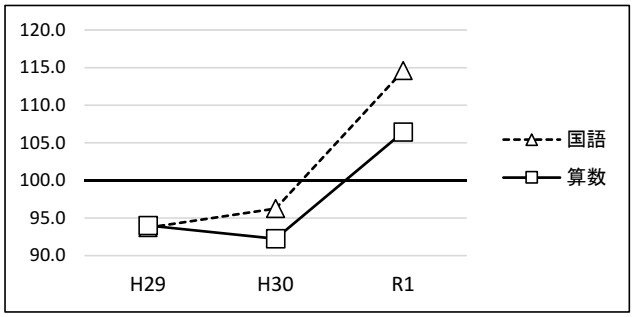
ミドルリーダー人材育成とＯＪＴを基軸とする学力向上戦略ＰＤＣＡの徹底

Ｉ市立Ｉ小学校（福岡地区）

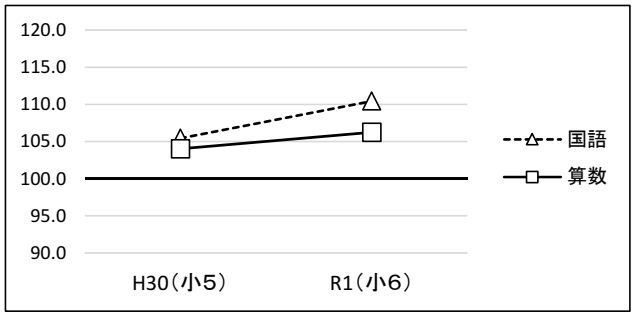
○学校の特徴等

全校児童 608 名、24 学級（特別支援学級を含む）、教職員 37 名の学校である。学級間差の解消という課題解決のために、ミドルリーダー（ＭＬ）の人材育成と若年教員のＯＪＴを基軸に取り組んでいる。

○経年変化（H29, H30 はＡ・Ｂ問題の平均）



○同一集団の推移　※県を 100 としたときの標準化得点



１　成果が見られた主な取組の概要

教員の力量差に起因する学力の学級間差を解消するために、ミドルリーダー（ＭＬ）の人材育成と若年教員のＯＪＴを機能させるためのシステムを整え、学年単位での目標管理に取り組んでいる。

①　ＭＬ人材育成とＯＪＴを目的とした学年チームづくりと目標管理

全学年を 30 代の学年主任・経験６年以下の若年教員・ベテランのコンシリエリ（相談・調整役）の３名で構成したチームをつくり、相互にメンタリング機能を働かせる中で、主任を中心に学年学力向上プランや若年教員育成ロードマップを作成し、計画的な指導力向上に取り組んでいる。

②　若年教員育成ロードマップ及び毎学期評価に基づく評価・改善

学年の学力向上プランや若年教員育成ロードマップについては、学力向上コーディネーターの参画による毎月の学年主任研修会や毎学期評価で結果を共有し、改善策を協議している。

２　取組のポイント

①　数値による根拠を明確にした評価活動

各種学力調査（国・県・市）に加えて、学校独自の計算・漢字検定、算数科学期まとめテスト、Ｉ小スタイルによる学び方の定着度（めあての自力設定率・文字数目標を定めた「まとめ」の自力表現率）等を根拠とした評価を取り入れている。

②　教職員業績評価とリンクしたＰＤＣＡサイクル

学力向上のための具体的方策だけでなく、学年チームを前提とする協働や組織貢献を自己評価の目標として設定させ、教職員相互の関与を強く意識させている。

３　取組の効果

ＭＬは学年の学力向上に対して責任を自覚し、学年学力向上プランの企画・提案に取り組むようになった。また、チームをつくったことにより、若年教員は、学年の学力向上への貢献意識をもって授業準備等に取り組むようになった。このことが、教員の個々の授業力量を高め、結果として、学力低位層の児童の減少につながったと考える。

本事例は、経験年数の差や個人の力量に依存することなく、学年チームとして、また、組織として学力向上に向けた取組を進めている好事例です。また、学年チームを中心としながらも、「ロードマップ」や「業績評価」と関連させたマネジメントが行われている点は、学校運営の視点からも参考となる事例です。

■事例１０：人材育成

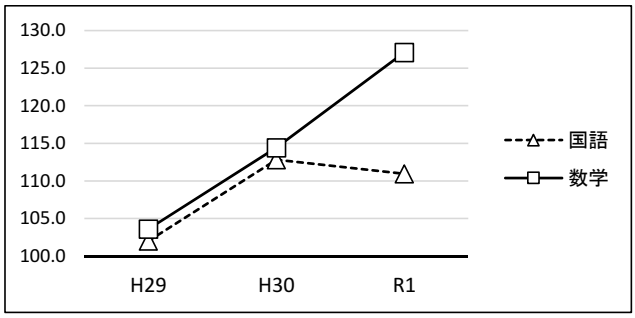
指導技術の継承を目指す学年学級バリアフリーによる人材育成

Ｊ市立Ｊ中学校（北筑後地区）

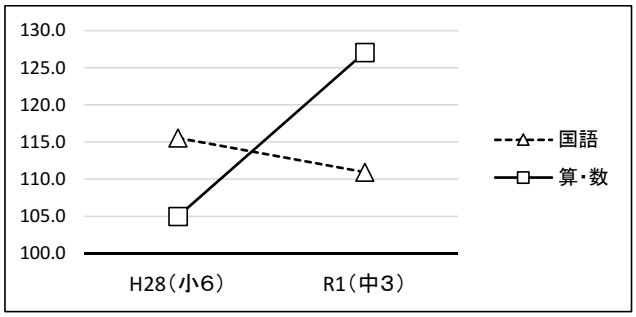
○学校の特徴等

全校生徒数 58 名、５学級（特別支援学級含む）、教職員 17 名の学校である。中学校における経営課題である学年セクト主義や学級担任の孤立化を未然に防ぎ、学力向上の取組を検証するために「学年学級バリアフリー」を行っている。

○経年変化（H29,H30 はＡ・Ｂ問題の平均）



○同一集団の推移



１ 成果が見られた主な取組の概要

「学年学級バリアフリー」とは、学級担任を定期的に入れ替え、生徒の現状を複数の視点で客観的に把握し、組織的に課題を共有・解決していくための取組である。

① 学年学級バリアフリーのミーティング

毎週末の 15 分間の職員朝礼の時間に、学年や学級の壁を取り除いたミーティングを行い、情報の共有化・行動の組織化を図っている。

② バリアフリー協議シートを活用した検証改善

課題解決の方策を明確にし、取組の効果の検証を行うために、事前に学年会でバリアフリー協議シートを作成し、４週間の実践を評価して成果と課題を明らかにする。週末に全教職員で当該学年の取組を協議し、複数で効果の検証と改善策の提案を行う。

③ 学年学級シャッフルによる朝の会

毎月第４週目の週末には、学級担任（学年職員を含む）のローテーションを行い、他学年の教職員が本来の学級担任に代わって朝の会を行う。その際、チェックシートを活用して生徒の様子や学習環境の状態を他学年の視点から客観的に評価する。

２ 取組のポイント

○ ＰＤＣＡの可視化と代案を準備したミーティング

客観的に効果の検証を行うために、バリアフリー協議シートでＰＤＣＡサイクルにおける取組の内容・方法・評価等を明確化している。また、教職員の参画意識を高めるとともに、経験年数等の違う教職員に対応できるように、ミーティングにおける質疑は代案を準備した提案型とし、取組の見通し（「誰が」、「何を」、「いつまでに」等）が持てるようにしている。

３ 取組の効果

学力向上の促進要因と阻害要因を学習指導、道徳・進路指導、生徒指導の視点から多面的・多角的に分析・考察して成果と課題を明らかにすることにより、全体指導と個別指導（特に下位層）を連動させた効果的な取組を持続させることができた。

本事例は、近年、小規模化や若年化する学校の課題を学校総体で改善していく視点を示唆する好事例と言えます。また、当該学年のみの教育活動に陥りがちな中学校において、本取組を通した定期的な検証改善のためのバリアフリー協議シートの作成・活用等は、多くの学校において参考となります。

■事例１１：その他〔英語教育〕

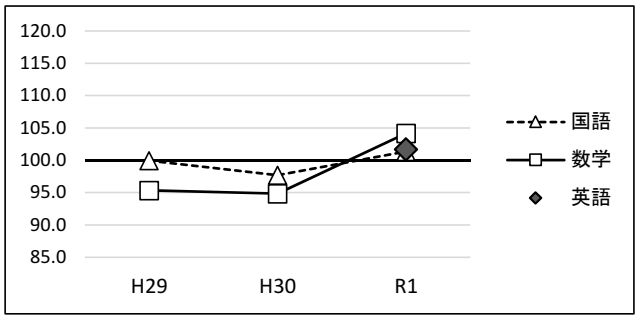
音声活動を中心とした外国語科の授業改善

Ｋ町立Ｋ中学校（北九州地区）

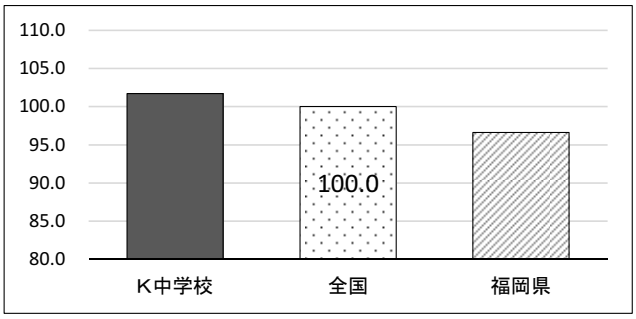
○学校の特徴等

全校生徒 524 名、17 学級（特別支援学級含む）、教職員 36 名の学校である。K町では、町を挙げて英語教育の充実に取り組んでおり、英語教育の授業改善や効率的な授業を行うためのＩＣＴ機器の設置など、K町独自の英語教育改革「K町英語教育改革イニシアティブ 2016」を策定し、英語で会話し、意思を伝えることができる生徒の育成を目指し、音声活動を中心とした授業改善を行っている。

○経年変化（H29,H30 はＡ・Ｂ問題の平均）



○英語標準化得点（話すことを除く）



１ 成果が見られた主な取組の概要

４技能のバランスのとれた英語力を養うために、音声活動とＩＣＴ機器の充実（電子黒板機能付プロジェクター・タブレット式パソコン等）を通して、英語科の授業改善を図っている。

○ 積極的な音声活動の実施

デジタル教科書を導入し、これまで授業開始時のみに行っていた音声活動を学習過程の中でも活用している。さらに、ネイティブ発音で収録されたデジタル教科書を反復して聞かせることで、聞く力の向上を図った。また、聞くと同時に発声させることで、正しい発音や意味を理解して「話せる英語力」を養うことを目指した。さらに、電子黒板機能を活用して教材等をスクリーンに映し出すことで、生徒が英語での授業内容を理解しやすくなるよう授業展開を工夫した。

２ 取組のポイント

音声活動を中心として、以下の内容も取り入れながら４技能の育成に取り組んでいる。

① 帯活動の充実

英語の歌、単元の新出単語や重要連語の練習、既習事項を活用したペアでの英会話、テーマに沿った短い条件英作文の活動をしている。

② 自学ノートの活用

単語練習、音読筆写、英作文、日記、英語のニュース記事や、海外の有名人の発言等、生徒自身が取り組む内容を考え、実態に合った課題に取り組んでいる。

③ 英語科部会の充実

定期的に英語科部会を開催し、全英語科教員（５人）が自作した副教材を共有してティームティーチングを実施することで、授業の様々な活動をルーティーン化している。

３ 取組の効果

英語の歌を帯活動に取り入れることで、４技能を効果的に使った様々な活動にテンポよく取り組むことができている。また、英会話の場面や英作文のテーマを生徒の実生活に即したものにし、段階的に難易度を高くしている。それにより、活動も単調にならず、ペア活動においても相手の表現に興味関心を持って取り組めている。自学ノートには、単語の反復練習だけでなく、学習した表現を基に自己表現に取り組む生徒が見られるようになった。

本事例は、効果的にICTを活用し、「目的をもって英語を聞くことを日常的に繰り返す」「ある程度まとまりのある英語を年間を通して継続して聞かせる」などの指導を通して、生徒の英語力（4技能）を向上させている好事例と言えます。

■事例１２：その他〔英語教育〕

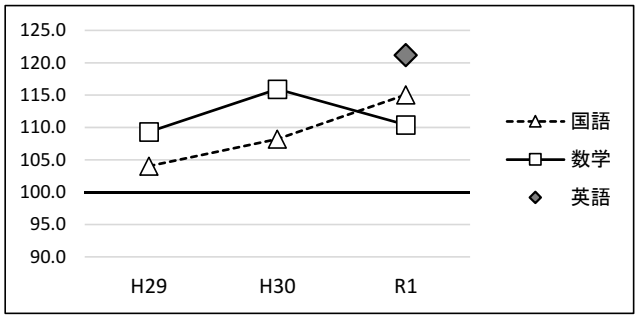
安心したコミュニケーションができるスピーキング活動

Ｌ市立Ｌ中学校：南筑後地区

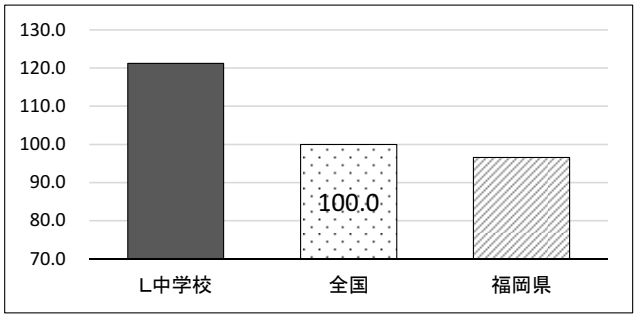
○学校の特徴等

全校生徒数 142 名、８学級（特別支援学級を含む）、教員数 20 名の学校である。目的意識、相手意識を持ち、情報や考えを伝え合う生徒の育成を目指し、日々の英語の授業改善に取り組んでいる。

○経年変化（H29,H30 はＡ・Ｂ問題の平均）



○英語標準化得点（話すことを除く）



１ 成果が見られた主な取組の概要

自分の思いや考え等を即興で伝え合うことができるようにするために、「目的や相手意識」「伝えたい内容」という視点をもたせ、コミュニケーションを基にした対話活動を取り入れている。

① ペア活動の充実

安心してできるコミュニケーションを継続的に活性化するために、学期ごとや単元ごとにペアを入れ替えながら意図的、計画的にペア活動を仕組んだ。それにより、学級の中で人間関係が良好になり、安心して相手の状況に合わせたコミュニケーションを図ることができる。

② 多読活動

全ての生徒に適応できるレベルや多様なジャンルの多読用図書を用意し、生徒自身が自分の英語力に適した、かつ興味のある本を選択するようにしている。また、読んだ本に関するスピーキングを帯活動の中で仕組み、「伝えたい内容」という意識を持ちながら読ませたり、スピーキングの発表内容を書かせたりすることで、４技能の向上を図っている。

２ 取組のポイント

○ チェック機能と対話機能を明確にしたペア活動

オールイングリッシュでの授業展開を行うペア活動では、「何のためにペア活動をするのか」という目的意識を大切にしている。チェック機能としてのペア活動では、「相手が理解しているか」「自分の考えが確かであるか」といったことを確認させる。対話機能としてのペア活動では、対話の目的や場面を意識させ、話す内容の視点を明確にして行わせる。そうすることで、生徒は安心してオールイングリッシュでの授業に参加することができる。

３ 取組の効果

生徒質問紙の「聞いたり、読んだりしたことについて、生徒同士で英語で問答したり意見を述べ合ったりする活動が行われていたか」では、肯定的な回答をした生徒は 100%であった。

本事例は、日々の授業において、常に目的意識、相手意識を持たせ、情報や考えを即興で伝え合う活動を行っている好事例です。また、英語による多読活動を行うことで、まとまりのある文章を読んで大切な部分を読み取ることが習慣化されている、まさに今求められている英語科学習指導のモデル的実践と言えます。

■事例１３：その他〔予習・家庭学習等〕

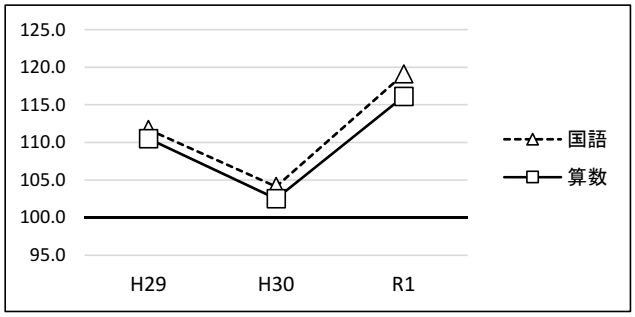
予習・復習等、学習の基盤づくりを生かした授業改善

Ｍ市立Ｍ小学校（北筑後地区）

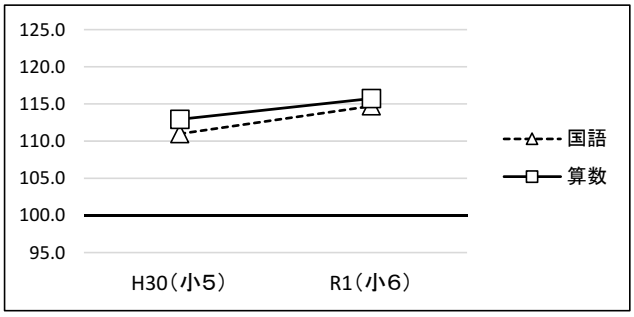
○学校の特徴等

全校児童数 978 名、37 学級（特別支援学級含む）、教職員 80 名の学校である。コミュニティスクールとして６年目となり、学校・家庭等と連携した学力向上・学習習慣の育成を図っている。

○経年変化（H29,H30 はＡ・Ｂ問題の平均）



○同一集団の推移　※県を 100 としたときの標準化得点



１　成果が見られた主な取組の概要

児童の主体的な学力向上の取組を進めるために、学力向上推進部を中心に、継続的に改善を加え、組織的で持続する家庭学習（主に予習）を実施し、学習の基盤づくりを図っている。

①　日常の授業改善につながる予習学習

予習学習は、次時で取り扱う学習問題等を「わかること」と「疑問」の視点で読み、授業の構えをつくることを目的としている。また、家庭学習の時間は「学年×10分＋10分」とし、その内訳は、復習と予習（短時間でできる予習）としている。特に、予習の内容は、国語、算数の２教科において学力向上推進部で作成している。

②　予習学習を生かした導入の工夫

算数の導入において、家庭での予習を生かし、「Ａ：問題の解き方を説明できる」「Ｂ：解き方はわかるが説明できない」「Ｃ：解き方がわからない」等の確認から入ることで、導入時での個々の課題や目指す姿を明確に持たせることができ、学習への主体性を高めることにつながっている。

２　取組のポイント

①　共通実践のための校内研修

校内研修の成果から、予習と復習を問題解決過程に取り込んだ学習の進め方を「授業づくりのリーフレット」にまとめ、４月に全職員に配布し、共通実践できるようにしている。

②　共通理解のための啓発活動

年度初めに、中学校区において全ての保護者に、「９年間の家庭学習の手引」を配布し、家庭学習の目的や共通して取り組む予習や復習の仕方について啓発している。

３　取組の効果

問題解決過程で予習を取り入れる目的や進め方を教員と児童、家庭で共通理解し、日常的に実践したことで児童の課題意識（問題を解決するだけでなく、解決方法を説明する等）が明確になり、学習への主体性が高まるとともに、授業改善に関する教員の意識が高まった。

本事例は、家庭学習と授業をつないで学力向上に取り組んでいる好事例です。家庭学習の内容を学力推進部で作成することで、家庭学習の質の保障や学級担任の負担の軽減につながっています。また、保護者の理解を促すことにも留意して取り組んでいることも効果を上げる要因だと考えられます。

■事例１４：その他〔家庭学習等〕

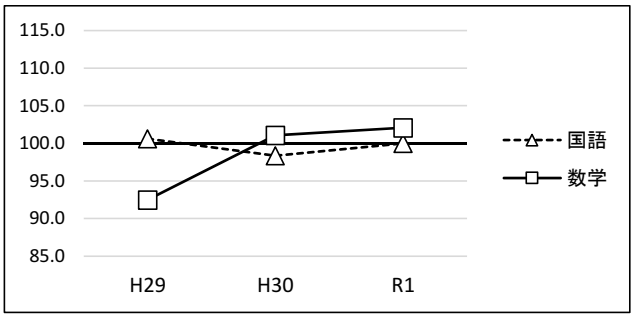
授業と授業をつなぐ「学びのサイクル（授業→自主学習ノート→3分前学習→授業）」の確立

Ｎ市立Ｎ中学校（筑豊地区）

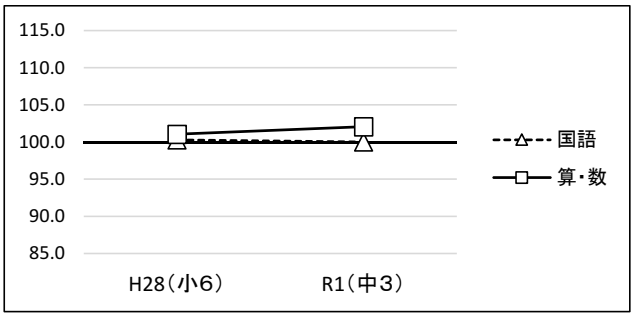
○学校の特徴等

全校生徒 259 名、９学級(特別支援学級を含む)、教職員 22 名の学校である。生徒が未来に展望を持ち､意欲的に学習に取り組めるよう､授業と家庭学習を効果的に結びつける「学びのサイクル」の取組を行っている。

○経年変化（H29,H30 はＡ・Ｂ問題の平均）



○同一集団の推移



１ 成果が見られた主な取組の概要

「学びのサイクル」とは、本時から次時までの間に「自主学習ノート」「３分前学習」を位置付けた本校独自の学習サイクルである。この取組を全教科、全教員で実施している。

① 自主学習ノート

生徒は、１日の学習内容を、授業のめあてをもとに｢何を学び｣｢何ができるようになったのか｣(肯定的なメタ認知)の視点で振り返り、自主学習ノートの見開き１ページにまとめる（６時間分)。教員は、ノート点検の際に肯定的なコメントを添え、モデルとなるものを選定し、掲示するなどして、全員のレベルアップにつなげている。また、ノート点検を、学年全教員で取り組むことで個々の学習理解度を把握し、個別の支援や情報共有に生かす。

② 授業３分前学習

「３分前学習」とは、本校の特色である３分前行動によって生みだされた授業前の３分間で、前時の振り返りを行う学習活動である。その際、小テストを実施したり ICT を活用した振り返りを行ったりする等、教科に応じて本時につながる既習事項を整理し、本時の動機付けになるように工夫している。

２ 取組のポイント

○ 取組の価値の共有・実感

「学びのサイクル」の連続性のよさを、教員とともに生徒が理解しておくことが重要である。例えば、数学科では、授業３分前学習で前時内容の小テストを実施している。生徒は、前時の学習内容を自主学習ノートにまとめておくことにより、次の小テストへの意欲を高めている。

３ 取組の効果

学びのサイクルの確立により、学校での授業と家庭学習が効果的に結びつき、生徒の学習意欲が向上している。また、教員は、生徒の学力向上・維持が、積極的な生徒指導の実現、ひいては進路保障につながることを実感してきており、全員で生徒の学力向上にむけて取り組む学校文化が根付いている。さらに、この取組によって、生徒と教員相互の信頼関係がとても深まり、学習に苦手意識を持つ生徒も、安心して学習に取り組むことができている。

本事例は、授業と家庭学習とをつなぐことにより学びの連続性を生み出しています。知識及び技能の習得や思考力・判断力・表現力の育成に向けた粘り強い取組を行おうとしたり、自らの学習を調整しようとしたりする等、今求められる資質・能力の１つである｢主体的に学習に取り組む態度｣を養うことが期待される好事例と言えます。

■事例１５：その他〔補充的な学習〕

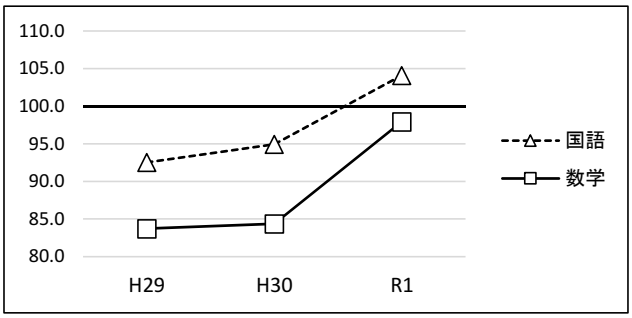
学力テストの誤答から始まる「再チャレ学習」の取組

○市立○中学校（筑豊地区）

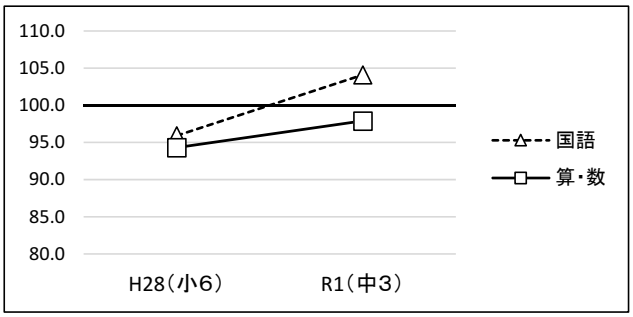
○学校の特徴等

全生徒数 263 名、11 学級（特別支援学級含む）、教職員 23 名の学校である。学力低位層の減少に向け、「基礎・基本の定着を図る 10 分間の徹底反復学習（チャレンジ・タイム）」等の取組に加え、誤答問題に再度向き合う「再チャレ学習」に取り組んでいる。

○経年変化（H29,H30 はＡ・Ｂ問題の平均）



○同一集団の推移



１ 成果が見られた主な取組の概要

「再チャレ学習」とは、テストの誤答問題に対して、再度チャレンジする学習である。テストの問題を解きっ放しにさせるのではなく、誤答問題にしぼって再度チャレンジさせることで、学力の定着を図る取組である。

① 再チャレ学び・教え合い

テスト返却時には、生徒たちが誤答問題に対して、「教え合い」「学び合い」の中で班の仲間たちと力を合わせて再度チャレンジし、誤答問題が解けるようになるための場を設定する。

② 再チャレウィーク

定期考査終了後に１週間の再チャレウィークを設定し、次の二つの取組を実施する。

- 再チャレノート：定期考査での誤答問題とその解き方等を自学ノートにまとめていく。
- 再チャレ問題：チャレンジ・タイム（学校裁量）の時間に定期考査問題に再度チャレンジする。この問題は、定期考査において全体的に誤答が多かった問題から出題される。

２ 取組のポイント

○ 「再チャレ学習」の価値の共有

学年ごとに作られた「再チャレ学習の解説用資料」を基に、年度のはじめに、各学級担任が「再チャレ学習」の意義や方法等について説明する。この説明の中で、「再チャレ学習」が単にテストの点数獲得だけはなく、「失敗力」（グローバル企業が求める人材の資質の一つである「失敗から学び、活かす力」）につながるものであること等の価値も伝えていく。

３ 取組の効果

当該学年は、全国学力・学習状況調査の結果に加え、その他の学力検査等でも、５教科（国語、数学以外の社会、理科、英語）において県平均以上の結果を得る等の効果が認められる。

本事例は、定期考査等の趣旨（教員の指導改善につながるもの、生徒の学習改善につながるもの）を踏まえて、組織的に基礎学力の定着を図っている好事例です。教員は、生徒がつまずきやすい箇所を想定できるようになり、それを踏まえた授業改善にもつながることが期待されます。

■事例１６：その他〔非認知的能力の育成〕

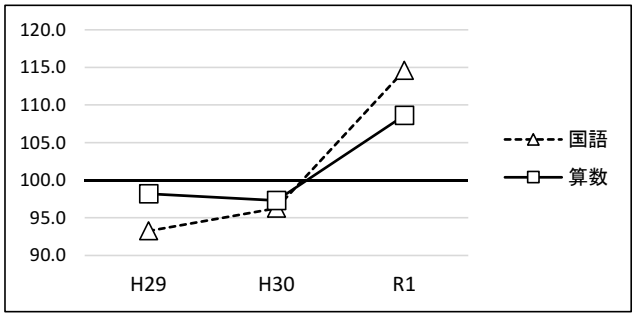
学ぶ意欲や向上心の高まりを目指す非認知的能力の育成

Ｐ町立Ｐ小学校：南筑後地区

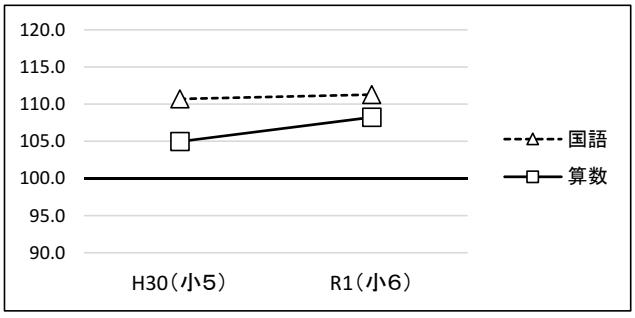
○学校の特徴等

全校児童 702 名、25 学級（特別支援学級を含む）、教職員数 38 名の学校である。平成 29 年度から福岡県教育委員会の「運動」を通した鍛ほめプロジェクトの研究協力校として、子どもが自律的に成長するための原動力となる「非認知的能力（目標を持ち粘り強く取り組む力）」の育成をめざし、教育活動の充実を図っている。

○経年変化（H29,H30 はＡ・Ｂ問題の平均）



○同一集団の推移　※県を 100 としたときの標準化得点



１　成果が見られた主な取組の概要

「鍛ほめ福岡メソッド」のコンセプトに則り、「目標設定活動」「挑む活動」「振り返る活動」の３ステップで運動プログラムを構成し、体力とともに学ぶ意欲や向上心の高まりを目指している。

①　「きたほめノート」を活用した目標設定活動

児童の運動への意欲を高めるために、学識経験者の指導のもと「試しの運動」を取り入れ、運動の心地よさや楽しさを実感させた上で、「きたほめノート」に個別の目標を設定させている。

②　運動の習慣化を図る「挑む活動」と「振り返る活動」

学識経験者によって構築された運動プログラム（スロージョギング）を、週３回以上１０分間実施している。毎回の活動後には、一人一人に心拍数を計測させ、ヘルスプロモーションの力（健康に関する自己指導能力）の育成を図るとともに、「きたほめノート」に達成シールを貼らせたり、感想を書かせたりするなど、活動が連続・発展するよう工夫している。

２　取組のポイント

○　「目標設定」「挑む」「振り返る」活動の繰り返しによる学ぶ意欲の向上

「目標設定活動」から「挑む活動」「振り返る活動」までを１サイクルとし、成功体験を生かして新たな目標を設定させ、チャレンジさせていく。また、教員も共に活動に参加する中で、励ましたり、ほめたりしながら、子どもに「やればできる自分」への手応えを実感させる。

３　取組の効果

自ら目標を設定し、目標達成のために努力を積み重ねることが、自律的成長の原動力となっている。本プロジェクトにより、子どもの「目標を持ち粘り強く取り組む力」が大きく向上した。そのことが学習活動にも波及し、粘り強く書く態度につながっている。また、全国学力・学習状況調査における記述問題の「無解答率」が減少している（H29 から国語は 5.6p、算数は 7.0p 減少）。

本事例では、「鍛ほめメソッド」を基にした運動プログラムを通して、目標を立てたり振り返ったりする価値を児童が実感しながら自己調整力を身に付けています。これは、学ぶ意欲や粘り強く取り組む態度、向上心の高まりを目指す非認知的能力の育成に向けた取組の好事例と言えます。

Ⅴ　児童生徒質問紙に関する調査結果と分析

◇　児童生徒質問紙調査の目的

小学校第６学年の児童及び中学校第３学年の生徒を対象に、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面に関する質問調査を行い、児童生徒の学習意欲や学習習慣の改善・充実のための教育活動や教育施策の改善を図る。

◇　本報告書において分析の対象とした質問項目

	視点	番号	カテゴリー	質問番号 小	質問番号 中	質問項目	頁番号
1	学力基盤づくり	(1)	基本的な生活習慣	1		朝食を毎日食べていますか。	57
		(2)	自己有用感	5		自分には、よいところがあると思いますか。	58
		(3)	将来に関する意識	8		将来の夢や目標を持っていますか。	59
		(4)	規範意識	13		学校のきまり（規則）を守っていますか。	60
				15		いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか。	61
		(5)	学習に対する関心・意欲・態度	37	40	国語の勉強は好きですか。	62
				46	49	算数／数学の勉強は好きですか。	63
2	授業づくり	(1)	各教科の内容	39	42	国語の授業の内容はよく分かりますか。	64
				48	51	算数／数学の授業の内容はよく分かりますか。	65
		(2)	課題解決に向けた取組	35	37	授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。	66
		(3)	自分の考えを深めたり広げたりすること	29	32	学級の友達と〔生徒〕の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。	67
3	家庭・関係機関との連携	(1)	家庭学習	17		家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか。	68
				18		学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾や家庭教師も含む）。	69
		(2)	読書時間	19		学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、読書をしますか（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）。	70
		(3)	地域・社会とのかかわり	24		地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか。	71

◇　分析の方法

Ａ　回答状況の経年比較

同一の質問項目に対する本県全体の児童生徒の回答状況を、当該質問が初めて調査項目となった年度と、平成 29、30、令和元年度で比較する。

Ｂ　回答状況と教科の正答率のクロス分析

令和元年度における質問項目に対して「肯定的な回答」をしている方が、教科の平均正答率が高い傾向が見られる場合のみ、棒グラフで示す。

Ｃ　地区別の回答状況

令和元年度における同一の質問項目に対する各地区の児童生徒の回答状況を比較する。

◇　資料を読み取る際の留意点

質問紙調査に対する回答状況は、選択肢以外の回答や無回答を除外しているため、合計が 100％にならない場合がある。

１　学力基盤づくり

（１）　基本的な生活習慣

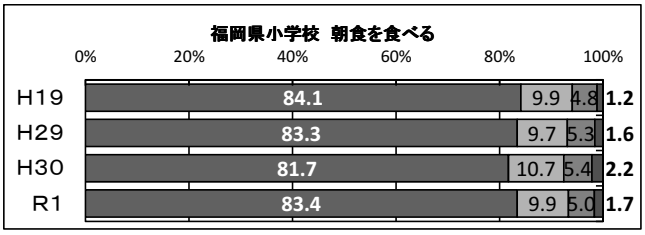
※　数字は、児童生徒質問紙中の質問番号

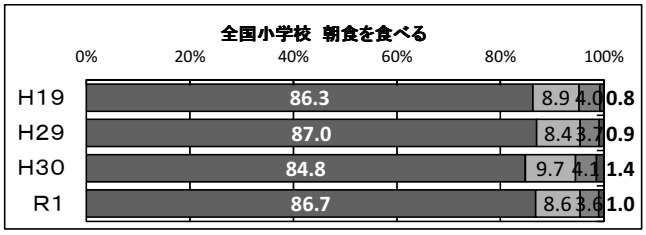
小１・中１	朝食を毎日食べていますか。

○　本年度の、食べていると回答している児童生徒の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに増加している。また、全く食べていないと回答している児童生徒の割合は、小学校、中学校ともに減少している。
○　本年度の、食べていると回答している児童生徒の割合は、全国より、小学校は 3.3 ポイント、中学校は 2.0 ポイント下回っている。
○　本年度の、食べていると回答している児童生徒の正答率は、全教科において高い傾向にある。
○　本年度の、食べていると回答している児童生徒の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 5.7 ポイント、中学校 5.7 ポイントである。

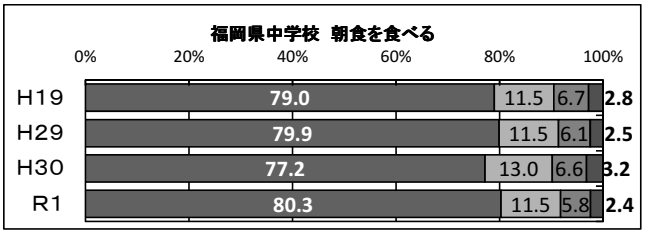
■ 食べている　■ どちらかといえば　■ あまり　■ 全く食べていない

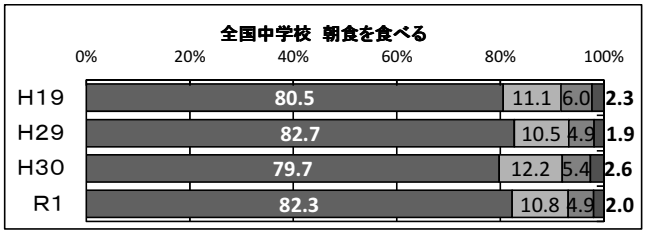
■　小学校回答状況



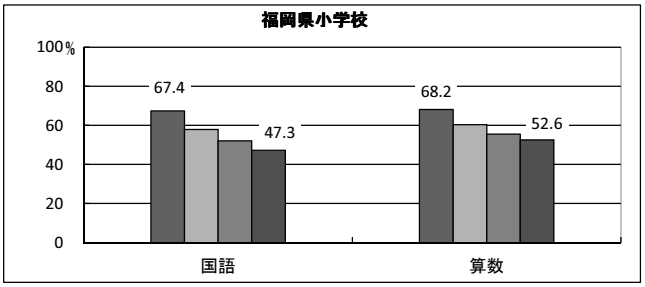


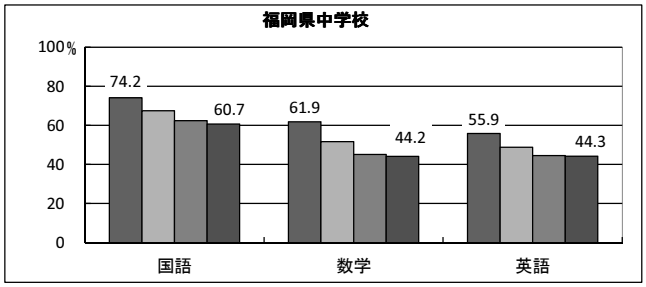
■　中学校回答状況



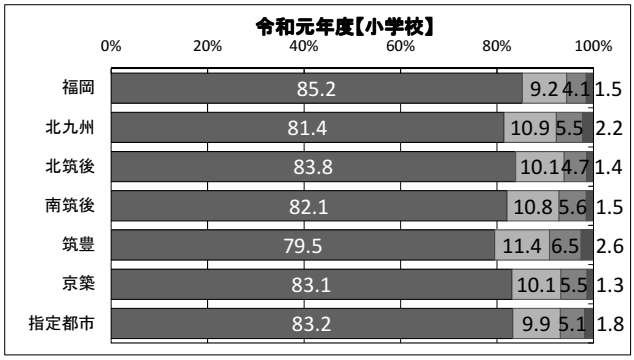


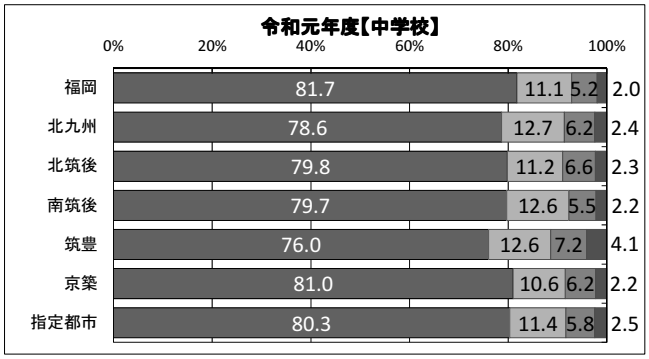
■　回答状況と教科の正答率のクロス分析





■　地区別回答状況





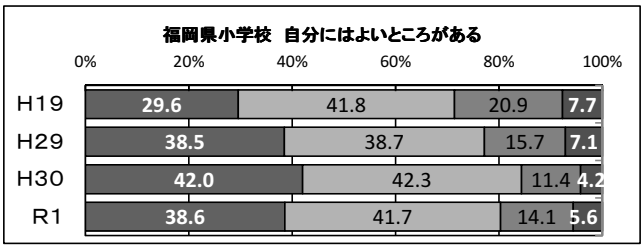
（２） 自己有用感

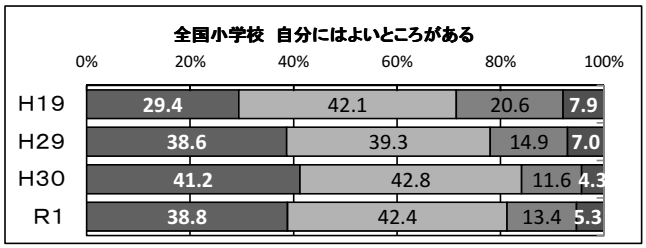
小 5･中 5	自分には、よいところがあると思いますか。

○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに減少している。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、全国より、小学校は 0.2 ポイント、中学校は 1.6 ポイント下回っている。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 4.3 ポイント、中学校 9.3 ポイントである。

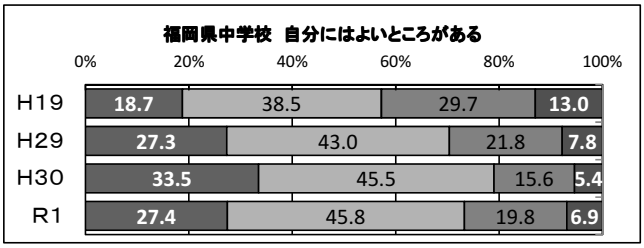
■ 当てはまる　■ どちらかといえば　■ あまり　■ 当てはまらない

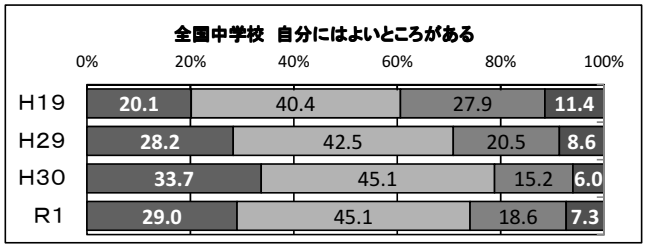
■　小学校回答状況



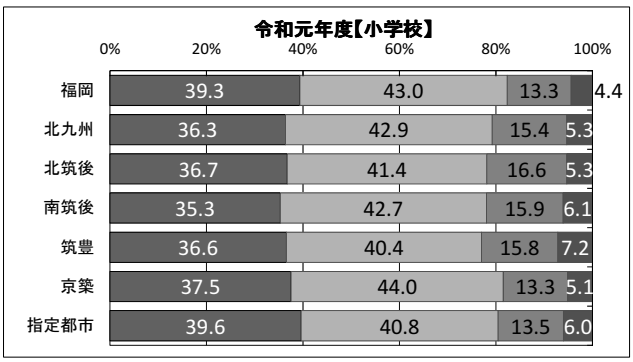


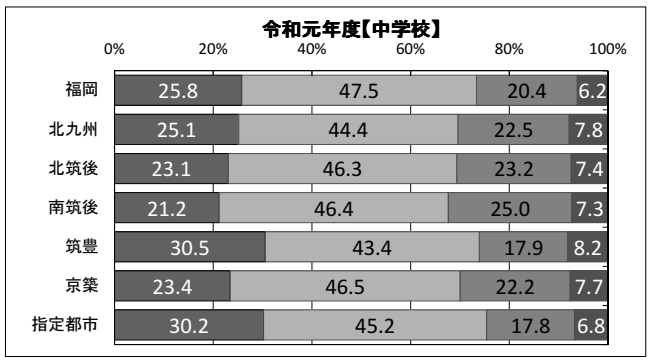
■　中学校回答状況





■　地区別回答状況





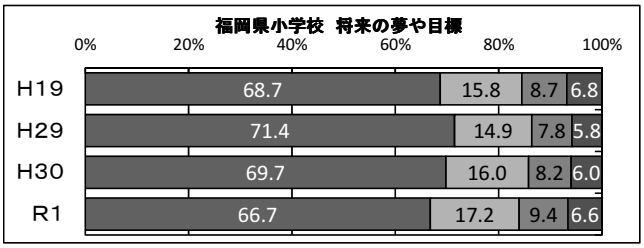
（３） 将来に関する意識

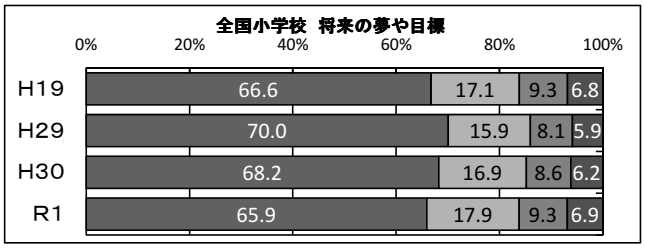
小 8･中 8	将来の夢や目標を持っていますか。

○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに減少している。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、全国より、小学校は 0.8 ポイント、中学校は 1.8 ポイント上回っている。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 6.3 ポイント、中学校 8.9 ポイントである。

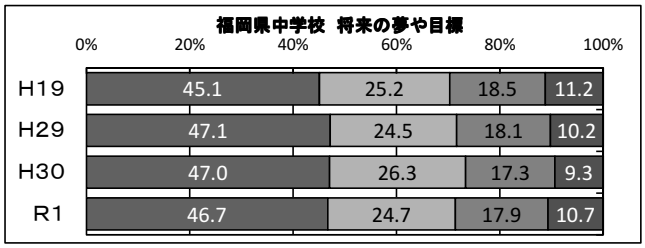
■ 当てはまる　■ どちらかといえば　■ あまり　■ 当てはまらない

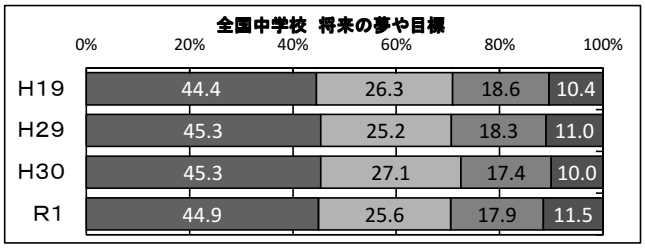
■　小学校回答状況



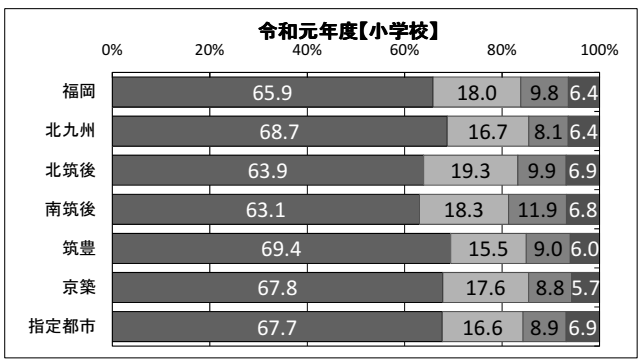


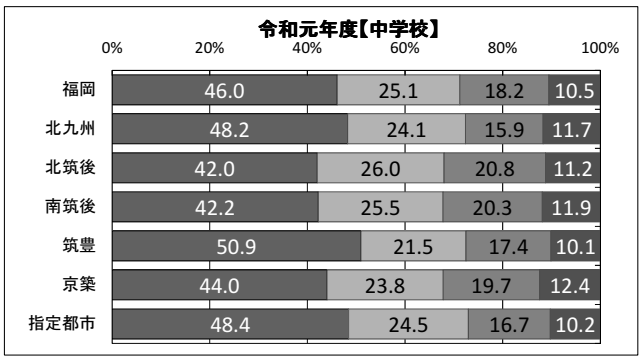
■　中学校回答状況





■　地区別回答状況





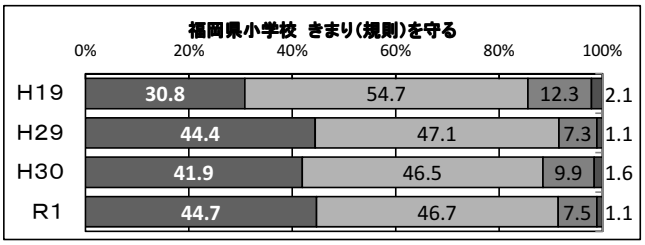
（４） 規範意識

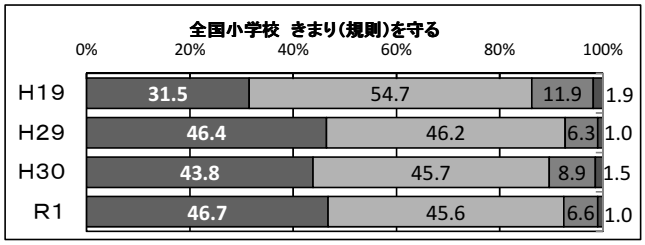
小 13･中 13	学校のきまり（規則）を守っていますか。

○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともには増加している。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、全国より、小学校は 2.0 ポイント、中学校は 0.3 ポイント下回っている。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の正答率は、全教科において高い傾向にある。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 10.0 ポイント、中学校 6.8 ポイントである。

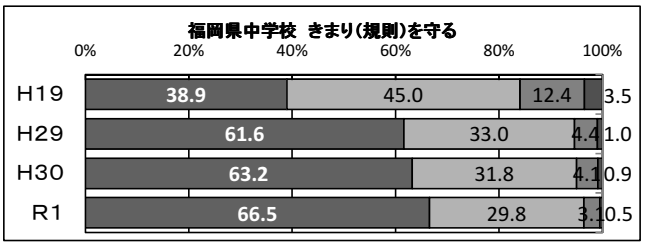
■ 当てはまる　■ どちらかといえば　■ あまり　■ 当てはまらない

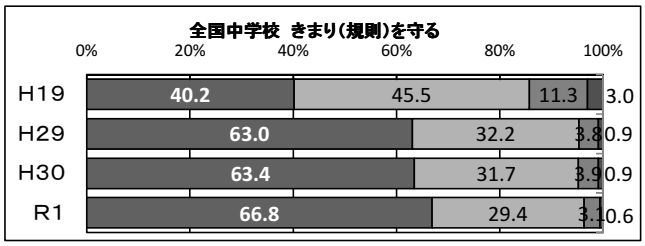
■　小学校回答状況



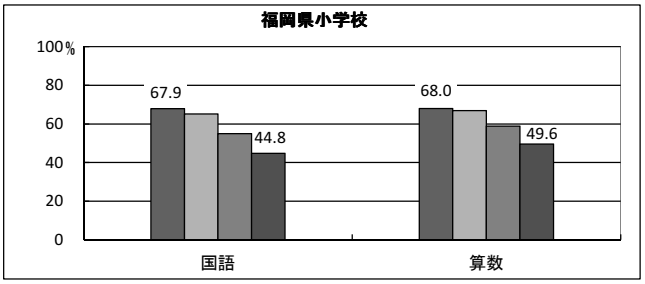


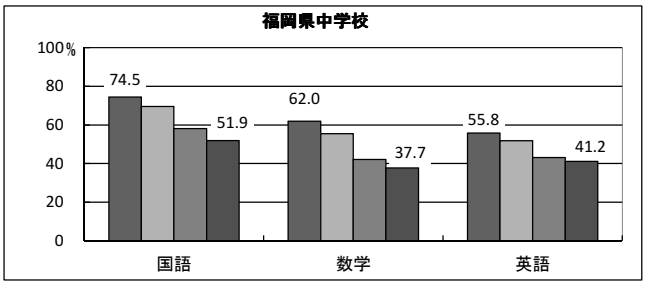
■　中学校回答状況



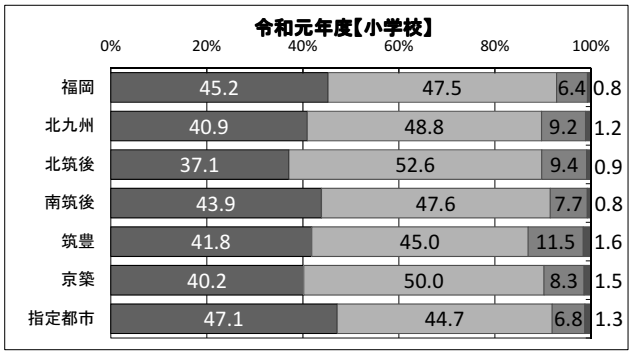


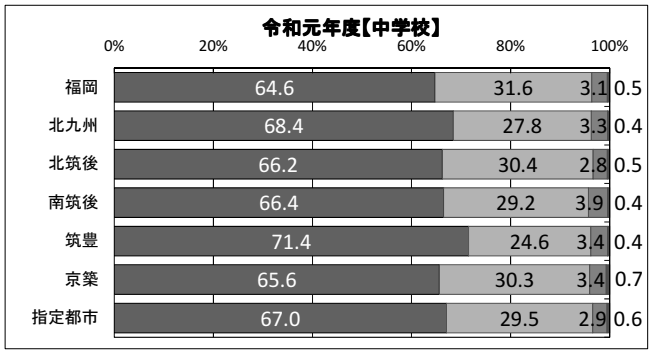
■　回答状況と教科の正答率のクロス分析





■　地区別回答状況



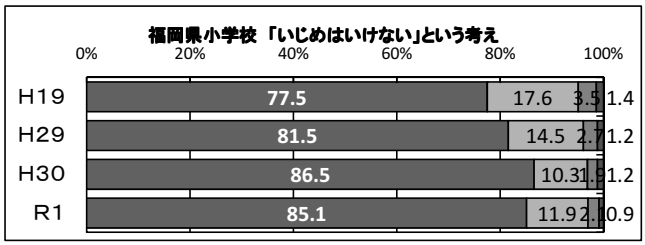


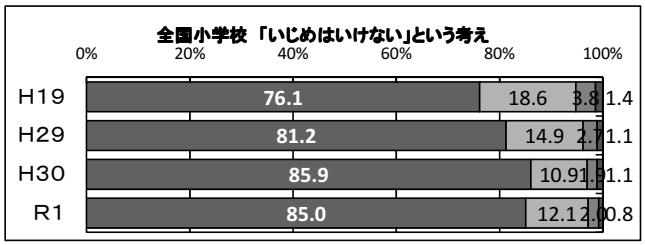
小 15・中 15	いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか。

○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに減少している。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、全国より、小学校は 0.1 ポイント、中学校は 2.6 ポイント上回っている。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 2.5 ポイント、中学校 4.0 ポイントである。

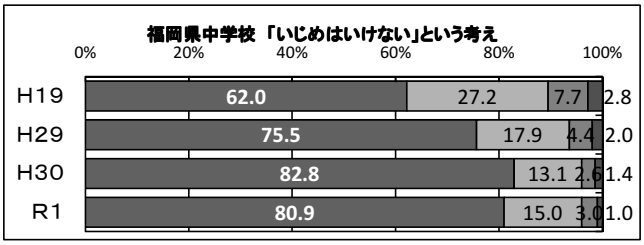
■ 当てはまる　■ どちらかといえば　■ あまり　■ 当てはまらない

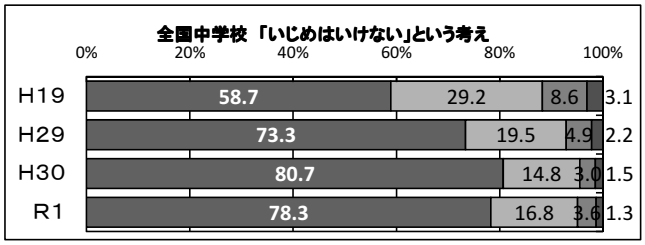
■　小学校回答状況



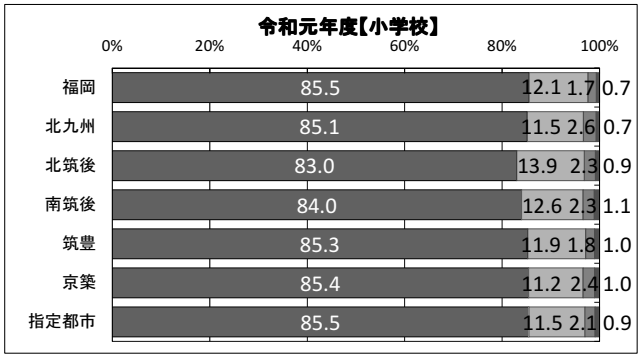


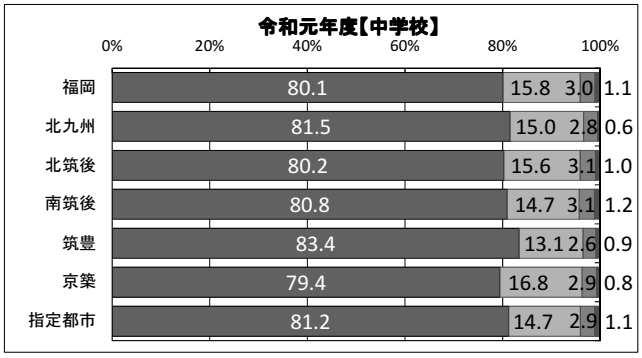
■　中学校回答状況





■　地区別回答状況





（５） 学習に対する関心・意欲・態度

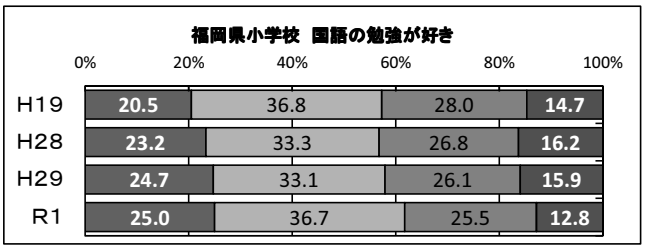
小37・中40	国語の勉強は好きですか。

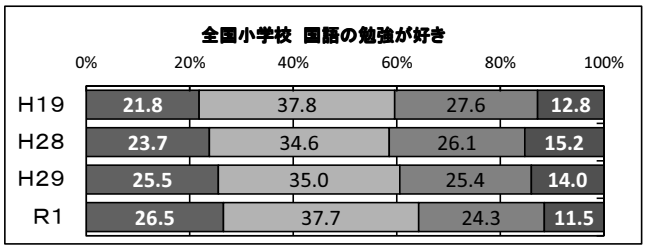
※ 平成３０年度は問われていない質問

○ 本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、平成 29 年度より、小学校は増加、中学校は減少している。
○ 本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、全国より、小学校は 1.5 ポイント下回り、中学校は 0.4 ポイント上回っている。
○ 本年度の、当てはまると回答している児童生徒の正答率は、全教科において高い傾向にある。
○ 本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 5.5 ポイント、中学校 4.6 ポイントである。

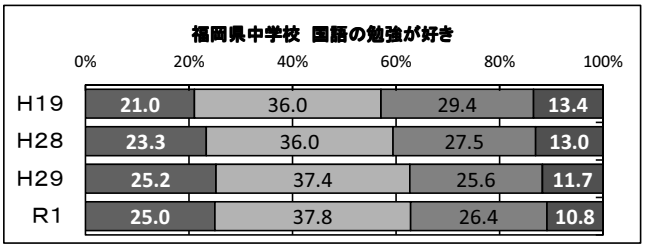
■ 当てはまる ■ どちらかといえば ■ あまり ■ 当てはまらない

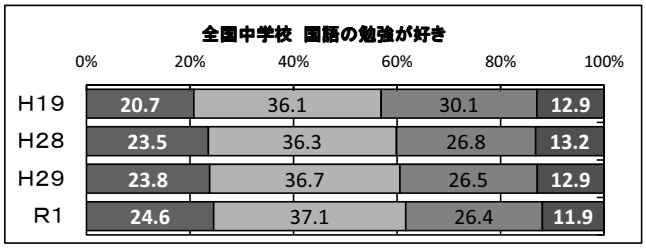
■ 小学校回答状況



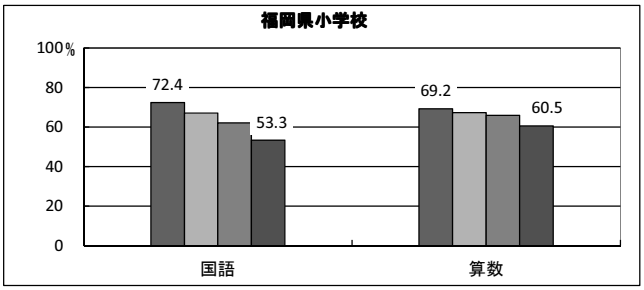


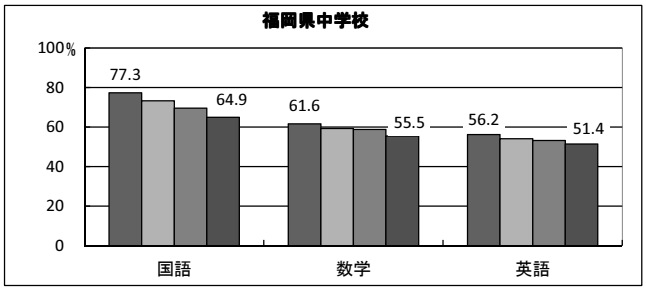
■ 中学校回答状況



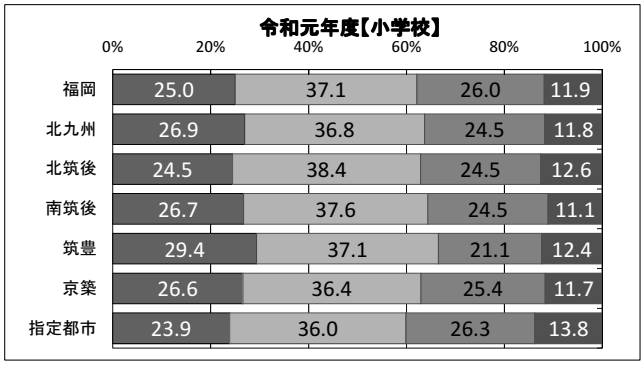


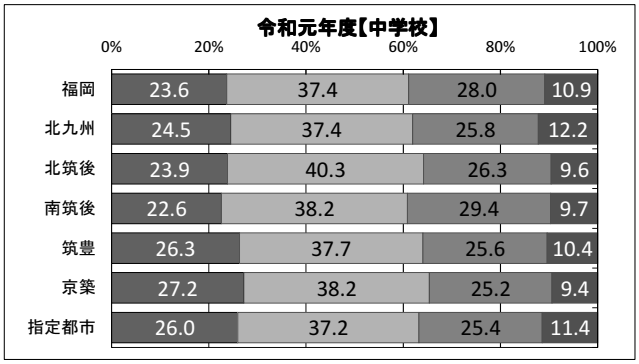
■ 回答状況と教科の正答率のクロス分析





■ 地区別回答状況



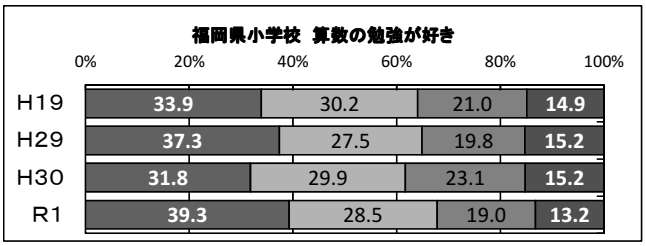


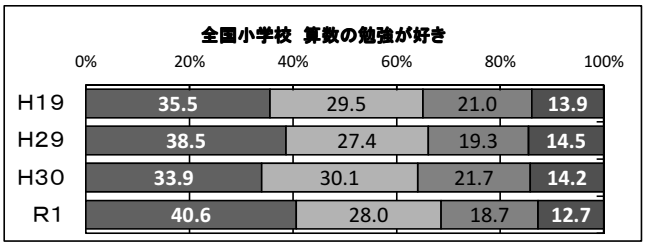
小 46・中 49	算数／数学の勉強は好きですか。

○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに増加している。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、全国より、小学校は 1.3 ポイント、中学校は 0.8 ポイント下回っている。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の正答率は、全教科において高い傾向にある。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 4.5 ポイント、中学校 3.6 ポイントである。

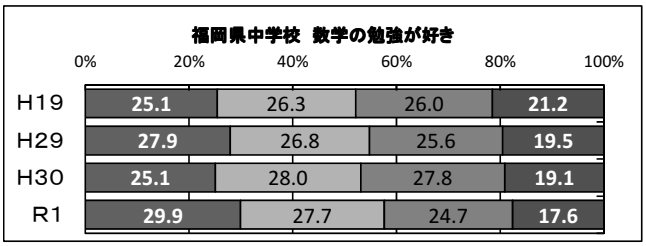
■ 当てはまる　■ どちらかといえば　■ あまり　■ 当てはまらない

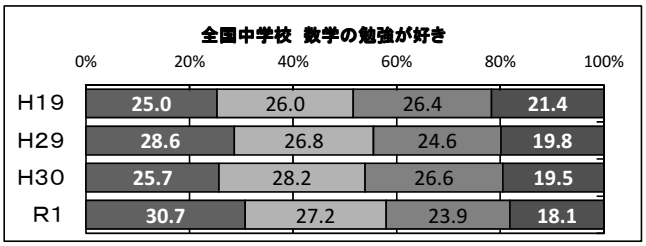
■　小学校回答状況



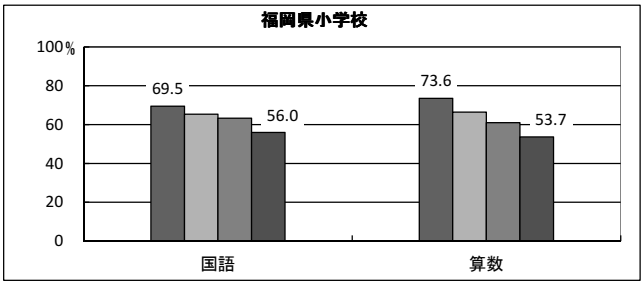


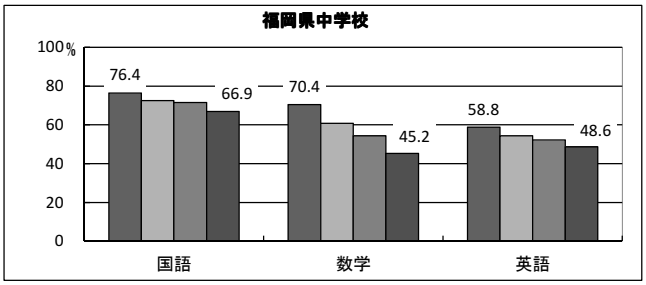
■　中学校回答状況



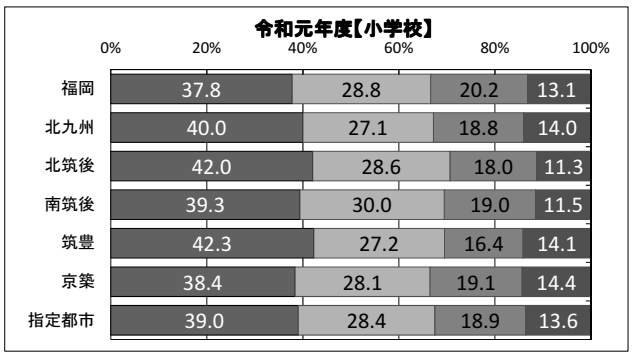


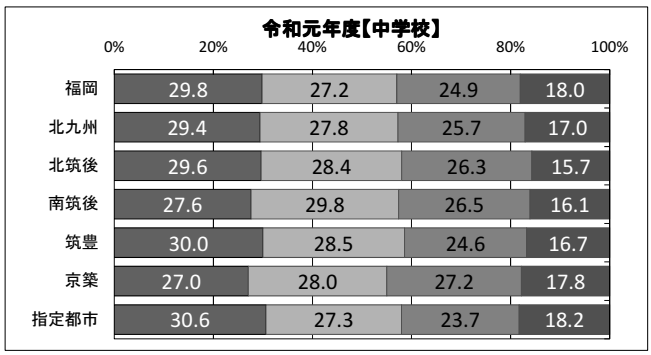
■　回答状況と教科の正答率のクロス分析





■　地区別回答状況





２　授業づくり

（１）　各教科の内容

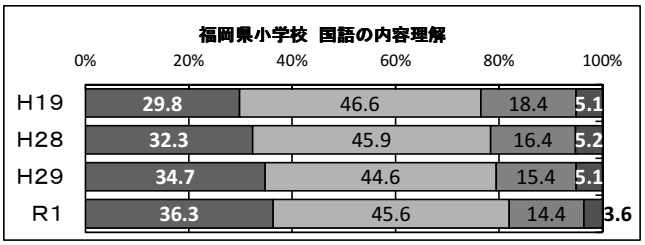
小 39・中 42	国語の授業の内容はよく分かりますか。

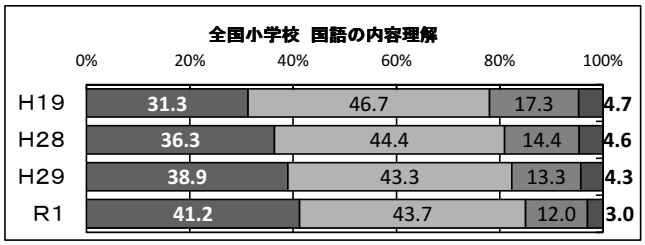
※　平成３０年度は問われていない質問

○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、平成 29 年度より、小学校、中学校ともに増加している。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、全国より、小学校は 4.9 ポイント、中学校は 2.6 ポイント下回っている。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の正答率は、全教科において高い傾向にある。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 3.7 ポイント、中学校 7.1 ポイントである。

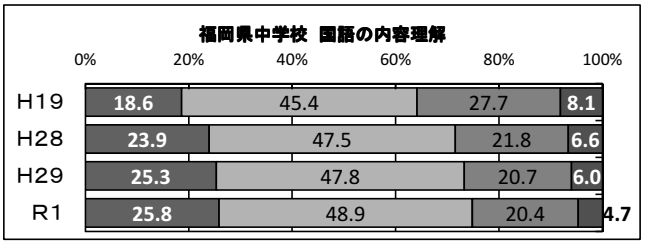
■ 当てはまる　■ どちらかといえば　■ あまり　■ 当てはまらない

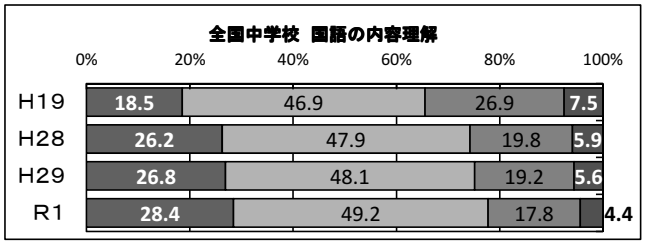
■　小学校回答状況



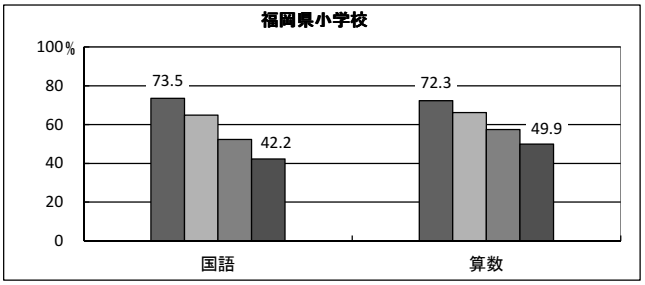


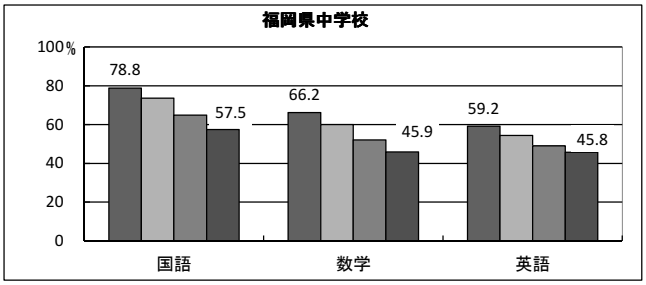
■　中学校回答状況



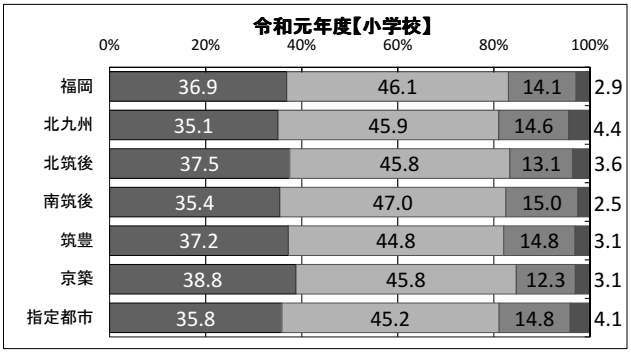


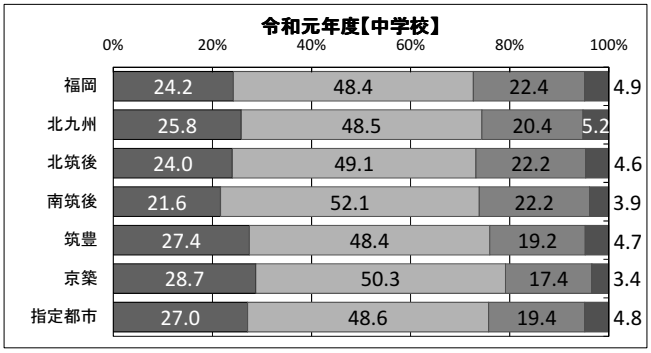
■　回答状況と教科の正答率のクロス分析





■　地区別回答状況



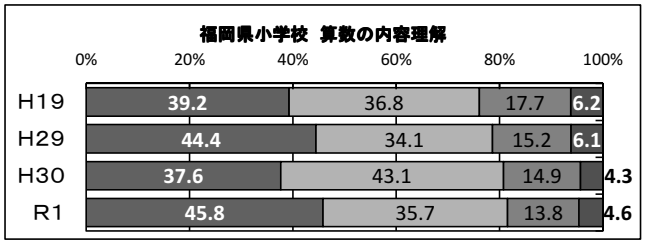


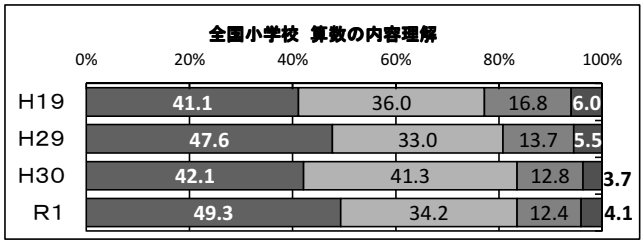
小 48・中 51	算数／数学の授業の内容はよく分かりますか。

○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに増加している。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、全国より、小学校は 3.5 ポイント、中学校は 2.3 ポイント下回っている。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の正答率は、全教科において高い傾向にある。
○　本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 4.8 ポイント、中学校 3.3 ポイントである。

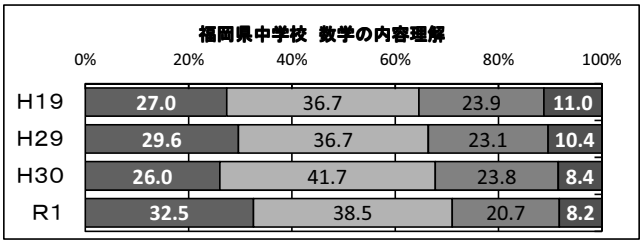
■ 当てはまる　■ どちらかといえば　■ あまり　■ 当てはまらない

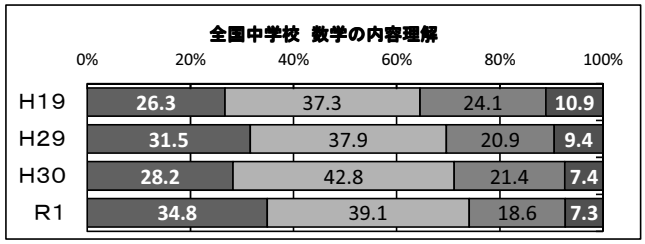
■　小学校回答状況



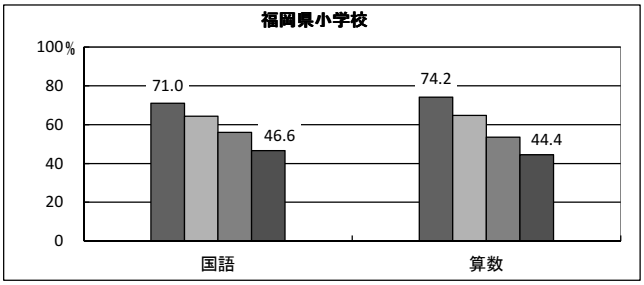


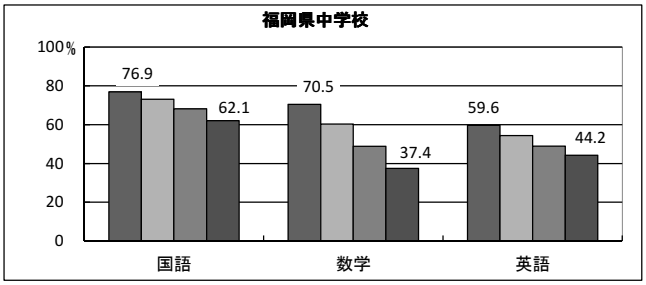
■　中学校回答状況



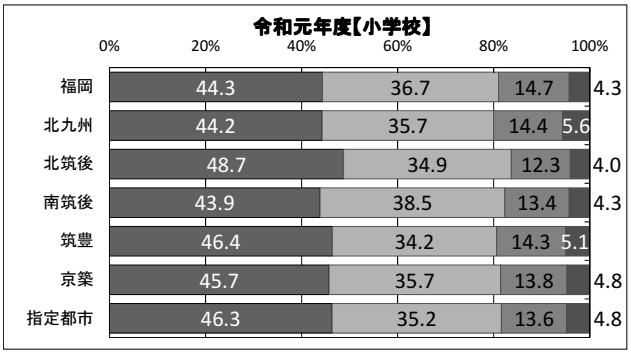


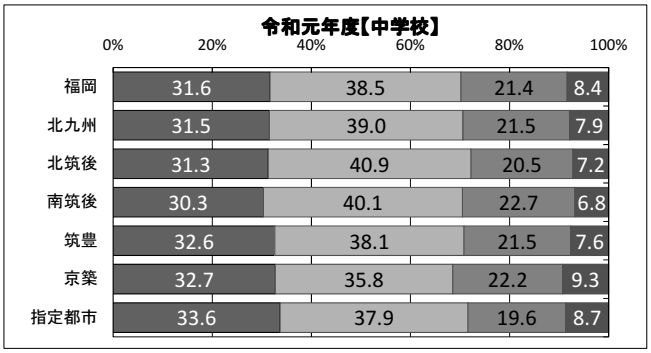
■　回答状況と教科の正答率のクロス分析





■　地区別回答状況





（２） 課題解決に向けた取組

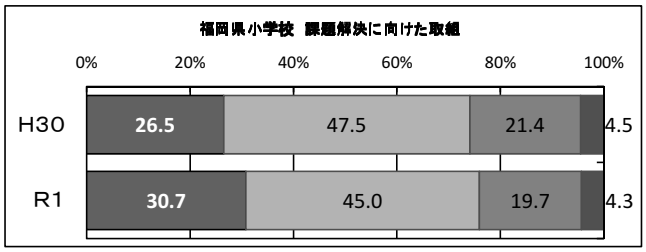
小 35・中 37	授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。

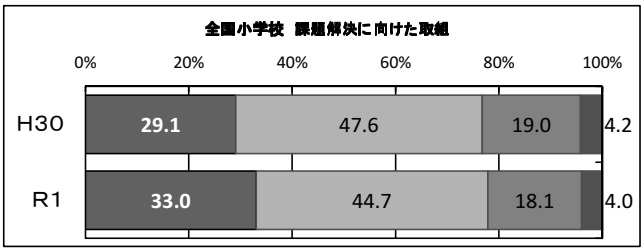
※ 平成３０年度から加えられた質問

○ 本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに増加している。
○ 本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、全国より、小学校は 2.3 ポイント、中学校は 1.1 ポイント下回っている。
○ 本年度の、当てはまると回答している児童生徒の正答率は、全教科において高い傾向にある。
○ 本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 5.0 ポイント、中学校 6.5 ポイントである。

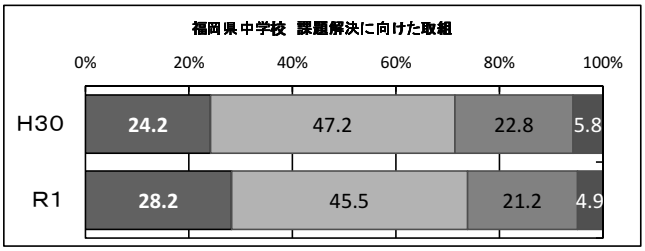
■ 当てはまる ■ どちらかといえば ■ あまり ■ 当てはまらない

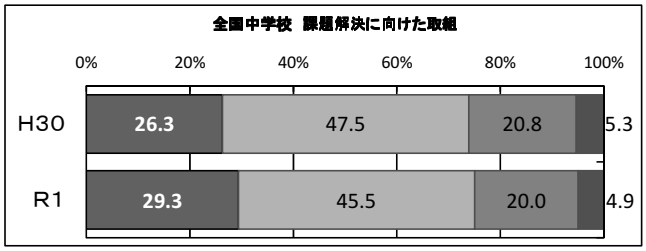
■ 小学校回答状況



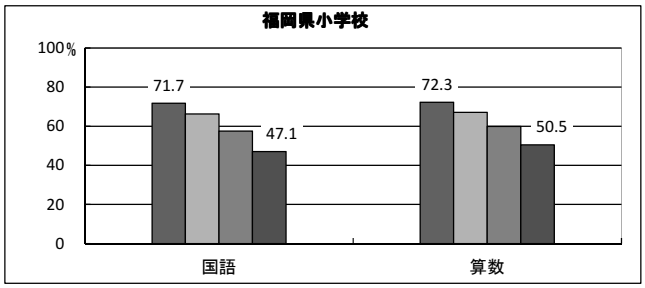


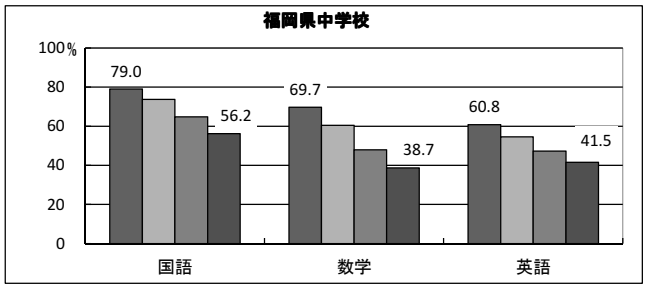
■ 中学校回答状況



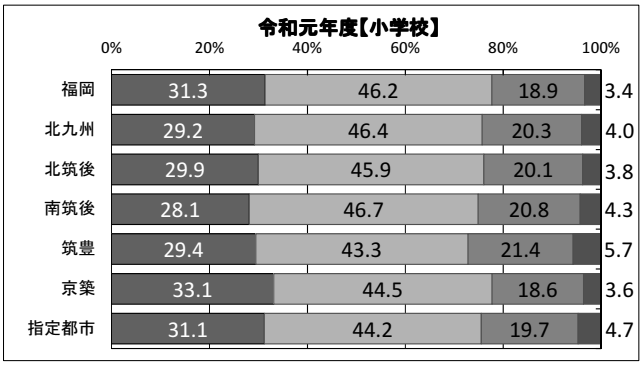


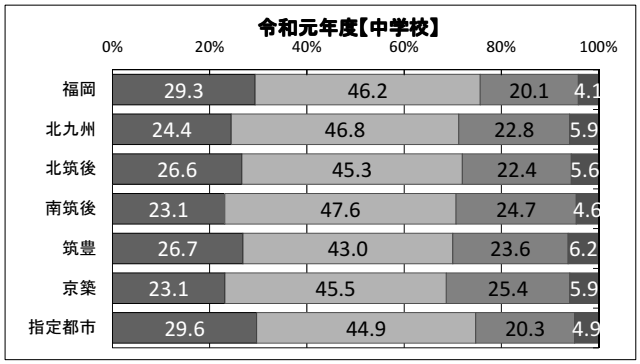
■ 回答状況と教科の正答率のクロス分析





■ 地区別回答状況





（３） 自分の考えを深めたり広げたりすること

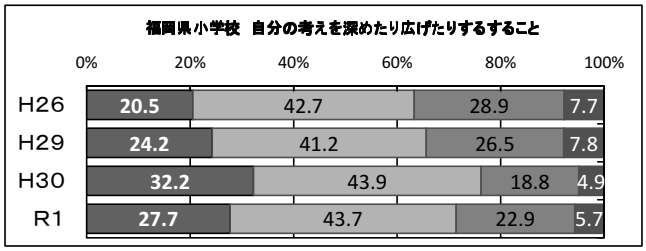
小 29・中 32	学級の友達と〔生徒〕の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。

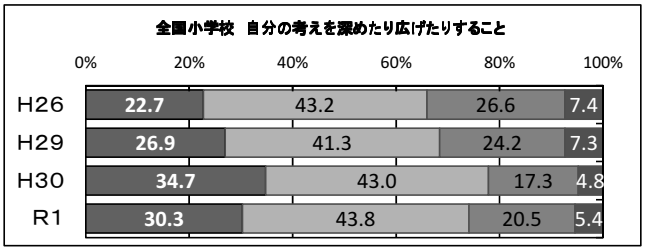
※ 平成２６年度から加えられた質問

○ 本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに減少している。
○ 本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、小学校は全国より 2.6 ポイント、中学校は 0.4 ポイント下回っている。
○ 本年度の、当てはまると回答している児童生徒の正答率は、全教科において高い傾向にある。
○ 本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 2.4 ポイント、中学校 8.0 ポイントである。

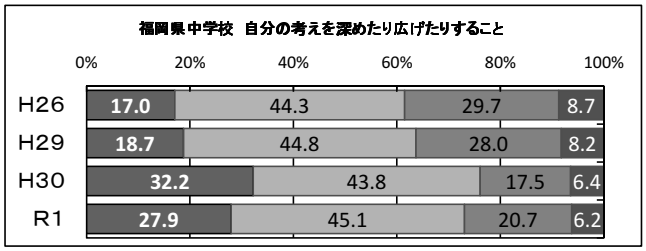
■ 当てはまる ■ どちらかといえば ■ あまり ■ 当てはまらない

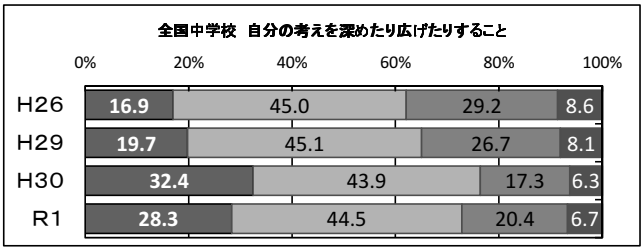
■ 小学校回答状況



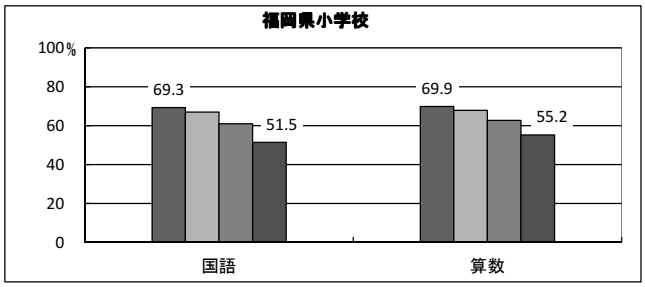


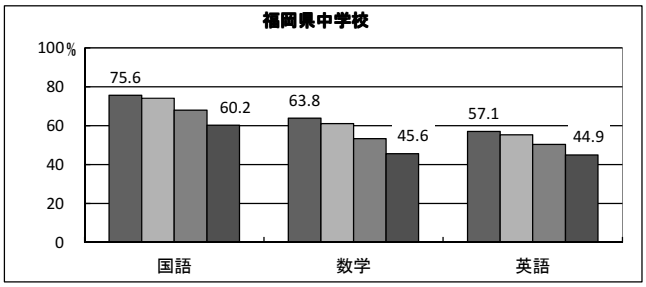
■ 中学校回答状況



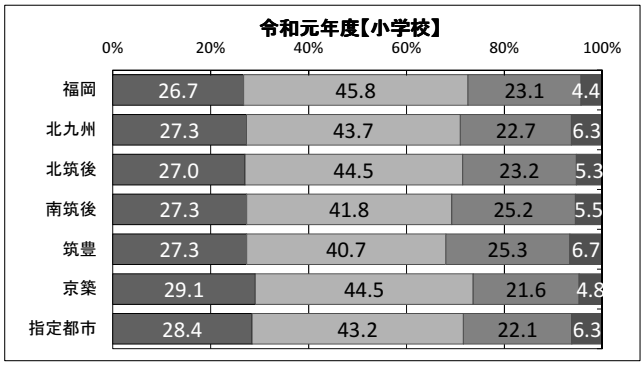


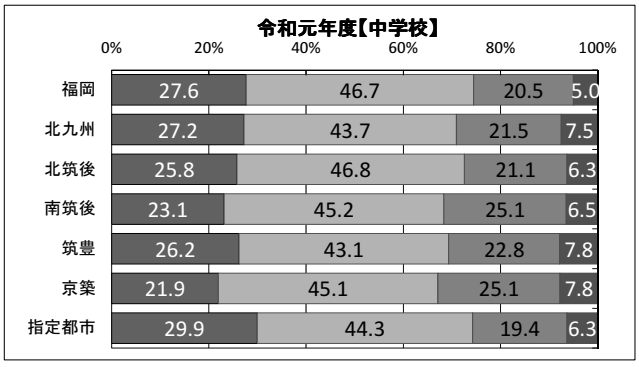
■ 回答状況と教科の正答率のクロス分析





■ 地区別回答状況





３　家庭・関係機関との連携

（１）　家庭学習

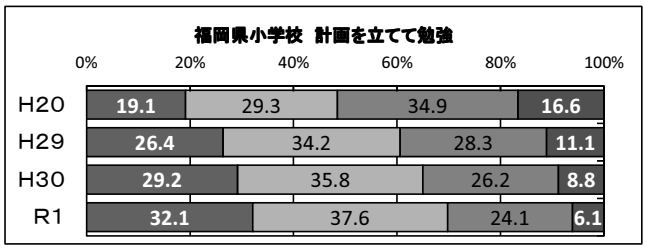
小 17･中 17	家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか。

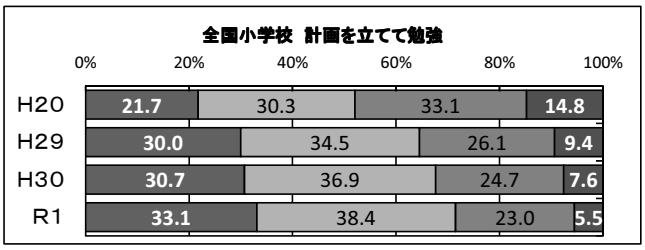
※　平成２０年度から加えられた質問

○　本年度の、していると回答している児童生徒の割合は、平成 30 年度より、小学校は増加し、中学校は減少している。
○　本年度の、していると回答している児童生徒の割合は、小学校は全国より 1.0 ポイント、中学校は 1.3 ポイント下回っている。
○　本年度の、していると回答している児童生徒の正答率は、全教科において高い傾向にある。
○　本年度の、していると回答している児童生徒の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 4.0 ポイント、中学校 4.4 ポイントである。

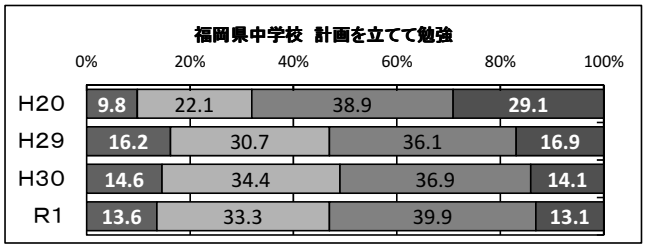
■ している　■ どちらかといえば　■ あまり　■ 全く

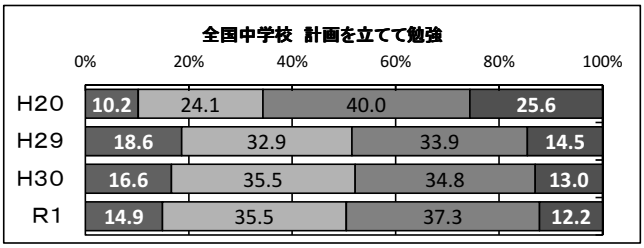
■　小学校回答状況



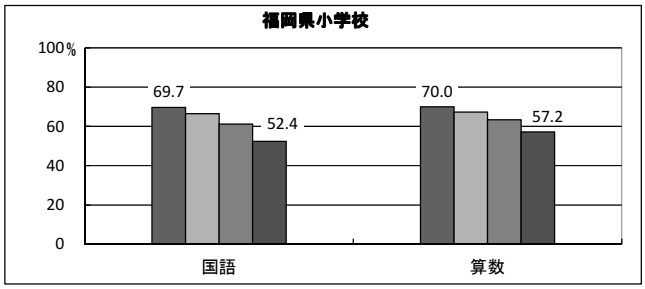


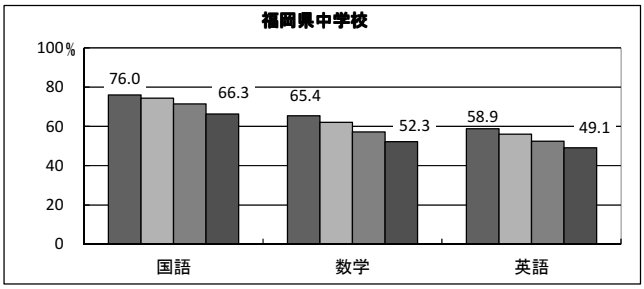
■　中学校回答状況



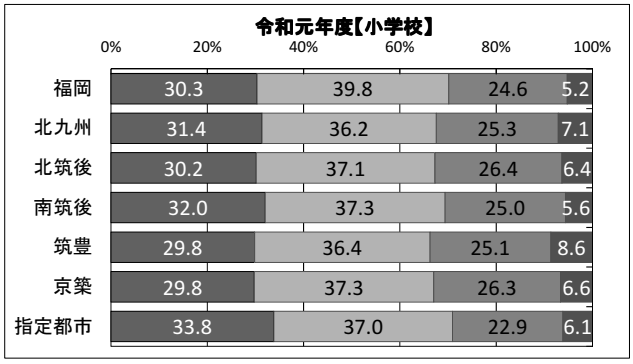


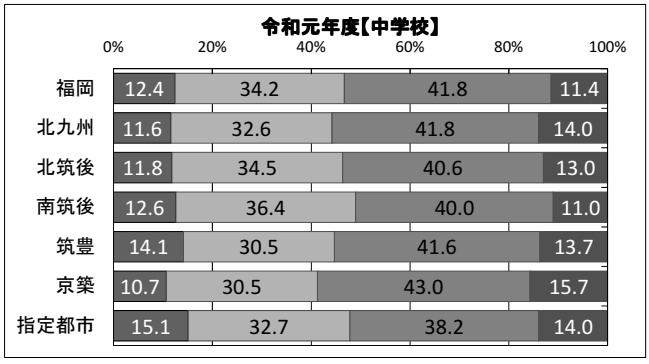
■　回答状況と教科の正答率のクロス分析





■　地区別回答状況



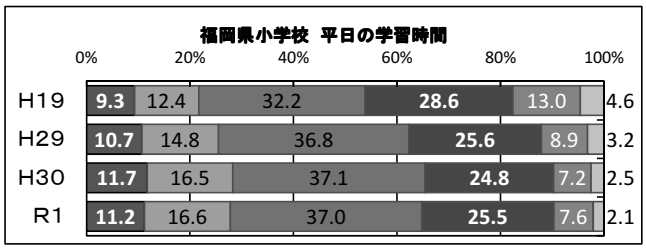


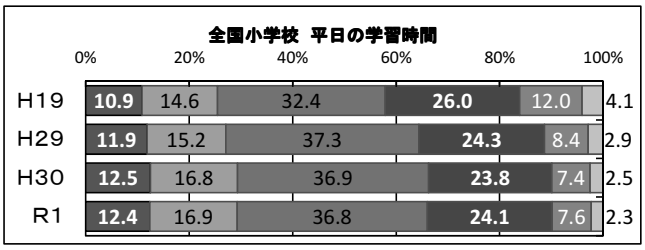
小18・中18	学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾や家庭教師も含む）。

○　本年度の、平日に家庭学習を小学校１時間以上、中学校２時間以上する児童生徒の割合は、平成30年度より、小学校、中学校ともに減少している。
○　本年度の、平日に家庭学習を小学校１時間以上、中学校２時間以上する児童生徒の割合は、全国より、小学校は1.3ポイント、中学校は0.3ポイント下回っている。
○　本年度の、平日に家庭学習を全くしない児童生徒の正答率は、全教科において低い傾向にある。
○　本年度の、平日に家庭学習を小学校１時間以上、中学校２時間以上する児童生徒の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校6.7ポイント、中学校11.4ポイントである。

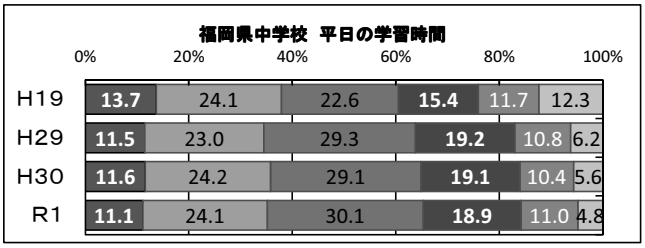
■３時間以上　■２時間以上　■１時間以上　■３０分以上　■３０分未満　■全く

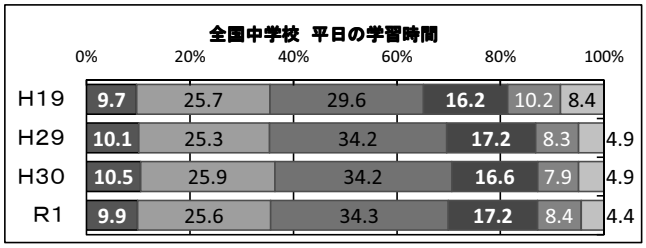
■　小学校回答状況



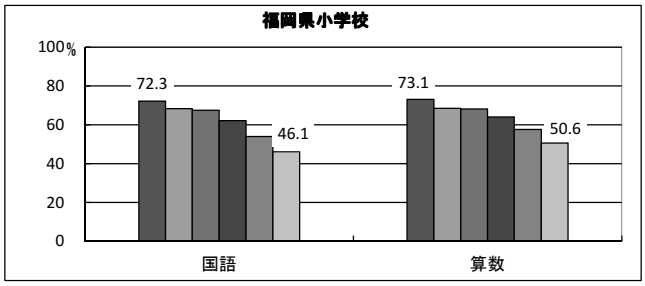


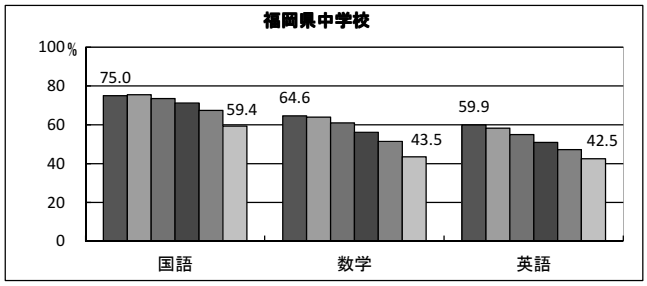
■　中学校回答状況



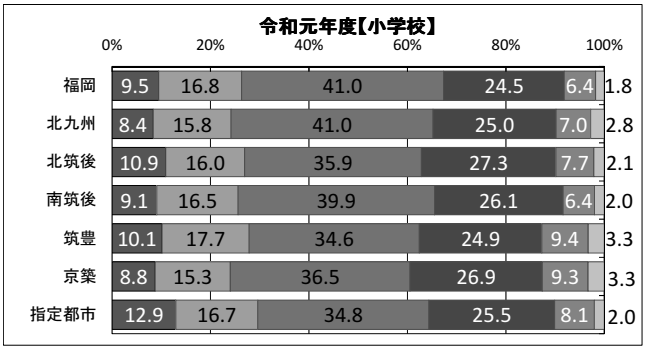


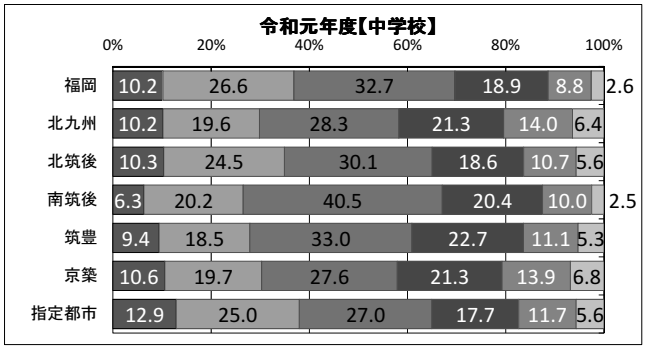
■　回答状況と教科の正答率のクロス分析





■　地区別回答状況





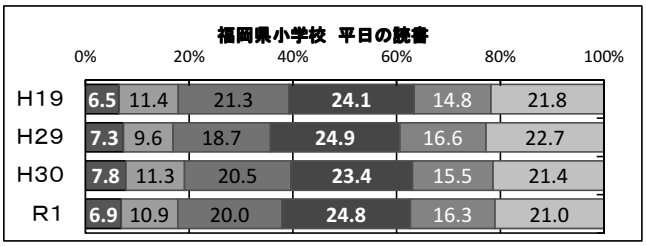
（２） 読書時間

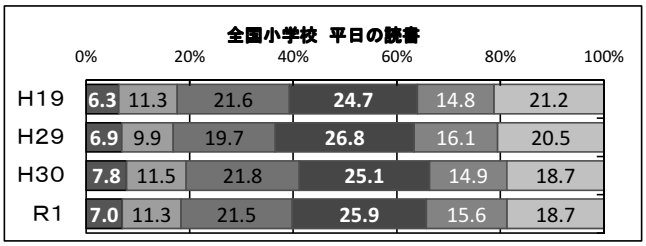
小 19･中 19	学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、読書をしますか（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）。

○　本年度の、30 分以上読書をしていると回答している児童生徒の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに減少している。
○　本年度の、30 分以上読書をしていると回答している児童生徒の割合は、全国より、小学校は 2.0 ポイント、中学校は 1.9 ポイント下回っている。
○　本年度の、30 分以上読書をしていると回答している児童生徒の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 8.3 ポイント、中学校 5.8 ポイントである。

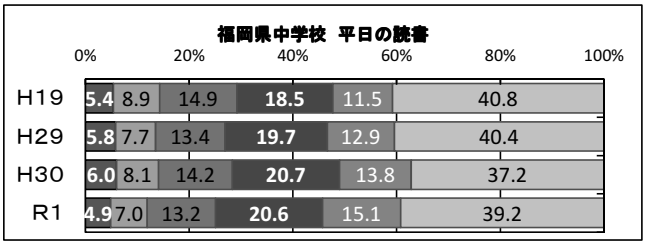
■２時間以上　■１時間以上　■３０分以上　■１０分以上　■１０分未満　■全く

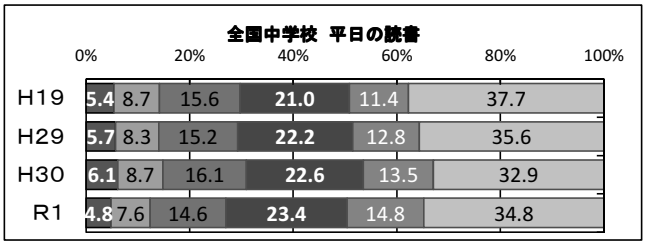
■　小学校回答状況



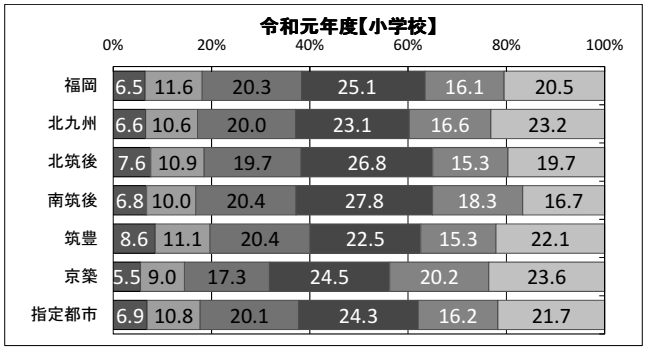


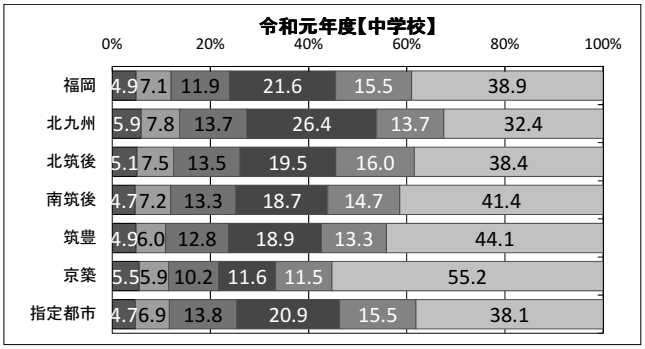
■　中学校回答状況





■　地区別回答状況





（３） 地域・社会とのかかわり

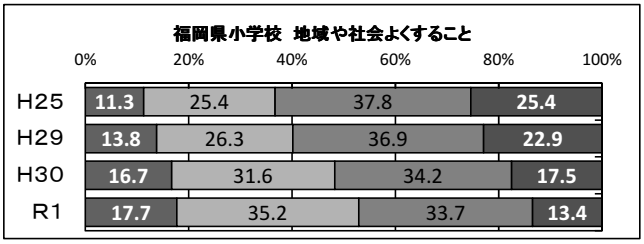
小 24・中 24	地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか。

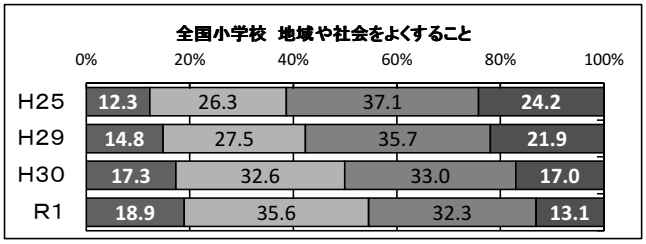
※ 平成２５年度から加えられた質問

○ 本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに増加している。
○ 本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合は、小学校は全国より 1.2 ポイント、中学校は 0.9 ポイント下回っている。
○ 本年度の、当てはまると回答している児童生徒の正答率は、全教科において高い傾向にある。
○ 本年度の、当てはまると回答している児童生徒の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 2.2 ポイント、中学校 2.7 ポイントである。

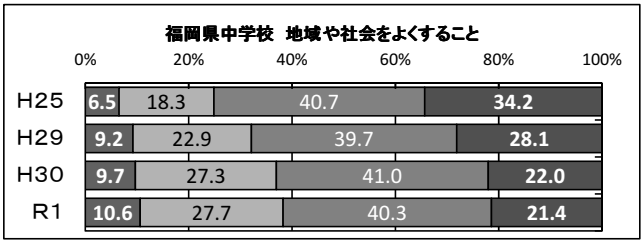
■ 当てはまる ■ どちらかといえば ■ あまり ■ 当てはまらない

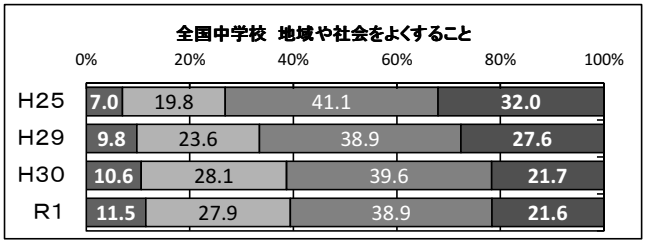
■ 小学校回答状況



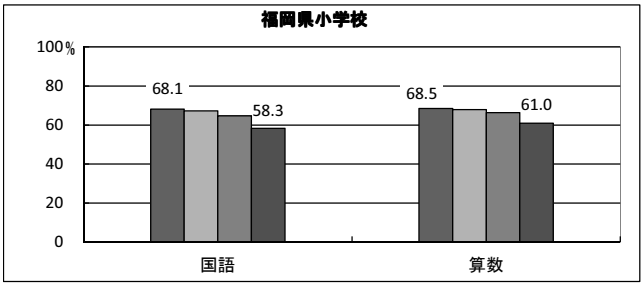


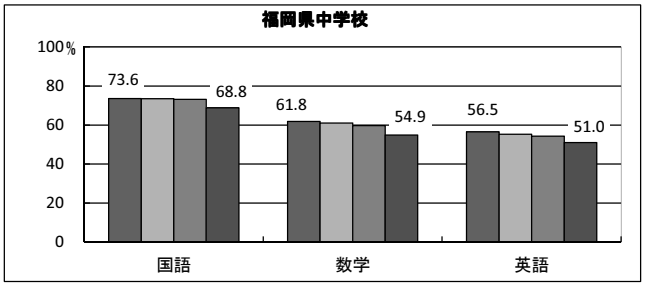
■ 中学校回答状況



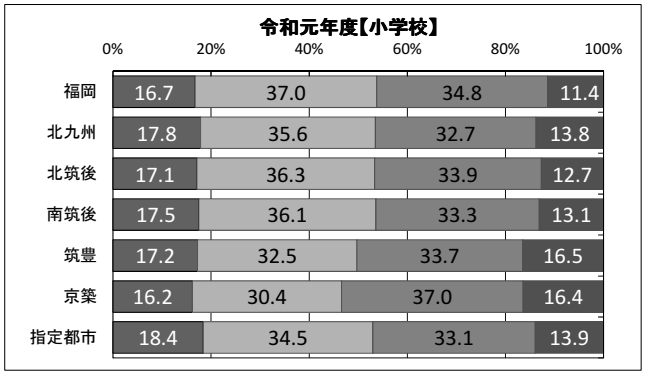


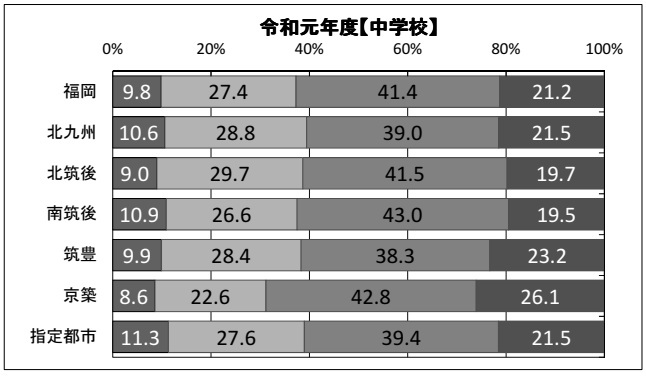
■ 回答状況と教科の正答率のクロス分析





■ 地区別回答状況





Ⅵ　学校質問紙に関する調査結果と分析

◇　学校質問紙調査の目的

学校における指導内容、指導方法に関する取組や学校における人的・物的な教育条件の整備の状況等を調査することにより、市町村教育委員会や学校の教育及び教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

◇　本報告書において分析の対象とした質問項目

	視点	番号	カテゴリー	質問番号 小	質問番号 中	質問項目	頁番号
1	学力基盤づくり	(1)	学習規律	9		授業中の私語が少なく、落ち着いていると思いますか。	73
				13		前年度までに、学習規律（私語をしない、話をしている人の方を向いて聞くなど）の維持を徹底しましたか。	74
2	授業づくり	(1)	指導方法	38		前年度までに、各教科等で身に付けたことを、様々な課題の解決に生かすことができるような機会を設けましたか。	75
		(2)	補充的な学習	39	40	国語の指導として、前年度までに補充的な学習の指導を行いましたか。	76
				45	46	算数／数学の指導として、前年度までに補充的な学習の指導を行いましたか。	77
		(3)	教職員の取組	19		言語活動について、国語科だけではなく、各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動を通じて、学校全体として取り組んでいますか。	78
3	教員の　意識・指導力の向上	(1)	カリキュラム・マネジメント	17		児童生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか。	79
		(2)	調査結果の活用	63	79	平成30年度全国学力・学習状況調査の自校の分析結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するために活用しましたか。	80
		(3)	教員研修	25	26	教員が、他校や外部の研修機関などの学校外での研修に積極的に参加できるようにしていますか。	81
		(4)	教職員の取組	30	31	学級運営の状況や課題を全教職員の間で共有し、学校として組織的に取り組んでいますか。	82
4	家庭・関係機関との連携	(1)	教育課程の周知	55	69	教育課程の趣旨について、家庭や地域との共有を図る取組を行っていますか。	83
		(2)	家庭学習	60	74	前年度までに、家庭学習の取組として、児童生徒に家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えましたか。（教科共通）	84
5	その他	(1)	就学援助	6		就学援助を受けている児童生徒の割合	85
		(2)	英語の指導方法		※中学校質問紙質問番号 50～62 を全国、福岡県、各地区で比較		86
		(3)	ICTの活用	49	63	前年度に、教員が大型提示装置などのICTを活用した授業を1クラス当たりどの程度行いましたか。	88

◇　分析の方法

A　回答状況の経年比較

同一の質問項目に対する本県全体の学校の回答状況を、当該質問が初めて調査項目となった年度と、平成 29、30、令和元年度で比較する。

B　回答状況と教科の正答率のクロス分析

令和元年度における質問項目に対して「肯定的な回答」をしている方が、教科の平均正答率が高い傾向が見られる場合のみ、棒グラフで示す。

C　地区別の回答状況

令和元年度における同一の質問項目に対する各地区の学校の回答状況を比較する。

◇　資料を読み取る際の留意点

特定の選択肢を回答した学校が少ない場合には、極端な傾向を示す場合がある。また、質問紙に対する回答状況は、選択肢以外の回答や無回答を除外しているため、合計が 100%にならない場合がある。

1　学力基盤づくり

（1）学習規律

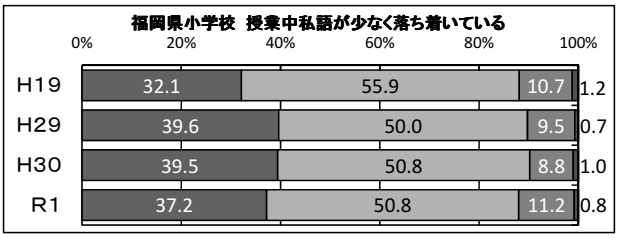
※　数字は、学校質問紙中の質問番号
※　差が 20.0 ポイント以上ある場合は数値に＿を引いている。

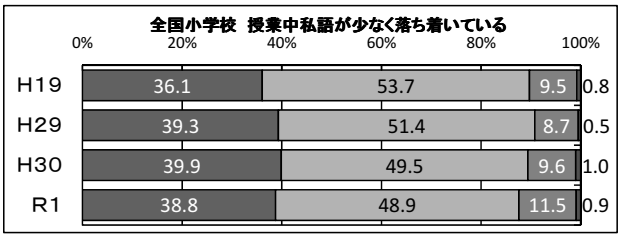
小 9・中 9	授業中の私語が少なく、落ち着いていると思いますか。

○　本年度の、そう思うと回答している学校の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに減少している。
○　本年度の、そう思うと回答している学校の割合は、全国より、小学校は 1.6 ポイント、中学校は 9.4 ポイント下回っている。
○　本年度の、そう思うと回答している学校の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 21.7 ポイント、中学校 30.0 ポイントである。

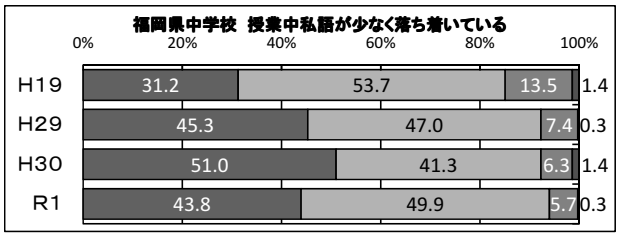
■そう思う　■どちらかといえば　■あまり　■そう思わない

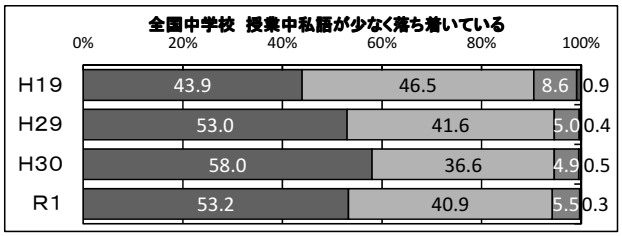
■　小学校回答状況



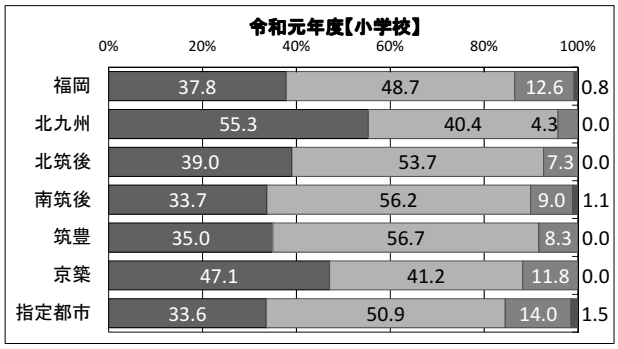


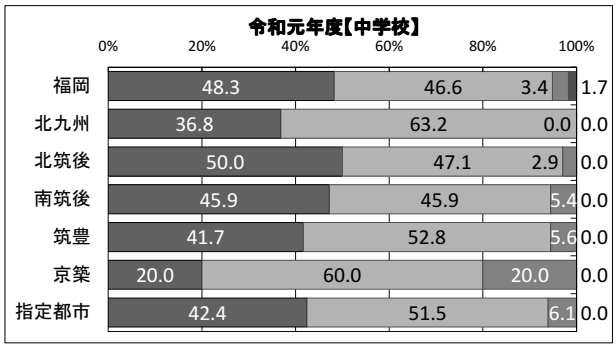
■　中学校回答状況





■　地区別回答状況





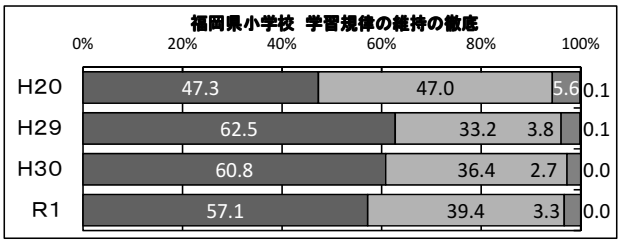
小 13・中 13	前年度までに、学習規律（私語をしない、話をしている人の方を向いて聞くなど）の維持を徹底しましたか。

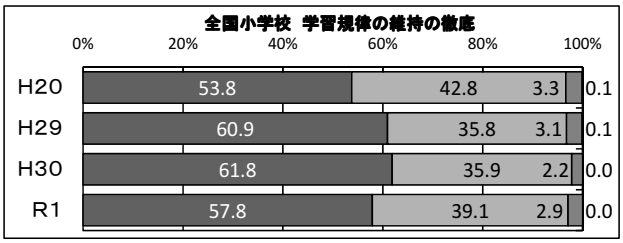
※　平成２０年度から加えられた質問

○　本年度の、よく行ったと回答している学校の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに減少している。
○　本年度の、よく行ったと回答している学校の割合は、全国より、小学校は 0.7 ポイント下回り、中学校は 0.1 ポイント上回っている。
○　本年度の、よく行ったと回答している学校の方が、教科の平均正答率が高い傾向が見られる。
○　本年度の、よく行ったと回答している学校の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 11.8 ポイント、中学校 18.2 ポイントである。

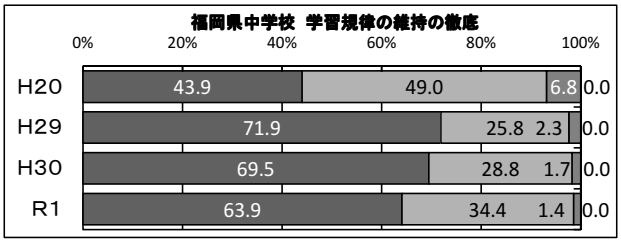
■ よく行った　■ どちらかといえば　■ あまり　■ 行っていない

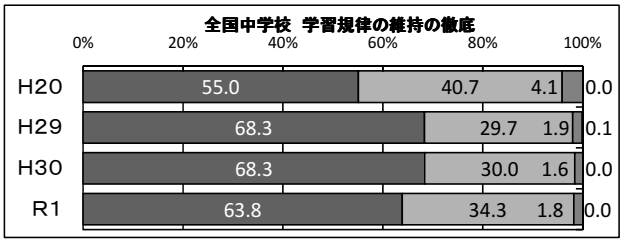
■　小学校回答状況



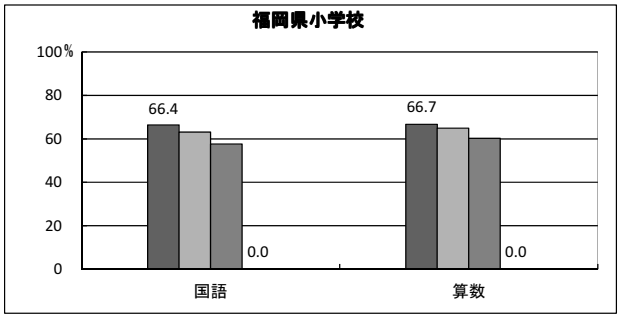


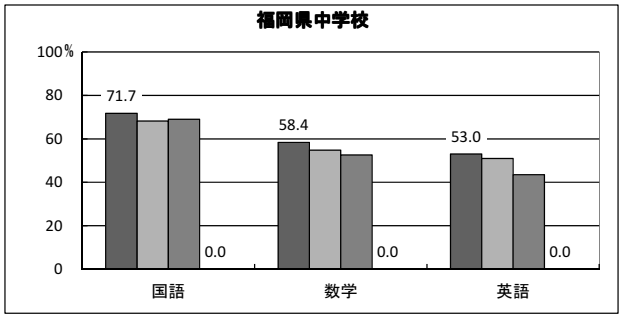
■　中学校回答状況



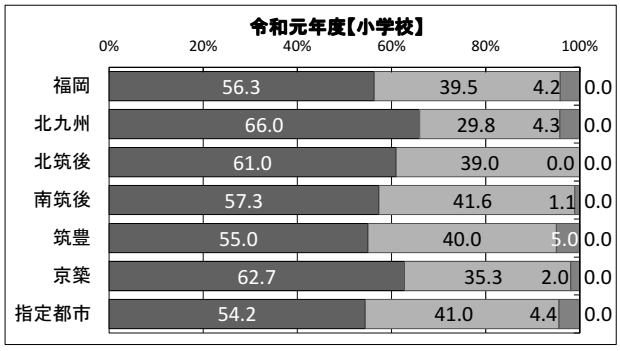


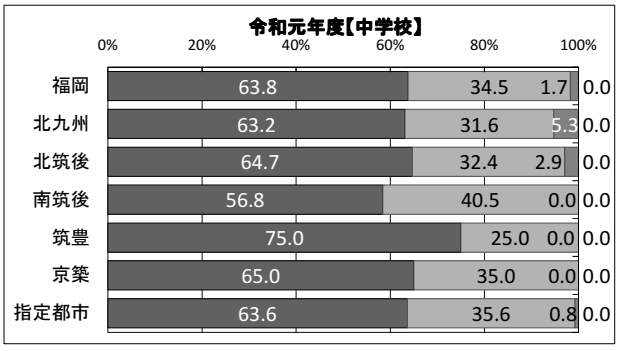
■　回答状況と教科の正答率のクロス分析





■　地区別回答状況





２　授業づくり

（１）　指導方法

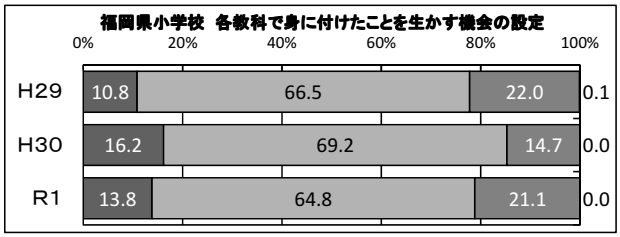
小 38・中 38	前年度までに、各教科等で身に付けたことを、様々な課題の解決に生かすことができるような機会を設けましたか。

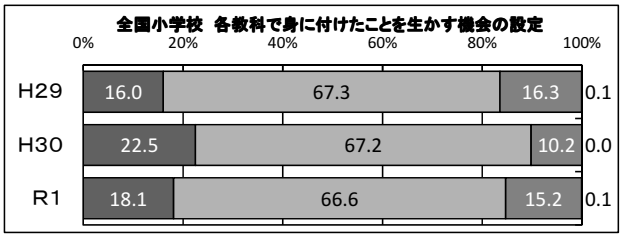
※　平成２９年度から加えられた質問

○　本年度の、よく行ったと回答している学校の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに減少している。
○　本年度の、よく行ったと回答している学校の割合は、全国より、小学校は 4.3 ポイント、中学校は 0.7 ポイント下回っている。
○　本年度の、よく行ったと回答している学校の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 15.1 ポイント、中学校 14.3 ポイントである。

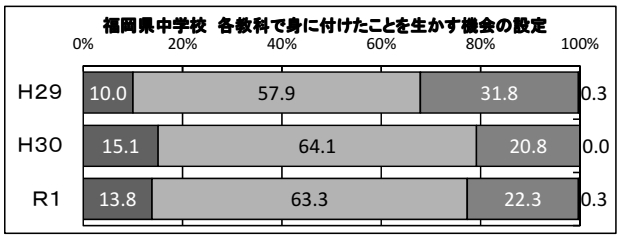
■よく行った　■どちらかといえば　■あまり　■行っていない

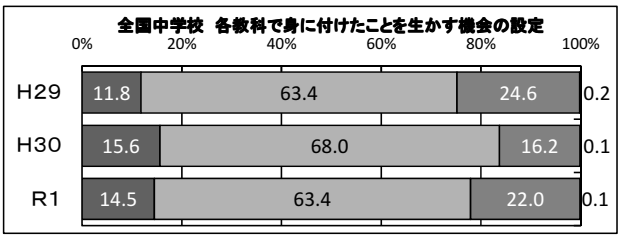
■　小学校回答状況



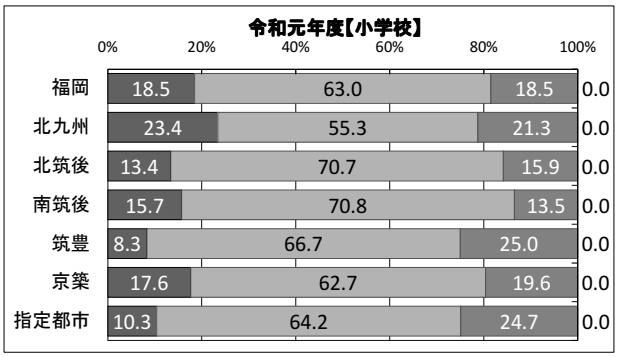


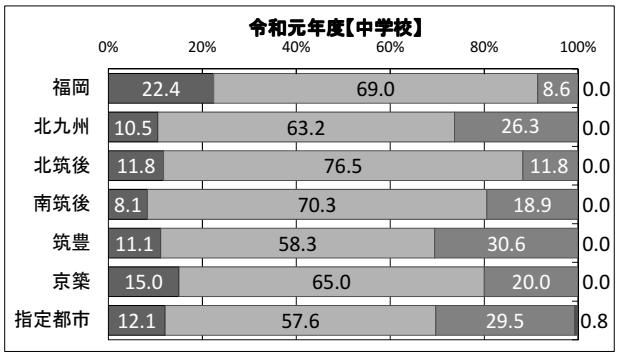
■　中学校回答状況





■　地区別回答状況





（２） 補充的な学習

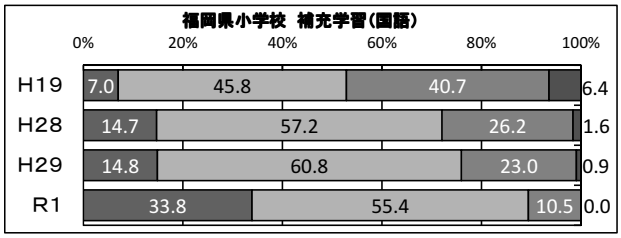
小 39・中 40	国語の指導として、前年度までに補充的な学習の指導を行いましたか。

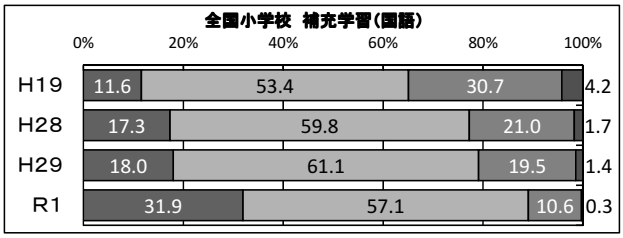
※ 平成３０年度は問われていない質問

○ 本年度の、よく行ったと回答している学校の割合は、平成 29 年度より、小学校、中学校ともに増加している。
○ 本年度の、よく行ったと回答している学校の割合は、全国より、小学校は 1.9 ポイント、中学校は 4.0 ポイント上回っている。
○ 本年度の、よく行ったと回答している学校の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 27.6 ポイント、中学校 24.4 ポイントである。

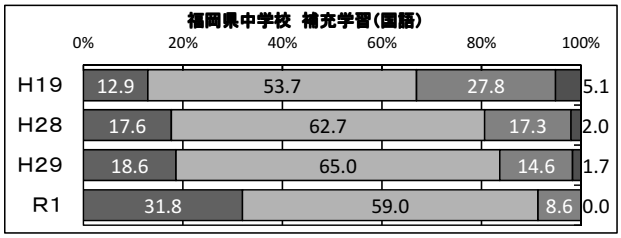
■よく行った ■どちらかといえば ■あまり ■行っていない

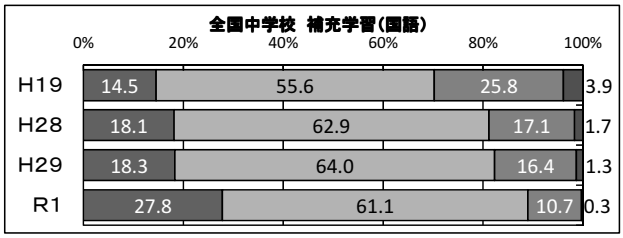
■ 小学校回答状況



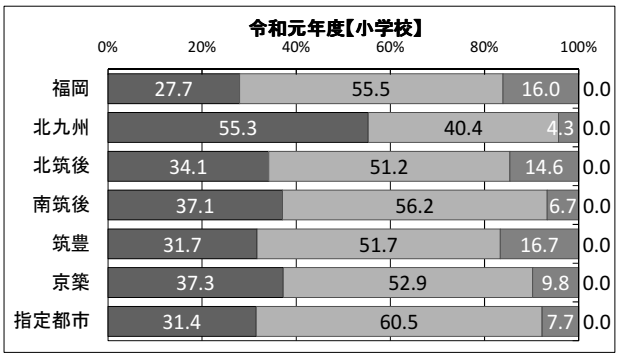


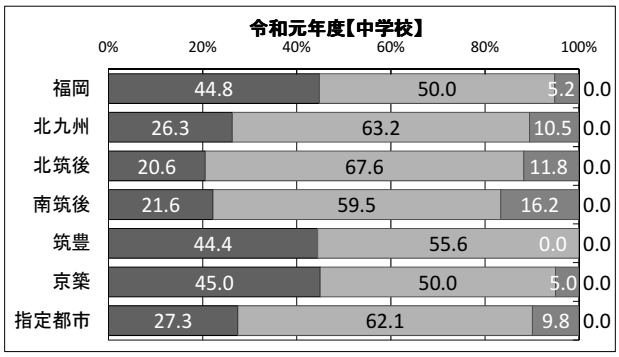
■ 中学校回答状況





■ 地区別回答状況



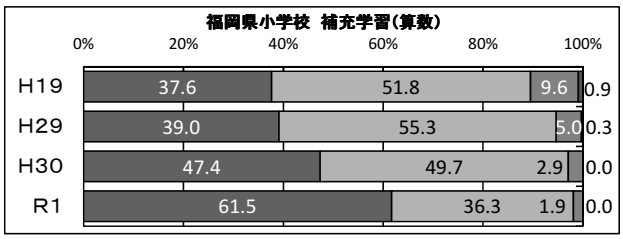


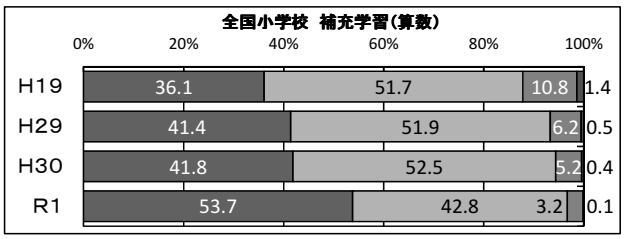
小 45・中 46	算数／数学の指導として、前年度までに補充的な学習の指導を行いましたか。

○　本年度の、よく行ったと回答している学校の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに増加している。
○　本年度の、よく行ったと回答している学校の割合は、全国より、小学校は 7.8 ポイント、中学校は 5.5 ポイント上回っている。
○　本年度の、よく行ったと回答している学校の方が、教科の平均正答率が高い傾向が見られる。
○　本年度の、よく行ったと回答している学校の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 13.2 ポイント、中学校 28.6 ポイントである。

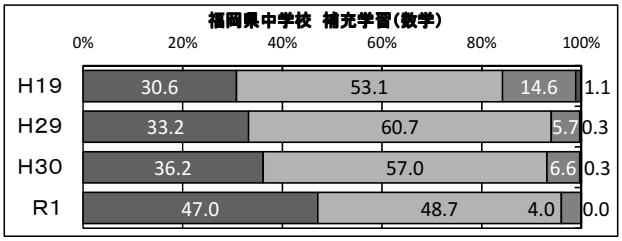
■ よく行った　■ どちらかといえば　■ あまり　■ 行っていない

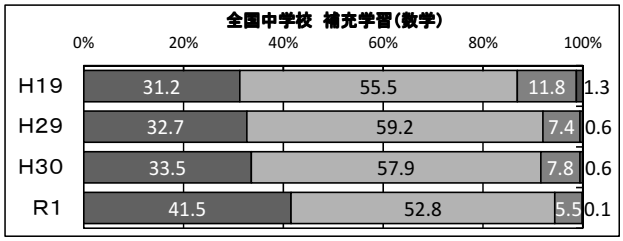
■　小学校回答状況



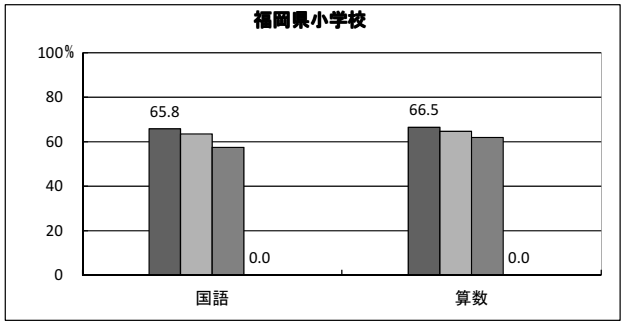


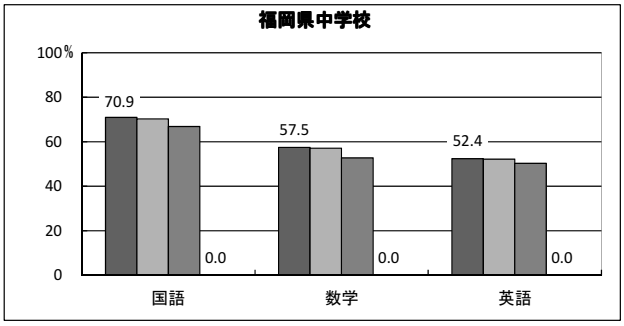
■　中学校回答状況



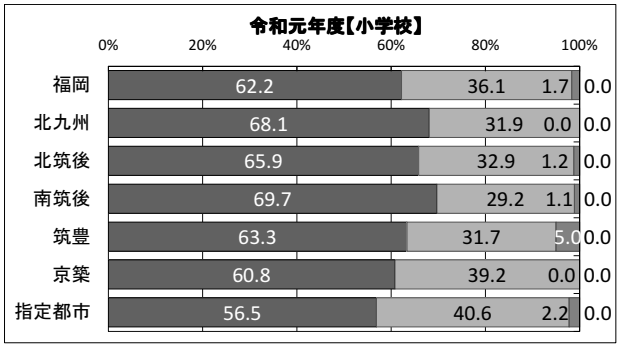


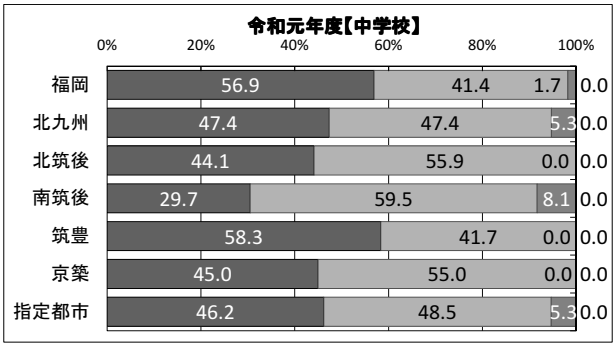
■　回答状況と教科の正答率のクロス分析





■　地区別回答状況





（３） 教職員の取組

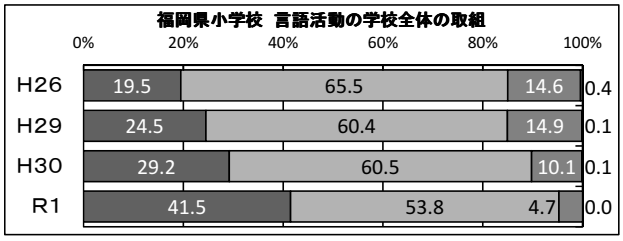
小 19・中 19	言語活動について、国語科だけではなく、各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動を通じて、学校全体として取り組んでいますか。

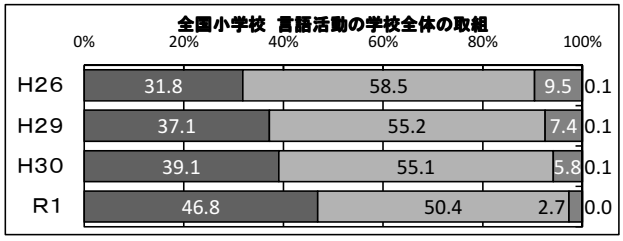
※ 平成２６年度から加えられた質問

○ 本年度の、よくしていると回答している学校の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに増加している。
○ 本年度の、よくしていると回答している学校の割合は、全国より、小学校は 5.3 ポイント、中学校は 0.3 ポイント下回っている。
○ 本年度の、よく行ったと回答している学校の方が、教科の平均正答率が高い傾向が見られる。
○ 本年度の、よくしていると回答している学校の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 31.7 ポイント、中学校 35.8 ポイントである。

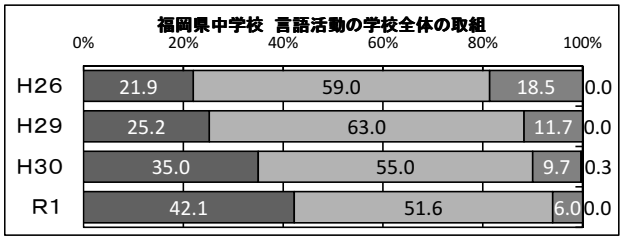
■よくしている ■どちらかといえば ■あまり ■していない

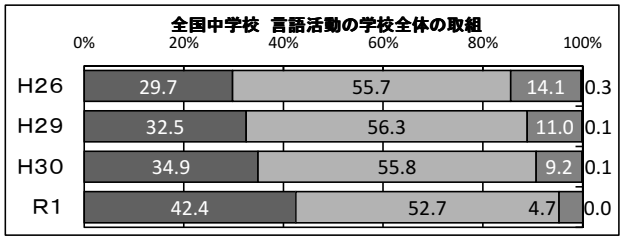
■ 小学校回答状況



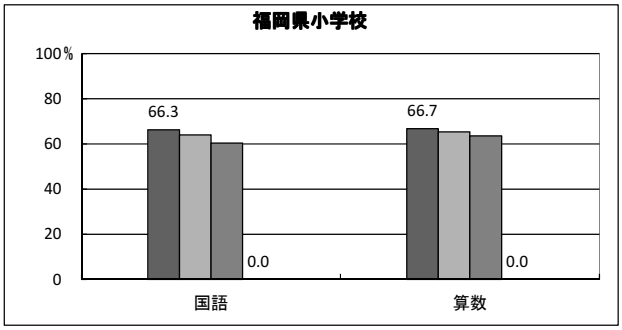


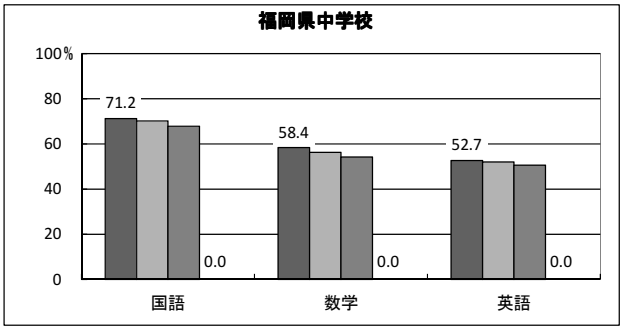
■ 中学校回答状況



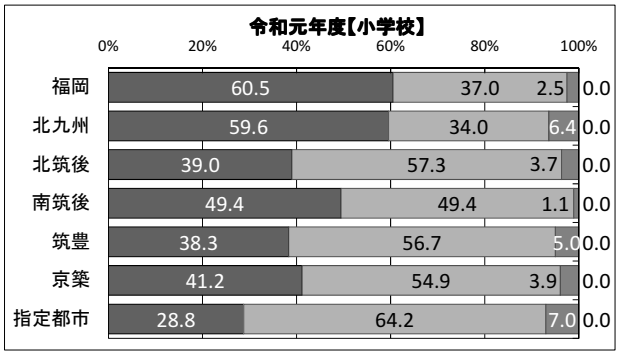


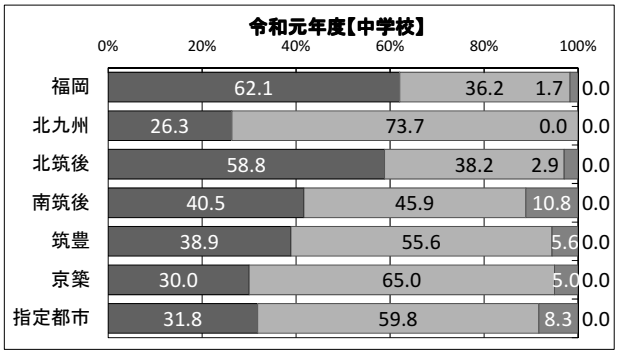
■ 回答状況と教科の正答率のクロス分析





■ 地区別回答状況





３　教員の意識・指導力の向上

（１）　カリキュラム・マネジメント

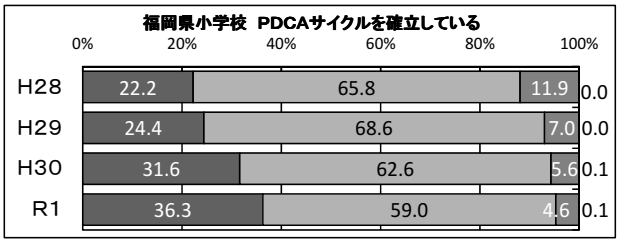
小 17・中 17	児童生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のＰＤＣＡサイクルを確立していますか。

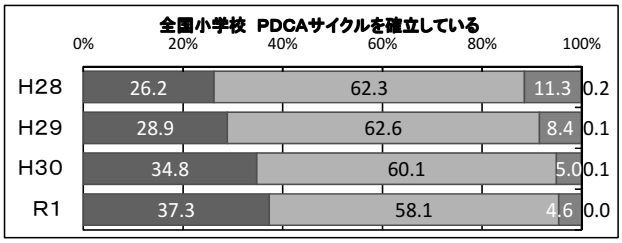
※　平成２８年度から加えられた質問

○　本年度の、よくしていると回答している学校の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに増加している。
○　本年度の、よくしていると回答している学校の割合は、全国より、小学校は 1.0 ポイント、中学校は 0.4 ポイント下回っている。
○　本年度の、よく行ったと回答している学校の方が、教科の平均正答率が高い傾向が見られる。
○　本年度の、よくしていると回答している学校の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 28.5 ポイント、中学校 31.0 ポイントである。

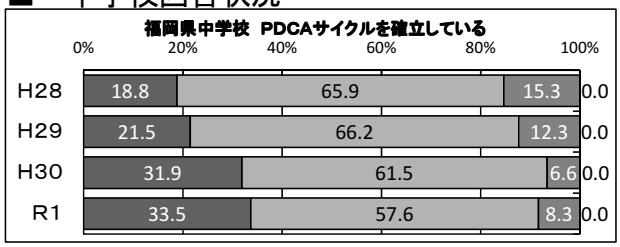
■よくしている　■どちらかといえば　■あまり　■していない

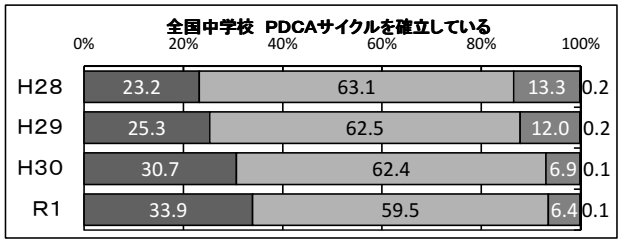
■　小学校回答状況



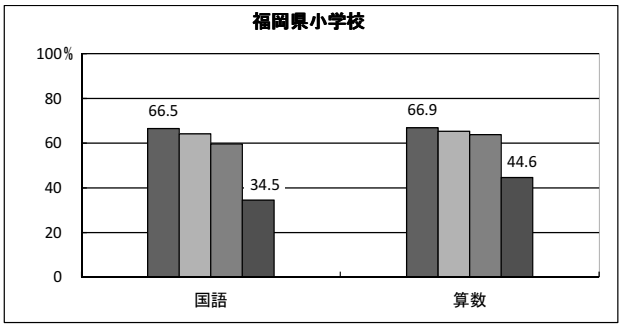


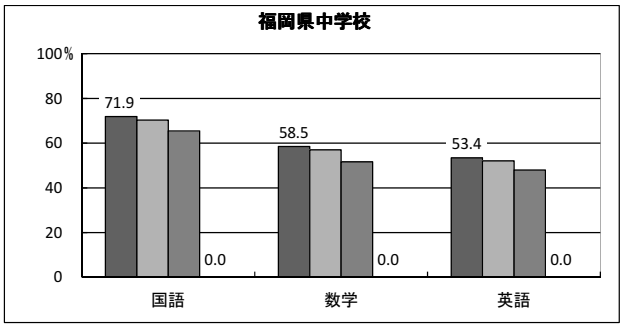
■　中学校回答状況



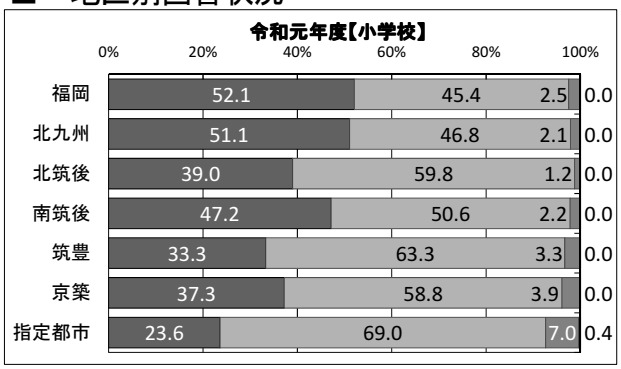


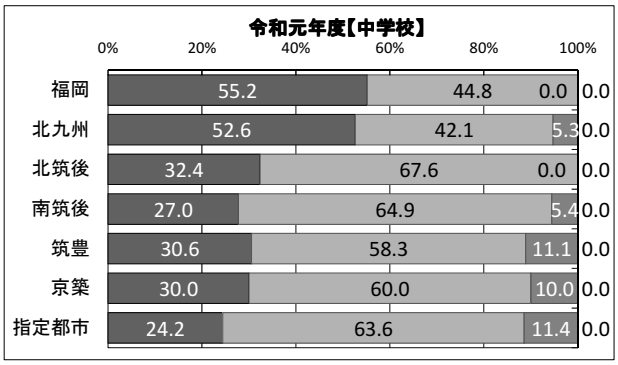
■　回答状況と教科の正答率のクロス分析





■　地区別回答状況





（２） 調査結果の活用

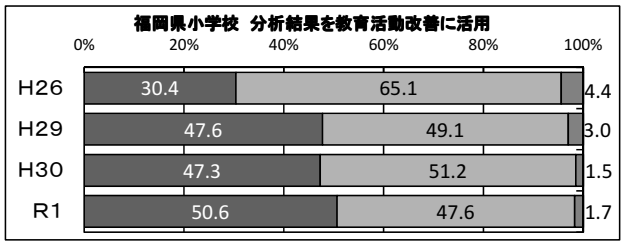
小 63・中 79	平成３０年度全国学力・学習状況調査の自校の分析結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するために活用しましたか。

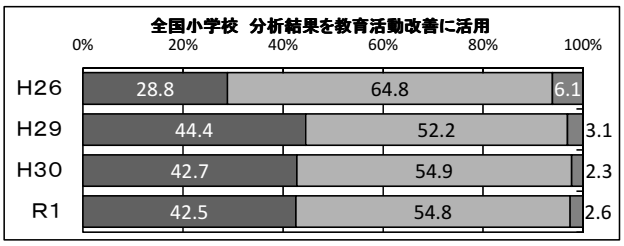
※ 平成２６年度から加えられた質問

○ 本年度の、よく行ったと回答している学校の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに増加している。
○ 本年度の、よく行ったと回答している学校の割合は、全国より、小学校は 8.1 ポイント、中学校は 7.0 ポイント上回っている。
○ 本年度の、よく行ったと回答している学校の方が、教科の平均正答率が高い傾向が見られる。
○ 本年度の、よく行ったと回答している学校の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 36.1 ポイント、中学校 30.6 ポイントである。

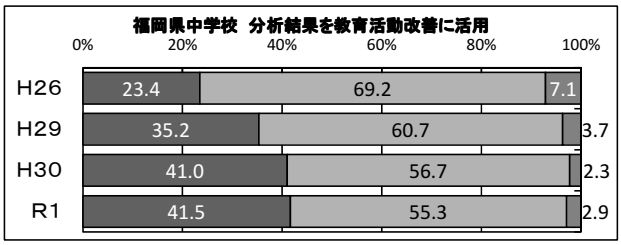
■ よく行った ■ 行った ■ ほとんど行っていない

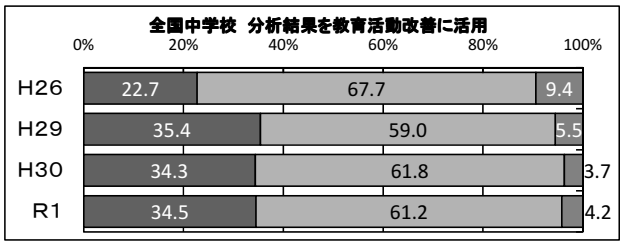
■ 小学校回答状況



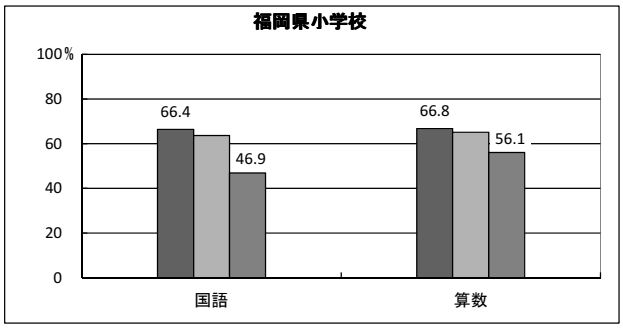


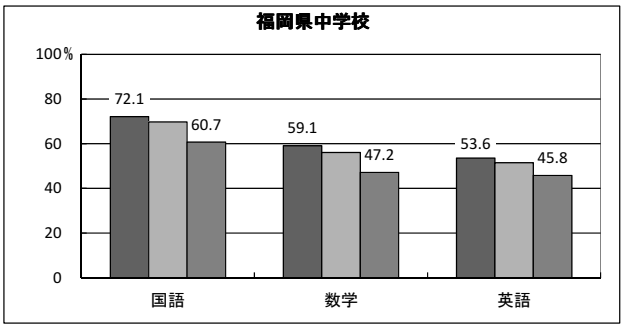
■ 中学校回答状況



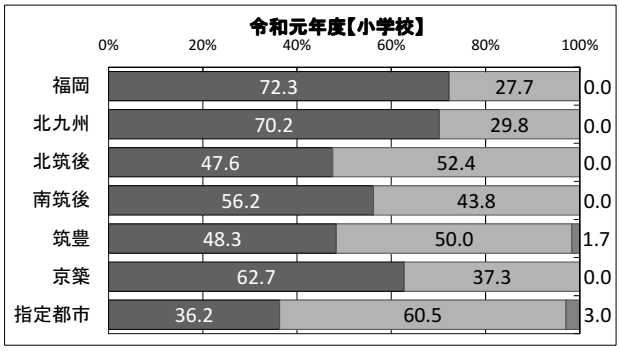


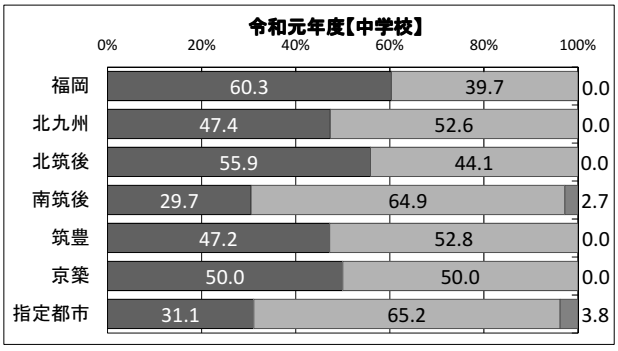
■ 回答状況と教科の正答率のクロス分析





■ 地区別回答状況





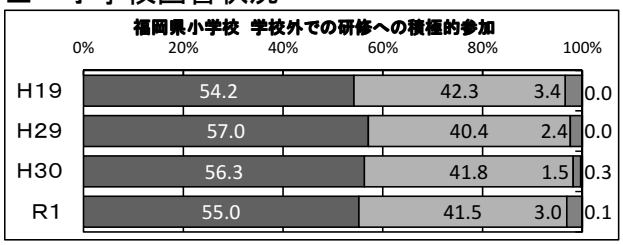
（3） 教員研修

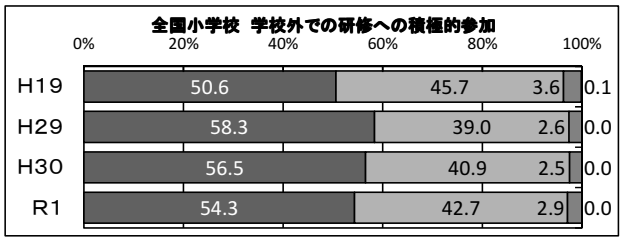
小 25・中 26	教員が、他校や外部の研修機関などの学校外での研修に積極的に参加できるようにしていますか。

○　本年度の、よくしていると回答している学校の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに減少している。
○　本年度の、よくしていると回答している学校の割合は、全国より、小学校は 0.7 ポイント、中学校は 2.9 ポイント上回っている。
○　本年度の、よくしていると回答している学校の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 34.2 ポイント、中学校 37.4 ポイントである。

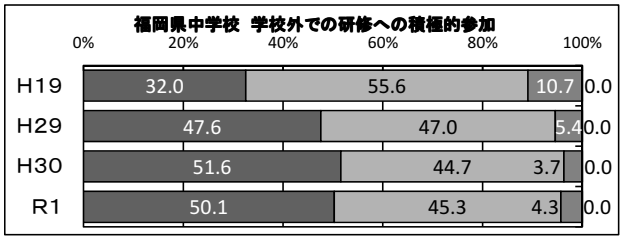
■ よくしている　■ どちらかといえば　■ あまり　■ していない

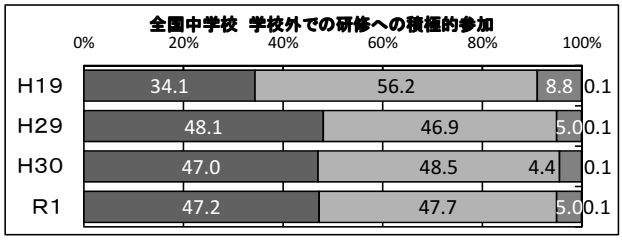
■　小学校回答状況



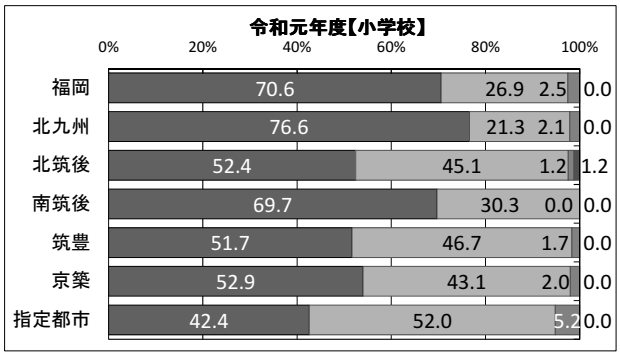


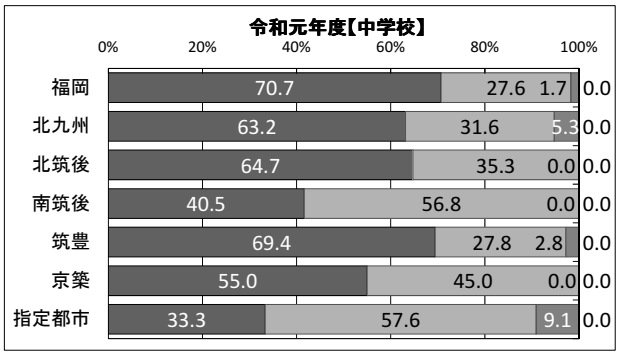
■　中学校回答状況





■　地区別回答状況





（４） 教職員の取組

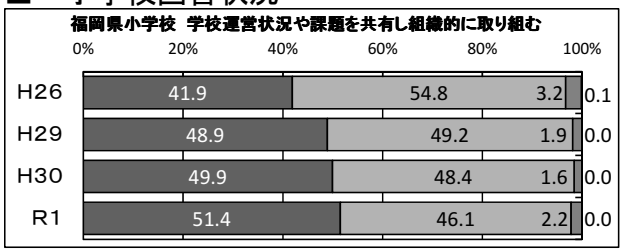
小 30・中 31	学級運営の状況や課題を全教職員の間で共有し、学校として組織的に取り組んでいますか。

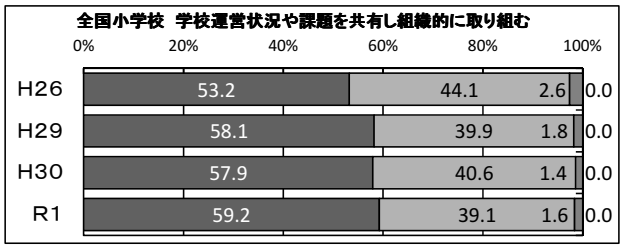
※ 平成２６年度から加えられた質問

○ 本年度の、よくしていると回答している学校の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに増加している。
○ 本年度の、よくしていると回答している学校の割合は、全国より、小学校は 7.8 ポイント、中学校は 7.0 ポイント下回っている。
○ 本年度の、よくしていると回答している学校の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 25.1 ポイント、中学校 29.7 ポイントである。

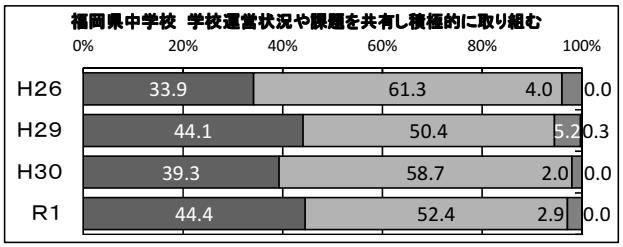
■ よくしている ■ どちらかといえば ■ あまり ■ していない

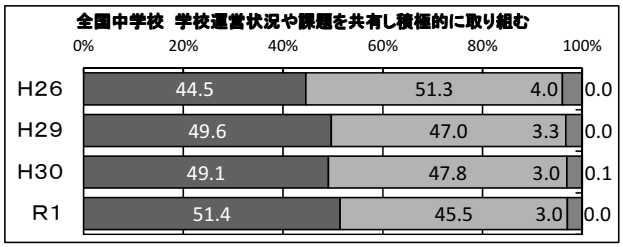
■ 小学校回答状況



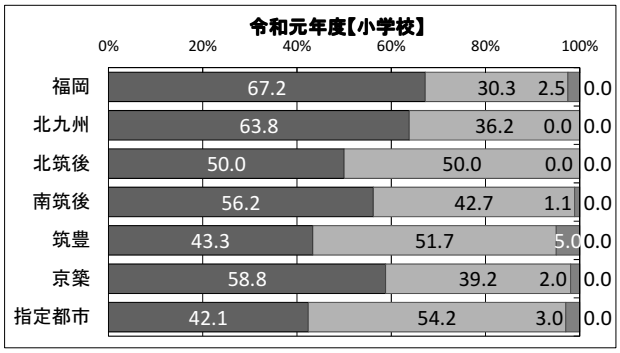


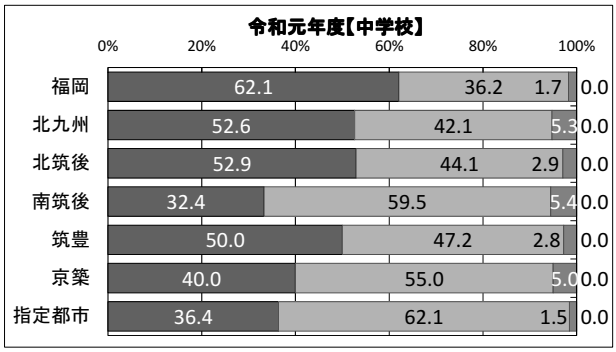
■ 中学校回答状況





■ 地区別回答状況





４　家庭・関係機関との連携

（１）　教育課程の周知

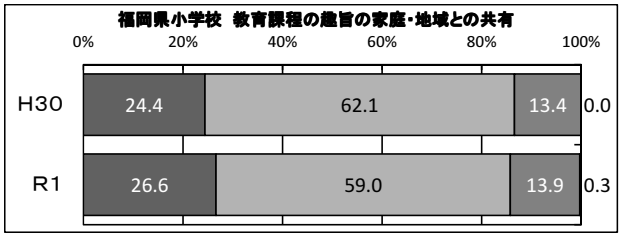
小 55・中 69	教育課程の趣旨について、家庭や地域との共有を図る取組を行っていますか。

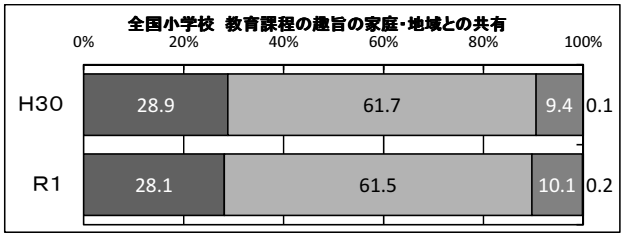
※　平成３０年度から加えられた質問

○　本年度の、よくしていると回答している学校の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに増加している。
○　本年度の、よくしていると回答している学校の割合は、全国より、小学校は 1.5 ポイント、中学校は 3.5 ポイント下回っている。
○　本年度の、よく行ったと回答している学校の方が、教科の平均正答率が高い傾向が見られる。
○　本年度の、よくしていると回答している学校の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 24.5 ポイント、中学校 43.1 ポイントである。

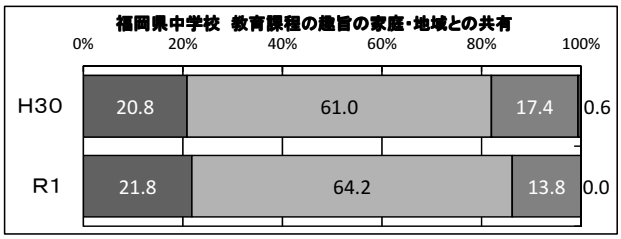
■ よくしている　■ どちらかといえば　■ あまり　■ していない

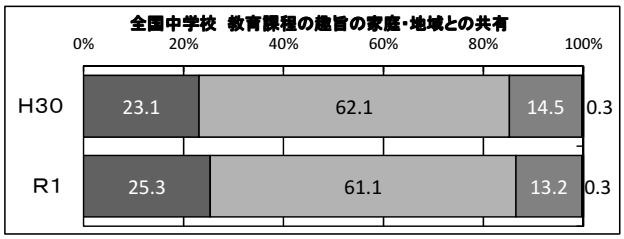
■　小学校回答状況



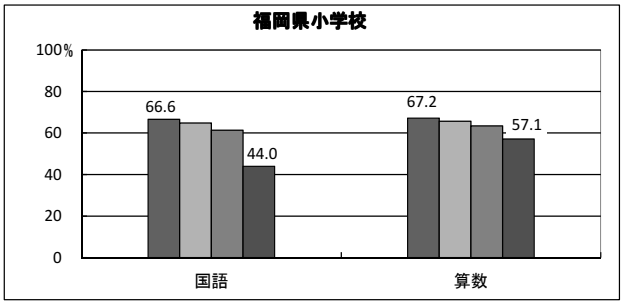


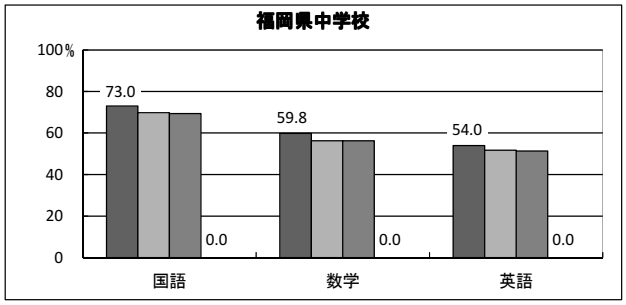
■　中学校回答状況



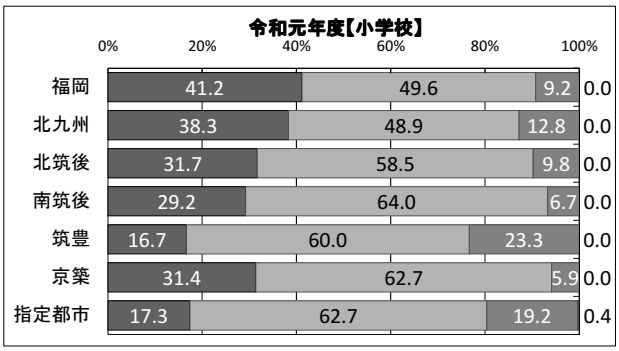


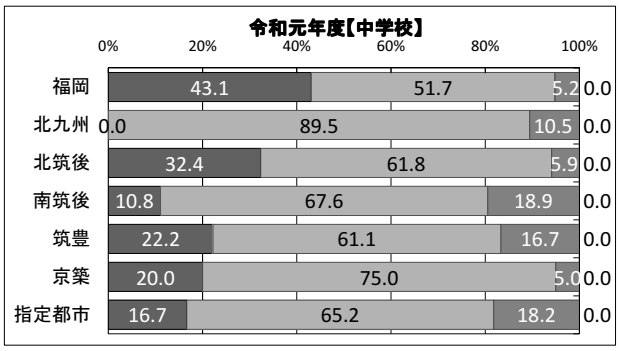
■　回答状況と教科の正答率のクロス分析





■　地区別回答状況





（２） 家庭学習

小 60・中 74	前年度までに、家庭学習の取組として、児童生徒に家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えましたか。（教科共通）

※ 平成２２年度から加えられた質問

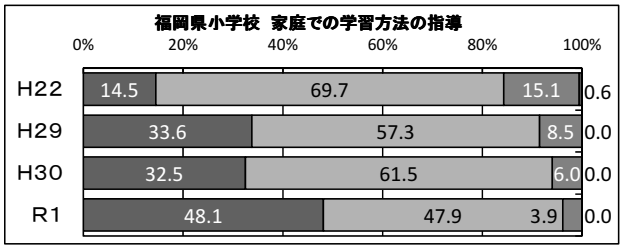
○ 本年度の、よく行ったと回答している学校の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに増加している。

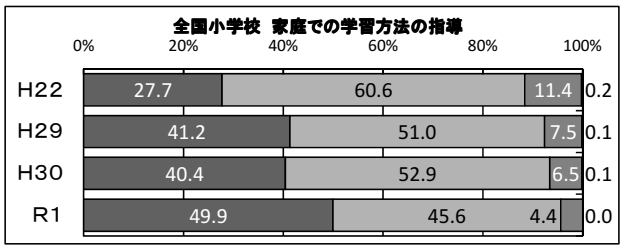
○ 本年度の、よく行ったと回答している学校の割合は、全国より、小学校は 1.8 ポイント下回り、中学校は 6.4 ポイント上回っている。

○ 本年度の、よく行ったと回答している学校の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 26.9 ポイント、中学校 31.3 ポイントである。

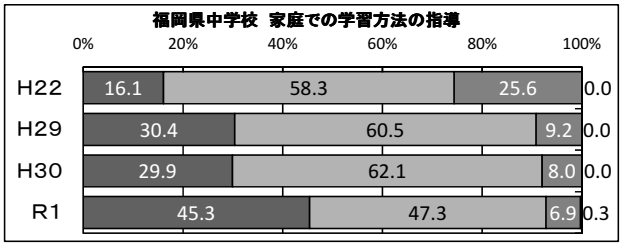
■ よく行った ■ どちらかといえば ■ あまり ■ 行っていない

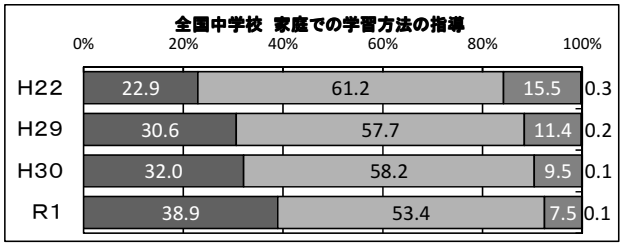
■ 小学校回答状況



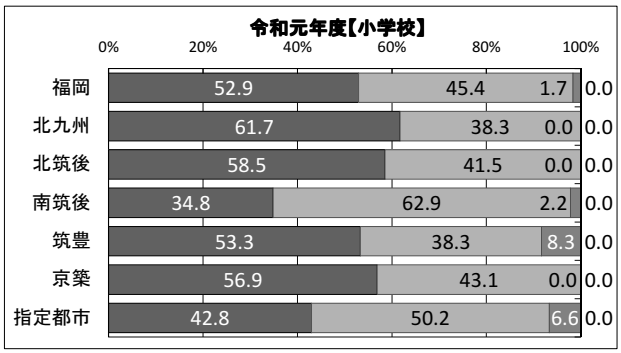


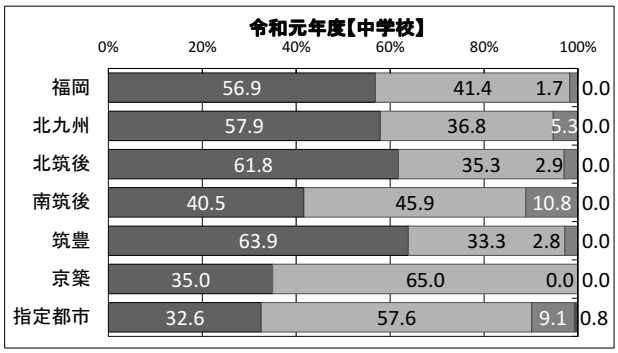
■ 中学校回答状況





■ 地区別回答状況





５　その他

（１）　就学援助

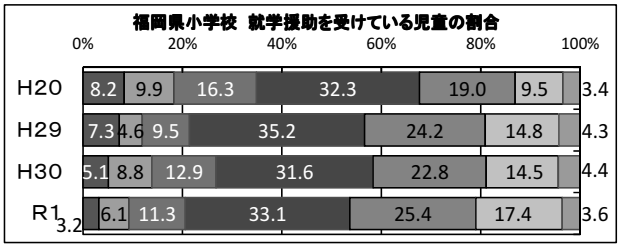
小６・中６	就学援助を受けている児童生徒の割合

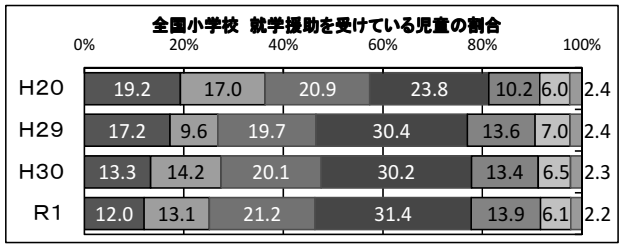
※　平成２０年度から加えられた質問

○　小学校、中学校ともに全国より、就学援助を受けている児童生徒の割合が大きい学校が多い。
○　本年度の、就学援助を受けている児童生徒の割合が大きい学校は、全教科区分において正答率が低い傾向にある。
○　本年度の、就学援助を受けている児童生徒の割合が 30%以上と回答している学校の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 49.5 ポイント、中学校 56.1 ポイントである。

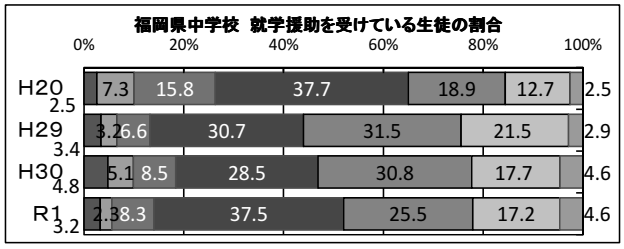
■受けていない　■５%未満　■１０%未満　■２０%未満　■３０%未満　■５０%未満　■５０%以上

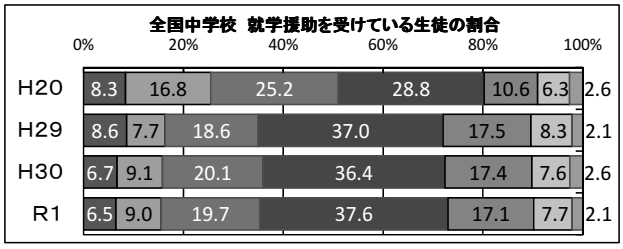
■　小学校回答状況



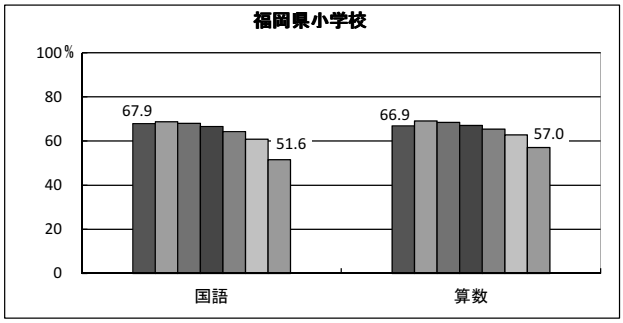


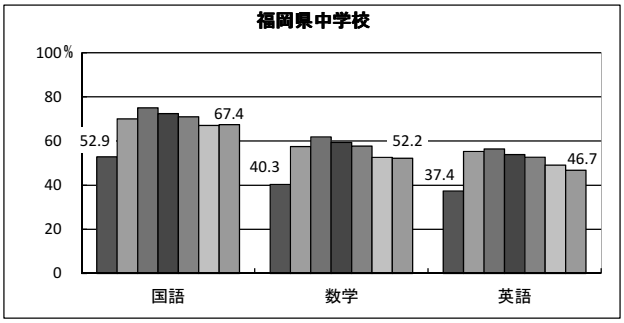
■　中学校回答状況



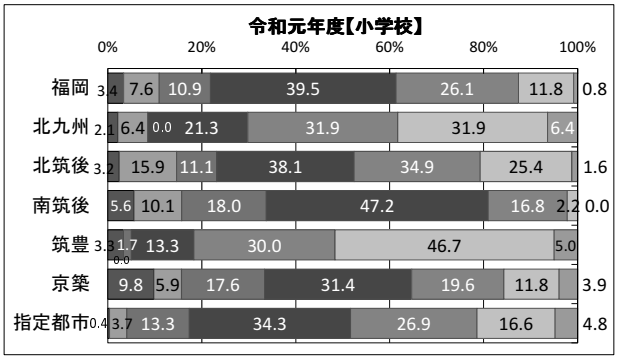


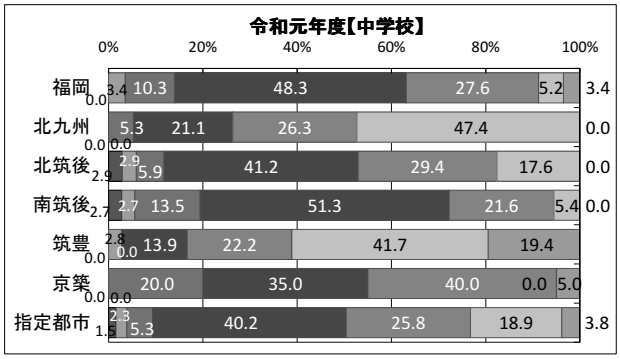
■　回答状況と教科の正答率のクロス分析





■　地区別回答状況





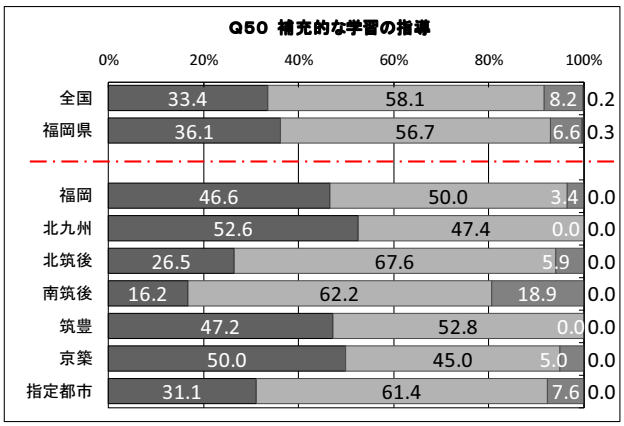
（２） 英語の指導方法

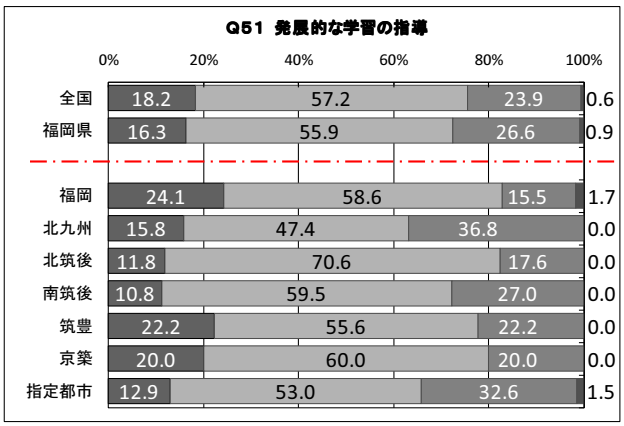
以下のグラフは、本年度初めて実施された中学校における外国語科（英語）の指導状況についての調査結果あり、その結果を全国、福岡県、各地区で比較して示したものである。

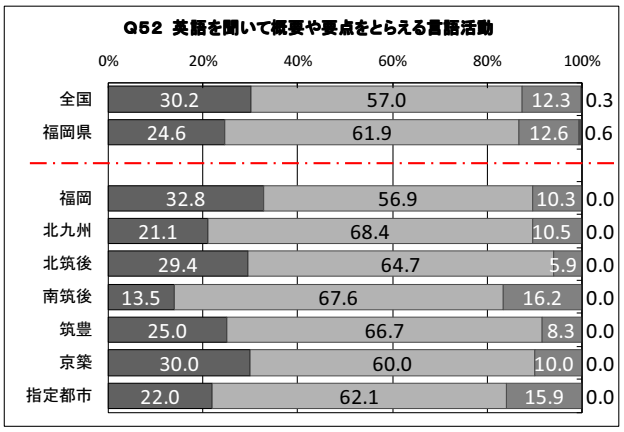
○ 全国と福岡県では、ほとんどの項目で大きな差は見られなかったが（最大7.1ポイント差※1）、地区間では、大きな差が見られた項目が多かった（最大36.4ポイント差※2）。

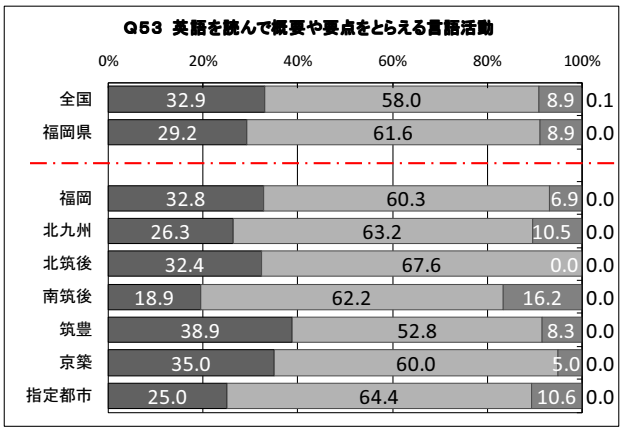
※１ Ｑ６１「ＡＬＴの活用頻度」の回答
※２ Ｑ５０「補充的な学習の指導」の回答

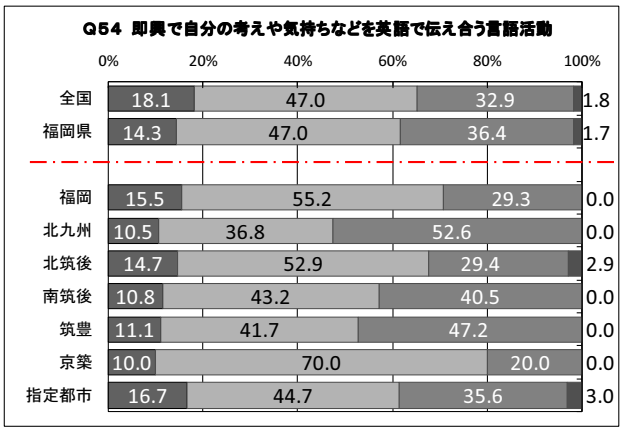
■ よく行った ■ どちらかといえば ■ あまり ■ 行っていない

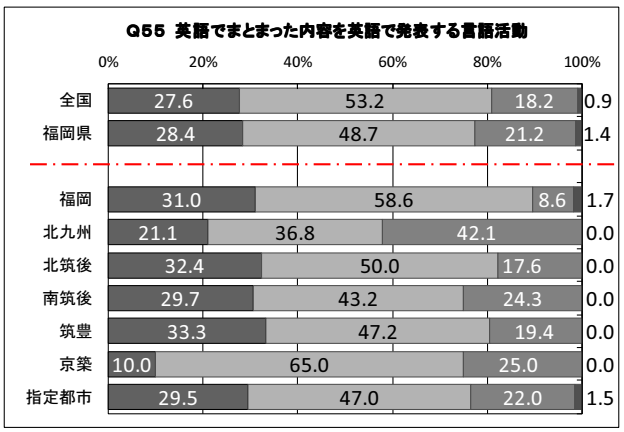


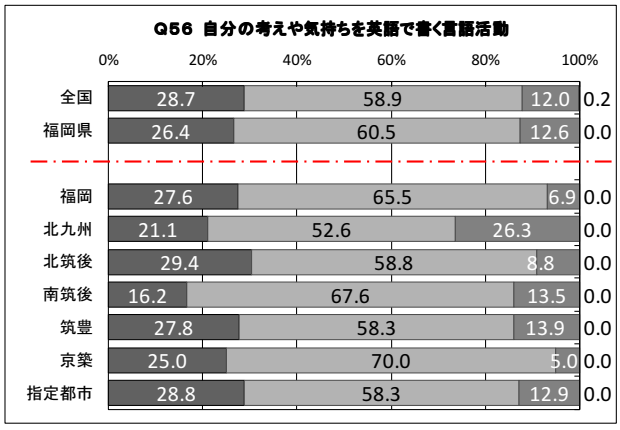


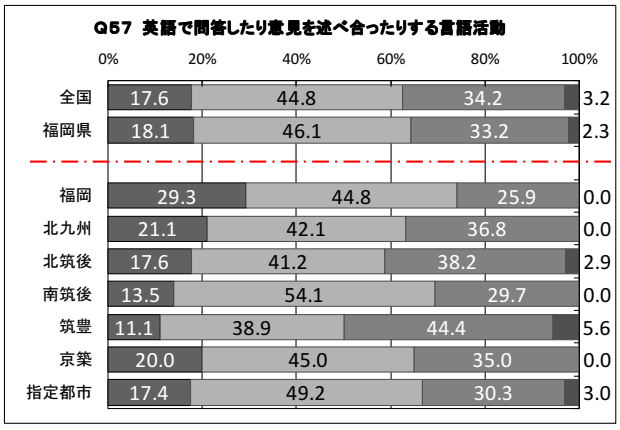


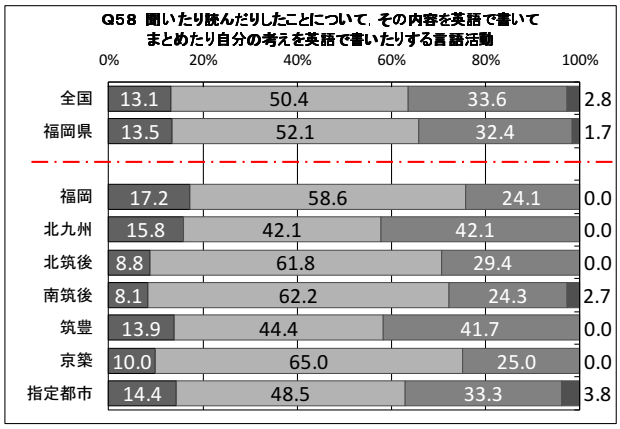


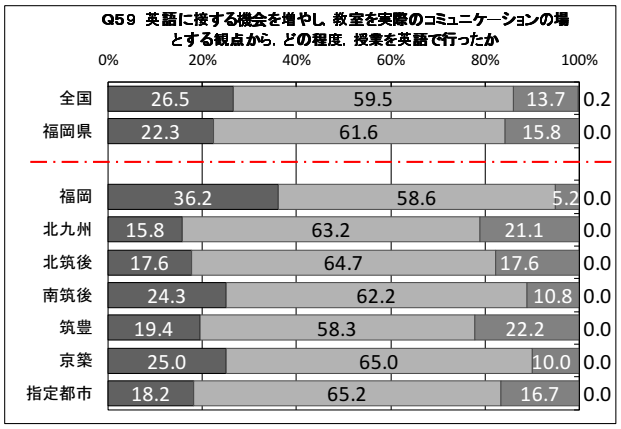


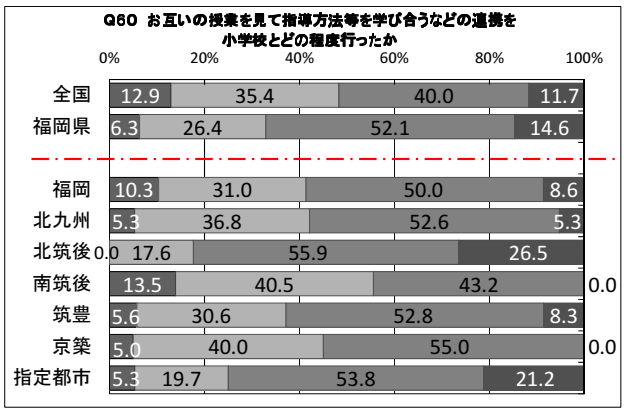


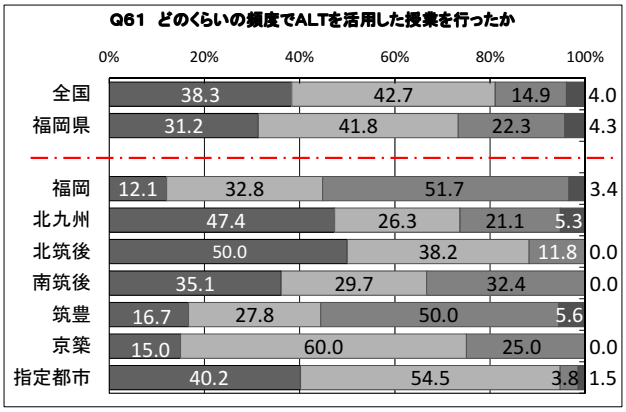




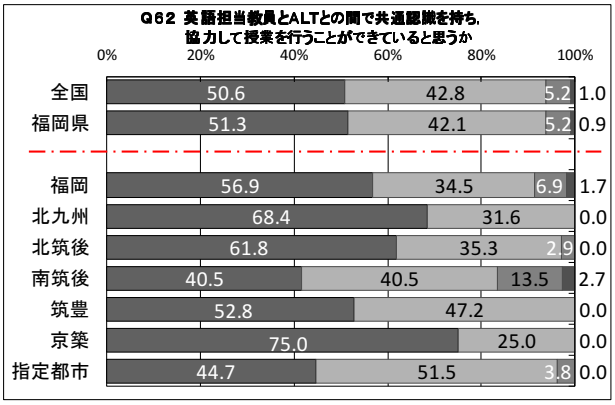








※ Q61は、左から「週に数回以上」「週1回程度」「月1回程度」「年数回以下」



※ Q62は、左から「そう思う」「どちらかといえば」「あまり」「思わない」

（３）　ＩＣＴの活用

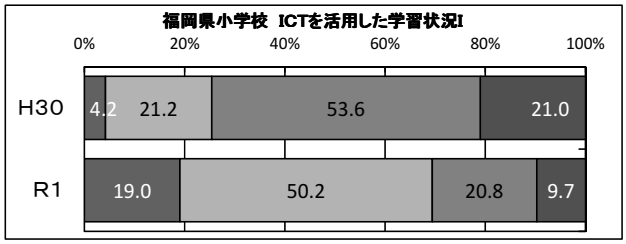
小 49・中 63	前年度に、教員が大型提示装置（プロジェクター、電子黒板など）などのＩＣＴを活用した授業を１クラス当たりどの程度行いましたか。

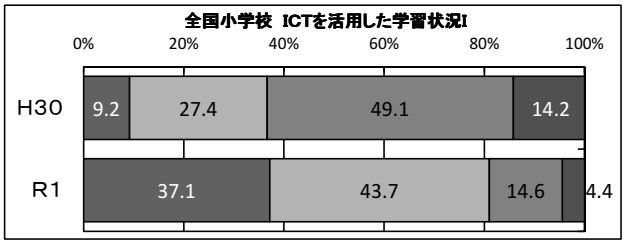
※　平成３０年度から加えられた質問

○　本年度の、週１回以上（ほぼ毎日を含む）と回答している学校の割合は、平成 30 年度より、小学校、中学校ともに増加している。
○　本年度の、週１回以上と回答している学校の割合は、全国より、小学校は 11.6 ポイント、中学校は 7.8 ポイント下回っている。
○　本年度の、週１回以上と回答している学校の割合の地区間の最大・最小の差は、小学校 29.7 ポイント、中学校 23.3 ポイントである。

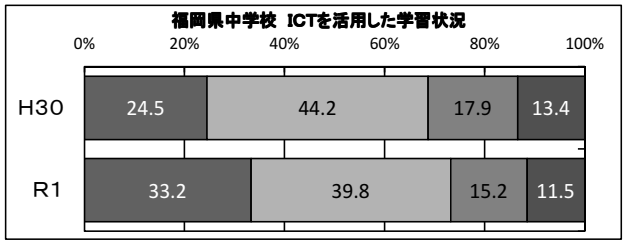
■ ほぼ毎日　■ 週１回以上　■ 月１回以上　■ 月１回未満

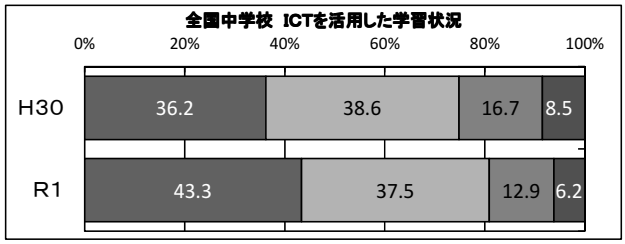
■　小学校回答状況



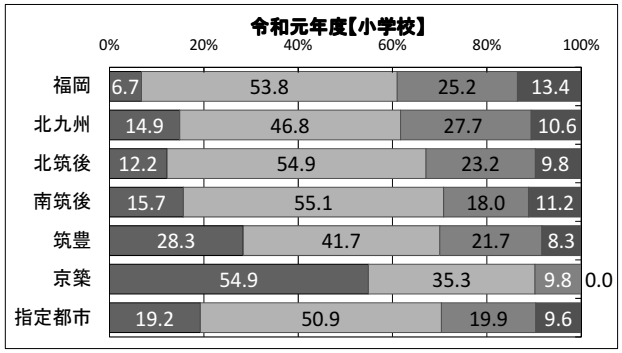


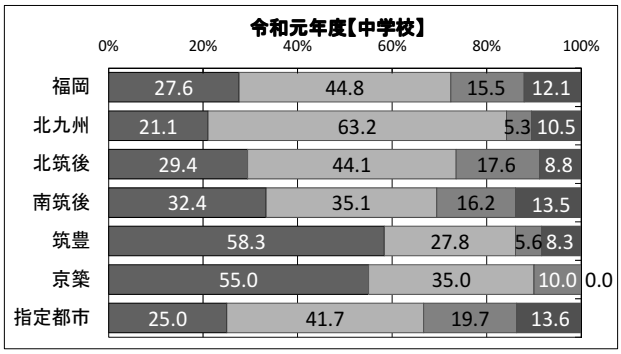
■　中学校回答状況





■　地区別回答状況





Ⅶ　児童生徒質問紙と学校質問紙の調査結果の比較分析

児童生徒質問紙と学校質問紙で共通及び関連する内容の質問について、本県における教師と児童生徒の認識の違いをみる。

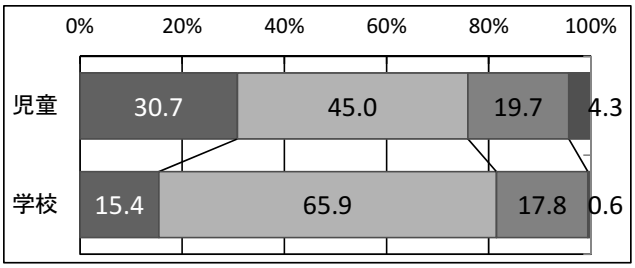
※　数字は、児童生徒質問紙及び学校質問紙中の質問番号

児童生徒質問紙	小 35 中 37	授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思う。
学校質問紙	小 32 中 33	児童生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができているか。

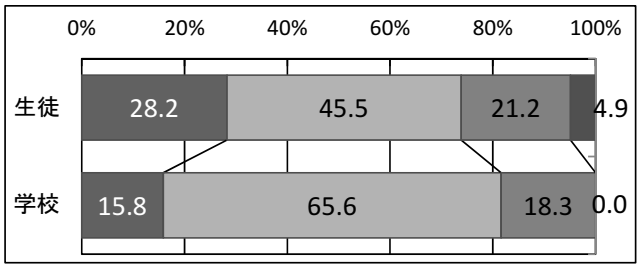
児童生徒質問紙　当てはまる　どちらかといえば　あまり　全く

学校質問紙　そう思う　どちらかといえば　あまり　そう思わない

■　小学校



■　中学校



○　当てはまると回答している割合は、児童が学校より 15.3 ポイント大きく、生徒が学校より 12.4 ポイント大きい。

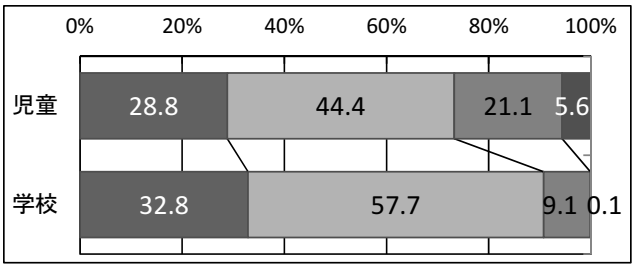
○　どちらかといえばを含む肯定的な回答の割合は、児童が学校より 5.6 ポイント小さく、生徒が学校より 7.7 ポイント小さい。

児童生徒質問紙	小 32 中 35	学級生活をよりよくするために学級会（学級活動）で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると思う。
学校質問紙	小 34 中 35	学級生活をよりよくするために、学級会（学級活動）で話し合い、互いのよさを生かして解決方法などを合意形成できるような指導を行っている。

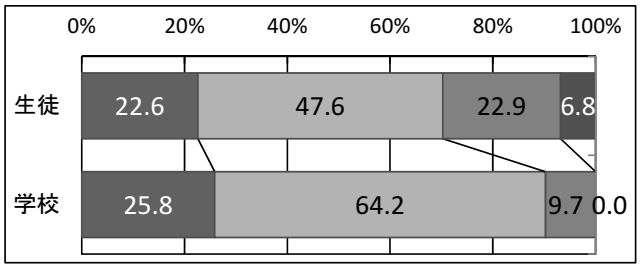
児童生徒質問紙　当てはまる　どちらかといえば　あまり　全く

学校質問紙　よくしている　どちらかといえば　あまり　全く

■　小学校



■　中学校



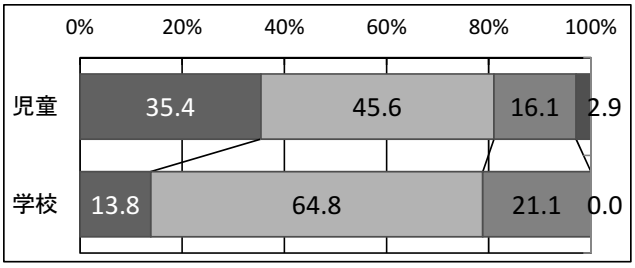
○　当てはまると回答している割合は、児童が学校より 4.0 ポイント小さく、生徒が学校より 3.2 ポイント小さい。

○　どちらかといえばを含む肯定的な回答の割合は、児童が学校より 17.3 ポイント小さく、生徒が学校より 19.8 ポイント小さい。

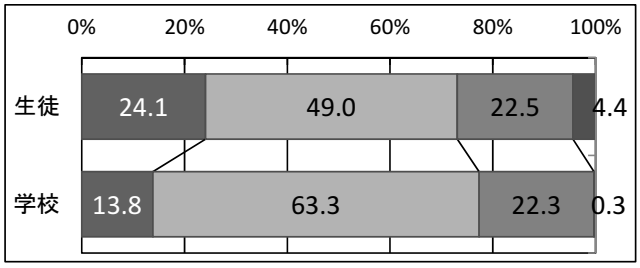
児童生徒質問紙	小 30 中 33	授業で学んだことを、ほかの学習に生かしている。
学校質問紙	小 38 中 38	各教科等で身に付けたことを、様々な課題の解決に生かすことができるような機会を設けたか。

児童生徒質問紙　当てはまる　どちらかといえば　あまり　全く
学校質問紙　よく行った　どちらかといえば　あまり　全く

■　小学校



■　中学校

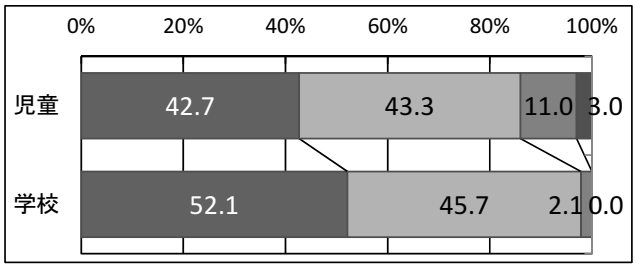


○　当てはまると回答している割合は、児童が学校より 21.6 ポイント大きく、生徒が学校より 10.3 ポイント大きい。
○　どちらかといえばを含む肯定的な回答の割合は、児童が学校より 2.4 ポイント大きく、生徒が学校より 4.0 ポイント小さい。

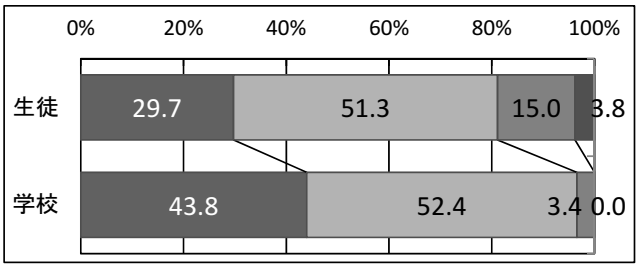
児童生徒質問紙	小 6 中 6	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。
学校質問紙	小 14 中 14	学校生活の中で、児童生徒一人一人のよい点や可能性を見付け評価する（褒めるなど）取組をどの程度行ったか。

児童生徒質問紙　当てはまる　どちらかといえば　あまり　全く
学校質問紙　よく行った　どちらかといえば　あまり　全く

■　小学校



■　中学校

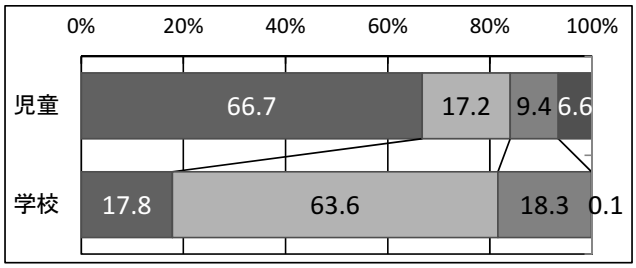


○　当てはまると回答している割合は、児童が学校より 9.4 ポイント小さく、生徒が学校より 14.1 ポイント小さい。
○　どちらかといえばを含む肯定的な回答の割合は、児童が学校より 11.8 ポイント小さく、生徒が学校より 15.2 ポイント小さい。

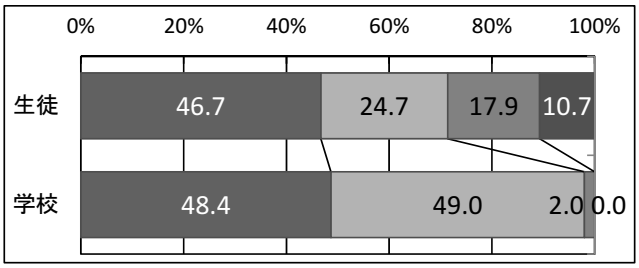
児童生徒質問紙	小 8 中 8	将来の夢や目標を持っている。
学校質問紙	小 11 中 11	将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をした。

児童生徒質問紙　当てはまる　どちらかといえば　あまり　全く
学校質問紙　よく行った　どちらかといえば　あまり　全く

■　小学校



■　中学校

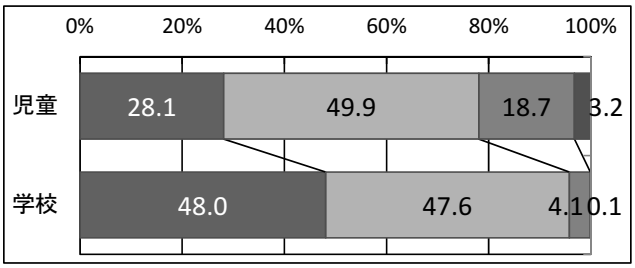


○　当てはまると回答している割合は、児童が学校より 48.9 ポイント大きく、生徒が学校より 1.7 ポイント小さい。
○　どちらかといえばを含む肯定的な回答の割合は、児童が学校より 2.5 ポイント大きく、生徒が学校より 26.0 ポイント小さい。

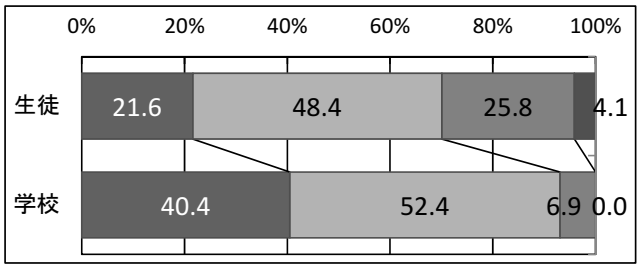
児童生徒質問紙	小 10 中 10	難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦していますか。
学校質問紙	小 12 中 12	学級全員で取り組んだり挑戦したりする課題やテーマを与えた。

児童生徒質問紙　当てはまる　どちらかといえば　あまり　全く
学校質問紙　よく行った　どちらかといえば　あまり　全く

■　小学校



■　中学校



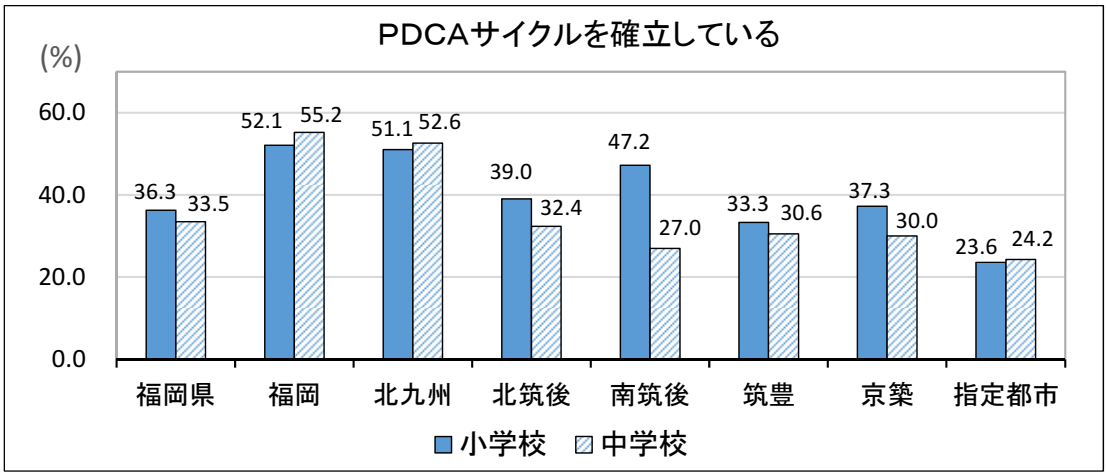
○　当てはまると回答している割合は、児童が学校より 19.9 ポイント小さく、生徒が学校より 18.8 ポイント小さい。
○　どちらかといえばを含む肯定的な回答の割合は、児童が学校より 17.6 ポイント小さく、生徒が学校より 22.8 ポイント小さい。

Ⅷ　小学校と中学校の質問紙回答状況を比較分析

(1)　学校質問紙

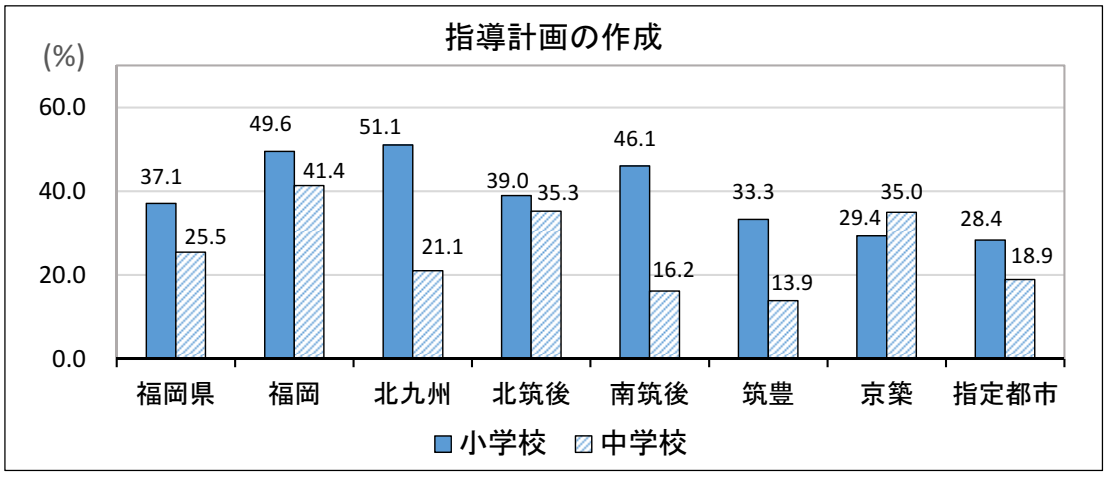
小 17 中 17	児童生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のＰＤＣＡサイクルを確立していますか。

○　県全体で「よくしている」と回答した学校の割合を小学校と中学校で比較すると、小学校が中学校を上回っている。
○　各地区で「よくしている」と回答した学校の割合を小学校と中学校で比較すると、南筑後は、小学校が中学校を約 20 ポイント上回っている。



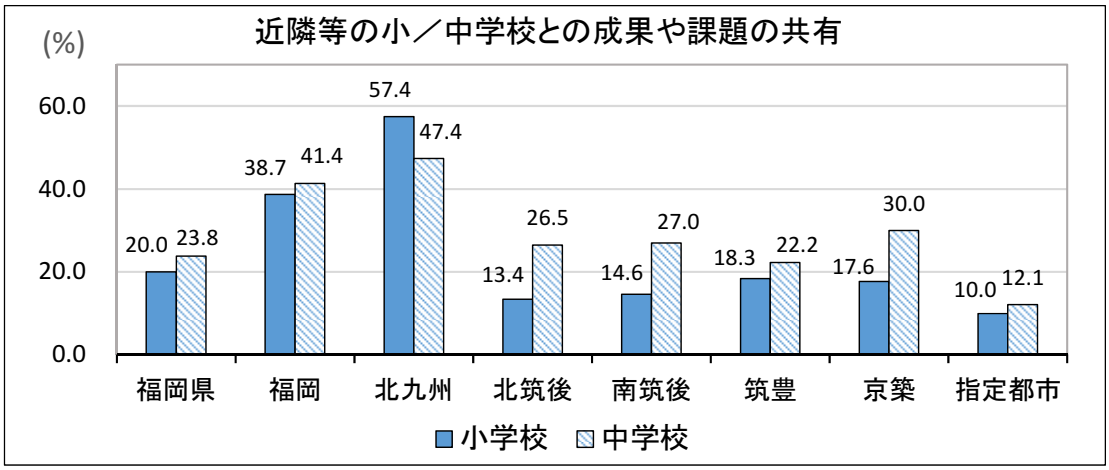
小 15 中 15	指導計画の作成に当たっては、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していますか。

○　県全体で「よくしている」と回答した学校の割合を小学校と中学校で比較すると、小学校が中学校を上回っている。
○　各地区で「よくしている」と回答した学校の割合を小学校と中学校で比較すると、北九州、南筑後は小学校が中学校を約 30 ポイント、筑豊は約 20 ポイント上回っている。



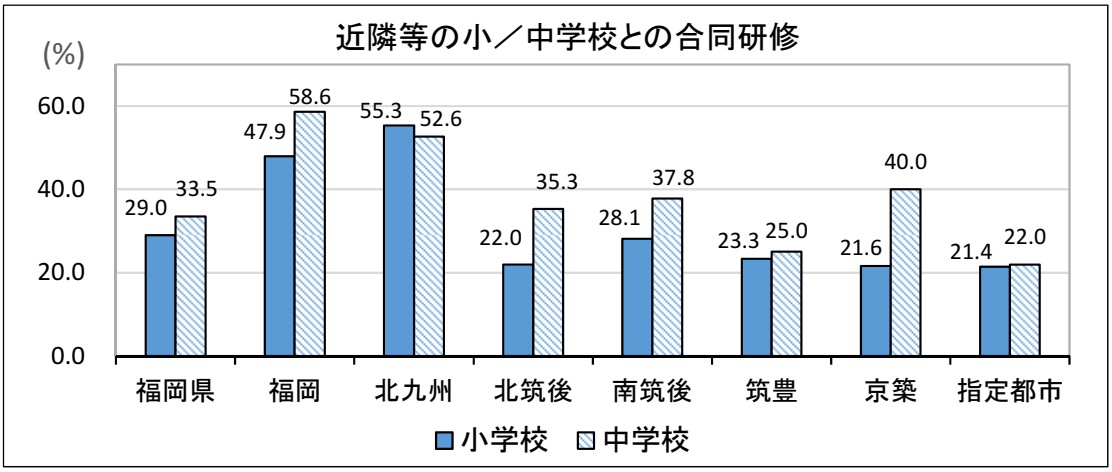
小 53 中 67	平成３０年度の全国学力・学習状況調査の分析結果について、近隣等の小／中学校と成果や課題を共有しましたか。

○　県全体で「よく行った」と回答した学校の割合を小学校と中学校で比較すると、中学校が小学校を上回っている。
○　各地区で「よく行った」と回答した学校の割合を小学校と中学校で比較すると、北九州以外は、中学校が小学校を上回っている。



小 52 中 66	前年度までに、近隣等の小／中学校と、授業研究を行うなど、合同して研修を行いましたか。

○　県全体で「よく行った」と回答した学校の割合を小学校と中学校で比較すると、中学校が小学校を上回っている。
○　各地区で「よく行った」と回答した学校の割合を小学校と中学校で比較すると、北九州以外は、中学校が小学校を上回っている。



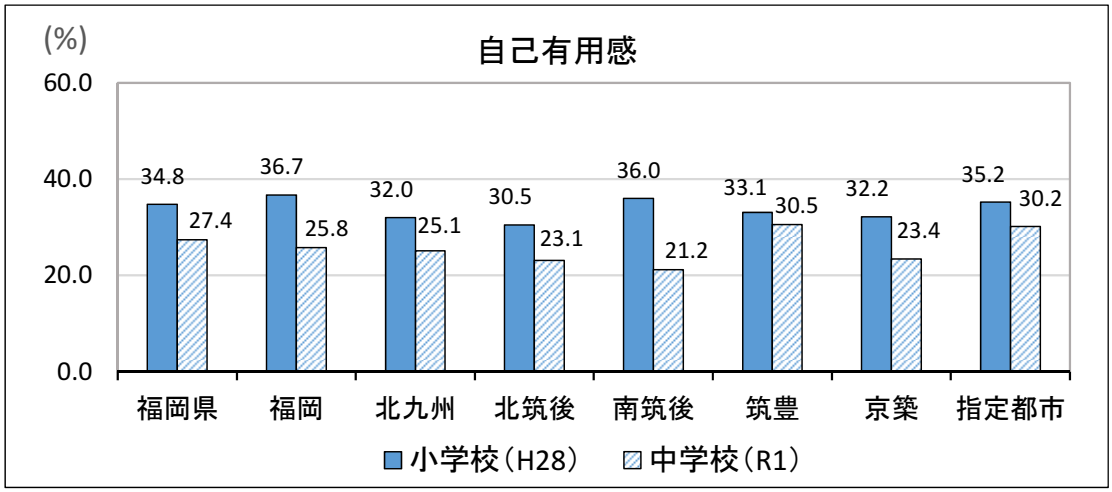
(2)　児童生徒質問紙

※　平成 28 年度（小６）と本年度（中３）の同一集団を比較しており、質問番号は実施年度の番号である。

小 6 中 5	自分には、よいところがあると思いますか。

○　県全体で「そう思う」と回答した同一児童生徒の割合を小学校と中学校で比較すると、中学校段階で下がっている。

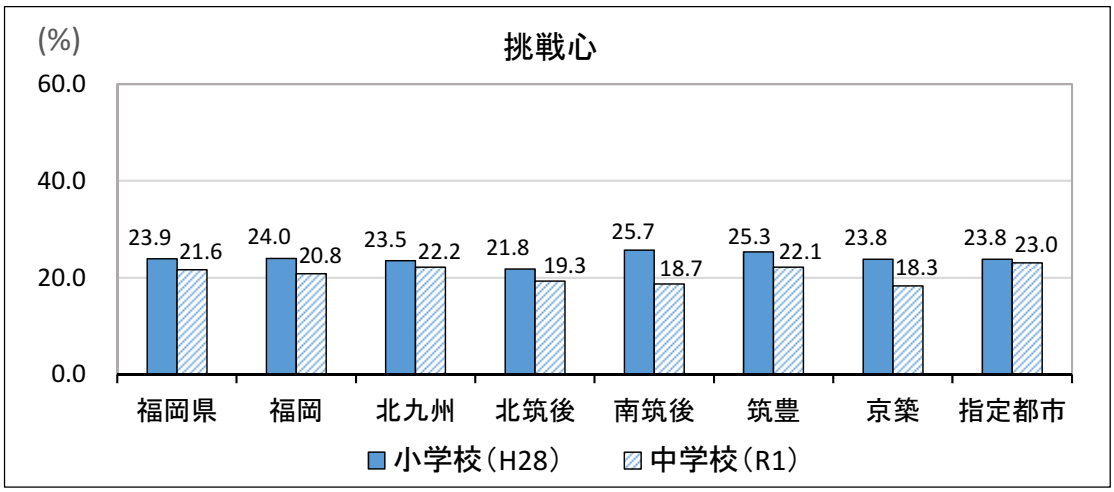
○　各地区で「そう思う」と回答した同一児童生徒の割合を小学校と中学校で比較すると、全ての地区において、中学校段階で下がっている。



小　5 中 10	難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦していますか。

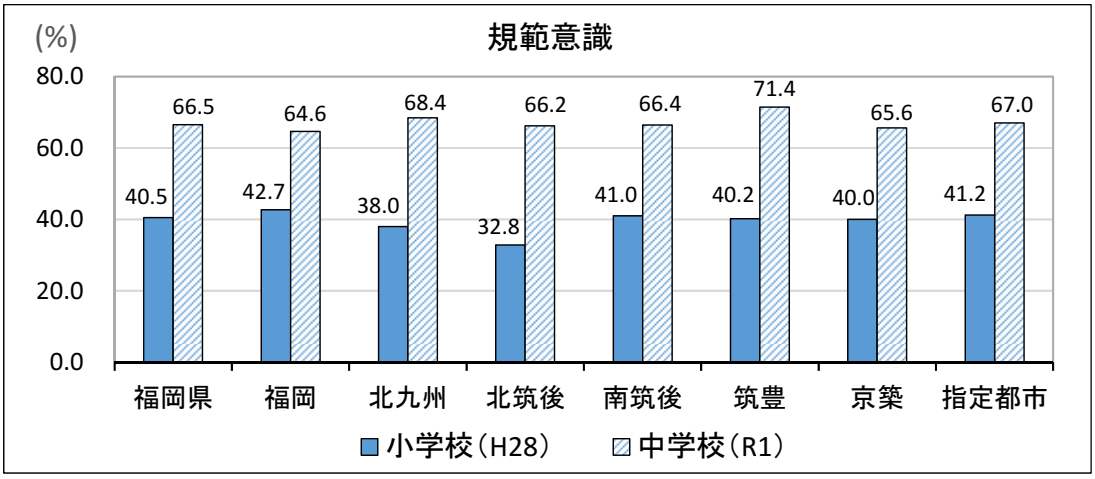
○　県全体で「当てはまる」と回答した同一児童生徒の割合を小学校と中学校で比較すると、中学校段階で下がっている。

○　各地区で「当てはまる」と回答した同一児童生徒の割合を小学校と中学校で比較すると、全ての地区において、中学校段階で下がっている。



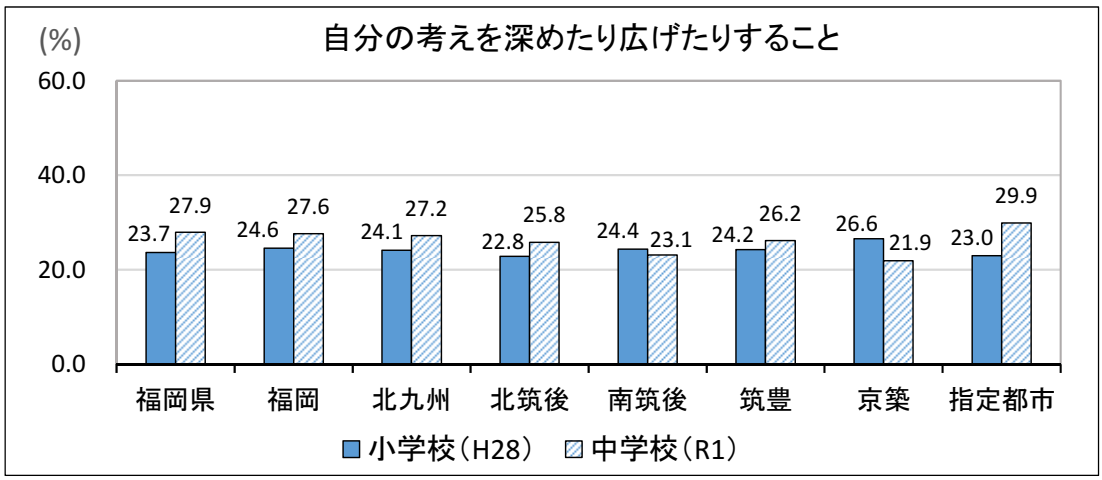
小 39 中 13	学校のきまり（規則）を守っていますか。

○　県全体で「当てはまる」と回答した同一児童生徒の割合を小学校と中学校で比較すると、中学校段階で上がっている。
○　各地区で「当てはまる」と回答した同一児童生徒の割合を小学校と中学校で比較すると、全ての地区において、中学校段階で上がっている。



小 59 中 32	学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。

○　県全体で「そう思う」と回答した同一児童生徒の割合を小学校と中学校で比較すると、中学校段階で上がっている。
○　各地区で「そう思う」と回答した同一児童生徒の割合を小学校と中学校で比較すると、福岡、北九州、北筑後、筑豊、指定都市において、中学校段階で上がっている。



令和元年度 福岡県学力調査

Ⅸ　調査結果

１　調査の概要

（1）調査の目的

①　義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、県内各地域における児童生徒の学力の状況をきめ細かく把握・分析することにより、教育及び教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

②　各市町村（学校組合）教育委員会（指定都市を除く。）、学校が自らの教育及び教育施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルの維持・向上を支援する。

③　各学校が、児童生徒の学力の状況を把握し、児童生徒への教育指導や学習状況の改善等に役立てる。

（2）調査の対象学年（指定都市を除く。）

○公立の小学校第５学年、義務教育学校前期課程第５学年、特別支援学校小学部第５学年

○公立の中学校第１・２学年、義務教育学校後期課程第１・２学年、中等教育学校前期課程第１・２学年、特別支援学校中学部第１・２学年

※　当該学年における当該教科の目標及び内容に準じて指導を受けている場合は、原則として調査の対象とする。

（3）調査の教科

○小学校第５学年、義務教育学校前期課程第５学年、特別支援学校小学部第５学年　　国語、算数（１教科４５分で実施）

○中学校第１・２学年、義務教育学校後期課程第１・２学年、中等教育学校前期課程第１・２学年、特別支援学校中学部第１・２学年　　国語、数学（１教科５０分で実施）

（4）調査の内容

主として「基礎」に関する問題	主として「活用」に関する問題
・身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容 ・実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 など	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力などにかかわる内容 ・様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などにかかわる内容 など

（5）調査日

令和元年６月１８日（火）

(6) ６月１８日に調査を実施した県内公立学校・児童生徒数

○　小学校

学年	学校数（校）	児童数（人）	
		国語	算数
第５学年	４５４	２３，４５９	２３，４７２

○　中学校

学年	学校数（校）	生徒数（人）	
		国語	数学
第１学年	２１５	２２，２７９	２２，２９６
第２学年	２１７	２０，８６９	２０，８８１

※学校数は、分校を含む。

(7) 調査問題の内容

○　調査範囲等

・　原則として、当該学年の前学年までの指導事項とする。

・　各教科の問題は、原則として、主として「基礎」に関する問題及び、主として「活用」に関する問題とする。問題数は下表のとおりである。

	小学校第５学年		中学校第１学年		中学校第２学年	
	国語	算数	国語	数学	国語	数学
主として「基礎」に関する問題	１１	１６	１３	１６	１６	１６
主として「活用」に関する問題	7	8	7	7	6	7
問題数合計	１８	２４	２０	２３	２２	２３

○　設問（解答）形式

「選択式」、「短答式」及び「記述式」の３形式とする。

＊選択式：選択肢から選ぶ（基本は４択）問題。

＊短答式：語句などを答える問題。グラフや図を描く問題も含む。

＊記述式：文で答える問題。考え方の筋道を図や式で答える問題も含む。

なお、形式ごとの問題数は下表のとおりである。

	小学校第５学年		中学校第１学年		中学校第２学年	
	国語	算数	国語	数学	国語	数学
選択式	１２	１２	１５	8	１１	8
短答式	4	9	3	１１	6	１２
記述式	2	3	2	4	5	3

2 調査結果の概要

(1) 県全体及び地区別の平均正答率、最大・最小の差

		小学校第5学年						中学校第1学年						中学校第2学年					
		国語			算数			国語			数学			国語			数学		
		全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用
県全体の平均正答率（指定都市を除く）		66.3	73.7	54.6	59.0	65.7	45.7	63.2	67.2	56.0	63.9	70.0	49.8	52.2	51.2	54.9	57.1	58.6	53.6
地区	福岡	69.0	76.4	57.5	61.7	68.2	48.5	65.5	69.2	58.5	66.1	72.2	52.3	54.4	53.3	57.3	60.7	62.4	56.7
	北九州	64.7	72.2	52.9	56.7	63.9	42.1	61.0	65.3	53.0	61.0	67.2	46.8	50.2	49.3	52.5	52.0	53.1	49.4
	北筑後	64.7	71.6	53.8	57.8	64.4	44.6	62.4	66.2	55.5	63.3	69.6	49.1	51.0	49.7	54.3	55.5	56.9	52.3
	南筑後	65.6	73.3	53.5	59.1	65.8	45.7	62.6	66.6	55.1	62.9	69.3	48.2	50.7	49.7	53.1	55.7	57.4	51.9
	筑豊	61.2	69.2	48.7	54.1	60.8	40.9	57.7	62.2	49.2	58.2	64.6	43.5	47.2	46.6	48.8	49.4	50.4	46.9
	京築	63.9	71.3	52.2	56.4	63.6	42.0	60.3	64.2	53.1	60.3	66.6	46.2	50.2	49.7	51.5	53.6	55.0	50.4
最大･最小の差		7.8	7.2	8.8	7.6	7.4	7.6	7.8	7.0	9.3	7.9	7.6	8.8	7.2	6.7	8.5	11.3	12.0	9.8

(2) 全体の状況

○　算数・数学は、「基礎」及び「活用」ともに学年が上がるにつれて、地区間の差が大きくなっている。

○　地区間の差は、中学校第２学年の数学において「活用」に関する問題より「基礎」に関する問題の方が大きくなっているが、その他は、「基礎」に関する問題より「活用」に関する問題の方が大きい。

(3) 小学校の状況

○　「全体」の地区間の差は、算数より国語の方が大きい。

○　「基礎」に関する問題についての地区間の差は、国語より算数の方が大きい。

○　「活用」に関する問題についての地区間の差は、算数より国語の方が大きい。

○　最も地区間の差が大きいのは、国語の「活用」に関する問題である。

(4) 中学校の状況

○　「全体」の地区間の差は、第１学年、第２学年ともに国語より数学の方が大きい。

○　「基礎」に関する問題についての地区間の差は、第１学年、第２学年ともに国語より数学の方が大きい。

○　「活用」に関する問題についての地区間の差は、第１学年では数学より国語の方が大きく、第２学年では国語より数学の方が大きい。

○　最も地区間の差が大きいのは、第２学年数学の「基礎」に関する問題である。

(5) 地区別の標準化得点

※　標準化得点は、県の平均正答数を１００としたときの各地区の平均得点。
※　網掛け部分は、開始年度の値と比較して、本年度の値が向上しているもの。
※　中学校第１学年は、H29 年度から実施のため H27、H28 の標準化得点及び差の数値を示していない。

（福岡地区）

	小学校第5学年						中学校第1学年						中学校第2学年					
	国語			算数			国語			数学			国語			数学		
	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用
H27	103.2	102.7	104.2	104.2	103.2	107.8	―	―	―	―	―	―	104.1	104.0	104.6	106.3	105.6	109.1
H28	103.6	102.5	106.9	103.6	103.3	104.5	―	―	―	―	―	―	103.4	103.1	104.0	105.7	106.0	104.5
H29	103.1	101.9	107.6	103.2	102.4	105.8	102.5	102.0	104.1	102.7	102.5	103.3	103.2	102.7	104.7	105.5	105.3	105.8
H30	103.9	102.4	110.0	103.4	101.8	105.0	103.8	103.2	105.3	102.7	102.6	106.5	104.1	104.3	103.4	107.1	107.3	106.7
R1	104.2	103.7	105.3	104.2	103.8	105.4	104.0	103.4	105.1	103.4	102.7	105.7	104.3	103.7	103.0	106.9	106.4	105.3
差	1.0	1.0	1.1	0.0	0.6	−2.4	1.5	1.4	1.0	0.7	0.2	2.4	0.2	−0.3	−1.6	0.6	0.8	−3.8

（北九州地区）

	小学校第5学年						中学校第1学年						中学校第2学年					
	国語			算数			国語			数学			国語			数学		
	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用
H27	96.0	96.7	94.5	93.9	94.7	91.2	―	―	―	―	―	―	95.9	96.7	93.5	91.9	93.2	86.4
H28	95.9	97.7	90.4	97.0	97.6	95.3	―	―	―	―	―	―	97.7	97.9	97.0	93.4	93.3	93.5
H29	94.8	96.9	87.7	96.1	97.4	91.8	97.5	98.2	94.8	97.0	97.3	96.0	98.5	99.5	95.0	90.5	91.0	89.4
H30	96.1	96.3	95.0	96.0	97.3	90.0	97.0	97.9	97.4	95.9	97.4	96.8	95.9	96.7	96.6	90.2	91.5	86.7
R1	98.3	97.5	97.4	95.8	97.1	91.9	96.8	97.7	94.9	95.2	96.4	94.3	95.7	96.3	93.9	91.6	90.4	92.1
差	2.3	0.8	2.9	1.9	2.4	0.7	−0.7	−0.5	0.1	−1.8	−0.9	−1.7	−0.2	−0.4	0.4	−0.3	−2.8	5.7

（北筑後地区）

	小学校第5学年						中学校第1学年						中学校第2学年					
	国語			算数			国語			数学			国語			数学		
	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用
H27	98.5	98.1	99.3	98.4	99.1	95.8	―	―	―	―	―	―	99.4	99.2	100.0	98.7	98.8	98.2
H28	97.7	98.3	95.7	98.5	98.8	97.4	―	―	―	―	―	―	98.7	99.0	97.7	98.3	98.4	97.7
H29	97.3	97.8	95.5	97.3	98.0	94.9	99.0	99.0	98.9	98.7	98.7	98.7	97.7	97.7	97.7	99.9	100.0	99.8
H30	96.1	95.1	100.0	98.7	99.1	97.5	99.2	100.0	100.0	99.3	100.0	103.2	97.5	97.8	100.0	98.2	98.8	96.7
R1	97.5	97.5	100.0	97.9	98.1	97.3	99.2	98.9	100.0	99.3	99.1	97.1	97.4	97.6	100.0	97.7	96.8	97.4
差	−1.0	−0.6	0.7	−0.5	−1.0	1.5	0.2	−0.1	1.1	0.6	0.4	−1.6	−2.0	−1.6	0.0	−1.0	−2.0	−0.8

（南筑後地区）

	小学校第5学年						中学校第1学年						中学校第2学年					
	国語			算数			国語			数学			国語			数学		
	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用
H27	101.2	101.7	100.4	101.1	100.9	101.6	―	―	―	―	―	―	97.5	97.8	96.8	98.9	99.0	98.5
H28	100.8	100.4	102.2	100.6	100.2	101.5	―	―	―	―	―	―	99.1	99.1	99.1	98.4	97.8	100.8
H29	102.7	102.5	103.5	102.4	102.0	104.0	98.6	98.7	98.3	98.9	98.9	99.0	97.5	98.0	95.6	95.6	95.6	95.6
H30	101.0	101.2	100.0	100.0	99.1	100.0	97.7	98.9	94.7	98.6	99.1	100.0	97.5	98.9	96.6	96.4	96.3	96.7
R1	99.2	100.0	97.4	100.0	100.0	100.0	99.2	100.0	100.0	98.6	99.1	97.1	96.5	97.6	97.0	97.7	97.9	94.7
差	−2.0	−1.7	−3.0	−1.1	−0.9	−1.6	0.6	1.3	1.7	−0.3	0.2	−1.9	−1.0	−0.2	0.2	−1.2	−1.1	−3.8

（筑豊地区）

	小学校第5学年						中学校第1学年						中学校第2学年					
	国語			算数			国語			数学			国語			数学		
	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用
H27	93.6	94.8	90.9	91.9	93.4	86.4	―	―	―	―	―	―	91.5	91.9	90.4	87.0	88.5	80.5
H28	93.6	95.3	88.2	92.5	93.3	90.1	―	―	―	―	―	―	90.3	90.9	88.5	85.2	85.1	85.5
H29	96.1	98.4	88.1	94.2	95.6	89.2	94.0	95.3	88.9	93.3	94.1	90.8	91.2	91.7	89.8	87.1	87.9	85.4
H30	98.0	98.8	95.0	94.0	95.5	87.5	91.7	92.6	89.5	90.5	92.2	90.3	89.3	90.2	89.7	86.6	87.8	83.3
R1	92.4	93.8	89.5	91.5	92.4	89.2	91.3	93.1	87.2	91.2	92.0	85.7	90.4	91.5	87.9	87.0	86.2	86.8
差	−1.2	−1.0	−1.4	−0.4	−1.0	2.8	−2.7	−2.2	−1.7	−2.1	−2.1	−5.1	−1.1	−0.4	−2.5	0.0	−2.3	6.3

（京築地区）

	小学校第5学年						中学校第1学年						中学校第2学年					
	国語			算数			国語			数学			国語			数学		
	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用	全体	基礎	活用
H27	97.7	97.9	97.1	97.5	98.5	94.2	―	―	―	―	―	―	96.4	96.6	95.8	91.4	92.0	88.8
H28	98.3	99.0	96.1	97.0	96.4	98.4	―	―	―	―	―	―	96.5	96.3	96.8	95.1	94.8	96.4
H29	94.7	95.6	91.7	96.5	96.4	96.8	97.1	97.8	94.5	97.1	97.4	95.9	98.6	99.5	95.5	93.4	94.4	91.1
H30	96.1	97.6	95.0	97.3	97.3	95.0	97.0	96.8	94.7	95.9	97.4	93.5	95.1	95.7	100.0	93.8	95.1	90.0
R1	96.6	96.3	97.4	95.1	97.1	91.9	96.0	96.6	94.9	94.6	94.6	91.4	95.7	96.3	93.9	93.9	93.6	92.1
差	−1.1	−1.6	0.3	−2.4	−1.4	−2.3	−1.1	−1.2	0.4	−2.5	−2.8	−4.5	−0.7	−0.3	−1.9	2.5	1.6	3.3

（6）各地区の同一集団（本年度中学校第２学年）の標準化得点の推移

※　グラフは、県平均を１００とした場合の同一集団標準化得点である。

※　以下は、H28（小５）と R1（中２）の推移を分析した内容である。

○　福岡地区は、算数・数学Ａが上昇傾向、国語Ａ、算数・数学Ｂがほぼ横ばい傾向、国語Ｂが下降傾向である。

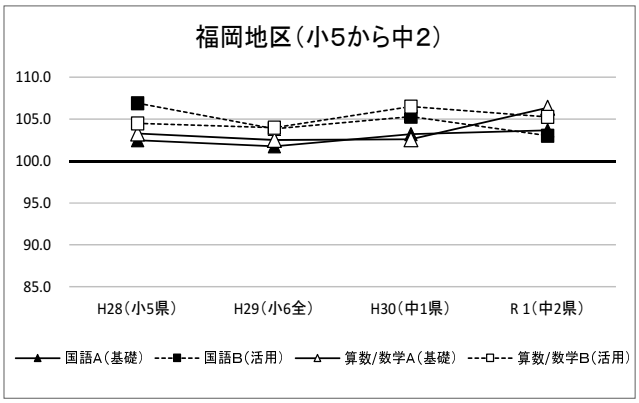
○　北九州地区は、国語Ｂが上昇傾向、国語Ａがほぼ横ばい傾向、算数・数学Ａ・Ｂが下降傾向である。

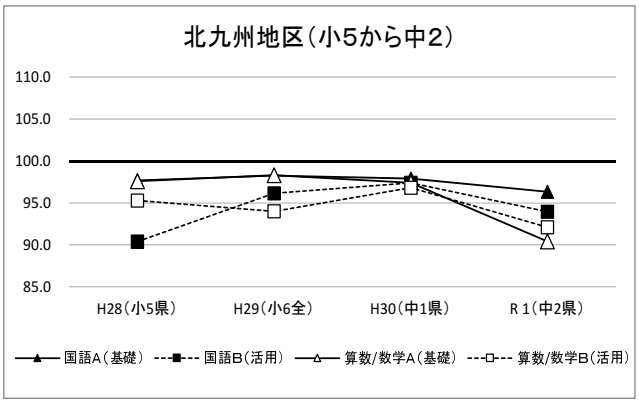
○　北筑後地区は、国語Ｂが上昇傾向、国語Ａ、算数・数学Ｂがほぼ横ばい傾向、算数・数学Ａが下降傾向である。

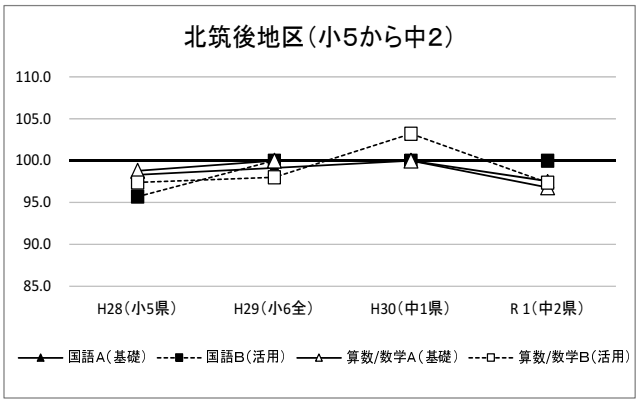
○　南筑後は、国語Ａ・Ｂ、算数・数学Ａ・Ｂが下降傾向である。

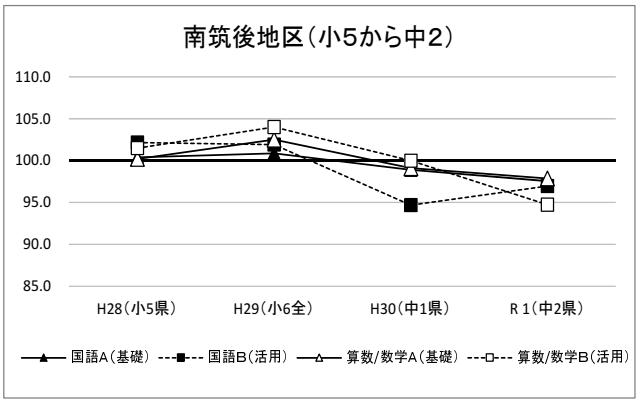
○　筑豊は、国語Ｂがほぼ横ばい傾向、国語Ａ、算数・数学Ａ・Ｂが下降傾向である。

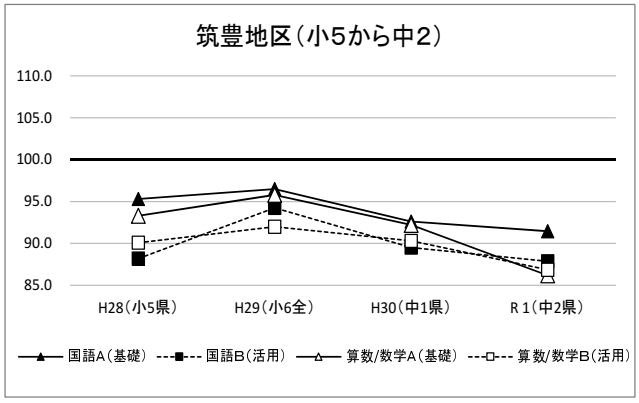
○　京築は、国語Ａ・Ｂ、算数・数学Ａ・Ｂが下降傾向である。

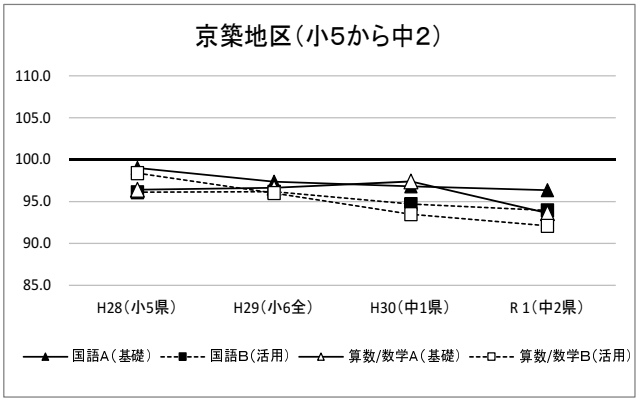






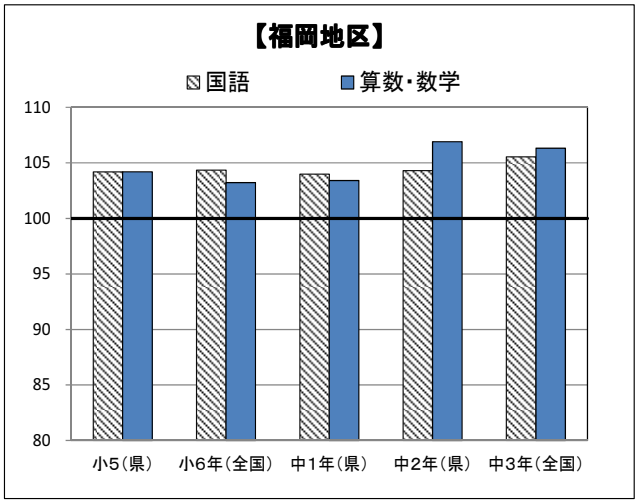


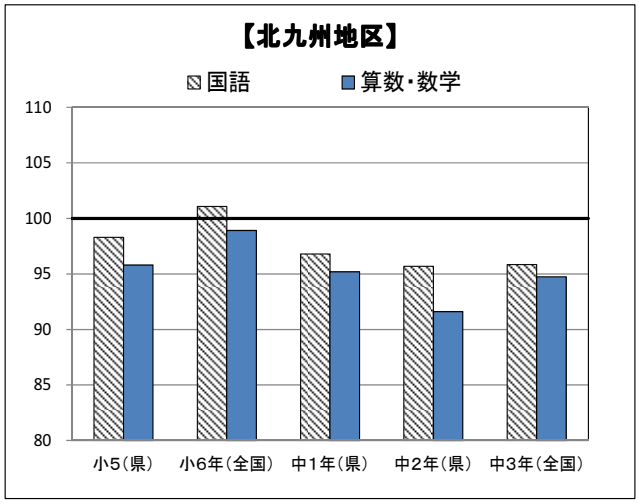


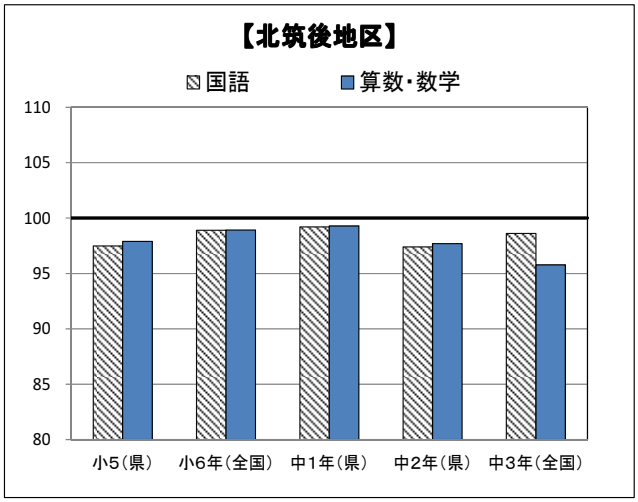


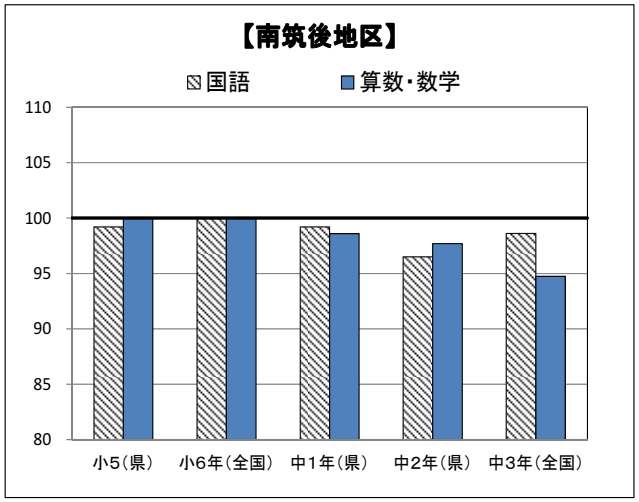
（7）県平均を１００とした場合の全国学力・学習状況調査と県学力調査の各地区の標準化得点

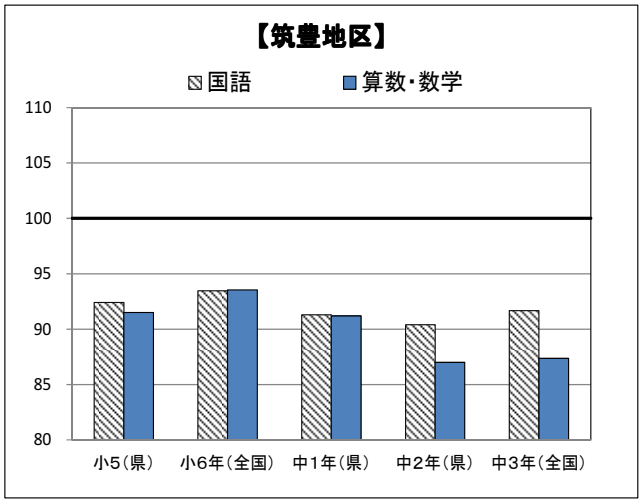
○　福岡地区の全学年全教科、北九州地区の小６国語、南筑後地区の小５算数、小６国語・算数は、県平均に達している。

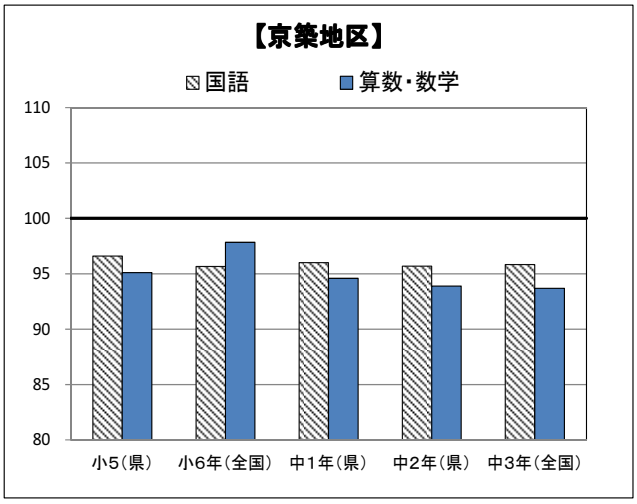












3 各学年の調査結果

（1）小学校第５学年国語

○　教科全体では、期待正答率 64.2%に対して平均正答率 66.3%であり、2.1 ポイント上回っている。
○　問題形式別に見ると、期待正答率を「基礎」では、4.2 ポイント上回り、「活用」では、1.1 ポイント下回っている。
○　評価の観点別に見ると、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」及び「言語についての知識・理解・技能」では、期待正答率をそれぞれ 2.5、2.9、0.8、4.8 ポイント上回っている。
○　解答形式別に見ると、「選択式」及び「短答式」では、期待正答率をそれぞれ 3.6、2.0 ポイント上回り、「記述式」では、6.8 ポイント下回っている。
○　領域別に見ると、「話すこと・聞くこと」及び「読むこと」では、期待正答率をそれぞれ 6.3、1.7 ポイント下回り、「書くこと」及び「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」では、それぞれ 5.1、4.8 ポイント上回っている。

■　教科全体と「基礎」・「活用」問題形式別、評価の観点別、解答形式別の正答率（%）

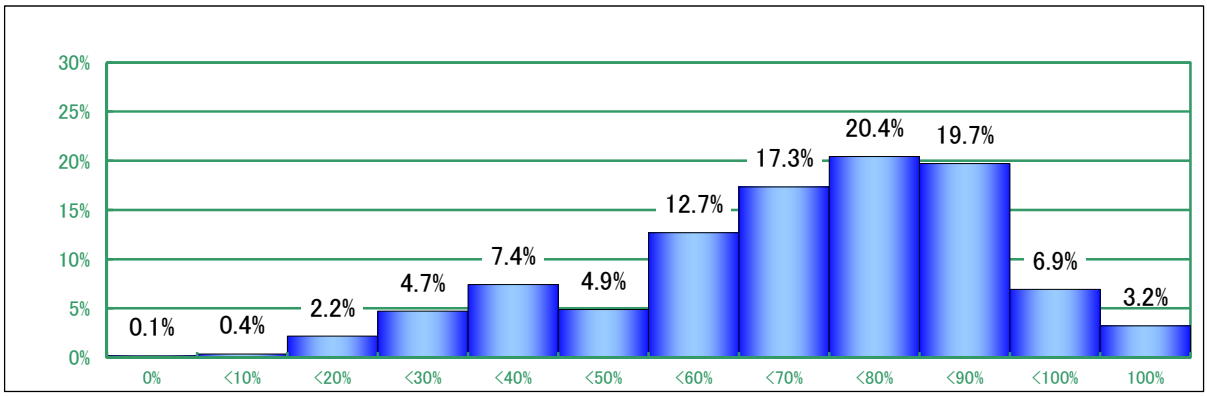
	問題形式別正答率			評価の観点別正答率				解答形式別正答率		
	全体	基礎	活用	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	言語についての知識・理解・技能	選択式	短答式	記述式
期待正答率	64.2	69.5	55.7	75.0	54.0	62.9	65.0	69.6	60.0	40.0
平均正答率	66.3	73.7	54.6	77.5	56.9	63.7	69.8	73.2	62.0	33.2
差	2.1	4.2	−1.1	2.5	2.9	0.8	4.8	3.6	2.0	−6.8

※網掛け部分は期待正答率を上回っているもの。

■　領域別の正答率（%）

	領域別正答率			
	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
期待正答率	90.0	57.5	63.3	65.0
平均正答率	83.7	62.6	61.6	69.8
差	−6.3	5.1	−1.7	4.8

■　正答率分布　横軸：正答率（１０%刻み）　縦軸：児童の割合（%）



(2) 小学校第５学年算数

○　教科全体では、期待正答率 66.9%に対して平均正答率 59.0%であり、7.9 ポイント下回っている。
○　問題形式別に見ると、期待正答率を「基礎」では、6.5 ポイント、「活用」では、10.6 ポイント下回っている。
○　評価の観点別に見ると、「数学的な考え方」、「技能」及び「知識・理解」では、期待正答率をそれぞれ 6.9、9.6、6.8 ポイント下回っている。
○　解答形式別に見ると、「選択式」、「短答式」及び「記述式」では、それぞれ 9.3、6.2、6.9 ポイント下回っている。
○　領域別に見ると、「数と計算」、「量と測定」、「図形」及び「数量関係」では、期待正答率をそれぞれ 7.1、5.8、12.8、7.3 ポイント下回っている。

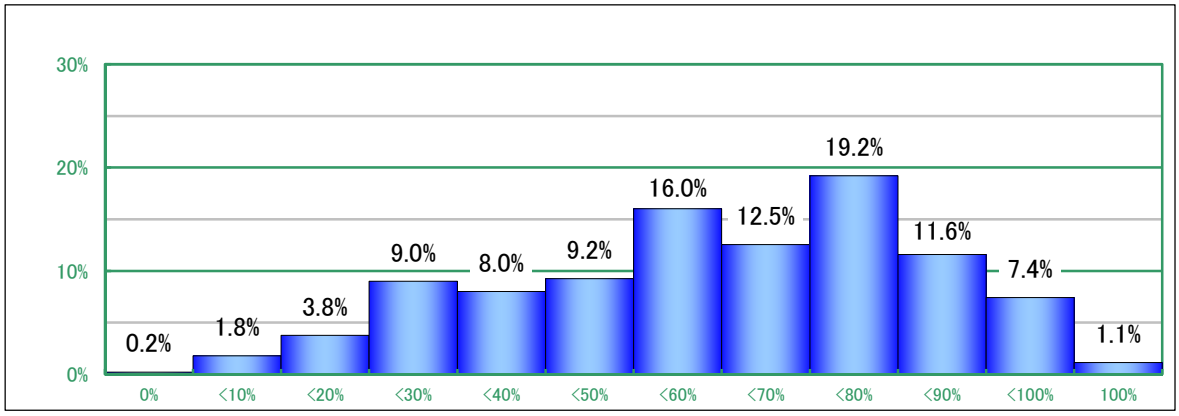
■　教科全体と「基礎」・「活用」問題形式別、評価の観点別、解答形式別の正答率（%）

	問題形式別正答率			評価の観点別正答率			解答形式別正答率		
	全体	基礎	活用	数学的な考え方	技能	知識・技能	選択式	短答式	記述式
期待正答率	66.9	72.2	56.3	45.0	77.8	64.2	65.8	75.6	45.0
平均正答率	59.0	65.7	45.7	38.1	68.2	57.4	56.5	69.4	38.1
差	−7.9	−6.5	−10.6	−6.9	−9.6	−6.8	−9.3	−6.2	−6.9

■　領域別の正答率（%）

	領域別正答率			
	数と計算	量と測定	図形	数量関係
期待正答率	66.7	72.0	60.0	67.5
平均正答率	59.6	66.2	47.2	60.2
差	−7.1	−5.8	−12.8	−7.3

■　正答率分布　横軸：正答率（１０%刻み）　縦軸：児童の割合（%）



(3) 中学校第１学年国語

○　教科全体では、期待正答率 64.5%に対して平均正答率 63.2%であり、1.3 ポイント下回っている。
○　問題形式別に見ると、期待正答率を「基礎」では、0.5 ポイント、「活用」では、2.6 ポイント下回っている。
○　評価の観点別に見ると、「話すこと・聞くこと」及び「読むこと」では、期待正答率をそれぞれ 10.5、1.2 ポイント下回り、「書くこと」及び「言語についての知識・理解・技能」では、それぞれ 1.8、1.7 ポイント上回っている。
○　解答形式別に見ると、「選択式」では、期待正答率を 2.5 ポイント下回り、「短答式」及び「記述式」では、それぞれ 1.1、4.7 ポイント上回っている。
○　領域別に見ると、「話すこと・聞くこと」及び「読むこと」では、期待正答率をそれぞれ 11.3、4.8 ポイント下回り、「書くこと」及び「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」では、それぞれ 1.5、5.4 ポイント上回っている。

■　教科全体と「基礎」・「活用」問題形式別、評価の観点別、解答形式別の正答率（%）

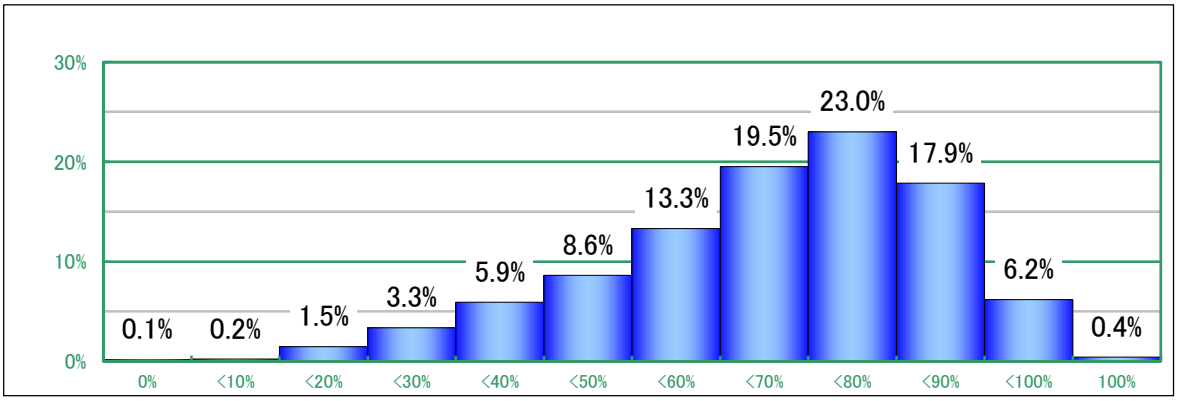
	問題形式別正答率			評価の観点別正答率				解答形式別正答率		
	全体	基礎	活用	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	言語についての知識・理解・技能	選択式	短答式	記述式
期待正答率	64.5	67.7	58.6	62.0	60.0	61.7	67.8	67.3	63.3	45.0
平均正答率	63.2	67.2	56.0	51.5	61.8	60.5	69.5	64.8	64.4	49.7
差	−1.3	−0.5	−2.6	−10.5	1.8	−1.2	1.7	−2.5	1.1	4.7

※網掛け部分は期待正答率を上回っているもの。

■　領域別の正答率（%）

	領域別正答率			
	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
期待正答率	67.5	55.0	64.0	68.6
平均正答率	56.2	56.5	59.2	74.0
差	−11.3	1.5	−4.8	5.4

■　正答率分布　横軸：正答率（１０%刻み）　縦軸：生徒の割合（%）



（4）中学校第１学年数学

○　教科全体では、期待正答率 63.9%に対して平均正答率も 63.9%である。
○　問題形式別に見ると、期待正答率を「基礎」では、1.2 ポイント上回り、「活用」では、3.1 ポイント下回っている。
○　評価の観点別に見ると、「数学的な見方や考え方」及び「技能」では、期待正答率をそれぞれ 3.1、1.2 ポイント下回り、「知識・技能」では、6.8 ポイント上回っている。
○　解答形式別に見ると、「選択式」では、1.8 ポイント下回り、「短答式」及び「記述式」では、どちらも 0.9 ポイント上回っている。
○　領域別に見ると、「数と計算」、「量と測定」及び「数量関係」では、期待正答率をそれぞれ 2.9、0.6、2.5 ポイント下回り、「図形」では、14.8 ポイント上回っている。

■　教科全体と「基礎」・「活用」問題形式別、評価の観点別、解答形式別の正答率（%）

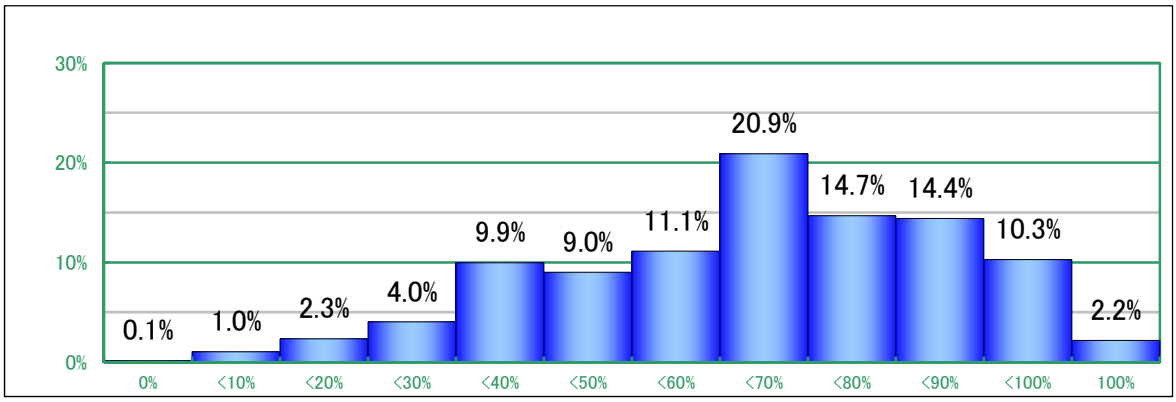
	問題形式別正答率			評価の観点別正答率			解答形式別正答率		
	全体	基礎	活用	数学的な見方や考え方	技能	知識・技能	選択式	短答式	記述式
期待正答率	63.9	68.8	52.9	52.9	70.0	66.0	63.1	70.0	48.8
平均正答率	63.9	70.0	49.8	49.8	68.8	72.8	61.3	70.9	49.7
差	0.0	1.2	−3.1	−3.1	−1.2	6.8	−1.8	0.9	0.9

※網掛け部分は期待正答率を上回っているもの。

■　領域別の正答率（%）

	領域別正答率			
	数と計算	量と測定	図形	数量関係
期待正答率	66.4	58.8	70.0	62.2
平均正答率	63.5	58.2	84.8	59.7
差	−2.9	−0.6	14.8	−2.5

■　正答率分布　横軸：正答率（１０%刻み）　縦軸：生徒の割合（%）



(5) 中学校第２学年国語

○　教科全体では、期待正答率 57.0%に対して平均正答率 52.2%であり、4.8 ポイント下回っている。
○　問題形式別に見ると、期待正答率を「基礎」では、7.6 ポイント下回り、「活用」では、2.4 ポイント上回っている。
○　評価の観点別に見ると、「話すこと・聞くこと」では、期待正答率を 3.1 ポイント上回り、「書くこと」、「読むこと」及び「言語についての知識・理解・技能」では、それぞれ 4.0、1.8、10.2 ポイント下回っている。
○　解答形式別に見ると、「選択式」では、期待正答率と同値であり、「短答式」及び「記述式」では、それぞれ 12.3、6.6 ポイント下回っている。
○　領域別に見ると、「話すこと・聞くこと」では、期待正答率を 4.8 ポイント上回り、「書くこと」、「読むこと」及び「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」では、それぞれ 4.8、1.8、11.1 ポイント下回っている。

■　教科全体と「基礎」・「活用」問題形式別、評価の観点別、解答形式別の正答率（%）

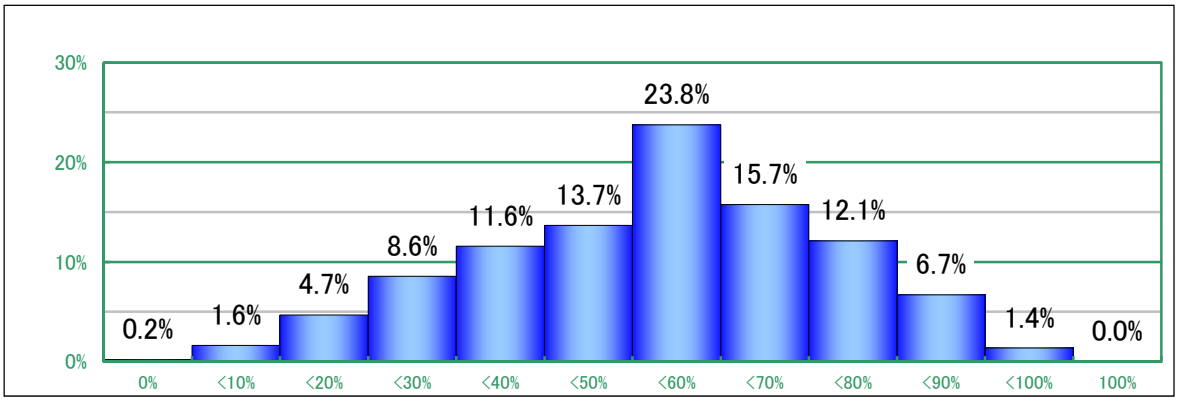
	問題形式別正答率			評価の観点別正答率				解答形式別正答率		
	全体	基礎	活用	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	言語についての知識・理解・技能	選択式	短答式	記述式
期待正答率	57.0	58.8	52.5	53.3	51.3	53.0	62.7	56.4	65.8	48.0
平均正答率	52.2	51.2	54.9	56.4	47.3	51.2	52.5	56.4	53.5	41.4
差	−4.8	−7.6	2.4	3.1	−4.0	−1.8	−10.2	0.0	−12.3	−6.6

※網掛け部分は期待正答率を上回っているもの。

■　領域別の正答率（%）

	領域別正答率			
	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
期待正答率	55.0	52.5	53.0	63.8
平均正答率	59.8	47.7	51.2	52.7
差	4.8	−4.8	−1.8	−11.1

■　正答率分布　横軸：正答率（１０%刻み）　縦軸：生徒の割合（%）



（6）中学校第２学年数学

○　教科全体では、期待正答率 59.6%に対して平均正答率 57.1%であり、2.5 ポイント下回っている。
○　問題形式別に見ると、期待正答率を「基礎」では、3.9 ポイント下回り、「活用」では、0.7 ポイント上回っている。
○　評価の観点別に見ると、「数学的な見方や考え方」では、期待正答率を 1.4 ポイント上回り、「技能」及び「知識・技能」では、それぞれ 3.2、4.3 ポイント下回っている。
○　解答形式別に見ると、「選択式」では、0.5 ポイント上回り、「短答式」及び「記述式」では、それぞれ 4.9、0.9 ポイント下回っている。
○　領域別に見ると、「数と計算」、「図形」及び「数量関係」では、期待正答率をそれぞれ 1.8、4.2、5.2 ポイント下回り、「数と測定」では、0.5 ポイント上回っている。

■　教科全体と「基礎」・「活用」問題形式別、評価の観点別、解答形式別の正答率（%）

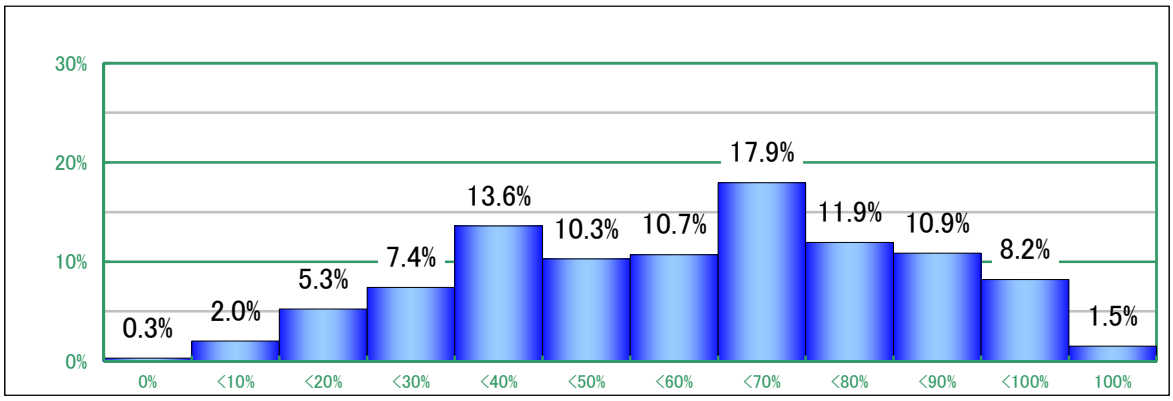
	問題形式別正答率			評価の観点別正答率			解答形式別正答率		
	全体	基礎	活用	数学的な見方や考え方	技能	知識・技能	選択式	短答式	記述式
期待正答率	59.6	62.5	52.9	48.0	66.3	55.8	63.8	62.5	36.7
平均正答率	57.1	58.6	53.6	49.4	63.1	51.5	64.3	57.6	35.8
差	−2.5	−3.9	0.7	1.4	−3.2	−4.3	0.5	−4.9	−0.9

※網掛け部分は期待正答率を上回っているもの。

■　領域別の正答率（%）

	領域別正答率			
	数と計算	量と測定	図形	数量関係
期待正答率	59.5	66.3	53.0	61.3
平均正答率	57.7	66.8	48.8	56.1
差	−1.8	0.5	−4.2	−5.2

■　正答率分布　横軸：正答率（１０%刻み）　縦軸：生徒の割合（%）



Ⅹ　まとめと今後の取組

１　まとめ

本年度は、「小中９年間を通した『授業改善』による学力向上」を掲げ、「学力アップ推進事業」をはじめとした取組を進め、各市町村教育委員会を支援してきたが、これまでの調査結果から、次のような成果と課題が明らかになった。

＜成果＞
○　全国学力調査において、小学校は５年連続上昇傾向、中学校は４年連続改善傾向にある。（全国学力・学習状況調査の経年変化の推移より）
○　学力向上に関する検証改善サイクルが着実に実施されている。（検証改善に関するアンケート調査より）
＜課題＞
●　小学校で培った学力を、中学校で十分に伸ばせていない。

これらを踏まえ、次年度も「小中９年間を通した『授業改善』による学力向上」を進めるために、次の３点から市町村教育委員会及び学校への支援を行う。

Ⅰ　「授業改善」

小学校で培った学力を中学校でさらに伸長させるには、小・中学校の授業において一貫した指導方法の継続が重要となる。そこで、「学力向上強化市町村指定事業」や「重点課題研究指定事業」等において、小学校と中学校が連携、協働した学習指導等の取組を進めるとともに、中学校向けの「定期考査問題の作り方」資料等を活用し、９年間で身に付けさせる学力を明確にした授業改善の支援を行う。

Ⅱ　「人材育成」

教育課程の編成・実施・評価や教科指導の中核となる人材は、効果的な検証改善サイクルを推進する上で欠かせない。そこで、ミドルリーダーのカリキュラム・マネジメントの力を磨くため、各地区間の情報交流を目的にした「福岡県地区間交流研修」等をさらに充実させる。また、授業力向上を目的に、各地区の「コア・ティーチャー（教科指導リーダー）」を対象とした指導力向上講座を開催したり、各地区の教科等研究会と連携したりして支援を行う。

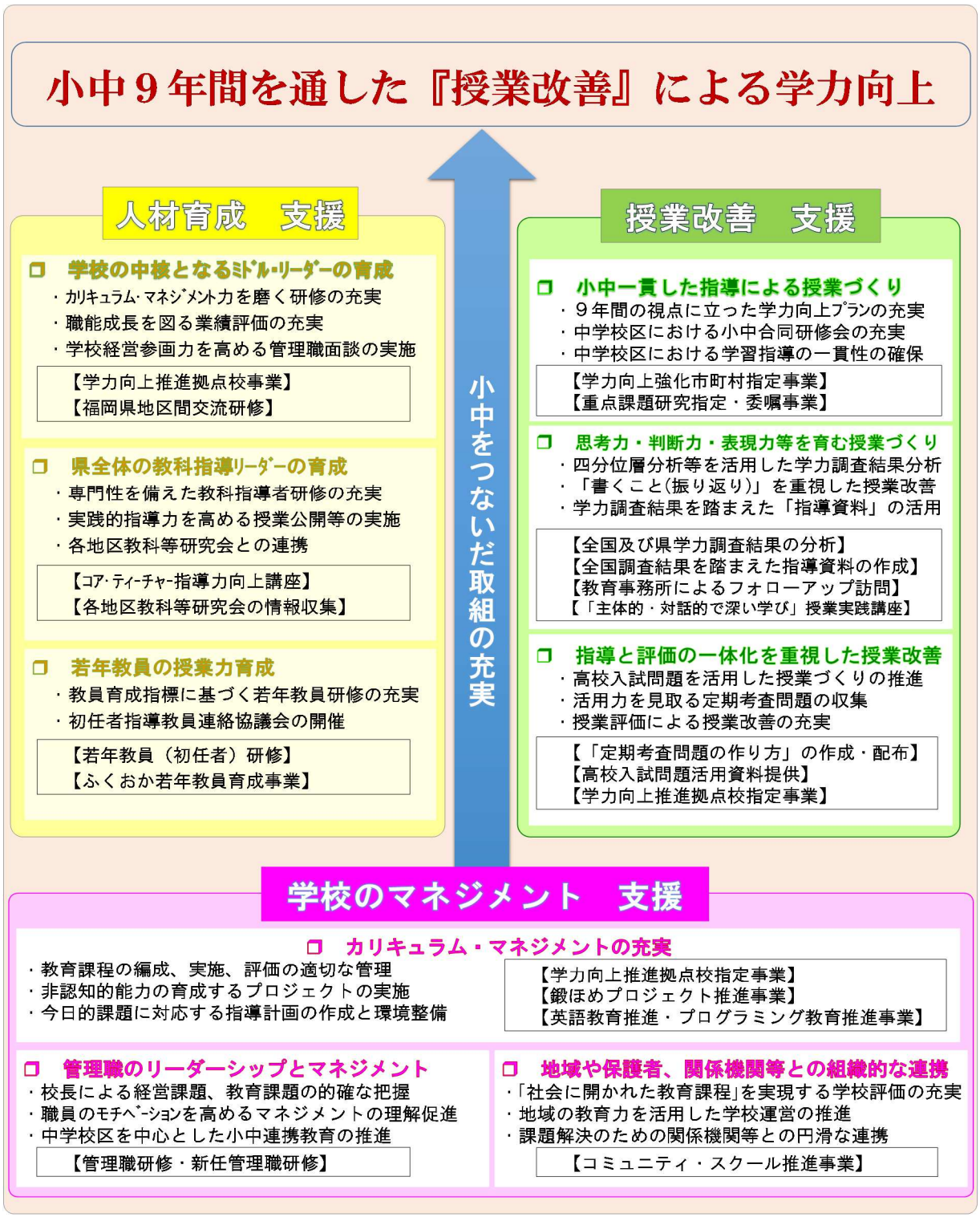
Ⅲ　「学校のマネジメント」

チーム学校として学力向上の取組を推進するには、管理職のマネジメントの質を向上させ、家庭や地域と学力向上の目標や取組について共有すること等が重要である。そこで、管理職のリーダーシップとマネジメントを向上させるために、「管理職研修」等を通した管理職のスキルアップや、「コミュニティ・スクール推進事業」等を通した「社会に開かれた教育課程」を実現する学校運営の支援を行う。

2　今後の取組

＜今後の改善の視点＞

- 小中一貫した指導等による「授業改善」
- ミドルリーダー等の「人材育成」
- 管理職のリーダーシップによる「学校マネジメント」



【県教育委員会としての今後の取組】